

氏名（

）

関関同立への道

関関同立の古文最高峰

# 関西大学の第九問

現代語訳

記述問題

I 関西大学の第九問 現代語訳記述問題

- **【一】 2023 関西大学** 2/1, 全学日程 1 (2・3 教科)・英語外部試験利用含む 法 社会安全 文 経済 商 社会 政策創造 外国語 人間健康 総合情報  
〔課題〕 月 日まで)〔済〕 月 日)…………… (5)
- **【二】 2023 関西大学** 2/2, 全学日程 1 (2・3 教科)・英語外部試験利用含む 法 社会安全 文 経済 商 社会 政策創造 外国語 人間健康 総合情報  
〔課題〕 月 日まで)〔済〕 月 日)…………… (14)
- **【三】 2023 関西大学** 2/3, 全学日程 1 (2・3 教科)・英語外部試験利用含む 法 社会安全 文 経済 商 社会 政策創造 外国語 人間健康 総合情報  
〔課題〕 月 日まで)〔済〕 月 日)…………… (22)
- ◆
- **【四】 2022 関西大学** 2/1, 全学日程 1 (2・3 教科)・英語外部試験利用含む 法 文 経済 商 社会 政策創造 外国語 人間健康 社会安全  
〔課題〕 月 日まで)〔済〕 月 日)…………… (31)
- **【五】 2022 関西大学** 2/2, 全学日程 1 (2・3 教科)・英語外部試験利用含む 法 文 経済 商 社会 政策創造 外国語 人間健康 総合情報 社会安全  
〔課題〕 月 日まで)〔済〕 月 日)…………… (40)
- **【六】 2022 関西大学** 2/3, 全学日程 1 (2・3 教科)・英語外部試験利用含む 法 文 経済 商 社会 政策創造 外国語 人間健康 総合情報 社会安全  
〔課題〕 月 日まで)〔済〕 月 日)…………… (49)
- ◆
- **【七】 2021 関西大学** 2/1, 全学日程 1 (2・3 教科)・英語外部試験利用含む 法 文 経済 商 社会 政策創造 外国語 人間健康 社会安全  
〔課題〕 月 日まで)〔済〕 月 日)…………… (58)
- **【八】 2021 関西大学** 2/2, 全学日程 1 (2・3 教科)・英語外部試験利用含む 法 文 経済 商 社会 政策創造 外国語 人間健康 総合情報 社会安全  
〔課題〕 月 日まで)〔済〕 月 日)…………… (67)
- **【九】 2021 関西大学** 2/3, 全学日程 1 (2・3 教科)・英語外部試験利用含む 法 文 経済 商 社会 政策創造 外国語 人間健康 総合情報 社会安全  
〔課題〕 月 日まで)〔済〕 月 日)…………… (76)
- ◆
- **【十】 2020 関西大学** 2/1, 学部個別(3教科・2教科英語外部試験利用) 文 経済 社会 政策創造〔課題〕 月 日まで)〔済〕 月 日)…………… (84)
- **【十一】 2020 関西大学** 2/3, 学部個別(3教科・2教科英語外部試験利用) 経済 商 政策創造 外国語 人間健康  
〔課題〕 月 日まで)〔済〕 月 日)…………… (93)
- **【十二】 2020 関西大学** 2/4, 学部個別(3教科・2教科英語外部試験利用) 法 文 商 総合情報 社会安全  
〔課題〕 月 日まで)〔済〕 月 日)…………… (100)
- **【十三】 2020 関西大学** 2/6, 学部個別(3教科・2教科英語外部試験利用) 法 社会 外国語 人間健康 社会安全  
〔課題〕 月 日まで)〔済〕 月 日)…………… (108)

- **【十四】 2019 関西大学** 2/1, 学部個別(3教科・2教科英語外部試験利用) 文 経済 社会 政策創造  
〔課題〕 月 日まで〔済〕 月 日……………(116)
- **【十五】 2019 関西大学** 2/3, 学部個別(3教科・2教科英語外部試験利用) 経済 商 政策創造 外国語 人間健康  
〔課題〕 月 日まで〔済〕 月 日……………(125)
- **【十六】 2019 関西大学** 2/4, 学部個別(3教科・2教科英語外部試験利用) 法 文 商 総合情報 社会安全  
〔課題〕 月 日まで〔済〕 月 日……………(132)
- **【十七】 2019 関西大学** 2/6, 学部個別(3教科) 法 社会 外国語 人間健康 社会安全〔課題〕 月 日まで〔済〕 月 日……………(139)
- **【十八】 2018 関西大学** 2/1, 学部個別(3教科・2教科英語外部試験利用) 文 経済 社会 政策創造  
〔課題〕 月 日まで〔済〕 月 日……………(148)
- **【十九】 2018 関西大学** 2/3, 学部個別(3教科・2教科英語外部試験利用) 経済 商 政策創造 外国語 人間健康  
〔課題〕 月 日まで〔済〕 月 日……………(155)
- **【二十】 2018 関西大学** 2/4, 学部個別(3教科・2教科英語外部試験利用) 法 文 商 総合情報 社会安全  
〔課題〕 月 日まで〔済〕 月 日……………(165)
- **【二十一】 2018 関西大学** 2/6, 学部個別(3教科) 法 社会 外国語 人間健康 社会安全〔課題〕 月 日まで〔済〕 月 日……………(173)
- **【二十二】 2017 関西大学** 2/1, 学部個別日程(3教科・2教科英語外部試験利用) 文 経済 社会 政策創造  
〔課題〕 月 日まで〔済〕 月 日……………(182)
- **【二十三】 2017 関西大学** 2/3, 学部個別(3教科) 経済 商 政策創造 外国語 人間健康〔課題〕 月 日まで〔済〕 月 日……………(189)
- **【二十四】 2017 関西大学** 2/4, 学部個別日程(3教科・2教科英語外部試験利用) 法 文 商 総合情報 社会安全  
〔課題〕 月 日まで〔済〕 月 日……………(196)
- **【二十五】 2017 関西大学** 2/6, 学部個別(3教科) 法 社会 外国語 人間健康 社会安全(3科目) 文 法 商 人間福祉  
〔課題〕 月 日まで〔済〕 月 日……………(204)
- **【二十六】 2016 関西大学** 2/1, 学部個別(3教科) 文 経済 社会 政策創造〔課題〕 月 日まで〔済〕 月 日……………(211)
- **【二十七】 2016 関西大学** 2/3, 学部個別(3教科) 経済 商 政策創造 外国語 人間健康〔課題〕 月 日まで〔済〕 月 日……………(218)
- **【二十八】 2016 関西大学** 2/4, 学部個別(3教科) 法 文 商 総合情報 社会安全〔課題〕 月 日まで〔済〕 月 日……………(225)
- **【二十九】 2016 関西大学** 2/6, 学部個別(3教科) 法 社会 外国語 人間健康 社会安全〔課題〕 月 日まで〔済〕 月 日……………(232)

- **【三十一】 2015 関西大学** 2/1, 学部個別日程(3教科) 文 経済 社会 政策創造(課題… 月 日まで)〔済… 月 日〕……………(239)
- **【三十一】 2015 関西大学** 2/3, 学部個別日程(3教科) 経済 商 政策創造 外国語 人間健康(課題… 月 日まで)〔済… 月 日〕……………(248)
- **【三十二】 2015 関西大学** 2/4, 学部個別日程(3教科) 法 文 商 総合情報 社会安(課題… 月 日まで)〔済… 月 日〕……………(255)
- **【三十三】 2015 関西大学** 2/6, 学部個別日程(3教科) 法 社会 外国語 人間健康 社会安全(課題… 月 日まで)〔済… 月 日〕……………(265)
- **【三十四】 2014 関西大学** 2/1, 学部個別日程(3教科) 文 経済 社会 政策創造(課題… 月 日まで)〔済… 月 日〕……………(273)
- **【三十五】 2014 関西大学** 2/3, 学部個別日程(3教科) 法 経済 商 外国語 人間健康(課題… 月 日まで)〔済… 月 日〕……………(281)
- **【三十六】 2014 関西大学** 2/4, 学部個別日程(3教科) 法 文 商 総合情報 社会安全(課題… 月 日まで)〔済… 月 日〕……………(289)
- **【三十七】 2014 関西大学** 2/6, 学部個別日程(3教科) 社会 政策創造 外国語 人間健康 社会安全  
〔課題… 月 日まで〕〔済… 月 日〕……………(296)
- ◆
- **【三十八】 2013 関西大学** 2/1, 学部個別日程(3教科) 文 経済 社会 政策創(課題… 月 日まで)〔済… 月 日〕……………(306)
- **【三十九】 2013 関西大学** 2/3, 学部個別日程(3教科) 経済 商 政策創造 外国語 社会安全(課題… 月 日まで)〔済… 月 日〕……………(314)
- **【四十】 2013 関西大学** 2/4, 学部個別日程(3教科) 法 文 商 人間健康 総合情報(課題… 月 日まで)〔済… 月 日〕……………(321)
- **【四十一】 2013 関西大学** 2/6, 学部個別日程(3教科) 法 社会 外国語 人間健康 社会安全(課題… 月 日まで)〔済… 月 日〕……………(331)
- ◆
- **【四十二】 2012 関西大学** 2/2, 学部個別日程(3教科) 商 政策創造 人間健康 社会安全(課題… 月 日まで)〔済… 月 日〕……………(339)
- **【四十三】 2012 関西大学** 2/3, 学部個別日程(3教科) 法 経済 政策創造 外国語 総合情報(課題… 月 日まで)〔済… 月 日〕……………(346)
- **【四十四】 2012 関西大学** 2/4, 学部個別日程(3教科) 法 文 商 社会 人間健康(課題… 月 日まで)〔済… 月 日〕……………(355)
- **【四十五】 2012 関西大学** 2/6, 学部個別日程(3教科) 文 経済 社会 外国語 社会安全(課題… 月 日まで)〔済… 月 日〕……………(362)

○ 解答……………(370)

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

月にはかられて、夜深く起きにけるも、思ふらむところいとほしけれど、たち帰らむも遠きほどなれば、やうやうゆくに、小家こいへなどに例おとなふものも聞こえず、くまなき月に、ところどころの花の木どもも、ひとへにまがひぬべく霞かすみたり。

いま少し、過ぎて見つるところよりも、おもしろく、過ぎがたき心地して、

そなたへとゆきもやられず花桜にほふこかげにたびだたれつと

と、うち誦ずんじて、「はやくここに、物言ひし人あり」と思ひ出でて、立ちやすらふに、\*<sub>1</sub>築地のくづれより、白きものの、いたう咳しはぶきつつ出づめり。あはれげに荒れ、人けなきところなれば、ここかしこのぞけど、とがむる人なし。このありつるものの返る呼びて、「ここに住みたまひし人は、いまだおはすや。『山人に物聞こえむと言ふ人あり』とものせよ」と言へば、「その御方は、ここにもおはしませず。なにとかいふところになむ住ませたまふ」と聞こえつれば、「あはれのことや。尼などにやなりたるらむ」と、うしろめたくて、「かの\*<sub>2</sub>みつとをにあはじや」など、ほほゑみてのたまふほどに、\*<sub>3</sub>妻戸をやはらかい放つ音すなり。

をのこども少しやりて、\*<sub>4</sub>透垣のつらなる群むらすすきの繁き下に隠れて見れば、「\*<sub>5</sub>少納言の君こそ。明けやしぬらむ。出でて見たまへ」と言ふ。よきほどなる童わらは

の、\*<sub>6</sub>やうだいをかしげなる、いたう萎えすぎで、宿直姿とらぬすがたなる、\*<sub>7</sub>蘇芳にやあらむ、つややかなる\*<sub>8</sub>相に、うちすきたる髪かみのすそ、\*<sub>9</sub>小桂に映えて、なまめかし。月の明かきかたに、扇をさしかくして、「\*<sub>10</sub>月と花とを」と口ずさみて、花のかたへ歩み来るに、おどろかさまほしけれど、しばし見れば、おとなしき人の、\*<sub>11</sub>すゑみつは、などか今まで起きぬぞ。\*<sub>12</sub>弁の君こそ。ここなりつる。参りたまへ」と言ふは、ものへ詣づるなるべし。ありつる童はとまるなるべし。「わびしくこそおぼゆれ。さばれ、ただ御供に参りて、近からむところに居て、御社みやしろへは参らじ」など言へば、「ものぐるほしや」など言ふ。

みなしたてて、五、六人ぞある。下るるほどもいとなやましげに、「これぞ主しゅなるらむ」と見ゆるを、よく見れば、衣ぬぎかけたるやうだい、ささやかに、いみじう児こめいたり。物言ひたるも、らうたきものの、ゆゑゆゑしく聞こゆ。「うれしくも見つるかな」と思ふに、やうやう明くれば、帰りましたまひぬ。

日さしあがるほどに起きたまひて、昨夜よべのところに文書きたまふ。「いみじう深うはべりつるも、ことわりなるべき御気色に、出ではべりぬるは、つらきもいかばかり」など、青き\*1薄様に、柳につけて、

さらざりしいにしへよりも青柳あをやなぎのいとどぞ今朝は思ひみだるる

とて、やりたまへり。返事かへりごとめやすく見ゆ。

かけざりしかたにぞ延はひし糸なれば解くと見しまにまたみだれつつ

とあるを見たまふほどに、\*14源中将、兵衛佐、小弓持たせておはしたり。「昨夜は、いづくに隠れたまへりしぞ。内裏うちに御遊ごあそびびありて召ししかども、見つけたてまつらでこそ」とのたまへば、「ここにこそ侍りしか。あやしかりけることかな」などのたまふ。

(『堤中納言物語』花桜折る少将による)

## 注

- \*1 築地ついでち 土塀。
- \*2 みつとを 光遠。自分の素性を隠すため主人公が仕立てた架空の名前。
- \*3 妻戸 寝殿造りの建物の脇にある両開きの板戸。夜間用の出入り口。
- \*4 透垣すいがい 板、竹などでできた垣根。
  - \*5 少納言の君 此の家に住む女房のひとり。
- \*6 やうだい 様態。姿。
  - \*7 蘇芳すはう 紫がかつた赤色。
- \*8 相あこめ 主に女性や童女が肌近くに着る衣服。
- \*9 小桂こつげい 高貴な女性の上着。
- \*10 月と花とを 「あたら夜の月と花とを同じくはあはれ知らむ人に見せばや」(後撰集)による。
- \*11 すゑみつ 季光。この家に通っていた男。

\* 12 弁の君||この家に住む女房のひとり。

\* 13 薄様||和紙の種類のひとつ。

\* 14 げんのちゆうじやう 源中將、ひやうぶのすけ 兵衛佐||主人公の友人。

問1 この文章の冒頭部の内容として、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 月の明るさに急がされて、夜深くに起きて出てきてしまったが、いつになく早く帰った私のことをどのように思っているだろうと不憫ではあるけれど、引き返すには遠いので、そのまま行く。通りすがりの家のなりわいの音も聞こえてこず、心ない月に照らされ、あちらこちらの桜は霞かみまがと見紛うようなさまで風情がある。

b 月の明るさに急がされて、夜深くに起きて出てきてしまったが、いつになく早く帰った私がこうして思っていることで困らせていないかと不安だけれど、このまま家に帰るにはまだ遠いものの、そのまま行く。通りすがりの家のなりわいの音も聞こえてこず、曇りない月に照らされ、ところどころの桜は霞かと見紛うようなさまで風情がある。

c 月の明るさにあざむかれて、夜深くに起きて出てきてしまったが、いつになく早く帰った私がこうして思っていることで困らせていないかと不安だけれど、引き返すには遠いので、そのまま行く。通りすがりの家のなりわいの音も聞こえてこず、曇りない月に照らされ、あちらこちらの桜は霞かと見紛うようなさまで風情がある。

d 月の明るさにあざむかれて、夜深くに起きて出てきてしまったが、いつになく早く帰った私がこうして思っていることで困らせていないかと不安だけれど、このまま家に帰るにはまだ遠いものの、そのまま行く。通りすがりの家のなりわいの音も聞こえてこず、心ない月に照らされ、ところどころの桜は霞かと見紛うようなさまで風情がある。

e 月の明るさにあざむかれて、夜深くに起きて出てきてしまったが、いつになく早く帰った私のことをどのように思っているだろうと不憫ではあるけれど、引き返すには遠いので、そのまま行く。通りすがりの家のなりわいの音も聞こえてこず、曇りない月に照らされ、あちらこちらの桜は霞かと見紛うようなさまで風情がある。

問2 主人公が、「そなたへと」の歌を詠じたときの心境と、詠じた歌の解釈として、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a ここまで通り過ぎて見て来た家よりも風流な桜のある家を見て、通り過ぎてしまおうと思いつつも、「あなたの元へ行くことも文を贈ることもできません。花桜の美しい木陰に心奪われてしまつて」と詠じた。

b ここまで通り過ぎて見て来た家よりも珍しい桜のある家を見て、通り過ぎることもためらわれて、「あなたの元へ行くことも文を贈ることもできません。花桜の美しい木陰に心奪われてしまつて」と詠じた。

c ここまで通り過ぎて見て来た家よりも風格のある桜のある家を見て、通り過ぎてしまおうと思いつつも、「あなたの元へ行くこともできません。花桜に映える木陰の方について足が向いてしまつて」と詠じた。

d ここまで通り過ぎて見て来た家よりも趣き深い桜のある家を見て、通り過ぎることもためらわれて、「あなたの元へ行くことも文を贈ることもできません。花桜の美しい木陰に心奪われてしまつて」と詠じた。

e ここまで通り過ぎて見て来た家よりも風情のある桜のある家を見て、通り過ぎることもためらわれて、「あなたの元へ行くこともできません。花桜の美しい木陰の方について足が向いてしまつて」と詠じた。

問3 主人公が歌を詠じた後の状況の説明として、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 「以前ここに親しくしていた女性がいたな」と思い出し、たたずんでいると、塀の崩れたところから白い衣をまとった者が、ひどく咳き込みながら出てくる様子である。恐ろしいほど荒れており、人が住めるようなところではないので、あちらこちら不気味だが、気に留める者もない。

b 「以前この話をした人がいたな」と思い出し、たたずんでいると、塀の崩れたところから白い衣をまとった者が、ひどく咳き込みながら出てくる様子である。恐ろしいほど荒れており、人が住めるようなところではないので、あちらこちら不気味だが、気に留める者もない。

c 「以前ここに親しくしていた女性がいたな」と思い出し、たたずんでいると、塀の崩れたところから白い衣をまとった者が、ひどく咳き込みながら出てく



る様子である。気の毒なほどに荒れており、人が住んでいないようなところなので、あちらこちらのぞくけれど、咎めだてする者もない。

d 「以前この話をした人がいたな」と思い出し、たち去ろうとすると、扉の崩れたところから白い衣をまとった者が、ひどく咳き込みながら出てくる様子である。気の毒なほどに荒れており、人が住んでいないようなところなので、あちらこちらのぞくけれど、咎めだてする者もない。

e 「以前ここに親しくしていた女性がいたな」と思い出し、たち去ろうとすると、扉の崩れたところから白い衣をまとった者が、ひどく咳き込みながら出てくる様子である。恐ろしいほど荒れており、人が住んでいないようなところなので、あちらこちらのぞくけれど、気に留める者もない。

問4 主人公と白い衣の者との会話の場面の説明として、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 主人公が「ここに住んでいらつした方はまだおいでか。『木こりのような者だが、ご挨拶申し上げたいという人がいます』と取り次ぐように」と言う  
と、その者は「そのお方はここにはいらつしやいません。何とかいうところにお住まいだそうです」と言うので、「おかわいそうに、尼にでもなったの  
らうか」と気がかりで、「あの光遠に逢うつもりもないのらうか」と微笑ほほえみながらおっしゃると、妻戸をすばやく開ける音が聞こえてきた。

b 主人公が「ここに住んでいらつした方はまだおいでか。『この山奥にお住まいの方に、ご挨拶申し上げたいという人がいます』と取り次ぐように」と言  
うと、その者は「そのお方はここにはいらつしやいません。何とかいうところにお住まいでございませう」と言うので、「おかわいそうに、尼にでもな  
つたのらうか」と気がかりで、「あの光遠に逢うつもりもないのらうか」と微笑みながらおっしゃると、妻戸を静かに開ける音が聞こえてきた。

c 主人公が「ここに住んでいらつした方はまだおいでか。『木こりのような者だが、ご挨拶申し上げたいという人がいます』と取り次ぐように」と言  
うと、その者は「そのお方はここにはいらつしやいません。何とかいうところにお住まいでございませう」と言うので、「おかわいそうに、尼にでもな  
つたのらうか」と以前のことが申し訳なく、「あの光遠に逢うつもりもないのらうか」と微笑みながらおっしゃると、妻戸を静かに開ける音が聞こえてきた。

d 主人公が「ここに住んでいらつした方はまだおいでか。『この山奥にお住まいの方に、ご挨拶申し上げたいという人がいます』と取り次ぐように」と言  
うと、その者は「そのお方はここにはいらつしやいません。何とかいうところにお住まいだそうです」と言うので、「おかわいそうに、尼にでもな  
つたのらうか」と気がかりで、「あの光遠に逢うつもりもないのらうか」と微笑みながらおっしゃると、妻戸をすばやく開ける音が聞こえてきた。

e 主人公が「ここに住んでいらっしやった方はまだおいでか。『この山奥にお住まいの方に、ご挨拶申し上げたいという人がいます』と取り次ぐように」と言うのと、その者は「そのお方はここにはいらっしやいません。何とかいうところにお住まいでございませう」と言うので、「おかわいそうに、尻にでもなったのだろうか」と以前のことが申し訳なく、「あの光遠に逢うつもりもないのだろうか」と微笑みながらおっしゃると、妻戸をすばやく開ける音が聞こえてきた。

問5 妻戸が開いた後の様子の説明として、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a お伴の者を少し遠ざけ、すすきに隠れて見ていると、「少納言の君さん。夜は明けたでしょうか。外に出てご覧なさい」と声がする。女の子が出て来て扇で顔を隠して古歌を口ずさみながら歩いて来る。気づかせたい気持ちもあるけれども、そのまま見ていると、おとなびた女房が「季光はどうしてまだ起きてこないの。弁の君さん。ここにいたのね。いらっしやい」と言うのは、どうも参詣に行くらしい。

b お伴の者を少し遠ざけ、すすきに隠れて見ていると、「少納言の君さん。夜は明けたでしょうか。外に出てご覧なさい」と声がする。女の子が出て来て扇で顔を隠して古歌を口ずさみながら歩いて来る。気づかせたい気持ちもあるけれども、そのまま見ていると、口数の少ない女房が「季光はどうしてまだ起きてこないの。弁の君さん。ここにいたのね。いらっしやい」と言うのは、どうも参詣に行くらしい。

c お伴の者を使いにより、すすきに隠れて見ていると、「少納言の君さん。夜は明けてはいないでしょうか。外に出てご覧なさい」と声がする。女の子が出て来て扇で顔を隠して古歌を口ずさみながら歩いて来る。おどろかせたくない気持ちがあるので、そのまま見ていると、口数の少ない女房が「季光はどうしてまだ起きてこないの。弁の君さん。ここにいたのね。いらっしやい」と言うのは、どうも参詣に行くらしい。

d お伴の者を少し遠ざけ、すすきに隠れて見ていると、「少納言の君さん。夜は明けたでしょうか。外に出てご覧なさい」と声がする。女の子が出て来て扇で顔を隠して古歌を口ずさみながら歩いて来る。おどろかせたくない気持ちがあるので、そのまま見ていると、おとなびた女房が「季光はなぜかもう起きてきたのね。弁の君さん。ここにいたのね。いらっしやい」と言うのは、どうも参詣に行くらしい。

e お伴の者を使いにより、すすきに隠れて見ていると、「少納言の君さん。夜は明けてはいないでしょうか。外に出てご覧なさい」と声がする。女の子が出て

来て扇で顔を隠して古歌を口ずさみながら歩いて来る。おどろかせたくない気持ちがあるので、そのまま見ていると、口数の少ない女房が「季光はなぜかもう起きてきたのね。弁の君さん。ここにいたのね。いらつしやい」と言うのは、どうも参詣に行くらしい。

問6 家に残ることになった童の様子として、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 「一人で留守番とはつらいですわ。もういいわ、ちよつとおともをして行って、近くで待っていて、お社には行かないでおくわ」と言い、「ばかなことをいって」とたしなめられている。

b 「一人で留守番とはつらいですわ。もういいわ、もうおともにも行かないし、近くにも行かない。お社になんか絶対行かない」と言い、「おかわいそうに」と慰められている。

c 「一人で留守番とはつらいですわ。もういいわ、ちよつとおともをして行って、近くで待っていて、お社には行かないでおくわ」と言い、「おかわいそうに」と慰められている。

d 「一人で留守番してもさびしくなんかありません。そういうことなら、もうおともにも行かないし、近くにも行かない。お社になんか絶対行かない」と言い、「いいかげんにしなさい」とたしなめられている。

e 「一人で留守番してもさびしくなんかありません。そういうことなら、もうおともにも行かないし、近くにも行かない。お社になんか絶対行かない」と言い、「ばかなことをいって」とたしなめられている。

問7 人々が参詣に出発する様子と、そのときの主人公の行動についての説明として、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 皆あわせて、五、六人である。階段を降りるのもためらっている様子で、「このかたこそ主人だろう」という人をよく見ると、小柄で子どもとしか思えない。ことばつきも、可憐かれんでありながら気品があるように聞こえる。「うれしいことによいところを見た」と思うけれど、そろそろ夜も明けるので、自宅に帰った。

b 皆あわせて、五、六人である。階段を降りるのもためらっている様子で、「このかたこそ主人だろう」という人をよく見ると、小柄でとてもあどけない様子である。ことばつきも、可憐でありながら気品があるように聞こえる。「うれしいことによいところを見た」と思うけれど、そろそろ夜も明けるので、自宅に帰った。

c 皆衣装を整えて、五、六人である。階段を降りるのもたいそう難儀そうにしている、「このかたこそ主人だろう」という人をよく見ると、小柄だがとても子どもとは思えない。ことばつきも、少し乱暴だが威厳があるように聞こえる。「うれしいことによいところを見た」と思うけれど、そろそろ夜も明けるので、自宅に帰った。

d 皆衣装を整えて、五、六人である。階段を降りるのもたいそう難儀そうにしている、「このかたこそ主人だろう」という人をよく見ると、小柄でとてもおっとりとしている。ことばつきも、可憐でありながら気品があるように聞こえる。「うれしいことによいところを見た」と思うけれど、そろそろ夜も明けるので、自宅に帰った。

e 皆あわせて、五、六人である。階段を降りるのもためらっている様子で、「このかたこそ主人だろう」という人をよく見ると、小柄でひどく落ち着きがない。ことばつきも、少し乱暴だが威厳があるように聞こえる。「うれしいことによいところを見た」と思うけれど、そろそろ夜も明けるので、自宅に帰った。

問8 「昨夜のところ」との歌のやりとりの説明として、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 主人公から女のもとに「あなたのもとを去ることのなかった昔よりも、青柳の糸ではありませんが、「いとど」(ますます)今朝は思い乱れています」と、「今朝」にかかる「青柳の」の枕詞まくらことばを使った歌を送ったのに対し、女からは「心にも掛けていなかった私にまつわりつく柳の糸のようなあなたなので、打ち解けたと見えてもすぐにまた他の女性に心が乱れるのでしょう」と、「かく」「延ぶ」「糸」「解く」「乱る」と縁語をもちいた歌が届いた。

b 主人公から女のもとに「それほどでもなかった昔よりも、青柳の糸ではありませんが、「いとど」(ますます)今朝は思い乱れています」と、「糸」と「いとど」の掛詞かけことばを利用した歌を送ったのに対し、女からは「心にも掛けていなかった私にまつわりつく柳の糸のようなあなたなので、打ち解けたと見えて

もすぐにまた他の女性に心が乱れるのでしよう」と、「かく」「延ぶ」「糸」「解く」「乱る」と縁語をもちいた歌が届いた。

c 主人公から女のもとに「それほどでもなかった昔よりも、青柳の糸ではありませんが、「いとど」(ますます)今朝、あなたは思い乱れていることでしょう」と、「今朝」にかかる「青柳の」の枕詞を使った歌を送ったのに対し、女からは「心にも掛けていなかった私にまつわりつく柳の糸のようなあなたなので、打ち解けたと見えてもすぐにまた他の女性に心が乱れてしまうのでしよう」と、「かく」「延ぶ」「糸」「解く」と縁語をもちいた歌が届いた。

d 女から主人公のもとに「それほどでもなかった昔よりも、青柳の糸ではありませんが、「いとど」(ますます)今朝は思い乱れています」と、「糸」と「いとど」の掛詞を利用した歌を送ったのに対し、主人公からは「心にも掛けていなかった私にまつわりつく柳の糸のようなあなたなので、打ち解けたつもりでもまたこうして思い乱れています」と、「かく」「延ぶ」「糸」「解く」「乱る」と縁語をもちいた歌が届いた。

e 女から主人公のもとに「あなたが私のもとを去ることのなかった昔よりも、青柳の糸ではありませんが、「いとど」(ますます)今朝は思い乱れています」と、「今朝」にかかる「青柳の」の枕詞を使った歌を送ったのに対し、主人公からは「心にも掛けていなかった私にまつわりつく柳の糸のようなあなたなので、打ち解けたつもりでもまたこうして思い乱れています」と、「かく」「延ぶ」「糸」「解く」「乱る」と縁語をもちいた歌が届いた。

問9 傍線部(A)を現代語訳せよ。

次の文章は『栄花物語』の一節である。村上帝の崩御により、皇太子であった冷泉帝が即位した。冷泉帝は、当時十八歳で心に病をかかえていた。東宮には、村上帝の第四皇子であり、左大臣源高明(本文では「源氏の左大臣」「左大臣」)の娘の婿であった為平親王(本文では「式部卿宮」「宮」)が目されていたが、冷泉帝と同腹で第五皇子の守平親王が立てられた。これを読んで、後の問いに答えよ。

帝、御もののけいとおどろおどろしうおはしませば、さるべき殿上人、殿ばら、たゆまず夜昼さぶらひたまふ。いとけおそろしくおはしますに、「今日おりさせたまふ、明日おりさせたまふ」とのみ、聞きにくく申し思へるに、帝と申すものは、一度はのどかに、一度はとくおりさせたまふといふことも、かならずあるべきことに申し思へるに、今年は\*<sub>1</sub>安和二年とぞいふめるに、位にて三年にこそはならせたまひぬれば、いかなるべき御有様にかとのみ見えさせたまへり。

かかるほどに、世の中にいとけしからぬことをぞ言ひ出でたるや。それは、源氏の左大臣の、式部卿宮の御事を思ひ、朝廷を傾けたてまつらんと思しかまふといふこと出で来て、世にいと聞きにくくのしる。「いでや、よにさるけしからぬことあらじ」など、世人申し思ふほどに、仏神の御ゆるしにや、げに御心のうちにもあるまじき御心やありけん、三月二十六日にこの左大臣殿に\*<sub>2</sub>檢非違使うち囲みて、\*<sub>3</sub>宣命詠みのしりて、「朝廷を傾けたてまつらんとかまふる罪によりて、大宰権帥になして流し遣はす」といふことを読みものしる。今は御位もなき定なればとて、\*<sub>4</sub>網代車に乗せたまつりて、ただ行きに率てたまつれば、式部卿宮の御心地、おほかたならんにてだにいみじと思さるべきに、まいてわが御事によりて出で来たること思すに、せむかたなく思されて、われもわれもと出で立ち騒がせたまふ。北の方、御女、男君達、いへばおろかなる殿の内の有様なり、思ひやるべし。昔\*<sub>5</sub>菅原の大臣の流されたまへるをこそ、世の物語に聞こしめししか、これはあさましいいみじき目を見て、あきれまどひて、みな泣き騒ぎたまふもかなし。男君達の冠などしたまへるも、後れじ後れじと惑ひたまへるも、あへて寄せつけたてまつらず。ただあるがなかの弟にて、童なる君の、殿の御懐はなれたまはぬぞ、泣きののしりて惑ひたまへば、事のよし奏して、「さはれ、それは」と許させたまふを、同じ御車にてだにあらず、馬にてぞおはする。十二ばかりにぞおはしける、ただ今、世の中になしくいみじき例なり。人のなくなりたまふ、例のことなり、これはいとゆゆしう心憂し。\*<sub>6</sub>醍醐の帝、いみじうさかしこくおはしまして、聖の帝とさへ申しし帝の御子の、\*<sub>7</sub>源氏になりたまへるぞかし。かかる御有様は、

世にあさましくかなしう心憂きことに、世に申しののしる。

式部卿宮、「法師にやなりなまし」と思せど、幼き宮たちのうつくしうておはします、\*8 大北の方の世をいみじきものに思いたるも、ただ今は宮一所の御蔭かげにかくれたまへれば、えふり捨てさせたまはず。いみじうあはれにかなしとも世の常なり。住ませたまふ宮のうちも、よろづに思し埋もれたれば、御前の池やりみづ、遣水みくさみむせも、水草居咽みくさみむせびて、心もゆかぬさまなり。さまざまにさばかり植多集め、<sup>⑧</sup>つくろはせたまひし前裁せんざい、植木どもも、心にまかせて生ひあがり、庭も浅茅あさちが原になりて、あはれに心細し。宮はあはれにいみじと思しめしながら、くれやみにて過ぐさせたまふにも、昔の御有様こひしう、かなしうて、御直衣なほしの袖もしぼりあへさせたまはず、生きながら身をかへさせたまへるぞ、あはれにかたじけなき。

(『菜花物語』月の宴による)

## 注

- \* 1 安和二年あんな 西暦九六九年、この年に安和の変が起こった。
- \* 2 檢非違使けびあし 京中の取り締まり、訴訟、裁判、刑の執行などをつかさどる令外の官。現在の警察官と裁判官とを兼ねたような職。
- \* 3 宣命せんめい 天皇の命令を伝える文書。
- \* 4 網代車あじろくるま 竹または檜木の網で車箱を張った牛車ぎゅうしゃ。主に四位、五位が常用にした。
- \* 5 菅原の大臣すがはら 菅原道真。
- \* 6 醍醐の帝だいご 村上帝の父親で先々代の帝。醍醐・村上両帝の治世は聖代とされ、延喜天曆えんぎてんりやくの治と呼ばれた。
- \* 7 源氏になり 源の姓を賜って臣籍に下る。
- \* 8 大北の方 北の方の母親、左大臣の妻。

問1 冷泉帝や殿上人たちの様子と、それを知った世の中の人々の気持ちとして、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 帝はもののけがたいそう不気味なので、殿上人たちを昼夜伺候させておられる。殿上人たちもまことに恐ろしい気分で、世の中では、今日退位なさるか、

明日退位なさるかとうわさになっている。帝というものは一代はおだやかで一代はすぐに崩御されるという定めだともいわれており、今年で在位も三年になるので、いったいどうなることかと思っていた。

b 帝はものけがたいそう不気味なので、殿上人たちは昼夜伺候させておられる。殿上人たちもまことに恐ろしい気分です、世の中では、今日ものけが出るか、明日出るかとうわさになっている。帝というものは一代はおだやかで一代は世の中が乱れるという定めだともいわれており、今年は在位三年なので、いったいどのような様子なのかと心配していた。

c 帝はものけがたいそう不気味なので、殿上人たちは昼夜伺候しておられる。それでもたいそう怖がっておられ、世の中では、今日退位なさるか、明日退位なさるかとうわさになっている。帝というものは一代はおだやかで一代は短いという定めだともいわれており、今年で在位も三年になるので、いったいどうなることかと思っていた。

d 帝はものけがたいそう不気味なので、殿上人たちは昼夜伺候しておられる。それでもたいそう怖がっておられ、世の中では、今日ものけが出るか、明日出るかとうわさになっている。帝というものは一代はおだやかで一代はすぐに退位される定めだともいわれており、今年で在位も三年になるので、いったいどうなることかと思っていた。

e 帝はものけがたいそう不気味なので、殿上人たちは昼夜伺候しておられる。それでもたいそう怖がっておられ、世の中では、今日退位なさるか、明日退位なさるかとうわさになっている。帝というものは一代はおだやかで一代は特別だという定めだともいわれており、今年で在位も三年になるので、いったいどのような様子なのかと心配していた。

問2 世の中ではこのころ、どのようなことがうわさされていたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 源氏の左大臣が、東宮になれなかった式部卿宮をそのかして、朝廷を転覆させようと思いいなっているという聞くにたえないうわさが立って騒いでいたが、一方では、「まさか、そんなとんでもないことはあるまい」と人々はうわさしていた。

b 源氏の左大臣が、東宮になれなかった式部卿宮をそのかして、朝廷を転覆させようと思いいなっているという聞くにたえないうわさが立って騒いでい



たが、一方では、「なんとまあ、あやしげなうわさがたつものだ、そんなことはあってはならない」と人々はうわさしていた。

c 源氏の左大臣が、東宮になれなかった式部卿宮の御事をお思いになって、朝廷を転覆させようと準備なさっているという聞くにたえないうわさが立つて騒いでいたが、一方では、「まさか、そんなとんでもないことはあるまい」と人々はうわさしていた。

d 源氏の左大臣が、東宮になれなかった式部卿宮の御事をお思いになって、朝廷を転覆させようと準備なさっているという聞くにたえないうわさが立つて騒いでいたが、「本当にまあ、当然だ。このまま黙っておられるようなことは決してないだろう」と人々はうわさしていた。

e 源氏の左大臣が、東宮になれなかった式部卿宮をそのかして、朝廷を転覆させようとお思いになっているという聞くにたえないうわさが立つて騒いでいたが、「本当にまあ、当然だ。このまま黙っておられるようなことは決してないだろう」と人々はうわさしていた。

問3 三月二十六日の事件について、どのように描写されているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 検非違使は、左大臣のお屋敷を取り囲んで、「朝廷を傾け申そうとした罪により、大宰権帥に任じて流し遣わす」との宣命を声高に読み上げ、位を召上げられた今の身分に見合った網代車にお乗せして、お連れ申し上げた。語り手はこのことを、仏や神が見放されたからなのか、それとも左大臣のお心のうちにあつてはならないお考えがあつたからなのだろうか、いぶかしんでいる。

b 検非違使は、左大臣のお屋敷を取り囲んで、「朝廷を傾け申そうとした罪により、大宰権帥に任じて流し遣わす」との宣命を声高に読み上げて大臣を責め立て、流されるものための網代車にお乗せして、お連れ申し上げた。語り手はせめて命を召されなかったことを、仏や神のご加護があつたからだろうか、それとも左大臣がみずから望まれたことであつたからなのだろうか、いぶかしんでいる。

c 検非違使は、左大臣のお屋敷を取り囲んで、「朝廷を傾け申そうとした罪により、大宰権帥に任じて流し遣わす」との宣命を声高に読み上げて大臣を責め立て、左大臣だった身分に見合った網代車にお乗せして、お供申し上げた。語り手はこのことを、仏や神が見放されたからなのか、それとも左大臣がみずから望まれたことであつたのだろうか、いぶかしんでいる。

d 検非違使は、左大臣のお屋敷を取り囲んで、「朝廷を傾け申そうとした罪により、大宰権帥に任じて流し遣わす」との宣命を声高に読み上げて大臣を責め

立て、流されるものための網代車にお乗せして、お供申し上げた。語り手はこのことを、仏や神が見放されたからなのか、それとも左大臣のお心のうちにあつてはならないお考えがあつたからなのだろうか、いぶかしんでいる。

e 検非違使は、左大臣のお屋敷を取り囲んで、「朝廷を傾け申そうとした罪により、大宰権帥に任じて流し遣わす」との宣命を声高に読み上げ、左大臣だった身分に見合った網代車にお乗せして、お供申し上げた。語り手はせめて命を召されなかつたことを、仏や神のご加護があつたからであらうか、それとも左大臣がみずから望まれたことであつたからなのだろうか、いぶかしんでいる。

問4 左大臣が連れ去られた時の式部卿宮の様子はどのように描写されているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 自分とはかかわらない世間一般の人々にさえ、ただならぬことと思われてしまうに違いないのに、まして、自分のことにかかわつてのことゆえどう思われるかと思うと、なすすべもなく思われて、私も連れて行け、私も連れて行けとわめきたてられるのであつた。

b 自分とはかかわらない世間一般の人々にさえ、はなはだ行き過ぎたことだと思われてしまうに違いないのに、まして、自分のことにかかわつてのことゆえだと思われてしまうかもしれないと思うと、なすすべもなく思われて、自分も同行しようと思つて準備なさるのであつた。

c 自分とはかかわらない世間一般のこととしてさえ、ただならぬことと思われてしまうに違いないのに、まして、自分のことにかかわつてのことゆえだと思われてしまうと、困つたことだと思われて、我が家のことなので一族の者たちも皆も同行すべきだとわめきたてられるのであつた。

d 自分とはかかわらない世間一般のこととしてさえ、はなはだ行き過ぎたことだと思ひになることであらうに、まして、自分のことにかかわつてのことゆえだと思ひになると、困つたことだと思われて、自分も同行しようと思ひなさるのであつた。

e 自分とはかかわらない世間一般のこととしてさえ、ただならぬことと思ひになることであらうに、まして、自分のことにかかわつてのことゆえだと思ひになると、なすすべもなく思われて、私も連れて行け、私も連れて行けとわめきたてられるのであつた。

問5 残された左大臣家の人々の様子はどのように描写されているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 残された北の方や子どもたちは、たいそう呆然ぼうぜんとしてことばも出ないほどであった。正装した子どもたちも、困惑するばかりで、車に近づくことはできなかった。ただ、幼い弟で父の懷を離れなかったものだけは、あまりにも泣きさければるので、父親と一緒に連れて行かれることになったが、それでも父と同じ車ではなく馬に乗せて連れて行かれた。

b 残された北の方や子どもたちの様子は、とてもことばでは表現できないものであった。成人している子どもたちも、困惑するばかりで、車に近づくことはできなかった。ただ、幼い弟だけは、父の懷を離れずずっと泣いておられたので、父親と一緒に連れて行かれることになったが、それでも父と同じ車ではなく馬に乗せて連れて行かれた。

c 残された北の方や子どもたちは、たいそう呆然ぼうぜんとしてことばも出ないほどであった。正装した子どもたちも、同行すると訴えたが許されなかった。ただ、幼い弟だけは、父の懷を離れずずっと泣いておられたので、連れて行かれることになったが、それでも父とは別のところに馬に乗せて連れて行かれた。

d 残された北の方や子どもたちの様子は、とてもことばでは表現できないものであった。成人している子どもたちも、同行すると訴えたが許されなかった。ただ、幼い弟で父の懷を離れなかったものだけは、あまりにも泣きさければるので、同行を許されたが、それでも父と同じ車ではなく馬に乗せて連れて行かれた。

e 残された北の方や子どもたちは、たいそう呆然ぼうぜんとしてことばも出ないほどであった。正装した子どもたちも、同行すると訴えたが許されなかった。ただ、幼い弟で父の懷を離れなかったものだけは、あまりにも泣きさければるので、同行を許されたが、それでも父と同じ車ではなく馬に乗せて連れて行かれた。

問6 左大臣の左遷について、世の中の人々ほどのように思っていたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 醍醐天皇はたいそう賢明な帝でいらっしやって、左大臣はその聖帝とまでいわれた帝の一番の皇子で、源氏になられたお方だった。それなのに、このようてんまつな顛末は、まったく思いがけないことだと世間では取り沙汰していた。

b 醍醐天皇はたいそう威厳があつて近づきがたい帝でいらっしやって、左大臣はその聖帝とまでいわれた帝の一番の皇子で、源氏になられたお方だった。それなのに、このようてんまつな顛末は、まったく思いがけないことであり、心が痛む情けないことだと世間では非難していた。

c 醍醐天皇はたいそう賢明な帝でいらつしやつて、左大臣はその聖帝とまでいわれた帝の一番の皇子で、源氏になられたお方であった。それなのに、このよ  
うな顛末は、たいそう残念なことであり、左大臣が慕わしくつらいことだと世間では取り沙汰していた。

d 醍醐天皇はたいそう威厳があつて近づきがたい帝でいらつしやつて、左大臣はその聖帝とまでいわれた帝の一番の皇子で、源氏になられたお方であった。  
それなのに、このような有様は、たいそう残念なことであり、左大臣が慕わしくかわいそうなことだと世間では取り沙汰していた。

e 醍醐天皇はたいそう賢明な帝でいらつしやつて、左大臣はその聖帝とまでいわれた帝の一番の皇子で、源氏になられたお方であった。それなのに、このよ  
うな企てをするなど、まったく思いがけないことであり、左大臣が慕わしくつらいことだと世間では非難していた。

問7 左大臣が連れ去られた後の式部卿宮の様子はどのようであったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 式部卿宮は、法師になれたらいいのになれないだろう、とお思いになるけれども、まだ幼少のかわいらしい宮たちがおありであるし、北の方の母君がひどくお嘆きでいらつしやつて、目下のところ宮お一人を頼りにしておられるのだが、法師になることをあきらめきれないでおられる。

b 式部卿宮は、いっそ法師になってしまおうか、とお思いになるけれども、まだ幼少の宮たちは宮をしたっており、北の方の母君は世の中のことを嘆いて、  
いつも奥に隠れておられるので、とても子どもたちを見捨てて出家することはおできにならない。

c 式部卿宮は、いっそ法師になってしまおうか、とお思いになるけれども、まだ幼少のかわいらしい宮たちがおありであるし、北の方の母君がひどくお嘆き  
でいらつしやつて、目下のところ宮お一人を頼りにしておられるので、それらの人々を見捨てることはおできにならない。

d 式部卿宮は、法師になれたらいいのになれないだろう、とお思いになるけれども、まだ幼少の宮たちは宮をしたっており、北の方の母君は世の中のことを  
嘆いて、いつも奥に隠れておられるのだが、法師になることをあきらめきれないでおられる。

e 式部卿宮は、いっそ法師になってしまおうか、とお思いになるけれども、まだ幼少の宮たちは宮をしたっており、北の方の母君がひどくお嘆きでいらつ  
しやつて、目下のところ宮お一人を頼りにしておられるので、北の方の母君を見捨てて出家することはおできにならない。

問8 荒れ果てた邸内で、式部卿宮はどんな様子であったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 式部卿宮は、荒れ果てた庭をしみじみとした思いで、夕暮れになってもずっとご覧になっておられるにつけ、かつてのはなばなしかったお暮らしが恋しく、またつらくて、涙を流し、今のお暮らしのまま出家なさったことは、おいたわしくおそれおおいことであった。

b 式部卿宮は、荒れ果てた庭をしみじみとした思いで、夕暮れになってもずっとご覧になっておられるにつけ、かつてのはなばなしかったお暮らしが恋しく、またつらくて、涙を流し、生きながらまるで全く別人に生まれ変わったようになってしまわれたことは、感慨深くありがたいことであった。

c 式部卿宮は、たいそうつらく悲しく闇の夜をさまようようなお気持ちでお暮らしであるにつけても、かつてのはなばなしかったお暮らしが恋しく、またつらくて、涙を流し、生きながらまるで全く別人に生まれ変わったようになってしまわれたことは、おいたわしくおそれおおいことであった。

d 式部卿宮は、たいそうつらく悲しく闇の夜をさまようようなお気持ちでお暮らしであるにつけても、かつてのはなばなしかったお暮らしが恋しく、またつらくて、涙を流し、今のお暮らしのまま出家なさったことは、感慨深くありがたいことであった。

e 式部卿宮は、たいそうつらく悲しく闇の夜をさまようようなお気持ちでお暮らしであるにつけても、かつてのはなばなしかったお暮らしが恋しく、またつらくて、涙を流し、生きながらまるで全く別人に生まれ変わったようになってしまわれたことは、感慨深くありがたいことであった。

問9 傍線部④を現代語訳せよ。

次の文章は、『源氏物語』「手習」の一節である。いったんは入水を決意した浮舟であるが、木の根元に倒れていたところを、比叡山延暦寺の横川に修行する高德の僧都が宇治を訪れた際に発見され、一命を取り留める。僧都の妹の尼が手厚く介抱したが、浮舟の意識はなかなか回復しなかった。妹の尼が、比叡山に戻っていた僧都の立場を心配しつつも下山を請うたので、僧都は下山して浮舟の回復を祈るために修法を始めるのだった。これを読んで、後の問いに答えよ。

朝廷の召しにだに従はず、深く籠もりたる山を出でたまひて、すずろにかかる人のためになむ行ひ騒ぎたまふと、ものの聞こえあらむ、いと聞きにくかるべし、とおぼし、弟子どもも言ひて、人に聞かせじと隠す。僧都、「いであなかま、\*<sub>1</sub>大徳たち。われ\*<sub>2</sub>無慚の法師にて、忌むことのなかに、破る戒は多からめど、女の筋につけて、まだそしりとらず、あやまつことなし。齢六十にあまりて、今さらに人のもどき負はむは、さるべきにこそあらめ」とのたまへば、「よからぬ人の、ものを便なく言ひなしはべる時には、仏法の瑕となりはべることなり」と、心よからず思ひつつ言ふ。「この修法のほどにしるし見えずは」と、いみじきことどもを誓ひたまひて、夜一夜加持したまへる晝に、人に駆り移して、何やうのもの、かく人をまどはしたるぞと、ありさまばかり言はせまほしくて、弟子の\*<sub>3</sub>阿闍梨、とりどりに加持したまふ。月ごろ、いささかもあらはれざりつるものけ、調ぜられて、「おのれは、ここまでまうで来て、かく調ぜられたまつるべき身にもあらず。昔は行ひせし法師の、いささかなる世に恨みをとどめて、漂ひありきしほどに、よき女のあまた住みたまひし所に住みつきて、\*<sub>4</sub>かたへは失ひてしに、この人は、心と世を恨みたまひて、われいかで死なむ、といふことを、夜昼のたまひしにたよりを得て、いと暗き夜、独りものしたまひしを取りてしなり。されど、観音とさまかうさまにはぐくみたまひければ、この僧都に負けたてまつりぬ。今はまかりなむ」とのしる。「かく言ふは何ぞ」と問へば、憑きたる人、ものはかなきけにや、はかばかしくも言はず。正身の心地はさはやかに、いささかもおぼえて見まはしたれば、一人見し人の顔はなくて、皆、老法師、ゆがみおとろへたる者どものみ多ければ、知らぬ国に来にける心地して、いと悲し。ありし世のこと思ひ出づれど、住みけむ所、誰と言ひし人とだに、たしかにはかばかしくもおぼえず。ただ、われは限りとて身を投げし人ぞかし、いづこに來にたるにか、とせめて思ひ出づれば、いといみじきものを思ひ嘆きて、皆人の寝たりしに、\*<sub>5</sub>妻戸を放ちて出でたりしに、風はげしく、川波も荒う聞こえしを、独りもの恐ろしかりしかば、來し方行く末もおぼえて、\*<sub>6</sub>簀子の端に足をさしおろしながら、行くべき方もまどはれて、帰り入らむも中空にて、心強くこ

の世に亡せなむと思ひ立ちしを、をこがましくて人に見つけられむよりは、鬼も何も食ひて失ひてよ、と言ひつつ、つくづくとゐたりしを、いとよげなる男の寄り来て、「いざたまへ、おのがもとへ」と言ひて、抱く心地のせしを、宮と聞こえし人のしたまふとおぼえしほどより、心地まどひにけるなめり、知らぬ所にすゑ置きて、この男消え失せぬ、と見しを、つひにかく本意のこともせずなりぬる、と思ひつついみじう泣く、と思ひしほどに、そののちのことは絶えて、いかにいかにもおぼえず、人の言ふを聞けば、多くの日ごろも経にけり、いかに憂きさまを、知らぬ人にあつかはれ見えつらむ、とはづかしく、つひにかくて生き返りぬるか、と思ふもくちをしければ、いみじくおぼえて、なかなか沈みたまへりつる日ごろは、うつし心もなきさまにて、ものいささか参るをりもありつるを、つゆばかりの湯をだに参らず。「いかなれば、かくたのもしげなくのみはおはするぞ。うちへぬるみなどしたまへることはさめたまひて、さはやかに見えたまへれば、うれしく思ひきこゆるを」と、泣く泣く、たゆむをりなく添ひあてあつかひきこえたまふ。ある人びとも、あたらしき御さま容貌を見れば、心を尽くしてぞ惜しみまもりける。心には、なほいかで死なむ、とぞ思ひわたりたまへど、さばかりにて、生きとまりたる人の命なれば、いと執念くて、やうやう頭もたげたまへば、もの参りなどしたまふにぞ、なかなか面瘦せもていく。いつしかとうれしく思ひきこゆるに、「尼になしたまひてよ。さてのみなむ生くやうもあるべき」とのたまへば、「いとほしげなる御さまを、いかでかさはなしたてまつらむ」とて、ただ頂ばかりをそぎ、\*五戒ばかりを受けさせたてまつる。心もとなけれど、もとよりおれおれしき人の心にて、えさかしく強ひてものたまはず。僧都は、「今はかばかりにて、いたはりやめたてまつりたまへ」と言ひおきて、上りたまひぬ。

注

- \* 1 大徳だいとく 修行を積んだ高德の僧侶。ここでは僧侶たちへの敬称。
- \* 2 無慚むざん 戒律を破つて恥じないこと。ここでは僧都が自らを卑下する。
- \* 3 阿闍梨あざり 手本となるべき高德の僧。加持祈祷をおこなう導師。
- \* 4 かたへ 浮舟の異母姉の大君をさす。
- \* 5 妻戸 寝殿造りの建物の脇にある両開きの板戸。夜間用の出入り口。
- \* 6 簀子 寝殿造りで、廂のさらに外側にある縁側。

(『源氏物語』手習による)

\*7 湯ニ葉草などを煮出した煎じ薬。

\*8 五戒ニ出家していない信者に与える五つの戒。

問1 僧都が浮舟のために修法を行うことに対し、周囲の人々はどのように思っただけか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 朝廷のお召しにさえ従わず山に籠もっていたのに、その山を下り、むやみにこのような女人のために修法を行おうと忙しく立ち働きなさって、世間にうわさがたつようなことになっては、体裁が悪いことだろうと、尼もお思いになり、弟子たちもそう言って、このことを世の人に聞かせまいと隠している。
- b 朝廷のお召しにさえ従わず山に籠もっていたのに、その山を下り、むやみにこのような女人のために修法を行おうと忙しく立ち働きなさると、朝廷からのお咎めとががあった際には、弁解しにくいだろうと、尼もお思いになり、弟子たちもそう言って、このことを世の人に聞かせまいと隠している。
- c 朝廷のお召しにさえ従わず山に籠もっていたのに、その山を下り、不本意にもこのような女人のために修法を行おうと忙しく立ち働きなさって、世間にうわさがたつようなことになっては、僧都に危険が及びかねないと、尼もお思いになり、弟子たちもそう言って、このことを世の人に聞かせまいと隠している。
- d 朝廷のお召しにさえ従わず山に籠もっていたのに、その山を下り、不本意にもこのような女人のために修法を行おうと忙しく立ち働きなさると、朝廷からのお咎めがあった際には、弁解しにくいだろうと、尼もお思いになり、弟子たちもそう言って、このことを世の人に聞かせまいと隠している。
- e 朝廷のお召しにさえ従わず山に籠もっていたのに、その山を下り、むやみにこのような女人のために修法を行おうと忙しく立ち働きなさって、世間にうわさがたつようなことになっては、僧都に危険が及びかねないと、尼もお思いになり、弟子たちもそう言って、このことを世の人に聞かせまいと隠している。

問2 修法の様子とその結果について、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 「今回の修法ではものけはあらわれないかもしれない」と思いながらも、なみなみならぬ願をおたてになって、一昼夜加持しておられたその暁に、ものけを人に移して、どのようなものが、このように人をたぶらかしたのだとその事情を白状させたくて、弟子の阿闍梨がそれぞれに加持をおこなった。すると、数ヶ月ものあいだ、わずかしか正体をあらわさなかったもののけが降参して語り出した。



b 「今回の修法ではものけはあらわれないかもしれない」と思いながらも、なみなみならぬ願をおたてになって、一晚中加持しておられたその暁に、ものけを人に移して、何ほどのことがあって、このように人をたぶらかしたのだとその事情を白状させたくて、弟子の阿闍梨がそれぞれに加持をおこなった。すると、数ヶ月ものあいだ、少しも正体をあらわさなかったもののけが降参して語り出した。

c 「今回の修法の間に効験があらわれないなら」と、なみなみならぬ願をおたてになって、一昼夜加持しておられたその暁に、ものけを人に移して、何ほどのことがあって、このように人をたぶらかしたのだとその事情を聞いてあげようと、弟子の阿闍梨がそれぞれに加持をおこなった。すると、数ヶ月ものあいだ、わずかしかな正体をあらわさなかったもののけが降参して語り出した。

d 「今回の修法の間に効験があらわれないなら」と、なみなみならぬ願をおたてになって、一昼夜加持しておられたその暁に、ものけを人に移して、何ほどのことがあって、このように人をたぶらかしたのだとその事情を聞いてあげようと、弟子の阿闍梨がそれぞれに加持をおこなった。すると、数ヶ月ものあいだ、少しも正体をあらわさなかったもののけが降参して語り出した。

e 「今回の修法の間に効験があらわれないなら」と、なみなみならぬ願をおたてになって、一晚中加持しておられたその暁に、ものけを人に移して、どのようなものが、このように人をたぶらかしたのだとその事情を白状させたくて、弟子の阿闍梨がそれぞれに加持をおこなった。すると、数ヶ月ものあいだ、少しも正体をあらわさなかったもののけが降参して語り出した。

問3 降参したもののけの語った内容について、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 「この人は自分から世を恨みなさって、自分は死ぬことなど何でもない、ということを夜も昼もおっしゃっていたことに手がかりを得て、真つ暗な夜に、ひとりでいらっしやったところを私がとりついたので、しかし、観音様があれやこれやお守りになったので、生きながらえ、そしてこの僧都の修法に負けることになってしまいました。今は後悔しています」と、恨み言を言った。

b 「この人は自分から世を恨みなさって、自分をどうか殺してほしい、ということも夜も昼もおっしゃっていたことに手がかりを得て、真つ暗な夜に、ひとりでいらっしやったところを私がとりついたので、しかし、観音様があれやこれやお守りになったので、生きながらえ、そしてこの僧都の修法に負け

ることになってしまいました。今は後悔しています」と、恨み言を言った。

c 「この人は自分から世を恨みなさって、自分はなんとかして死にたい、ということをや夜も昼もおっしゃっていたことに手がかりを得て、真つ暗な夜に、ひとりであらうしやうとしたところを私がとりついたので。しかし、観音様があれやこれやお守りになったので、生きながらえ、そしてこの僧都の修法に負けることになってしまいました。今はもう退散します」と、大声をあげた。

d 「この人は自分から世を恨みなさって、自分をどうか殺してほしい、ということをや夜も昼もおっしゃっていたことに手がかりを得て、真つ暗な夜に、ひとりであらうしやうとしたところを私がとりついたので。しかし、観音様や様々な神様がお守りになったので、生きながらえ、そしてこの僧都の修法に負けることになってしまいました。今はもう退散します」と、大声をあげた。

e 「この人は自分から世を恨みなさって、自分は死ぬことなど何でもない、ということをや夜も昼もおっしゃっていたことに手がかりを得て、真つ暗な夜に、ひとりであらうしやうとしたところを私がとりついたので。しかし、観音様や様々な神様がお守りになったので、生きながらえ、そしてこの僧都の修法に負けることになってしまいました。今はもう退散します」と、大声をあげた。

問4 ものけが去った直後の浮舟について、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 気分がさっぱりして、すこし意識もはっきりして周囲を見回すと、心を開いて話せそうな人は一人もおらず、知らない国に来た心地がして、とても悲しい。かつての暮らしのことを思い出そうとするけれど、住んでいた所や誰と親しくしていたのかもはっきりとはわからない。ただ、自分はもう最期と思っ

b 気分がさっぱりして、すこし意識もはっきりして周囲を見回すと、心を開いて話せそうな人は一人もおらず、知らない国に来た心地がして、とても悲しい。前世のことを思い出そうとするけれど、住んでいた所や何という名前だったのかもはっきりとはわからない。ただ、自分はもう最期と思っ

c 気分がさっぱりして、すこし意識もはっきりして周囲を見回すと、知っている人は一人もおらず、知らない国に来た心地がして、とても悲しい。前世での

ことを思い出そうとするけれど、住んでいた所や誰と親しくしていたのかもはっきりとはわからない。ただ、自分はまだ最期と思って入水した人であり、それなのに、どこに来てしまったのかと、無理に記憶をたどった。

d 気分がさっぱりして、すこし意識もはっきりして周囲を見回すと、知っている人は一人もおらず、知らない国に来た心地がして、とても悲しい。かつての暮らしのことを思い出そうとするけれど、住んでいた所や何という名前だったのかもはっきりとはわからない。ただ、自分はまだ最期と思って入水した人であり、それなのに、どこに来てしまったのかと、無理に記憶をたどった。

e 気分がさっぱりして、すこし意識もはっきりして周囲を見回すと、知っている人は一人もおらず、知らない国に来た心地がして、とても悲しい。かつての暮らしのことを思い出そうとするけれど、住んでいた所や誰と親しくしていたのかもはっきりとはわからない。ただ、自分はまだ最期と思って入水した人であり、それなのに、どこに来てしまったのかと思いつつ、問いただされて記憶をたどった。

問5 浮舟は、入水しようとしたときの経緯についてどのように回想しているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 皆が寝静まってから、妻戸を開けて外へ出たものの、風が激しく川波も荒々しく音を立てていて、孤独で恐ろしかったので、今までのこともこれから先のこととも頭になくて、どっちに行ってもいいかもわからず、死んでしまおうと強く決心したのに、何かの拍子に人に見つけられるより前に、鬼かほかの何かが私を食べ殺してしまうかもしれないと言いながら、うろろろとさまよっていた。

b 皆が寝静まってから、妻戸を開けて外へ出たものの、風が激しく川波も荒々しく音を立てていて、孤独で恐ろしかったので、今までのこともこれから先のこととも頭になくて、どっちに行ってもいいかもわからず、死んでしまおうと強く決心したのに、みっともなくも人に見つけられるよりは、鬼でも私を食べ殺してしまっておくれと言いながら、じっと思い詰めて座っていた。

c 皆が寝静まってから、妻戸を開けて外へ出たものの、風が激しく川波も荒々しく音を立てていて、孤独で恐ろしかったので、今までのこともこれから先のこととも頭になくて、どっちに行ってもいいかもわからず、死んでしまおうと強く決心したのに、何かの拍子に人に見つけられるよりは、鬼でも私を食べ殺してしまっておくれと言いながら、うろろろとさまよっていた。

d 皆が寝静まってから、妻戸を開けて外へ出たものの、風が激しく川波も荒々しく音を立てていて、孤独で恐ろしかったので、前世や来世のことも気になつて、どっちに行つていいかわからず、死んでしまおうと強く決心したのに、みつともなく人に見つけられるより前に、鬼かほかの何か私を食べ殺してしまうかもしれないと言いながら、うろろうとさまよつていた。

e 皆が寝静まってから、妻戸を開けて外へ出たものの、風が激しく川波も荒々しく音を立てていて、孤独で恐ろしかったので、前世や来世のことも気になつて、どっちに行つていいかわからず、死んでしまおうと強く決心したのに、みつともなく人に見つけられるよりは、鬼でも私を食べ殺してしまつておくれと言いながら、じつと思ひ詰めて座つていた。

問6 浮舟はどこまで記憶をたどることができたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a たいそう美しい男性がよつてきて、「さあくださいな、あなたの命を」と言つて、自分を抱くように感じたので、宮とお話し申していた人がそうなさるのだからと思つたときから、正気を失つてしまつたようで、その男性は自分を見知らぬ所に座らせておいて、消えてしまつたとみたのだが、自分はどうとう本心を打ち明けることもできないままになつてしまつたと思つて、泣いていたと思うけれども、その後のことは詳しくは思ひ出せない。

b たいそう美しい男性がよつてきて、「さあくださいな、あなたの命を」と言つて、自分を抱くように感じたので、宮とお話し申していた人がそうなさるのだからと思つたときから、正気を失つてしまつたようで、その男性は自分を見知らぬ所に座らせておいて、消えてしまつたとみたのだが、自分はどうとう目的を果たして死んでしまうこともできないままになつてしまつたと思つて、泣いていたと思うけれども、その後のことはどうしても思ひ出せない。

c たいそう美しい男性がよつてきて、「さあいらっしゃい、わたしのところへ」と言つて、自分を抱くように感じたので、宮と申し上げた人がそうなさるのだからと思つたときから、正気を失つてしまつたようで、その男性は自分を見知らぬ所に座らせておいて、消えてしまつたとみたのだが、自分はどうとう目的を果たして死んでしまうこともできないままになつてしまつたと思つて、泣いていたと思うけれども、その後のことはどうしても思ひ出せない。

d たいそう美しい男性がよつてきて、「さあいらっしゃい、わたしのところへ」と言つて、自分を抱くように感じたので、宮と申し上げた人がそうなさるのだからと思つたときから、正気を失つてしまつたようで、その男性は自分を見知らぬ所に座らせておいて、消えてしまつたとみたのだが、自分はどうとう

本心を打ち明けることもできないままになってしまったと思って、泣いていたと思うけれども、その後のことは詳しくは思い出せない。

e たいそう美しい男性がよってきて、「さあいらっしゃい、わたしのところへ」と言っていて、自分を抱くように感じたので、宮とお話し申していた人がそんなさるのだろうと思ったときから、正気を失ってしまったようで、その男性は自分を見知らぬ所に座らせておいて、消えてしまったとみたのだが、自分はどうとう目的を果たして死んでしまうこともできないままになってしまったと思って、泣いていたと思うけれども、その後のことは詳しくは思い出せない。

問7 食事や薬湯を拒む浮舟に対して、お世話をしていた人々の様子として、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 「どうしてこう心細そうにいらっしゃるのですか。熱も下がってさっぱりなさったようにお見受けしますのを、うれしく思い申しておりますのに」と泣く泣く言っていて、尼君は絶えず困惑なさっている。僧都の弟子たちも、浮舟のもつたいないようなお姿や顔立ちを見ると、このまま死なせるのが惜しく、一生懸命にお守りしようと思った。

b 「どうしてこう心細そうにいらっしゃるのですか。熱も下がってさっぱりした感じにおなりになったのを、うれしく思い申しておりますのに」と泣く泣く言っていて、尼君は付ききりでお世話申し上げなさる。僧都の弟子たちも、ものけが去って一新した浮舟のお姿や顔立ちを見ると、このまま死なせるのが惜しく、一生懸命にお守りしようと思った。

c 「どうしてこう心細そうにいらっしゃるのですか。熱も下がってさっぱりした感じにおなりになったのを、うれしく思い申しておりますのに」と泣く泣く言っていて、尼君は付ききりでお世話申し上げなさる。お側の女房たちも、ものけが去って一新した浮舟のお姿や顔立ちを見ると、このまま死なせるのが惜しく、精一杯介抱した。

d 「どうしてこう心細そうにいらっしゃるのですか。熱も下がってさっぱりした感じにおなりになったのを、うれしく思い申しておりますのに」と泣く泣く言っていて、尼君は絶えず困惑なさっている。お側の女房たちも、ものけが去って一新した浮舟のお姿や顔立ちを見ると、このまま死なせるのが惜しく、精一杯介抱した。

e 「どうしてこう心細そうにいらっしゃるのですか。熱も下がってさっぱりなさったようにお見受けしますのを、うれしく思い申しておりますのに」と

泣く泣く言って、尼君は付ききりでお世話申し上げなさる。お側の女房たちも、浮舟のもったいないようなお姿や顔立ちを見ると、このまま死なせるのが惜しく、精一杯介抱した。

問8 五戒を受けた浮舟の様子と、僧都の対応はどのようなものであったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 浮舟は、五戒だけでは不十分で物足りないけれど、元来はきはきしたところのない性格なので、さしでがましく無理に出家をお願いすることもおできにない。僧都は、「今はこのくらいにしておいて、お大事になさってください」と浮舟に言い置いて、横川へお上りになった。

b 浮舟は、五戒だけでは不十分で物足りないけれど、元来はきはきしたところのない性格なので、さしでがましく無理に出家をお願いすることもおできにない。僧都は、「今はこのくらいにしておいて、お大事にしてさしあげてください」と妹の尼に言い置いて、横川へお上りになった。

c 浮舟は、出家させてもらえるのを待ち遠しく思うけれど、もともと自己主張の強い性格ではあるものの、さしでがましく早く出家させてほしいとお願ひするようなこともおっしゃることができない。僧都は、「今はこのくらいにしておいて、お大事になさってください」と浮舟に言い置いて、横川へお上りになった。

d 浮舟は、出家させてもらえるのを待ち遠しく思うけれど、元来はきはきしたところのない性格なので、さしでがましく早く出家させてもらえるようお願いすることもおできにならない。僧都は、「今はこのくらいにしておいて、お大事になさってください」と浮舟に言い置いて、横川へお上りになった。

e 浮舟は、出家させてもらえるのを待ち遠しく思うけれど、もともと自己主張の強い性格ではあるものの、さしでがましく早く出家させてほしいとお願ひするようなこともおっしゃることができない。僧都は、「今はこのくらいにしておいて、お大事にしてさしあげてください」と妹の尼に言い置いて、横川へお上りになった。

問9 傍線部(A)を、指示語のさす内容をあきらかにして、現代語訳せよ。

次の文章は、『源氏物語』明石巻の一節である。須磨に退去した光源氏(本文中では「君」)は祓えの日に暴風雨に襲われた。これを読んで、後の問いに答えよ。

君は御心を静めて、何ばかりの過ちにてかこの渚なみぞに命をはきはめんと強う思おぼしなせど、いともの騒がしければ、いろいろの\*幣帛へいやく捧げさせたまひて、「住吉すみよしの神、近き境を鎮め護りたまふ。まことに\*迹あとを垂れたまふ神ならば助けたまへ」と、多くの大願を立てたまふ。おのおのみづからの命をばさるものにて、かかる御身のまたなき例に沈たまひぬたまひぬべきことのいみじう悲しきに、心を起おこして、すこしものおぼゆるかぎりは、身に代へてこの御身ひとつを救ひたてまつらむとよみて、もろ声に仏神を念じたてまつる。「帝王の深き宮に養はれたまひて、いろいろの楽しみに驕りたまひしかど、深き御うつくしみ大八洲にあまねく、沈おぼめる輩ともがらをこそ多く浮かべたまひしか。今何の報いにか、こころ横よこさまなる浪風にはおぼほれたまはむ。天地あめつちことわりたまへ。罪なくて罪に当たり、官位つかさくらゐをとられ、家を離れ、境を去りて、明け暮れやすき空なく嘆きたまふに、かく悲しき目をさへ見、命いのち尽きなんとするは、前の世さきの報いか、この世の犯しかと、神仏明らかになしませば、この愁うれへやすめたまへ」と、御社みやしろの方かたに向きてさまさまの願を立てたまふ。また海の中の竜王、よろづの神たちに願を立てさせたまふに、いよいよ鳴りとどろきて、おはしまずに続きたる廊に落ちかかりぬ。炎燃えあがりて廊は焼けぬ。心魂こころたまなくであるかぎりまどふ。背後うしろの方なる\*大炊殿おほひと思しき屋に移したてまつりて、上下かみしもとなく立ちこみていとらうがはしく泣きとよむ声、雷いかづちにもおとらず。空は墨をすりたるやうにて日も暮れにけり。

やうやう風なほり、雨の脚しめり、星の光も見ゆるに、この御座所おましどころのいとめづらかなるも、いとかたじけなくて、寝殿に返し移したてまつらむとするに、「焼け残のこりたる方も疎まましげに、そこの人の踏みとどろかしまどへるに、御簾みすなどもみな吹き散らしてけり」「夜を明かしてこそは」とたりあへるに、君は御念誦ねんずしたまひて、思しめぐらすに、いと心あわたし。月さし出いでて、潮の近く満ち来ける跡もあらはに、なごりなほ寄せかへる波荒きを、柴しばの戸おし開けてながめおはします。近き世界に、ものの心を知り、来し方行く先のことうちおぼえ、とやかくやとはかばかしく悟る人もなし。あやしき海人あまどもなどの、貴たかき人おはする所とて、集まり参りて、聞きも知りたまはぬことどもをさへづりあへるも、いとめづらかなれどえ追ひも払はず。「この風いまして止やまざらましかば、潮上りて残る所なからまし。神の助けおろかならざりけり」と言ふを聞きたまふも、いと心細しと言へばおろかなり。

\*4 海にます神のたすけにかからずは\*5 潮のやほあひにさすらへなまし

終日ひねもすにいりもみつる雷かみの騒さわぎに、さこそいへ、いたう困こまじたまひにければ、心にもあらずうちまどろみたまふ。かたじけなき御座所なれば、ただ寄りゐたまへるに、

\*6 故院ただおはしまししまながら立ちたまひて、「などかくあやしき所にはものするぞ」とて、御手を取りて引き立てたまふ。「住吉の神の導きたまふままに、はや舟出してこの浦を去りね」とのたまはず。いとうれしくて、「かしこき御影に別れたてまつりにしこなた、さまさま悲しきことのみ多くはべれば、今はこの渚に身をや棄すてはべりなまし」と聞こえたまへば、「いとあるまじきこと。これはただいささかなる物の報いなり。我は位に在りし時、過つことなかりしかど、おのづから犯しありければ、その罪を終ふるほど暇いとまなくて、この世をかへりみざりつれど、いみじき愁へに沈むを見るにたへがたくて、海に入り、渚に上り、いたく困じにたれど、かかるついでに内裏に奏すべきことあるによりなむ急ぎ上りぬる」とて立ち去りたまひぬ。

飽かず悲しくて、<sup>④</sup>御供みこに参りなんと泣き入りたまひて、見上げたまへれば、人もなく、月の顔のみきらきらとして、夢の心地こころもせず、御けはひとまれる心地して、空の雲あはれにたなびけり。

(『源氏物語』明石による)

## 注

- \*1 幣帛みてぐら 神に奉納する物の総称。
- \*2 迹あとを垂たれたまふ神 本地垂迹すいじやく説による。神は仏の化身であると考えられていた。
- \*3 大炊殿おほひとの 食物を調理する建物。      \*4 海にます神 海うみの神である住吉大明神と海竜王その他の神々。
- \*5 潮のやほあひ 潮流が八方から集まって深くなったところ。
- \*6 故院 今は亡き桐壺院きりつばいん。源氏の父。

問1 暴風雨に遭った光源氏の様子について、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 光源氏は、気持ちを落ち着けて、少しばかり罰を受けたとしても、この渚で運命をまつとうしようとして強く思っいらっしやるけれども、いっこうに風が静



まらないので、さまざまの色の幣帛をお供えになり、「住吉の神よ、もし本当に御仏の化身でいらっしゃるのならば、どうかお助けください」と、願を立てになる。

b 光源氏は、気持ちを落ち着けて、少しばかり罰を受けたとしても、この渚で運命をまっとうしようと強く思っていたらっしゃるけれども、まだ自らの動揺を抑えられないので、さまざまの色の幣帛をお供えになり、「住吉の神よ、あなたはまさしく御仏の化身でいらっしゃるのだから、どうかお助けください」と、願をお立てになる。

c 光源氏は、気持ちを落ち着けて、多くの過ちを犯してしまったので、この渚で命を終えることになるだろうと強く感じていらっしゃるけれども、従者たちが不安で落ち着かないので、さまざまの色の幣帛をお供えになり、「住吉の神よ、もし本当に御仏の化身でいらっしゃるのならば、どうかお助けください」と、願をお立てになる。

d 光源氏は、気持ちを落ち着けて、一体、どんな過ちのために、この渚で死ななければならないのか、そんなはずはないと気強くかまえていらっしゃるけれども、いっこうに嵐が静まらないので、さまざまの色の幣帛をお供えになり、「住吉の神よ、あなたはまさしく御仏の化身でいらっしゃるのだから、どうかお助けください」と、願をお立てになる。

e 光源氏は、気持ちを落ち着けて、一体、どんな過ちのために、この渚で死ななければならないのか、そんなはずはないと気強くかまえていらっしゃるけれども、従者たちが不安で落ち着かないので、さまざまの色の幣帛をお供えになり、「住吉の神よ、もし本当に御仏の化身でいらっしゃるのならば、どうかお助けください」と、願をお立てになる。

問2 従者たちは光源氏について、神仏にどのように祈ったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 従者たちは、「君は帝王の奥深い宮に養われなされて、数々の楽しみを人びとにおふるまいなされていらつしやったために、奥深い優美さが国中に知れ渡って、悲しみに沈んでいる者たちを大勢お救いになったのです。今、何の報いで、このように並々でない波風を君が受けていらつしやるのでしょうか。神々よ、是非を明らかにしてください」と祈った。

b 従者たちは、「君は帝王の奥深い宮に養われなさって、数々の楽しみに贅を尽くしなさったけれども、奥深い優美さが国中に知れ渡って、悲しみに沈んでいる者たちを大勢お救いになったのです。今、何の報いで、このように並々でない波風を君が受けていらつしやるのでしょうか。神々よ、理非を明らかにしてください」と祈った。

c 従者たちは、「君は帝王の奥深い宮に養われなさって、数々の楽しみに贅を尽くしなさったけれども、奥深い優美さが国中に知れ渡って、悲しみに沈んでいる者たちを大勢お救いになったのです。今、何の報いで、このように激しい波風を君が受けていらつしやるのでしょうか。神々よ、この報いを退けてください」と祈った。

d 従者たちは、「君は帝王の奥深い宮に養われなさって、数々の楽しみに贅を尽くしなさったけれども、深い御慈悲は国中に行き渡って、悲しみに沈んでいる者たちを大勢お救いになったのです。今、何の報いで、このように激しい波風を君が受けていらつしやるのでしょうか。神々よ、理非を明らかにしてください」と祈った。

e 従者たちは、「君は帝王の奥深い宮に養われなさって、数々の楽しみを人びとにおふるまいなさっていらつしやったために、深い御慈悲は国中に行き渡って、悲しみに沈んでいる者たちを大勢お救いになったのです。今、何の報いで、このように激しい波風を君が受けていらつしやるのでしょうか。神々よ、この報いを退けてください」と祈った。

問3 風雨が静まった後の、従者たちの様子はどうだったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 従者たちは、雷により移った光源氏の御座所がとても異様などころであるのかもしれないそうやるせなく、光源氏を寢殿にお移ししようとするが、「焼け残った所も悲惨な感じだし、それにあちこちの人が音を立てて踏みならし、うろろうしていたうえに、御簾なども吹き飛ばされてしまったのです」「夜を明かしてからにしては」とみなで迷っていた。

b 従者たちは、雷により移った光源氏の御座所がとても異様などころであるのかもしれないそうおそれ多く、光源氏を寢殿にお移ししようとするが、「焼け残った所も不気味な感じだし、それに大勢の人が音を立てて踏みならし、うろろうしていたうえに、御簾なども吹き飛ばされてしまったのです」「夜を明かして

からにしては」とみんで迷っていた。

c 従者たちは、雷により移った光源氏の御座所がとても異様なところであるのかもしれないそう面目ないことで、光源氏を寢殿にお移ししようとするが、「焼け残った所も不気味な感じだし、それに大勢の人が足を踏みならして大声で願を立て、うろろろしていたうえに、御簾なども跳ね飛ばしてしまったのです」「夜を明かしてからにしては」とみんで迷っていた。

d 従者たちは、雷により移った光源氏の御座所がまったく不似合いなところであるのかもしれないそう珍しいことで、光源氏を寢殿にお移ししようとするが、「焼け残った所も悲惨な感じだし、それにあちこちの人が昔を立てて踏みならし、うろろろしていたうえに、御簾なども吹き飛ばされてしまったのです」「夜を明かしてからにしては」とみんで迷っていた。

e 従者たちは、雷により移った光源氏の御座所がまったく不似合いなところであるのかもしれないそう非礼で、光源氏を寢殿にお移ししようとするが、「焼け残った所も不気味な感じだし、それに大勢の人が足を踏みならして大声で願を立て、うろろろしていたうえに、御簾なども跳ね飛ばしてしまったのです」「夜を明かしてからにしては」とみんで迷っていた。

問4 光源氏が柴の戸を押し開けたときの周囲の状況は、どのようだったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a このあたりには、自分の心情をさとり、過去未来のこともよく理解し、あれはあれ、これはこれとてきばきと判断できる人もいない。賤しい海人などが、貴いお方がお住まいだといつて集まってきて、従者たちの話を聞いて知ったことを話し合っているのも、たいそう異様ではあるが、追い払うこともできないでいる。

b このあたりには、物事の道理をわきまえて、過去未来のこともよく理解し、あれはあれ、これはこれとてきばきと判断できる人もいない。賤しい海人などが、貴いお方がお住まいだといつて集まってきて、従者たちの話を聞いて知ったことを話し合っているのも、非常にまれなことではあるが、追い払うこともできないでいる。

c このあたりには、自分の心情をさとり、過去未来のこともよく理解し、あれはあれ、これはこれと明確に判断できる人もいない。賤しい海人などが、貴い

お方がお住まいだといって集まってきて、光源氏が聞いてもわからない言葉をはかしてくるのも、非常にまれなことではあるが、追い払うこともしない  
でいる。

d このあたりには、自分の心情をさとり、過去未来のこともよく理解し、あれはあれ、これはこれと明確に判断できる人もいない。賤しい海人などが、貴い  
お方がお住まいだといって集まってきて、光源氏が聞いてもわからない言葉をはかしてくるのも、たいそう異様ではあるが、追い払うこともできないで  
いる。

e このあたりには、物事の道理をわきまえ、過去未来のこともよく理解し、あれはあれ、これはこれと明確に判断できる人もいない。賤しい海人などが、貴  
いお方がお住まいだといって集まってきて、光源氏が聞いてもわからない言葉をはかしているのも、たいそう異様ではあるが、追い払うこともできない  
でいる。

問5 暴風雨に対して、光源氏はどのように感じて、どのような歌を詠んだか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 光源氏は、海人が「この風がもう少し止まずに続いていたら、高潮が襲って何もかもさらわれてしまったら。神々の助けは並々ではなかったの  
だ」というのを聞くにつけても心細いどころではなく、「海にいらっしゃる神の助けを疑わなかったので、潮路の八重に集まる沖の海で生き延びていら  
れるだろう」という歌を詠んだ。

b 光源氏は、海人が「この風がもう少し止まずに続いていたら、高潮が襲って何もかもさらわれてしまったら。神々の助けは物足りなくはなかった  
のだなあ」というのを聞くもの、心細さにおろかにも、「海にいらっしゃる神の助けが及ばなかったので、潮路の八重に集まる沖の海に漂ってしまった  
ことだ」という歌を詠んだ。

c 光源氏は、海人が「この風がもう少し止まずに続いていたら、高潮が襲って何もかもさらわれてしまったら。神々の助けは並々ではなかったの  
だ」というのを聞くにつけても心細いどころではなく、「海にいらっしゃる神の助けを受けなかったら、潮路の八重に集まる沖の海に漂っていたことだろ  
う」という歌を詠んだ。

d 光源氏は、海人が「この風が長い間止まずに続いていたので、高潮が襲って何もかもさらわれてしまったのだなあ。神々の助けは及ばなかったのだろうか」というのを聞くものの、心細いと口に出すのもおろかなので、「海にいらっしやる神の助けがなかったら、潮路の八重に集まる沖の海に漂っていたことだろう」という歌を詠んだ。

e 光源氏は、海人が「この風が長い間止まずに続いていたので、高潮が襲って何もかもさらわれてしまったのだなあ。神々の助けは及ばなかったのだろうか」というのを聞くにつけても心細いどころではなく、「海にいらっしやる神の助けを頼みにしなかったので、潮路の八重に集まる沖の海に漂ってしまっただことだ」という歌を詠んだ。

問6 光源氏が眠りかかったところに、どのようなことが起こったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 光源氏が物に寄りかかって座っていらっしやると、桐壺院が、ご生前そのままのお姿で立っていらっしやって、「どうしてこのような見苦しいところにいるのか」と、光源氏の手を取って引き起こしなされた。

b 光源氏が物に寄りかかって座っていらっしやると、桐壺院が、光源氏に向いている先に立っていらっしやって、「どうしてそのような不思議なところに行こうとするのか」と、光源氏の手を取ってとがめなされた。

c 光源氏が物に寄りかかって座っていらっしやると、桐壺院が、光源氏に向いている先に立っていらっしやって、「どうしてこのような神秘的なところにいるのか」と、光源氏の手を取って引き起こしなされた。

d 光源氏が物に寄りかかって座っていらっしやると、桐壺院が、ご生前そのままのお姿で立っていらっしやって、「どうしてそのような不吉なところに行こうとするのか」と、光源氏の手を取って引き起こしなされた。

e 光源氏が物に寄りかかって座っていらっしやると、桐壺院が、ご生前そのままのお姿で立っていらっしやって、「どうしてこのようなみすばらしいところにいるのか」と、光源氏の手を取ってとがめなされた。

問7

桐壺院と光源氏のやりとりはどのようなものだったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 桐壺院が「住吉の神のお導きがあつたならば、早く船を出してこの浦を去りなさい」とおっしゃったところ、光源氏は「おそれ多い院のお姿にお別れ申し上げてこのかた、いろいろと悲しいことばかりございましたので、今すぐにこの渚に身を捨ててはならないかもしれません」と申し上げた。
- b 桐壺院が「住吉の神のお導きがあつたならば、早く船を出してこの浦を去りなさい」とおっしゃったところ、光源氏は「おそれるべき神々のお姿にお別れ申し上げた今となっては、いろいろと悲しいことばかりございましたので、今すぐにこの渚に身を捨ててはならないかもしれません」と申し上げた。
- c 桐壺院が「住吉の神のお導きに従つて、早く船を出してこの浦を去りなさい」とおっしゃったところ、光源氏は「院のお造りになつたすばらしい都にお別れ申し上げてこのかた、いろいろと悲しいことばかりございますので、今はいつそのこと、この渚に身を捨ててしまひとうございます」と申し上げた。

d 桐壺院が「住吉の神のお導きに従つて、早く船を出してこの浦を去りなさい」とおっしゃったところ、光源氏は「おそれ多い院のお姿にお別れ申し上げてこのかた、いろいろと悲しいことばかりございますので、今はいつそのこと、この渚に身を捨ててしまひとうございます」と申し上げた。

e 桐壺院が「住吉の神のお導きに従つて、早く船を出してこの浦を去りなさい」とおっしゃったところ、光源氏は「おそれるべき神々のお姿にお別れ申し上げた今となっては、いろいろと悲しいことばかりございますので、今はいつそのこと、この渚に身を捨ててしまひとうございます」と申し上げた。

問8

桐壺院が光源氏に言いおいたことはどのようなことか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 桐壺院は「これは、少し不条理なものの報いである。私は、在位中の知らないうちに犯した罪を償うまでのあいだ、今の世のことを顧みることができなかったが、みなが深い悲しみを感じているのを見ると我慢できず、ここまで来た。それで、ひどく氣力が失われたけれども、みなど帝に奏上することがあるので急いで京へ上るところだ」とおっしゃった。

b 桐壺院は「これは、少し不条理なものの報いである。私は、在位中の知らないうちに犯した罪を償うまでのあいだ、自分の生きた世の中を顧みることができなかったが、みなが深い悲しみを感じているのを見ると我慢できず、ここまで来た。それで、ひどくくたびれたけれども、帝に奏上することがあるので急いで京へ上るところだ」とおっしゃった。

c 桐壺院は「これは、ただほんの些細ささいなものものの報いである。私は、在位中の知らないうちに犯した罪を償うまでのあいだ、自分の生きた世の中を顧みることができなかつたが、そなたが苦しんでいるのを見ると我慢できず、ここまで来た。それで、ひどく迷ったけれども、帝に奏上することがあるので急いで京へ上るところだ」とおっしゃった。

d 桐壺院は「これは、ただほんの些細なものものの報いである。私は、在位中の知らないうちに犯した罪を償うまでのあいだ、今の世のことを顧みることができなかつたが、みなが深い悲しみを感じているのを見ると我慢できず、ここまで来た。それで、おまえのことがひどく気にかかるけれども、帝に奏上することがあるので急いで京へ上るところだ」とおっしゃった。

e 桐壺院は「これは、ただほんの些細なものものの報いである。私は、在位中の知らないうちに犯した罪を償うまでのあいだ、今の世のことを顧みることができなかつたが、そなたが苦しんでいるのを見ると我慢できず、ここまで来た。それで、ひどく疲れたけれども、帝に奏上することがあるので急いで京へ上るところだ」とおっしゃった。

問9 傍線部(A)を、主語を補って現代語訳せよ。

次の文章は、『うつほ物語』の一部である。藤原仲忠(本文中では中納言とも)は、幼い頃暮らしていた屋敷跡を訪れた。他に人家もない屋敷跡には場違いとも思われる立派な蔵があった。そのまわりには多くの死体があり、さらに調べさせると蔵には頑丈な錠がかけられ、その封印には祖父の名前があった。その時、おうな おきな 翁と翁がやって来て、「これは多くの人を取り殺した蔵です。とにかくここを離れてください」と泣く。蔵から少し離れ、二人は仲忠に語り始めた。これを読んで、後の問いに答えよ。

さて、これらが申すやう、(嫗・翁)「この村は、いみじく栄えてはべりし所なり。今年二十年あまり、三十年にはまだ足らぬほどになむ、かく滅びてはべる。そのゆゑは、むかし、一人子を唐土もちこしに渡したまへりし人の御殿になむありし。その子を、お待ち得たまはで失うせたまひし後に、その子帰りいましたりし。さてこの殿を、いと清らに造りて住みたまひしほどに、御娘一人なむ持たたまへりし。その娘の小さくいますがりし時より、世に聞こえぬ\*<sub>1</sub>音声樂の声なむ絶えざりし。その音声樂を聞く人は、みな肝きも心こころ榮えて、病ある者なくなり、老いたる者も若くなりしかば、京のうちの人は巡りて承りし。その娘嫁ぎ時になりたまひしかば、御門かどを鎖さして、人通はさでありしに、\*<sub>2</sub>大王、皇子みこ、宮、殿ばらの御よばひの使は、明け立てば立ち巡りて、こともえ告げでぞはべりし。しかありしほどに、その父母かくれたまひにしかば、かの御娘は聞こえたまはずなりにき。さりしかば、この殿は、河原人、里人入り乱りて毀こぼち果はてて、ただ一、二年にかくなりはべりにき。屋ども、よろづのものども取りしが、こともなかりしかば、この蔵ばかりは物どもはべらむとて、まかり寄る者は、やがて倒れて、多くの人死にはべりぬ。夜は人にも見えはべらで、馬に乗りて来つつ、\*<sub>3</sub>弓弦打ちをしつつ、夜巡りするやうになむはべる。かく恐ろしき所に、百歳ももせになりはべるまで、この嫗、翁の見たてまつりはべるに、わが国に見えたまはぬ姿がおはする玉たまの男をとこの見えたまへるは、いみじう悲しさに、とく告げ申さむとて、まどひまうで来あへず、まどひはべるなり」と申す。中納言、「いとよく申したり。この巡りに住まずなりにけむは、いかであるぞ」と問はせたまへば、「この蔵を開けむ、開けむとはべりつつ、人の悪あしくするを、われはなど開けざらむと、かつ倒れ伏せるを見つつ、年月を経てしはべりしほどに、みな死にはべりにき。させし人の家には、時のまにこと起こりつつ、にはかに滅びはべりにき」と申せば、「いと恐ろしきことかな。また開くる人やあると見はべれ」とて、御衣おんせひとかさね一襲脱ぎたまひて、一つづつ賜たまひつ。「この地のうちに見ゆる屋のわた



りにはべりて、この蔵、人またさのごとするやあると見はべれ。さて、その蔵の巡りにうたてあるものを、人に払ひ捨てさせて候へ」とて帰たまひぬれば、姫、翁、老いの世に、見知らぬ香ばしくうるはしき綾掻練の御衣どもを得て、おちまどふこと限りなし。すなはち、もの詣でしたる人、見つけて、価も限らず取りつ。かくて、その価の物を、おのが孫のあたりの者にくれて、蔵の巡りを払ひ清めさせて候へば、四、五日ばかりあれば、\*5殿の家司来て\*6幄打つ。しばしあれば、\*7大徳たち、陰陽師など来て、祓へし、読経するほどに、中納言、御前いと多くて、蔵開けさすべき人など率ゐておはして、ことのよし申させ、御誦経をせさせたまひて、鍵なれば、開くべきたばかりをしつつ、蔵を開けさせたまふ。さらに開かず。そこに、二、三日、多くの人を率ゐて、夜は車にて、幄の内に居たまひつつ開けさせたまふに、さらに開くべくもあらず。うたてをめきわび、多くの人しわづらふ。

三日といふ昼つ方、御装束などしたまひて、心のうちに申したまふやう、「承れば、この蔵、先祖の御領なりけり。御封を見れば御名あり。この世に仲忠を放ちては、御後なし。母はべれど、これ女なり。この蔵、先祖の御霊、開かせたまへ」と祈りたまふ。されど開かず。人の申すやう、(供人「天下いかにいふとも、この鎖は割るべきにもあらず。上を毀ち、開けはべらむ」と申せば、「いかなれば、え開けぬぞと見む。あやしきわざかな」とうち笑ひて、蔵に上りて見たまへば、いといかめしき鎖なり。引きくつろがして見たまへば、開きぬ。これは、げに先祖の御霊の、われを待ちたまふなりけり、と思ひて、人を召して、開けさせて見たまへば、内に、今一重\*8校して鎖あり。その戸には、\*9文殿と\*10印さしたり。さればよと思ひて、また鎖開けたまへば、ただ開きに開きぬ。

## 注

- \*1 音声楽おんじやうがく 管弦楽の総称。素晴らしい音色を持った音楽のこと。
- \*2 大王おんじやう 天皇のこと。
- \*3 弓弦打ちゆづる 弓の弦を鳴らして悪霊などを退散させること。
- \*4 綾掻練あやかいねり 模様を織り出した柔らかい絹。
- \*5 殿の家司けいし 家司は三位以上の家におかれていた家政職員。ここでは仲忠配下の者のこと。
- \*6 幄あけぼり 以下の儀式に参加する者たちのための建物。
- \*7 大徳たちだいとく、陰陽師おんやうじ など 大徳は、位の高い僧侶。陰陽師は、占いや土地の吉凶をみるなどする役人。

(『うつほ物語』蔵開上による)

\* 8 校して<sup>あせ</sup>校倉造りにして。二重構造の蔵であり、嚴重に保管されていたことをあらわす。

\* 9 文殿<sup>おして</sup>書籍などを保存しておく建物。

\* 10 印<sup>おして</sup>さしたり<sup>おして</sup>しるしが押してある。

問1 姫・翁は、どんなことから語り始めたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a この辺りはとても栄えていました。今年で二十年余り、三十年にはまだ足りないほどですが、このように荒れ果ててしまいました。昔ここは、一人子を唐の国に連れて行かれた男の方がいらつしやいました。その子の帰国をお待ちになることもできずにその方は行方知れずになってしまい、その後、その子は帰国いたしました。

b この辺りは少しは栄えていました。今年で二十年余り、三十年にはまだ足りないほどですが、このように荒れ果ててしまいました。昔ここは、一人子を唐の国に行かせた方のお屋敷でありました。その子の帰国をお待ちにしていたのですが、その方は亡くなってしまい、その後、その子は帰国いたしました。

c この辺りはとても栄えていました。今年で二十年余り、三十年にはまだ足りないほどですが、このように荒れ果ててしまいました。昔ここは、一人子を唐の国に行かせた方のお屋敷でありました。その子の帰国をお待ちになることもできずにその方は亡くなってしまい、その後、その子は帰国いたしました。

d この辺りは少しは栄えていました。今年で二十年余り、三十年にはまだ足りないほどですが、このように荒れ果ててしまいました。昔ここに、一人子を唐の国に連れて行かれた男の方がいらつしやいました。その子の帰国をお待ちにしていたのですが、その方は亡くなってしまい、その後、その子は帰国いたしました。

e この辺りはとても栄えていました。今年で二十年余り、三十年にはまだ足りないほどですが、このように荒れ果ててしまいました。昔ここは、一人子を唐の国に行かせた方のお屋敷でありました。その子の帰国をお待ちになっていたのですが、その方は行方知れずになってしまい、その後、その子は帰国いたしました。

問2 嫗・翁は、ここに住んでいた人々のその後についてどのように語っているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 帰国した子は、ここを質素に構えて住んでいらっしやいましたが、そのうちに一人の女の子が生まれました。その女の子は小さい頃から素晴らしい音楽を奏でました。京の内の人はお屋敷を囲んでその音を聞いたものでした。結婚する年齢になると、門を閉めて人を通わせないようにしましたので、天皇をはじめ高貴な方々の求婚の使いの者は、夜明けになると家の周囲に立って、用件も告げずに帰って行きました。

b 帰国した子は、ここを華麗にしつらえて住んでいらっしやいましたが、そのうちに一人の女の子が生まれました。その女の子は小さい頃から素晴らしい音楽を奏でました。京の内の人はあちらこちら尋ね歩いてここにやって来ました。結婚する年齢になると、門を閉めて人を通わせないようにしましたので、天皇をはじめ高貴な方々の求婚の使いの者は、夜明けになると家の周囲を歩きまわり、用件も告げずに帰って行きました。

c 帰国した子は、ここを華麗にしつらえて住んでいらっしやいましたが、そのうちに一人の女の子が生まれました。その女の子は小さい頃から素晴らしい音楽を奏でました。京の内の人はお屋敷を囲んでその音を聞いたものでした。結婚する年齢になると、門を閉めて人を通わせないようにしましたので、天皇をはじめ高貴な方々の求婚の使いの者は、夜明けになると家の周囲に立って、用件を告げることでもできずにおりました。

d 帰国した子は、ここを華麗にしつらえて住んでいらっしやいましたが、そのうちに一人の女の子を引き取りました。その女の子は小さい頃から素晴らしい音楽を奏でました。京の内の人はあちらこちら尋ね歩いてここにやって来ました。結婚する年齢になると、門を閉めて人を通わせないようにしましたので、天皇をはじめ高貴な方々の求婚の使いの者は、夜明けになると家の周囲を歩きまわり、用件を告げることでもできずにおりました。

e 帰国した子は、ここを質素に構えて住んでいらっしやいましたが、そのうちに一人の女の子を引き取りました。その女の子は小さい頃から素晴らしい音楽を奏でました。京の内の人はお屋敷を囲んでその音を聞いたものでした。結婚する年齢になると、門を閉めて人を通わせないようにしましたので、天皇をはじめ高貴な方々の求婚の使いの者は、夜明けになると家の周囲を歩きまわり、用件を告げることでもできずにおりました。

問3 嫗・翁は、娘の父母が亡くなった後、どのようなことが起きたと語っているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a ご両親が亡くなってしまったので娘さんの評判も聞こえなくなっていました。娘さんは去ってしまったのか、このお屋敷は様々な人が入り乱れて壊し尽くして、ほんの一、二年の間にこのようになってしまいました。あらゆるものを取り尽くしましたが、他にもまだ何かあるに違いない、この蔵には何かあるだろうと近づいた者は、そのまま倒れ、多くの人が死んでしまいました。

b ご両親が亡くなってしまったので娘さんの評判も聞こえなくなっていました。娘さんは去ってしまったのか、このお屋敷は様々な人が入り乱れて壊し尽くして、一、二年もしないうちにこのようになってしまいました。あらゆるものを取り尽くしましたが、他にもまだ何かあるに違いない、この蔵には何かあるだろうと近づいた者は、しばらくすると倒れ、多くの人が死んでしまいました。

c ご両親が亡くなってしまったので娘さんの評判も聞こえなくなっていました。そういうことで、このお屋敷は様々な人が入り乱れて壊し尽くして、一、二年もしないうちにこのようになってしまいました。あらゆるものを取り尽くしましたが、さしたるものもなかったようなので、この蔵には何かあるだろうと近づいた者は、しばらくすると倒れ、多くの人が死んでしまいました。

d ご両親が亡くなってしまったので娘さんの評判も聞こえなくなっていました。娘さんは去ってしまったのか、このお屋敷は様々な人が入り乱れて壊し尽くして、ほんの一、二年の間にこのようになってしまいました。あらゆるものを取り尽くしましたが、さしたるものもなかったようなので、この蔵には何かあるだろうと近づいた者は、そのまま倒れ、多くの人が死んでしまいました。

e ご両親が亡くなってしまったので娘さんの評判も聞こえなくなっていました。そういうことで、このお屋敷は様々な人が入り乱れて壊し尽くして、ほんの一、二年の間にこのようになってしまいました。あらゆるものを取り尽くしましたが、さしたるものもなかったようなので、この蔵には何かあるだろうと近づいた者は、そのまま倒れ、多くの人が死んでしまいました。

問4 姫・翁は、現在に至るまでのことを、どのように語っているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 夜には人目に付かないように私どもが、馬に乗って来て弓の弦を鳴らして、夜回りをしています。このような恐ろしいところに百歳になりますまで、この姫と翁がその有様を見て参りましたところ、素晴らしい男性がお見えになったので、この男性になにかあったらと思うととても悲しく、とにもかくにもお

知らせしようと慌てて参りましたが、なかなか思うように足を運べず、混乱させてしまいました。

b 夜には人には見えない何者かが、馬に乗って来て弓の弦を鳴らして、夜回りをしているようです。このような恐ろしいところに百歳になりますまで、この  
 姫と翁がその有様を見て参りましたところ、素晴らしい男性がお見えになったので、この男性になにかあつたらと思っても悲しく、早くお知らせしよ  
 うと慌てて参りましたが、なかなか思うように足を運べず、うろたえております。

c 夜には人には見えない何者かが、馬に乗って来て弓の弦を鳴らして、夜回りをしているようです。このような恐ろしいところに百歳になりますまで、この  
 姫と翁がその有様を見て参りましたところ、素晴らしい男性がお見えになったので、この男性になにかあつたらと思っても悲しく、とにもかくにもお  
 知らせしようと慌てて参りましたが、なかなか思うように足を運べず、うろたえております。

d 夜には人には見えない何者かが、馬に乗って来て弓の弦を鳴らして、夜回りをしているようです。このような恐ろしいところに百歳になりますまで、この  
 姫と翁がその有様を見て参りましたところ、素晴らしい男性がお見えになったので、この男性になにかあつたらと思っても悲しく、早くお知らせしよ  
 うと慌てて参りましたが、なかなか思うように足を運べず、混乱させてしまいました。

e 夜には人目に付かないように私どもが、馬に乗って来て弓の弦を鳴らして、夜回りをしています。このような恐ろしいところに百歳になりますまで、この  
 姫と翁がその有様を見て参りましたところ、素晴らしい男性がお見えになったので、この男性になにかあつたらと思っても悲しく、早くお知らせしよ  
 うと慌てて参りましたが、なかなか思うように足を運べず、うろたえております。

問5 姫・翁が、蔵を開けようとして死んだ者が多く、滅んだ家もあると言ったのに対し、仲忠はどうしたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマ  
 クせよ。

a 仲忠は「恐ろしいことだ。また開ける者がいないか見張るように」と言いながら、着ていた衣服を与えて「ここから見えるところに住み、この蔵に誰かが  
 またそのようなことをするかどうか見ていなさい。そして、蔵のまわりにある不快なものを、人払いしてから捨てなさい」と言って帰って行かれた。

b 仲忠は「恐ろしいことだ。また開ける者があるのか、いやあるまい」と言いながら、着ていた衣服を与えて「ここから見えるところに住み、この蔵に誰か

がまたそのようなことをするかどうか見ていなさい。そして、蔵のまわりに大量にあるものを、人に捨てさせなさい」と言つて帰つて行かれた。

c 仲忠は「恐ろしいことだ。また開ける者があるのか、いやあるまい」と言いながら、着ていた衣服を与えて「ここから見るところに住み、この蔵に誰かがまたそのようなことをするかどうか見ていなさい。そして、蔵のまわりにある不快なものを、人払いをしてから捨てなさい」と言つて帰つて行かれた。

d 仲忠は「恐ろしいことだ。また開ける者がいないか見張るように」と言いながら、着ていた衣服を与えて「ここから見るところに住み、この蔵に誰かがまたそのようなことをするかどうか見ていなさい。そして、蔵のまわりに大量にあるものを、人払いをしてから捨てなさい」と言つて帰つて行かれた。

e 仲忠は「恐ろしいことだ。また開ける者がいないか見張るように」と言いながら、着ていた衣服を与えて「ここから見るところに住み、この蔵に誰かがまたそのようなことをするかどうか見ていなさい。そして、蔵のまわりにある不快なものを、人に捨てさせなさい」と言つて帰つて行かれた。

問6 仲忠から衣服をもらった媼・翁は、その後どうしたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 媼と翁は、まだ見たこともない香がたきしめられた美しい衣服を手に入れて、怖じ気づきうろたえること、限りない。その衣服は、すぐに参詣の人が見つけて、高額で買い取った。そして、そのお金を孫などにやっつて、蔵のあたりを払い清めさせた。

b 媼と翁は、まだ見たこともない香がたきしめられた高価な衣服を手に入れて、怖じ気づきうろたえること、限りない。その衣服は、すぐに参詣の人が見つけて、安く買い取った。そして、そのお金を孫などにやっつて、蔵の壁を払い清めさせた。

c 媼と翁は、まだ見たこともない香がたきしめられた美しい衣服を手に入れて、どうやって売ろうかとうろたえること、限りない。その衣服は、すぐに仲買人が見つけて、高額で買い取った。そして、そのお金を孫などにやっつて、蔵の壁を払い清めさせた。

d 媼と翁は、まだ見たこともない香がたきしめられた美しい衣服を手に入れて、どうやって売ろうかとうろたえること、限りない。その衣服は、すぐに参詣の人が見つけて、高額で買い取った。そして、そのお金を孫などにやっつて、蔵のあたりを払い清めさせた。

e 媼と翁は、まだ見たこともない香がたきしめられた高価な衣服を手に入れて、どうやって売ろうかとうろたえること、限りない。その衣服は、すぐに仲買人が見つけて、安く買い取った。そして、そのお金を孫などにやっつて、蔵のあたりを払い清めさせた。

問7

高僧や陰陽師が祓えや読経をする中、仲忠が蔵にやって来る。そこでどのようなことが起きたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 仲忠は多くの先払いの者を従えて蔵を開けさせる人を連れていらっしやった。鍵がないので、錠が開くという偽りの話を信じて、蔵を開けさせなさるが、蔵は開かない。その後も二、三日、開けさせなさるが、やはり開ける方法もわからない。具合が悪くなつてうめきながら、多くの人が病気になるた。

b 仲忠は多くの先払いの者を従えて蔵を開けさせる人を連れていらっしやった。鍵がないので、錠が開くような手段を講じつつ、蔵を開けさせなさるが、蔵は開かない。その後も二、三日、開けさせなさるが、やはり開ける方法もわからない。具合が悪くなつてうめきながら、多くの人が病気になるた。

c 仲忠は多くの先払いの者を従えて蔵開けを指示する人を連れていらっしやった。鍵がないので、錠が開くような手段を講じつつ、蔵を開けさせなさるが、蔵は開かない。その後も二、三日、開けさせなさるが、まったく開きそうな気配もない。具合が悪くなつてうめきながら、多くの人が苦勞していた。

d 仲忠は多くの先払いの者を従えて蔵を開けさせる人を連れていらっしやった。鍵がないので、錠が開くような手段を講じつつ、蔵を開けさせなさるが、蔵は開かない。その後も二、三日、開けさせなさるが、まったく開きそうな気配もない。ひどくわめき声をあげ、多くの人が苦勞していた。

e 仲忠は多くの先払いの者を従えて蔵開けを指示する人を連れていらっしやった。鍵がないので、錠が開くという偽りの話を信じて、蔵を開けさせなさるが、蔵は開かない。その後も二、三日、開けさせなさるが、まったく開きそうな気配もない。ひどくわめき声をあげ、多くの人が苦勞していた。

問8

仲忠の供人が「屋根を壊して開けましょう」と言ったのに対して、仲忠はどうしたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 「どうして開けられないと思うのか。不思議なことだ」とお笑いになって、蔵に登つてご覧になると、とても頑丈な錠であった。心を落ち着けて引くと、開いた。これはやはり、先祖の御霊が私をお待ちになっていたのだと思つて、人を呼んで戸を開けさせて見ると、内側にはもう一つ錠があった。その戸には文殿というしるしがあった。これは意外だつたと思ひになつて、また錠を開けなざると、すぐに開いた。

b 「どうして開けられないと思うのか。不思議なことだ」とお笑いになって、蔵に登つてご覧になると、とても頑丈な錠であった。心を落ち着けて引くと、開いた。これはやはり、先祖の御霊が私をお待ちになっていたのだと思つて、人を呼んで戸を開けさせて見ると、内側にはもう一つ錠があった。その戸に

は文殿というしるしがあつた。思った通りだとお思いになって、また錠を開けなざると、すぐに開いた。

c 「どうして開けられないと思うのか。特別な方法が必要だ」とお笑いになって、蔵に登ってご覧になると、とても頑丈な錠であつた。引つ張つて緩めたところ、開いた。これはやはり、先祖の御霊が私をお待ちになっていたのだと思つて、人を呼んで戸を開けさせて見ると、内側にはもう一つ錠があつた。その戸には文殿というしるしがあつた。思った通りだとお思いになって、また錠を開けなざると、すぐに開いた。

d 「どうして開けられないと思うのか。不思議なことだ」とお笑いになって、蔵に登ってご覧になると、とても頑丈な錠であつた。引つ張つて緩めたところ、開いた。これはやはり、先祖の御霊が私をお待ちになっていたのだと思つて、人を呼んで戸を開けさせて見ると、内側にはもう一つ錠があつた。その戸には文殿というしるしがあつた。思った通りだとお思いになって、また錠を開けなざると、すぐに開いた。

e 「どうして開けられないと思うのか。特別な方法が必要だ」とお笑いになって、蔵に登ってご覧になると、とても頑丈な錠であつた。心を落ち着けて引くと、開いた。これはやはり、先祖の御霊が私をお待ちになっていたのだと思つて、人を呼んで戸を開けさせて見ると、内側にはもう一つ錠があつた。その戸には文殿というしるしがあつた。これは意外だつたとお思いになって、また錠を開けなざると、すぐに開いた。

問9 傍線部(A)を現代語訳せよ。



次の文章は、『平家物語』の一節である。白拍子しらびょうし(女芸能者)である祇王ぎおうは清盛(本文中では入道相国・浄海)に気に入られていたが、同業の仏御前が、招かれてもいないのに清盛の邸にやってきたことから状況は一変し、清盛の邸を追われることになる。これを読んで、後の問いに答えよ。

祇王もとより思ひまうけたる道なれども、さすがに昨日今日とは思ひよらず。いそぎ出づべき由、しきりにのたまふあひだ、はきのごひ塵ちりひろはせ、みぐるしきもどもとりしたためて、出づべきにこそ定まりけれ。<sup>\*</sup>一樹のかげに宿りあひ、同じ流れをむすぶだに、別れはかなしきならひぞかし。ましてこの三年みつとせが間、住みなれしところなれば、名残もをしうかなしくて、かひなきなみだぞこぼれける。さてもあるべきことならねば、祇王すでに、今はかうとて出でけるが、なからん跡の、忘れがたみにもと思ひけむ。<sup>\*</sup>障子になくなく、一首の歌をぞかきつけける。

もえ出づるも枯るるもおなじ野辺の草いづれか秋にあはではつべき

さて車に乗つて宿所に帰り、障子のうちに倒れふし、ただなくより外のことぞなき。母や妹これを見て、「いかにやいかに」ととひけれども、とかうの返事にも及ばず。具したる女に尋ねてぞ、さることありとも知りてんげれ。

さるほどに毎月におくられたりける。<sup>\*</sup>百石百貫をも今はとどめられて、仏御前がゆかりの者どもぞ、はじめて楽しみ栄えける。京中の上下、「祇王こそ入道殿よりいとまたまはつて出でたんなれ。いざ見参げんざんしてあそはむ」とて、あるいは文をつかはす人もあり、あるいは使ひを立つる者もあり。祇王、さればとて、いまさら人に対面してあそびたはぶるべきにもあらねば、文をとりいることもなく、まして使ひにあひしらふまでもなかりけり。これにつけてもかなしくて、いとど涙にのみぞ沈みにける。

かくてことしも暮れぬ。あくる春のころ、入道相国、祇王がもとへ使者を立てて、「いかに、その後何事かある。仏御前があまりにつれづれげにみゆるに、参つて<sup>\*</sup>今様をもうたひ、舞なんどもも舞うて、仏なぐさめよ」とぞのたまひける。祇王とかうの御返事にも及ばず。入道、「など祇王は返事はせぬぞ。参るまじいか。参るまじくはそのやうを申せ。浄海もはからふむねあり」とぞのたまひける。<sup>\*</sup>母とちこれをきくになさしくて、いかなるべしとおぼえず。なくなく教訓しけるは、「い

かに祇王御前、ともかうも御返事を申せかし。さやうにしかられまゐらせんよりは」といへば、祇王、「参らんと思ふ道ならばこそ、やがて参るとも申さめ。参らざらむもの故に、なにと御返事を申すべしとおほえず。このたび召さむに参らずは、はからふむねありと仰せらるるは、都の外へ出ださるるか、さらずは命を召さるるか、このふたつにはよも過ぎじ。たとひ都を出ださるるとも、なげくべき道にあらず。たとひ命を召さるるとも、をしかるべき又我が身かは。ひとたびうきものに思はれまゐらせて、ふたたびおもてを向かふべきにもあらず」とて、なほ御返事をも申さざりけるを、母とち重ねて教訓しけるは、「天が下に住まんほどは、ともかうも入道殿の仰せをば背くまじきことにてあるぞとよ。\*。男女の縁、宿世、今にはじめぬことぞかし。千年万年とちぎれども、やがてはなるるなかもあり。あからさまとは思へども、ながらへはつることもあり。世に定めなきものは男女のならひなり。それに、わごぜは、この三年までおもはれまゐらせたれば、ありがたき御情けでこそあれ。召さんに参らねばとて、命をうしなはるるまではよもあらず。ただ都の外へぞ出だされんずらん。たとひ都を出ださるとも、わごぜたちは年若ければ、いかならん岩木のはざまにても、過ごさんことやすかるべし。年老いおとろへたる母、都の外へぞ出だされんずらむ。ならばぬひなのすまひこそ、かねておもふもかなしけれ。ただ、われを都のうちにて、住みはてさせよ。それぞ今生後生の孝養と思はむずる」といへば、祇王うしと思ひし道なれども、おやの命をそむかじと、なくなくとまた出で立ちける、心のうちこそ、無慙なれ。

(『平家物語』による)

注

- \* 1 一樹のかげに宿りあひ、同じ流れをむすぶだに||慣用句。同じ木陰に雨を避けて宿るのも、同じ川の水を汲んで飲むのも、前世からの因縁であることをいう。
- \* 2 障子||襖。ふすま。唐紙障子。現在の「明かり障子」とは異なる。
- \* 3 百石百貫||米を百石と錢を百貫。一石は百升、一貫は千文。
- \* 4 今様||当時流行していた歌謡。  
\* 5 母とち||祇王の母親。
- \* 6 男女の縁、宿世、今にはじめぬことぞかし||男と女の結びつきや運命がはかりがたいことは、今に始まったことではない。
- \* 7 わごぜ||我御前。女性に親しみをこめて呼ぶ語。

\*8 無慙なれ<sup>むさん</sup>痛ましく気の毒なことだ。

問1 清盛邸から追い出されることになった祇王の様子を述べたものとして、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 祇王は、清盛に気に入られた当初から、心のなかでは準備していたことだが、それでも昨日今日に退去することになるとは思っていなかった。しきりに出て行くように言われるなかで、自らが使っていた部屋の片付けなどしていたが、ついに退去することとなった。わずかな因縁でさえ別れはつらいのに、三年もの年月を過ごしたところなので、退去するのは名残惜しく悲しくて、泣いてもどうにもならないが涙がこぼれた。しかし、いつまでもそうしてはいられないので、自分がいたあかしにでもと、襖に和歌を書き付けた。
- b 祇王は、しばしの経済的な安定を望んでいただけだったが、それでも昨日今日に退去することになるとは思っていなかった。しきりに出て行くように言われるなかで、自らが使っていた部屋の片付けなどしていたが、ついに退去することとなった。清盛との因縁だけは別れてもきつと続くとは思うものの、三年もの年月を過ごしたところなので、退去を命じられたことが悔しくて自然と涙がこぼれた。しかし、いつまでもそうしてはいられないので、清盛が忘れられないようにと、襖に和歌を書き付けた。
- c 祇王は、清盛に気に入られた当初から、心のなかでは準備していたことだが、それでも昨日今日に退去することになるとは思っていなかった。しきりに出て行くように言われるなかで、自らが使っていた部屋の片付けなどしていたが、ついに退去することとなった。清盛との因縁だけは別れてもきつと続くとは思うものの、三年もの年月を過ごしたところなので、退去するのは名残惜しく悲しくて、泣いてもどうにもならないが涙がこぼれた。しかし、いつまでもそうしてはいられないので、清盛を呪う和歌を襖に書き付けた。
- d 祇王は、白拍子は一人の人物に永遠にお世話になることはないと思っていたが、それでも昨日今日に退去することになるとは思っていなかった。しきりに出て行くように言われるなかで、自らが使っていた部屋の片付けなどしていたが、ついに退去することとなった。わずかな因縁でさえ別れはつらいのに、三年もの年月を過ごしたところなので、退去するのは名残惜しく悲しくて、泣いてもどうにもならないが涙がこぼれた。しかし、いつまでもそうしてはいられないので、清盛を呪う和歌を襖に書き付けた。

e (削除)

問2 祇王が襖に書き付けた和歌を説明するものとして、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 萌<sup>も</sup>え出る草を仏御前に、枯れる草を自分にたとえて、二人の奇妙な宿命が悔しく思われることを、反語表現を使って表現したもので、秋になるまでには、仏御前も清盛に飽きられて、また立場が逆転するだろうと言っている。

b 萌え出る草を仏御前に、枯れる草を自分にたとえて、どちらが長く清盛の寵愛<sup>ちやうあい</sup>を受けることができるかとこれからの仏御前の行く末を案じている気持ちを詠んだもので、縁語を巧みに使って、自分を捨てた清盛に恨み言を伝えている。

c 萌え出る草を仏御前に、枯れる草を自分にたとえて、どちらもしずれは捨てられる運命にあることを、掛詞<sup>かけことば</sup>を巧みに使って表現したもので、仏御前も結局は、自分と同じように、清盛に飽きられる運命であることを言っている。

d 萌え出る草を清盛に、枯れる草を自分にたとえて、自分は清盛のために捨てられてしまったけれど、いずれ清盛も衰えてしまうことを、反語表現を使って表現したもので、清盛に対する恨み言を伝えている。

e 萌え出る草を仏御前に、枯れる草を清盛にたとえて、どちらもしずれは勢いが衰えてしまう運命にあることを詠んだもので、掛詞を巧みに使って、秋になるまでには清盛も衰えて、仏御前を捨てざるをえなくなるだろうと言っている。

問3 清盛邸を追われた後の祇王の境遇を説明するものとして、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 祇王が清盛邸を追われたと知った京中の人々は、文を送ったり、使者を立てたりして、祇王を呼んで技芸を披露させようとしたが、祇王は、そうかというて、このような境遇となつては、ほかの人と遊び戯れることはできるはずもないので、手紙を受け取ることも、使者に対応することもなかった。こんなことのおこることもまでもが哀れに思えて、祇王はますます涙にくれるばかりであった。

b 祇王が清盛邸を追われたと知った京中の人々は、文を送ったり、使者を立てたりして、祇王のところに行つて遊興しようとしたが、祇王は、もう清盛のも

とを退去した身なので、ほかの人と遊び戯れたいとは思うものの、そうもできずに手紙を受け取ることも、使者に應對することもなかった。こんなことのおこることが悲しくて、祇王はただ涙を流すことしかできなかった。

c 祇王が清盛邸を追われたと知った京中の人々は、文を送ったり、使者を立てたりして、祇王を呼んで技芸を披露させようとしたが、祇王は、もう清盛のものとを退去した身であって、ほかの人と遊び戯れることは止められていたので、手紙を受け取ることも、使者に應對することもなかった。こんなことのおこることまでもが哀れに思えて、祇王はただ涙にくれる毎日であった。

d 祇王が清盛邸を追われたと知った京中の人々は、文を送ったり、使者を立てたりして、祇王のところに行って遊興しようとしたが、祇王は、そうかといって、このような境遇となつては、ほかの人と遊び戯れることはできるはずもないので、手紙を受け取ることも、使者に應對することもなかった。こんな境遇に置かれたことが信じられず、祇王はただ涙を流すことしかできなかった。

e 祇王が清盛邸を追われたと知った京中の人々は、文を送ったり、使者を立てたりして、祇王を呼んで技芸を披露させようとしたが、祇王は、もう清盛のものとを退去した身なので、ほかの人と遊び戯れたいとは思うものの、そうもできずに手紙を受け取ることも、使者に應對することもなかった。こんな境遇に置かれたことが信じられず、祇王はなおいつそう涙をおさえることができなかった。

問4 祇王が清盛邸を去った翌年、清盛は使者を立てて、祇王にどのように言ってきたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 「どうだ、その後、どうしているか。仏御前が、所在なくすごしているお前のことをとても心配しているので、こちらに来て、一緒に今様をもうたい、舞などまつて、仏御前を安心させてくれ」と、清盛邸に来るように言ってきた。

b 「どうだ、その後、どうしているか。仏御前が、とても退屈そうに日々をすごしているので、こちらに来て、今様をもうたい、舞などまつて、仏御前の気を紛らわせてくれ」と、清盛邸に来るように言ってきた。

c 「どうだ、その後、どうしているか。仏御前が、物思いにふけているお前の話を聞きたいと思っているので、こちらに来て、今様をもうたい、舞などまつて、仏御前と仲良くしてくれ」と、清盛邸に来るように言ってきた。

d 「どうしたのだ、その後、どうしているか。仏御前が、とても寂しそうに日々をすごしているので、こちらに来て、一緒に今様をもうたい、舞などまって、私を安心させてくれ」と、清盛邸に来るように言ってきた。

e 「どうしたのだ、その後、どうしているか。仏御前が、私が退屈にすごしていることをとても気にしているので、こちらに来て、今様をもうたい、舞などまって、私の気を紛らわせてくれ」と、清盛邸に来るように言ってきた。

問5 祇王が清盛に返事をしないことに対して、清盛はどうしたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 清盛は「どうして祇王は返事をしないのだ。参上しないつもりか。参上するつもりであれば、そういつてこい。こちらもそれなりに援助してやる」と、とにかく返事をするようにいった。

b 清盛は「どうして祇王が返事をしないことがあるか。参上するつもりか。参上しないつもりであれば、その理由をいつてこい。こちらにも、それなりのこころづもりがある」と、返事のないことを怒っていった。

c 清盛は「どうして祇王は返事をしないのだ。参上するつもりか。参上するつもりであれば、そういつてこい。こちらもそれなりに援助してやる」と、とにかく返事をするようにいった。

d 清盛は「どうして祇王が返事をしないということがあろうか。参上できないなら、参上できない理由をいつてこい。こちらにも、都合がある」と、返事のないことを怒っていった。

e 清盛は「どうして祇王は返事をしないのだ。参上しないつもりか。参上しないつもりであれば、その理由をいつてこい。こちらにも、それなりのこころづもりがある」と、返事のないことを怒っていった。

問6 祇王の母は、清盛に返事をしない祇王にどのようにいったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 祇王の母は、「どうしてなの、祇王。どうでもこうでも返事だけはしなさいよ。清盛さまも、このようにいつてくださっているのに」といった。

問7

祇王は母のことばに対してどうしたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- b 祇王の母は、「ねえ、祇王。どうでもこうでも返事だけはしなさいよ。清盛さまもこんなに怒っていらっしやるでしょう」といった。
- c 祇王の母は、「どうしてなの、祇王。何とも返事しないことがありませんか。清盛さまも、このようにいつてくださっているのに」といった。
- d 祇王の母は、「ねえ、祇王。どうでもこうでも返事だけはしなさいよ。このように清盛さまのおしかりをうけるよりはましでしょう」といった。
- e 祇王の母は、「ねえ、祇王。何とも返事しないことがありませんか。このように清盛さまのおしかりをうけるよりはましでしょう」といった。
- a 祇王は、「参上するつもりなら、すぐに返事もいたしましょうが、そのつもりがないので、返事を申し上げるつもりはありません。参上しなくても、都から追放されるか命を召されるかのどちらかにすぎないでしょう。どちらにしても、一度嫌われたものが、再びお会いするものではありません」といって、やはり返事はしなかった。
- b 祇王は、「参上するつもりなら、そのうち返事もいたしましょうが、そのつもりがないので、どう返事すればいいのかわかりません。参上しなくても、都から追放されるか命を召されるかのどちらかにすぎないでしょう。どちらにしても、一度嫌われたものが、再びお会いすることなどあつてはならないことです」といって、やはり返事はしなかった。
- c 祇王は、「参上するつもりなら、そのうち返事もいたしましょうが、そのつもりがないので、どう返事すればいいのかわかりません。参上しなくても、都から追放されるか命を召されるかのどちらかにすぎないでしょう。どちらにしても、一度嫌われたものが、再び会っていたらなどとは思いません」といって、やはり返事はしなかった。
- d 祇王は、「参上するつもりなら、そのうち返事もいたしましょうが、そのつもりがないので、返事を申し上げるつもりはありません。参上しなくても、都から追放されるか命を召されるかのどちらかにすぎないでしょう。どちらにしても、一度嫌われたものが、再びお会いすることなどあつてはならないことです」といって、やはり返事はしなかった。
- e 祇王は、「参上するつもりなら、すぐに返事もいたしましょうが、そのつもりがないので、どう返事すればいいのかわかりません。参上しなくても、都か

ら追放されるか命を召されるかのどちらかにすぎないでしょう。どちらにしても、一度嫌われたものが、再びお会いするものではありません」といって、やはり返事はしなかった。

問8 祇王のごとばに対して祇王の母は、重ねてどのようにいったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 母は、「生きているうちは、清盛さまのいうことに背いてはなりません。あなたがた若い人は、都を離れてもなんとか生きていくことはできるでしょう。しかし、年老いた母には、慣れない田舎暮らしなど想像するだけでもつらいことです。どうか今までどおり都のうちに住まわせてください。それが親孝行だとは思いませんか」といった。

b 母は、「この国に住んでいるうちは、清盛さまのいうことに背いてはなりません。あなたがた若い人は、都を離れてもなんとか生きていくことはできるでしょう。しかし、年老いた母には、慣れない田舎暮らしなど想像するだけでもつらいことです。どうか都のうちで一生を終えさせてください。それが親孝行だと思いたいです」といった。

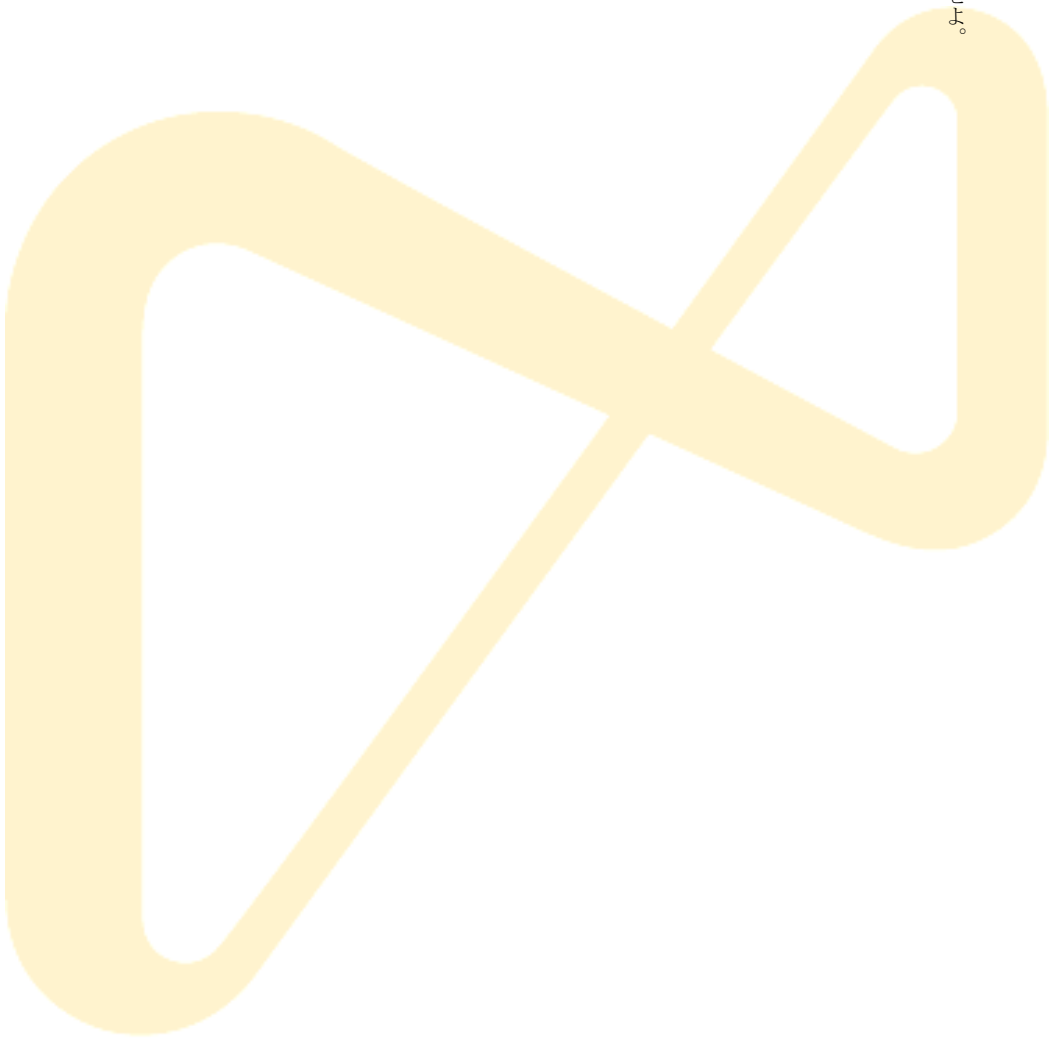
c 母は、「この国に住んでいるうちは、清盛さまのいうことに背くことありませんか。あなたがた若い人は、都を離れてもなんとか生きていくことはできるでしょう。しかし、年老いた母には、慣れない田舎暮らしなど相応の覚悟が必要です。どうか今までどおり都のうちに住まわせてください。それが親孝行だとは思いませんか」といった。

d 母は、「生きているうちは、清盛さまのいうことに背くことありませんか。あなたがた若い人は、都を離れてもなんとか生きていくことはできるでしょう。しかし、年老いた母には、慣れない田舎暮らしなど想像するだけでもつらいことです。どうか今までどおり都のうちに住まわせてください。それが親孝行だとは思いませんか」といった。

e 母は、「生きているうちは、清盛さまのいうことに背いてはなりません。あなたがた若い人は、都を離れてもなんとか生きていくことはできるでしょう。しかし、年老いた母には、慣れない田舎暮らしなど相応の覚悟が必要です。どうか都のうちで一生を終えさせてください。それが親孝行だと思いたいです」といった。



問9 傍線部(A)を現代語訳せよ。



次の文章は、『兵部卿物語』の一節である。帝みかどの御子である兵部卿宮(本文中では「宮」)は、西の京で見初めた女こゝせちのたいなん(故按察大納言の娘、本文中では「女」)のもとに通っていたが、女は突然失踪してしまった。後にその女が、自分が最近結婚した女性(右大臣の娘、本文中では「姫君」)に女房として出仕していたことがわかり、兵部卿宮は女のもとを訪れ、女を別の所に隠し据えることを提案する。これを読んで、後の問いに答えよ。

宮は、かううち出で給ひてよりは、いとどあはれに忘るる間なく思おぼしければ、かうながら人目をつつむにもいと苦し。さりとてあらはれてはなかなか人の思ひもいとほしきを、密みそかに盗み出だしつつ、深く隠し置きて、心安く見んと思しければ、例の更かしておはしつつ、「かくと思ひ寄りにしを、必ず人に気色見けしきえで、その心し給へ」とのたまふ。いと恐ろしくて、御答いぢらへも聞こえず、ほろほろと泣き給ふさま、いかに思ふらんと心苦しければ、いよいよ浅からず契り給ひつつ出で給ふに、女、つくづくと思ふに、かのたまひしことのさもあらば、いかに深く隠すとも、つひには隠れあるまじきを。我、いかに思ふとも、心を合はせぬると姫君の思しのたまはん。いとろしるぐらきやうに、人々の、この頃、数々言ひしことも、さればこそ、かかることありしを、ことなしびにもてなしけるよなど思はれんも、身のほどにはいとほしたなきことなり。この度否ぶとも、また、さまざまに憂きことはまさりなるを、いかにもして死なんと念ずれども、それさへもかなはぬ身にしあれば、いかばかり罪深き身にこそあるらんに、いかにもしてここを逃れて、深き山にも閉ぢ籠もり、後の世を願はばやと思せど、心ひとつには思ひ立つべきやうもなきを、泣く泣くき侍従に、初めよりのたまはせしさま、思ふ心のほどを語り給へば、侍従もうち泣きて、「このほどの御有様を見奉ればいたはしく、とてもかくても御ためよからんとてこそ、この憂き世にもすすめ奉りしを、また、かかる御物思ひさへ添ひにて侍れば、かう思はずもことわりなれど、頼もし人とても今はなきを、いかがはせん」と、たださし向かひ、泣くよりほかのことなし。

からうじて、やうやう思ひ出でて、昔、父大納言殿、領じ給ひしところ、嵯峨野さかのにありしが、その里人、昔を忘れず折々とぶらひ奉る老人おきな夫婦ありしを思ひ出でて、そのもとへ人を遣はして、「ちと言ひ合はすべきことあれば、二人に一人いそぎおはせよ」と言ひやりしかば、翁おきな、ぞいそぎ参りしかば、侍従出でて、「ここにいと恐ろしきことありて、えおはしますまじきことなんあるを、今宵こよひのほどに、いづちへも隠し奉るべく思ふを、そこよりほかに言ひ合はすべき頼もし人もなきを、ともかく

もはからひ給へ」と、「いかにもいかにも人に知らせぬさまに」と言ひければ、翁もうち泣きて、京に知る人のありしところにて、やつれたる車借りつつ、たそかれ時のたどたどしきほど、さし寄せぬれば、よろづのもの、昼より取りしたため、そこら見苦しからぬさまにぞとりまかなひつつ、侍従うち連れて出で奉れど、何のあやめも見分かぬほどなりしかば、知る人なかりけり。

かの翁、かひがひしくよろづこしらへつつ、\*<sub>2</sub>初夜の頃、嵯峨に着きぬ。翁、まづ入りて、\*<sub>3</sub>女房にしかしかと語りければ、走り出でつつ、車も、我と引き入れつつ下ろし奉り、互ひのことわりも言ひやらず、聞きも得ず、さし集ひてまづ泣きける。とばかりありて、侍従、よろづのことを語り続けて、「とかく馴らはぬ御身に宮仕ひももの憂く思ひて、ともすれば、しほたれがちに見えさせ給ふを、かかる御物思ひとは知らで、聞きよく言ひもてゆくことなどもありしを、いとど苦しからせ給うて、死なばやと嘆かせ給ふが、見奉るもいと苦しきに、やうやうすかし奉りて、かうまでも思ひ立ちしを、必ず人に知らせ給ふな」と泣く泣く言へば、二人の人もうち泣きて、「御親たちだにおはせば、などてかかる御物思ひに沈み給ふべき。かくて見奉るは、まことに夢のやうにこそ」とて、尽きせず泣く。

宮には、「この人見え給はぬはいかなることか」と騒ぎつつ、局に残りたる人々を苛み尋ねけれど、まことに知らぬことなれば、恐ろしき誓言をしつつ明きらめ聞こゆ。「不思議なること」とも、\*<sub>4</sub>かの古里にも人をやりて尋ねけれど、あとかたなければ、この頃、人の言ひし宮の御心移りもまことにて、さは隠し給ひけんと姫君も思し、人々もさ言ひけれど、「宮もこのこと聞こし召してより、御気色も常ならず、いかになりにけることにかと思す御気色にて、内々には、いたう嘆かせ給ふ」など、誰言ふともなければ聞こゆれば、その心、疑ひもなし。「いと不思議なるわざなり。この頃、人のとかく言ひしを、いたう苦しげに見えしかば、かかることにて身や投げ給ひけん。さらずはものに取られ給ひけるか。あはれに、優しき人を」と、誰も誰もあたらしきものに思ひ給ふに、\*<sub>5</sub>中納言の君と聞こえしは、中に親しく馴れ睡り給ひければ、局にも折々まうで給ひて、残れる人々の嘆くも慰め、我もまたかううせ給ひけることを尽きせず嘆き給ふに、常に寄りみ給ひし障子のつまに、いと小さくものの書かれたるを寄りて見給へば、その人の手にて、

ながらへばなほも憂き身は白雲の八重立つ山をわけぞみるべき

と、片仮名にて書き付け給ひしを見出で給うて、いとどあはれに悲しくて、このほどの人の気色にて、かうは思ひ立ち給ひけんといとほしく、いかなる山路にか迷ひ給ふらんを、我には少しもほのめかし給はでなど、人にもえ言はで、思ひ嘆き給ふ。

注

\* 1 侍従Ⅱ女の、今は亡き乳母の娘。

\* 2 初夜Ⅱ現在の午後八時ごろ。

\* 3 女房Ⅱここでは翁の妻のこと。

\* 4 かの古里Ⅱ女が住んでいた西の京の住まい。

\* 5 中納言の君Ⅱ女と同僚であった女房。

問 1

兵部卿官はなぜ女を別の所に隠し据えることを提案したのか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 以前にもまして女のがかかわいそうに思われ、忘れる間もなく思いが募るが、このまま人目を気にして会わないのもたいそう苦しいし、しかし自分が世間に二人の関係を公表することも、世間の人がどう思うかなかなか判断が難しいから。

b 以前にもまして女のがしみじみと思われ、忘れる間もなく思いが募るが、このまま人目を忍んで会うのもたいそう苦しいし、かといって二人の関係が露見しては、世間の人がどう思うかなかなか判断が難しいから。

c 以前にもまして女のがしみじみと思われ、忘れる間もなく思いが募るので、このまま人目を忍んで会うのもたいそう苦しいし、かといって二人の関係が露見しては、かえって女が悩むことになり、気の毒に思われるから。

d 以前にもまして女のがしみじみと思われ、忘れる間もなく思いが募るので、このまま人目を忍んで会うのもたいそう苦しいし、しかし自分が世間に二人の関係を公表することも、かえって女が悩むことになり、気の毒に思われるから。

e 以前にもまして女のがかわいそうに思われ、忘れる間もなく思いが募るので、このまま人目を気にして過ごすのもたいそう苦しいし、しかし自分が世間に二人の関係を公表することも、世間の人がどう思うかなかなか判断が難しいから。

問 2

兵部卿官が帰った後、女はどのように考えたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 宮のおっしゃったとおりになったら、どれだけ隠しても隠しきれないでしょうに。私がどう思おうと、私と宮とが心を合わせていたのだと、姫君はお思い

になり、またおっしゃるでしょう。ずいぶんやましいところがあるように、女房たちがいろいろ噂うわさをしていたことも、やはりそういうことがあったのに、何事もなかったかのようにふるまっていたのだなと姫君に思われると、自分としてはどっちつかずになってしまいます。

b 宮のおっしゃったとおりになったら、どれだけ隠しても隠しきれないでしょうに。私がどう思おうと、私と女房たちとが心を合わせていたのだと、姫君は思いになり、またおっしゃるでしょう。ずいぶんやましいところがあるように、女房たちがいろいろ噂うわさをしていたことも、やはりそういうことがあったのに、知らぬふりをして寵愛ちやうあいを受けていたのだなと姫君が思われるのも、自分にとってはとてもみつともないことです。

c 宮のおっしゃったとおりになったら、どれだけ隠しても隠しきれないでしょうに。私がどう思おうと、私と女房たちとが心を合わせていたのだと、姫君は思いになり、またおっしゃるでしょう。ずいぶんうしろめたいところがあるように、女房たちがいろいろ噂うわさをしていたことも、やはりそういうことがあったのに、何事もなかったかのようにふるまっていたのだなと姫君に思われると、自分としてはどっちつかずになってしまいます。

d 宮のおっしゃったとおりになったら、どれだけ隠しても隠しきれないでしょうに。私がどう思おうと、私と宮とが心を合わせていたのだと、姫君は思いになり、またおっしゃるでしょう。ずいぶんうしろめたいところがあるように、女房たちがいろいろ噂うわさをしていたことも、やはりそういうことがあったのに、知らぬふりをして寵愛ちやうあいを受けていたのだなと姫君に思われると、自分としてはどっちつかずになってしまいます。

e 宮のおっしゃったとおりになったら、どれだけ隠しても隠しきれないでしょうに。私がどう思おうと、私と宮とが心を合わせていたのだと、姫君は思いになり、またおっしゃるでしょう。ずいぶんやましいところがあるように、女房たちがいろいろ噂うわさをしていたことも、やはりそういうことがあったのに、何事もなかったかのようにふるまっていたのだなと姫君が思われるのも、自分にとってはとてもみつともないことです。

問3 女がことのはじまりから今の気持ちまでを侍従に語った時、それを聞いた侍従は何と言ったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 最近のご様子を拝見するにつけお気の毒で、どのようにしてでも女君の御ためによからうと思っこそ、姫君への出仕をお勧め申し上げましたが、またこのような宮との間の悩みごとまで加わってしまいましたので、女君がこのようなお思いになることは当然ながら、頼りになる人も今はおりませんし、どうしたものでしょうか。

b 最近のご様子を拝見するにつけ、ご病気がちで、どのようにしてでも女君の御ためによかろうと思つてこそ、宮とご縁を持つことをお勧め申し上げましたが、またこのような宮との間の悩みごとまで加わつてしまいましたので、女君がこのようにお思いになることは当然ながら、頼りになる人も今はおりませんし、どうしたものでしょうか。

c 最近のご様子を拝見するにつけ、ご病気がちで、どのようにしてでも女君の御ためによかろうと思つてこそ、宮とご縁を持つことをお勧め申し上げましたが、またこのような宮との間の悩みごとまで加わつてしまいましたので、女君がこのようにお思いになることは当然ながら、頼りになる人も今は亡くなりましたし、どうしたものでしょうか。

d 最近のご様子を拝見するにつけ、ご病気がちで、どのようにしてでも女君の御ためによかろうと思つてこそ、姫君への出仕をお勧め申し上げましたが、このような宮との間の悩みごとすら解決できませんので、女君がこのようにお思いになることは当然ながら、頼りになる人も今はおりませんし、どうしたものでしょうか。

e 最近のご様子を拝見するにつけ、ご病気がちで、どのようにしてでも女君の御ためによかろうと思つてこそ、姫君への出仕をお勧め申し上げましたが、このような宮との間の悩みごとすら解決できませんので、女君がこのようにお思いになることは当然ながら、頼りになる人も今は亡くなりましたし、どうしたものでしょうか。

問4 女の置かれた事態に対処するため、侍従は誰にどのような依頼をしたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 女の父大納言の死後に知り合いとなった翁に対し、「とても恐ろしいことがあって、そちらへ出かけることができませぬ。どこにでもお隠し申し上げたいと思うのですが、なんとか取り計らってください。けつして誰にも知られないようにしてください」と依頼した。

b 女の父大納言の在世中からの知り合いであった翁に対し、「とても恐ろしいことがあって、ここにすることができません。どこにでもお隠し申し上げたいと思うのですが、なんとか取り計らってください。けつして誰にも知られないようにしてください」と依頼した。

c 女の父大納言の在世中からの知り合いであった翁に対し、「とても恐ろしいことがあって、ここにすることができません。どこにでもお隠し申し上げたい

と思うのですが、なんとか取り計らってください。いかにしても女君に事情を知られないように配慮してください」と依頼した。

d 女の父大納言の死後に知り合いとなつた翁に対し、「とても恐ろしいことがあって、ここにいることができません。どこにでもお隠し申し上げたいと思うのですが、なんとか取り計らってください。いかにしても女君に事情を知られないように配慮してください」と依頼した。

e 女の父大納言の在世中からの知り合いであつた翁に対し、「とても恐ろしいことがあって、そちらへ出かけることができません。どこにでもお隠し申し上げたいと思うのですが、なんとか取り計らってください。いかにしても女君に事情を知られないように配慮してください」と依頼した。

問5 嵯峨に着いた後、侍従は老人夫婦に女の状況についてどのように説明したか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 宮仕えに馴れていらつしやる御身とはいえわびしくお思いになり、ともすればしおれていらつしやるのを、ここまでの思いとは知らずに、なだめていたこともあるのですが、たいそう苦しまれ、死んでしまいたいとお嘆きになるのを拝見するのも辛く、そこで無理を承知で、こうまでして逃げ出してくることを決心したのです。

b 宮仕えに馴れていらつしやる御身なのでわびしくお思いになり、ともすれば涙を流しがちでいらつしやるのを、ここまでの思いとは知らずに、なだめていたこともあるのですが、たいそう苦しまれ、死んでしまいたいとお嘆きになるのを拝見するのも辛く、そこでなんとか説得して、こうして逃げ出してくることを決心したのです。

c 宮仕えに馴れていらつしやる御身とはいえわびしくお思いになり、ともすればしおれていらつしやるのを、ここまでの思いとは知らずに、解決しようとしていたこともあるのですが、たいそう苦しまれ、死んでしまいたいとお嘆きになるのを拝見するのも辛く、そこで無理を承知で、こうまでして逃げ出してくることを決心したのです。

d 宮仕えに馴れていらつしやる御身なのでわびしくお思いになり、ともすれば涙を流しがちでいらつしやるのを、ここまでの思いとは知らずに、解決しようとしていたこともあるのですが、たいそう苦しまれ、死んでしまいたいとお嘆きになるのを拝見するのも辛く、そこでなんとか説得して、こうして逃げ出してくることを決心したのです。

e 宮仕えに馴れていらつしやらない御身なのでわびしくお思いになり、ともすれば涙を流しがちでいらつしやるのを、ここまでの思いとは知らずに、なだめていたこともあるのですが、たいそう苦しまれ、死んでしまいたいとお嘆きになるのを拝見するのも辛く、そこで無理を承知で、こうして逃げ出してくることを決心したのです。

問6 侍従の説明を聞いた二人は、どのように答えたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 御両親がここにお出かけになられたとしても、きっとこのような物思いに沈みなさるはずです。このように女君にお会い申し上げることは、本当に夢のようなことではないと思います。

b 御両親が生きていらつしやったとしても、きっとこのような物思いに沈みなさるはずです。このように女君にお会い申し上げることは、本当に夢のようなことではないと思います。

c 御両親さえここにお出かけになられれば、どうしてこのような物思いに沈みなさることがありましようか。このように女君をお世話申し上げることができるのは、本当に夢のようなことではないと思います。

d 御両親さえ生きていらつしやれば、どうしてこのような物思いに沈みなさることがありましようか。このように女君にお会い申し上げることは、本当に夢のようなことではないと思います。

e 御両親も生きてここにおいでならば、きっとこのような物思いに沈みなさるはずです。このように女君をお世話申し上げることができるのは、本当に夢のようなことではないと思います。

問7 女の失踪という事態を受けて、兵部卿宮の妻である姫君の反応はどのようなものであったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 最近、女房たちの言っていた宮の御心変わりも本当のことであって、それゆえ女が姿を消したのだらうと思っていた。女房たちもそのように言っていたのだが、「宮も女が失踪したことをお聞きになってからは「様子も普通ではなく、どうなってしまったのかと、ひどく嘆いていらつしやいます」などと、誰



ともなく姫君に申し上げるので、女を隠したのは宮ではあるまいと思っている。

b 最近、女房たちの言っていた宮の御心変わりも本当のことであって、それゆえ女が姿を消したのだろうと思っていた。女房たちもそのように言っていたのだが、「宮も女が失踪したことをお聞きになってからは世の無常をお感じになった」様子で、どうなってしまったのかと、ひどく嘆いていらっしやいます」などと、誰ともなく姫君に申し上げるので、女を隠したのは宮ではあるまいと思っている。

c 最近、女房たちの言っていた宮の御心変わりも本当のことであって、宮が女をお隠しになったのだろうと思っていた。女房たちもそのように言っていたのだが、「宮も女が失踪したことをお聞きになってからは」様子も普通ではなく、どうなってしまったのかと、ひどく嘆いていらっしやいます」などと、誰ともなく姫君に申し上げるので、女を隠したのは宮であるに違いないと思っている。

d 最近、女房たちの言っていた宮の御心変わりも本当のことであって、宮が女をお隠しになったのだろうと思っていた。女房たちもそのように言っていたのだが、「宮も女が失踪したことをお聞きになってからは」様子も普通ではなく、どうなってしまったのかと、ひどく嘆いていらっしやいます」などと、誰ともなく姫君に申し上げるので、女を隠したのは宮ではあるまいと思っている。

e 最近、女房たちの言っていた宮の御心変わりも本当のことであって、宮が女をお隠しになったのだろうと思っていた。女房たちもそのように言っていたのだが、「宮も女が失踪したことをお聞きになってからは世の無常をお感じになった」様子で、どうなってしまったのかと、ひどく嘆いていらっしやいます」などと、誰ともなく姫君に申し上げるので、女を隠したのは宮であるに違いないと思っている。

問8 また兵部卿宮周辺の女房たち、および中納言の君の反応はどのようなものであったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a とても不思議なことだ。最近人があれこれと噂していたのを、女は苦しく感じているように見えたので、こうした悩みで身投げでもなさったのだろうか。そうでなければ盗人に捕われなさったのか。あれほどしみじみとお優しい方であったのに、と女房たちも惜しいことだと思いきる。中納言の君も、女がいなくなってしまうことをあれこれ嘆いていらっしやる。

b とても不思議なことだ。最近人があれこれと噂していたのを、女は苦しく感じているように見えたので、こうした悩みで身投げでもなさったのだろうか。

そうでなければ物の怪ものけにさらわれなさったのか。あれほどしみじみとお優しい方であったのに、と女房たちも残念なことだと思いなさる。中納言の君も、女がいなくなってしまうことを困ったものだと思いなさる。

c とても不思議なことだ。最近人があれこれと噂していたのを、女は苦しく感じているように見えたので、こうした悩みで身投げでもなさったのだろうか。そうでなければ盗人に捕われなさったのか。あれほどしみじみとお優しい方であったのに、と女房たちも残念なことだと思いなさる。中納言の君も、女がいなくなってしまうことをあれこれ嘆いていらつしやる。

d とても不思議なことだ。最近人があれこれと噂していたのを、女は苦しく感じているように見えたので、こうした悩みで身投げでもなさったのだろうか。そうでなければ物の怪にさらわれなさったのか。あれほどしみじみとお優しい方であったのに、と女房たちも惜しいことだと思いなさる。中納言の君も、女がいなくなってしまうことをあれこれ嘆いていらつしやる。

e とても不思議なことだ。最近人があれこれと噂していたのを、女は苦しく感じているように見えたので、こうした悩みで身投げでもなさったのだろうか。そうでなければ物の怪にさらわれなさったのか。あれほどしみじみとお優しい方であったのに、と女房たちも珍しいことだと思いなさる。中納言の君も、女がいなくなってしまうことを困ったものだと思いなさる。

問9 傍線部④を、主語を補って現代語訳せよ。

次の文章は、『栄花物語』の一節である。万寿二(一〇二五)年八月五日、東宮(敦良親王)妃・嬉子(本文中では、督の殿)は、出産の後に十九歳で亡くなった。東宮をはじめ、父・道長(本文中では、殿、殿の御前)や母・倫子(本文中では、上の御前)など周囲の人々の悲しみと衝撃は大きなものがあった。嬉子の亡骸は八月十五日の夜、火葬のために「岩蔭」(平安京外の北にある山の麓、火葬の地)へと移され、その葬送には道長自身も参列した。これを読んで、後の問いに答えよ。

おはしますほどの有様、いへばおろかにいかめし。西は\*<sub>1</sub>大宮よりさしすぎ、東は\*<sub>2</sub>京極をきはに続きたちたるを、またおはしましつる\*<sub>3</sub>法興院までぞ、名残は続きたるほどをおしはかるべし。また世の中を昔見たる 嬬、翁、「まだかかる猛なること見ず」などぞ、泣く泣く申し思へる。年ごろいみじき天変とてののしりつるは、げに空しくやはありける。春は\*<sub>4</sub>皇后宮うせさせたまひぬ。たちぬる月には、\*<sub>5</sub>院の女御うせさせたまふ。またかくおはしまして、かく一天下のゆすりたる、これこそは天変なりけれ。今は何ごとのあるべきぞと見えたり。

おはしまし着きぬれば、殿に年ごろ使はせたまひて、睦まじう思しめさるるままに、今の\*<sub>6</sub>信濃守保資、\*<sub>7</sub>大炊頭為職、\*<sub>8</sub>備後前司公則など、すべてただかやうの人をぞ、よろづにさしあづけさせたまへれば、げに火水に入りて仕うまつれど、さすがにしも知らざりけることにて、夜ふけ、鶏も鳴きぬ。あさましう月の明くめでたきに、そこらの人々参りこみたるに、殿の御声のあはれに悲しきにぞ、ここらの人もえ忍びあへざりける。煙にて上がらせたまふにも、やがて靡きて、いづれの雲とも御覧じわくべくもあらぬにも、御胸ふたがりて、さだかにも御覧ぜられず。

かかるほどに、\*<sub>9</sub>船岡の南の方に、火こそほのめきて、ただならずあはれなることぞ見ゆる。人々見やりて、「あはれ、かれ見よや、はやまたかくもありけるは」など、見やり騒ぐに、あるものの申すは、督の殿に、小左衛門とていみじううたきものにとりわき思したりしが、日ごろかれもわづらひて、え参らざりしに、このうせさせたまふ日ぞ、参りて見たてまつりて、まかでにけるままに、同じ日やがてうせにけるが、をりしもこそあれ、今宵しもこのわたり近うするなりけり。人々あはれなりけるよしを言ひ思へるに、\*<sub>10</sub>女房車もたしかに問ひききて、いみじうあはれに見やる。高き短きこよなき御有様にこそ、同じういふべからねど、ことのさま煙に上るほどは見え分かぬわざになんありける。\*<sub>11</sub>殿ばらなどのあはれがりのたまはするを、殿の御前にほの聞こしめして、「あはれ、とふべかりけることにこそありけ

れ。物などをやるべかりけるものを。人よりもあはれと思したりしかば、同じ所にや参らん」と思しめすも悲しうて、泣く泣く御覧じければ、火のいとほのかにて、人なども多くも見えず、有様のあはれに心すげなり。かへすがへすもあはれがらせたまひて、「法事にだにかならず物遣はさん」と思しめしけり。女房車かへすがへすあはれに見やる。今宵の月はめでたきものといひ置きたれど、まことに明きはいとありがたうのみありけるに、今宵の月ぞ、まことにかぐや姫の空に上りけんその夜の月かくやと見えたる。風さへ涼しく吹きたるに、ときどきこの御あたり近う、赤雲の立ち出づるは、わが君の御有様と見ゆるに、詮方なく悲しかりける。上の御前は、御格子を下ろさで、やがて端におはしまして、「かの岩蔭はいづ方ぞ」など、人に問はせたまひて、そなたさまにながめさせたまふに、赤き雲の見ゆれば、まづそれならんかしと、御衣の袖のみならず、御身さへ流れさせたまふ。東宮は、今宵と聞こしめしたることなれば、つゆまどろませたまはず、かの昔の楚王の夢を思し合せられて、あさましく思しまどはせたまふ。「かやうにてや」とぞ、人申しいはせける、

「ほどもなく雲となりぬる君なれば昔の夢の心地こそすれ

かへすがへす」と言へど、なほ思しかけさせたまはざりつる御有様の民心憂くて。夜も明けぬれば、殿の御前には木幡へと思しめせど、「さまではいかでか」など、人々聞こえさすれば、木幡へは別当僧都、播磨守泰通、すべてさるべき人々ぞ参りける。

#### 注

(『栄花物語』による)

- \* 1 大宮 東大宮大路。法興院よりも西にある。
- \* 2 京極 東京極大路。平安京の東端にある。
- \* 3 法興院 二条京極にあり、かつての二条院を仏寺としたもの。嬉子の亡骸が安置されていた。
- \* 4 皇后宮 三条天皇の皇后・城子。万寿二(一〇二五)年三月二十五日に亡くなる。
- \* 5 院の女御 小一条院(敦明親王)の女御・寛子。万寿二(一〇二五)年七月九日に亡くなる。
- \* 6 信濃守保資 甘南備(のち大江)保資。道長の家司。
- \* 7 大炊頭為職 菅原為職。道長の家司。

\* 8 備後前司公則びんごのぜんじきむのり 藤原(のち源)公則。道長の家司。

\* 9 船岡ふねの 岩蔭いわかげより東南にある葬送さうじやうの地。

\* 10 女房車にようぐるま 女房が外出時に使う牛車ぎゅうしゃ。供奉くぶの女房たちが乗っている。

\* 11 殿とのばら 嬪子の葬送に参列した高貴な男性たち。

\* 12 楚王そわうの夢ゆめ 『文選もんぜん』 「高唐賦こうたうふ」をさす。楚の懷王が昼寝していると、夢の中に女が現れて契りを結び、女は立ち去る際、王に「私は巫山ふせうざんの南の、険しい峰の頂に住んでおります。朝は雲となり、夕べは雨となって、朝夕にあなたのもとに現われます」といったという話。

\* 13 木幡きはた 京都市の南、藤原氏の代々の墓所がある。

\* 14 别当べつたう僧都そうとう 木幡浄妙寺の别当・定基。

\* 15 播磨はりま守泰かみやすみち通とみ 藤原泰通。嬪子の乳母めのとの夫。

問1 嬪子の葬列はどのようなものであったか、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a それはことばにできないほどおごそかであった。西は東大宮大路を通り過ぎ、東は東京極大路まで続くが、道長がいらつしやる法興院に至るまで別れを惜しんで多くの人々が練り歩いていた。老人たちは「これほどいかめしいものは見たことがない」と泣いていた。

b それはことばにするのもおごかしいものであった。西は東大宮大路を通り過ぎ、東は東京極大路まで続くが、道長がいらつしやる法興院に至るまで別れを惜しんで多くの人々が練り歩いていた。老人たちは「これほどいかめしいものは見たことがない」と泣いていた。

c それはことばにするのもおごかしいものであった。西は東大宮大路を通り過ぎ、東は東京極大路まで続くが、嬪子の亡骸を安置していた法興院に至るまで多くの人々が別れを惜しんで葬列に続いていた。老人たちは「これほどおどろおどろしいものは見たことがない」と泣いていた。

d それはことばにできないほどおごそかであった。西は東大宮大路を通り過ぎ、東は東京極大路まで続くが、嬪子の亡骸を安置していた法興院に至るまで多くの人々が別れを惜しんで葬列に続いていた。老人たちは「これほどいかめしいものは見たことがない」と泣いていた。

e それはことばにできないほどおごそかであった。西は東大宮大路を通り過ぎ、東は東京極大路まで続くが、嬉子の亡骸を安置していた法興院に至るまで多くの人々が別れを惜しんで葬列に続いていた。老人たちは「これほどおどろおどろしいものは見たことがない」と泣いていた。

問2 この年の天変地異についての説明として、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 数年来、ひどい天変が起きると大騒ぎしていたのは、うそではなかった。春には皇后が、数ヶ月前には院の女御が、そして、このたび嬉子が亡くなって、こうして天地をゆるがす地震まで起きた。これこそ天変であった。

b 数年来、ひどい天変が起きると大騒ぎしていたのは、うそではなかった。春には皇后が、先月には院の女御が、そして、このたび嬉子が亡くなって、このように世の中が大騒ぎになった。これこそ天変であった。

c 数年来、ひどい天変など起きないと信じられていたのは、当っていなかった。春には皇后が、数ヶ月前には院の女御が、そして、このたび嬉子が亡くなって、このように世の中が大騒ぎになった。これこそ天変であった。

d 数年来、ひどい天変など起きないと信じられていたのは、当っていなかった。春には皇后が、先月には院の女御が、そして、このたび嬉子が亡くなって、このように世の中が大騒ぎになった。これこそ天変であった。

e 数年来、ひどい天変など起きないと信じられていたのは、当っていなかった。春には皇后が、数ヶ月前には院の女御が、そして、このたび嬉子が亡くなって、こうして天地をゆるがす地震まで起きた。これこそ天変であった。

問3 嬉子の葬送について述べたものとして、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 道長の泣く声がしみじみと悲しいので、明るいう月に誘われて出てきた近くの人々も涙をこらえることができない状況の中、嬉子の茶毘たびに付され空へ上っていく煙は、ゆっくり空にたなびいて、どこか雲の彼方かなたへ消えていくので、道長は胸が塞がって嬉子の煙をはつきりと見ることができなかった。

b 道長の泣く声がしみじみと悲しいので、明るいう月に誘われて出てきた近くの人々もひっそりと静かにせざるをえない状況の中、嬉子の茶毘に付され空へ

上つていく煙は、ゆっくり空にたなびいて、どこか雲の彼方へ消えていくので、道長は胸が塞がって嬉子の煙をはっきりと見ることができなかった。

c 道長の泣く声がしみじみと悲しいので、葬儀に参列した人々もひっそりと静かにせざるをえない状況の中、嬉子の茶毘に付され空へ上つていく煙は、そのまま空にたなびいて、どの雲が嬉子の煙というようには区別がつかないので、道長は胸が塞がって嬉子の煙をはっきりと見ることができなかった。

d 道長の泣く声がしみじみと悲しいので、葬儀に参列した人々も涙をこらえることなどできない状況の中、嬉子の茶毘に付され空へ上つていく煙は、ゆっくり空にたなびいて、どこか雲の彼方へ消えていくので、道長は胸が塞がって嬉子の煙をはっきりと見ることができなかった。

e 道長の泣く声がしみじみと悲しいので、葬儀に参列した人々も涙をこらえることなどできない状況の中、嬉子の茶毘に付され空へ上つていく煙は、そのまま空にたなびいて、どの雲が嬉子の煙というようには区別がつかないので、道長は胸が塞がって嬉子の煙をはっきりと見ることができなかった。

問4 船岡の南の方に見えたものの説明として、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 小左衛門という、嬉子が特にかわいがっていた愛らしい女房を火葬にする火で、小左衛門は嬉子同様しばらく病気で休んでいたのだが、嬉子が亡くなるまさにその日、小左衛門が参上してお目にかかったものの、退いてそのまま同じ日に死んでしまい、偶然にも嬉子の火葬の場とほど近い所で同じ時に火葬されていた。

b 小左衛門という、嬉子が特にかわいがっていた愛らしい女房を火葬にする火で、小左衛門は嬉子同様しばらく病気で休んでいたのだが、嬉子が亡くなるまさにその日、嬉子が見舞いにいらっしゃってお目にかかることができたものの、お帰りになった直後、死んでしまい、特別の計らいで嬉子の火葬の場とほど近い所で同じ時に火葬されていた。

c 小左衛門という、嬉子が特にかわいがっていた愛らしい女房を火葬にする火で、小左衛門は嬉子同様しばらく病気で休んでいたのだが、嬉子が亡くなるまさにその日、嬉子が見舞いにいらっしゃってお目にかかることができたものの、お帰りになった直後、死んでしまい、偶然にも嬉子の火葬の場とほど近い所で同じ時に火葬されていた。

d 小左衛門という、嬉子が特に気に掛けていた病弱な女房を火葬にする火で、小左衛門は嬉子同様しばらく病気で休んでいたのだが、嬉子が亡くなるまさに

その日、小左衛門が参上してお目にかかったものの、退いてそのまま同じ日に死んでしまい、特別の計らいで嬉子の火葬の場とほど近い所で同じ時に火葬されていた。

e 小左衛門という、嬉子が特に気に掛けていた病弱な女房を火葬にする火で、小左衛門は嬉子同様しばらく病気で休んでいたのだが、嬉子が亡くなるまさにその日、嬉子が見舞いにいらっしやってお目にかかることができたものの、お帰りになった直後、同じ日に死んでしまい、偶然にも嬉子の火葬の場とほど近い所で同じ時に火葬されていた。

問5 道長は、「殿ばら」が小左衛門のことを話すのを耳にしてどのように思ったか、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 「なんと趣深いことだ、弔問してやるべきであった。弔問の品を届けてやればよかった。嬉子は小左衛門のことを他の女房よりも寵愛ちようあいなさっていたのだから、同じように扱ってやろう」と悲しまれ、火葬の火がかすかで生前に訪問する人もわずかだったことを気の毒がられて、「せめて法事にだけでも必ず供物を届けよう」と思われた。

b 「なんと趣深いことだ、弔問してやるべきであった。弔問の品を届けてやればよかった。嬉子は小左衛門のことを他の女房よりも寵愛なさっていたのだから、あの世でも嬉子のもとに参上するだろう」と悲しまれ、火葬の火がかすかで生前に訪問する人もわずかだったことを気の毒がられて、「せめて法事にだけでも必ず供物を届けよう」と思われた。

c 「ああ、弔問してやるべきであった。弔問の品を届けてやればよかった。嬉子は小左衛門のことを他の女房よりも寵愛なさっていたのだから、あの世でも嬉子のもとに参上するだろう」と悲しまれ、火葬の火がかすかで生前に訪問する人もわずかだったことを気の毒がられて、「せめて法事にだけでも必ず供物を届けよう」と思われた。

d 「ああ、弔問してやるべきであった。弔問の品を届けてやればよかった。嬉子は小左衛門のことを他の女房よりも寵愛なさっていたのだから、あの世でも嬉子のもとに参上するだろう」と悲しまれ、火葬の火がかすかで弔う人もわずかであることを気の毒がられて、「せめて法事にだけでも必ず供物を届けよう」と思われた。



e 「ああ、弔問してやるべきであった。弔問の品を届けてやればよかった。嬉子は小左衛門のことを他の女房よりも寵愛なさっていたのだから、同じように扱ってやろう」と悲しまれ、火葬の火がかすかで弔う人もわずかであることを気の毒がられて、「せめて法事にだけでも必ず供物を届けよう」と思われた。

問6 人々が、この日の夜空の様子から感じたことの説明として、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 今宵の月はすばらしいものと昔からいつてきているが、八月十五日が明るい月夜というのはとても尊い。かぐや姫が空に昇ったというその夜の月も今宵ほどは明るくなかっただろう。その上風までもが涼しく吹いてきて、この付近に時々赤い雲が立ち上ってくるのは、亡くなったわが君嬉子の茶毘の煙に見える。

b 今宵の月はすばらしいものと昔からいつてきているが、実際に八月十五日が明るい月夜というのは珍しい。かぐや姫が空に昇ったというその夜の月も今宵のように明るかったのだろう。その上風までもが涼しく吹いてきて、この付近に時々赤い雲が立ち上ってくるのは、亡くなったわが君嬉子の茶毘の煙に見える。

c 皆、今宵の月はすばらしいといつているが、実際に八月十五日が明るい月夜というのは珍しい。かぐや姫が空に昇ったというその夜の月も今宵のように明るかったのだろう。そこに風が涼しく吹いてきて、この付近に時々赤い雲が立ち上ってくるのは、亡くなったわが君嬉子の茶毘の煙に見える。

d 今宵の月はすばらしいものと昔からいつてきているが、八月十五日が明るい月夜というのはとても尊い。かぐや姫が空に昇ったというその夜の月も今宵のように明るかったのだろう。そこに風が涼しく吹いてきて、この付近に時々立ち上ってくる赤い雲が、亡くなったわが君嬉子を思い出させるよすがとして見える。

e 皆、今宵の月はすばらしいといつているが、実際に八月十五日が明るい月夜というのは珍しい。かぐや姫が空に昇ったというその夜の月も今宵ほどは明るくなかっただろう。その上風までもが涼しく吹いてきて、この付近に時々立ち上ってくる赤い雲が、亡くなったわが君嬉子を思い出させるよすがとして見える。

問7 この日の東宮の行動と心情についての説明として、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 今宵、嬉子が火葬されると聞いていたので眠らずに起きていて、昔、楚王が朝の雲を見た時の心境が自身の今の状況と重なることよと、驚き思い乱れていた。周囲の人が東宮の心中を察して和歌を詠むにつけても、東宮は自ら詠もうと思案しているうちに思いがけず他人に詠まれたのが、ただただつらく思われるのであった。

b 今宵、嬉子が火葬されると聞いていたので眠らずに起きていて、昔、楚王が朝の雲を見た時の心境が自身の今の状況と重なることよと、驚き思い乱れていた。周囲の人が東宮の心中を察して和歌を詠むにつけても、東宮は思いがけずはかなく短かった嬉子との関係が、ただただつらく思われるのであった。

c 今宵、嬉子が火葬されると聞いていたので眠らずに起きていて、昔、楚王が朝の雲を見た時の心境が自身の今の状況と重なることよと、驚き思い乱れていた。周囲の人が自らの思いを詠んだ和歌は東宮自身の気持ちと思いがけず重なり、はかなく短かった嬉子との関係が、ただただつらく思われるばかりであった。

d 今宵、赤雲が見えるのと聞いていたので眠らずに起きていて、今日の赤雲の風情が昔の楚王の夢と似た趣深さであると思ひ、驚き困惑した。周囲の人がその東宮の心中を察して和歌を詠んだが、東宮は自ら詠もうと思案しているうちに思いがけず他人に詠まれたのが、ただただつらく思われるのであった。

e 今宵、赤雲が見えるのと聞いていたので眠らずに起きていて、今日の赤雲の風情が昔の楚王の夢と似た趣深さであると思ひ、驚き困惑した。周囲の人が赤雲の情趣を和歌に詠むにつけても、東宮は赤雲の趣深いことを今まで知らずに心にかけてこなかったことが、ただただつらく思われるのであった。

問8 「ほどもなく雲となりぬる」の和歌についての説明として、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 茶毘に付され煙となって空へ立ち昇る嬉子に心寄り添っている東宮を、上空に縁のある語として雲を用いて表わし、嬉子とのほかない逢瀬<sup>おうせ</sup>を、かつて楚王が夢で女と結んだ関係に喩<sup>たと</sup>えて美しく表現している。

b 東宮が、火葬の煙が空に立ち昇ってたなびく雲を、はかなく亡くなった嬉子自身と見て思いを馳<sup>は</sup>せているということを、かつて楚王が女と逢<sup>あ</sup>う夢から醒<sup>さ</sup>めた後に朝雲を見て女を思う故事を用いて情趣深く表現している。

- c 火葬の煙を見て東宮が嬉子を偲しのんでいるのに、煙はすぐに空へと立ち昇って雲と区別がつかなくなってしまい、煙さえもすぐに消えていく嬉子のはかなく頼りないさまを、かつて見た夢と重ねて象徴的に表現している。
- d 嬉子を亡くした悲しみのために心乱れて困惑する東宮の様子を、嬉子の火葬の煙が空へ立ち昇った雲に重ねて指摘し、周囲に居る人さえも頼りない気持ちになっっていることを、かつて見た夢を比喩として表現している。
- e 嬉子を亡くした悲しみのため、東宮がこのまま後追うように亡くなってしまえば、残された人がふたたび今と同じ悲しみに惑うことになると、過去・現在・未来の時間を巧みに用いて表現している。

問9 傍線部(A)を現代語訳せよ。

次の文章は、『うつほ物語』の一節で、藤壺が東宮との間の第三子を出産する場面から始まる。これを読んで、後の問いに答えよ。

かかるほどに、つごもりになりて、いと平らかに男皇子みこむ生まれたまへり。気色けしきもなくておはしつるほどに、生まれたまへり。人々は聞きあへたまはず。\*<sub>1</sub>おとど、\*<sub>2</sub>宮、喜びたまふこと限りなし。いかならむ、と思ひつるたびしも、何なにごともなくしたまへれば、生まれたまひつる皇子を、うつくしみおはさふ。

\*<sub>3</sub>宮より、御消息せうそく立ち返りあり。おとど、むつましく仕うまつる人を御前まへに召して、よろづ調じて参りたまふ。思ふやうに人のえせぬをば、御手づからしたまふ。

\*<sub>4</sub>宮の御腹の君たちは、籠もりておはす。御手づからしたまへば、君たち、「何なにごとをか仕うまつらむ」と聞こえたまへば、おとど、「そこたちは、まだ未熟みじくならむ。翁おきなは多くの子、孫むまこの母もいたはり馴ならひたり。かかる人をば、この折まがひによくいたはり、心知らひつれば、かたちも殊ことに損こなはれぬものなり。宮みやのよう思おぼすなるに、費つひやかさでこそは参まらせめ」とて、よろづにありがたきものをして参りたまふ。

\*<sub>5</sub>座ざ養やうしたまはぬ人なく、いと清きよらにしたまふ。宮みやより、七日ななのは、御屏風びやうぶ、御座ましよりはじめたまひて、長持ながもちの脚あしつきたる三さんつ、唐櫃からびつ五具ごぐに、綾あや、錦にしきよりはじめて、よろづの物入れさせたまへり。御文ごぶんあり。御使ごしは大おほ夫と。

たびたびのは見たまへき。みづからのたまはねば、おぼつかなくなむ。いかにと思ふしるしにや、異なることなくてものしたまふなるを喜び。よろづのこと見ぬものとなりけるこそ、改あらためまほしくこそ。さてこれは、旅人りゆうじんの料りょうにとて。あまたの親おやになりたまひぬるをなむ、いとあはれに。今は、とく対面たいめんもがなどのみなむ。さりぬべくは、夢ゆめばかりも、みづからものたまへ。うちも驚おどろかされたりとも、いとよく見えつべしや。

とて奉りたまへり。

大宮おほみや見たまひて、「かく人の親おやになりたまひて、心こころしておはしますこそあはれなれ。『おぼつかなし』とあめるを、御返ごへんりことも、臥ふしながら聞こえたまへかし」とのたまへば、聞こえたまふ。

承うけたまりぬ。また筆ふでも取とられはべらねば、「おぼつかなし」とのたまはせられたれば、臥ふしながら聞こえさす。いかにと思ひ嘆なげきつるを、今日けふまではかく聞こえさす

を、後はいかが。「人の親に」とかのたまはせたるは、かつは「\*6 闇に」とかいふなることをなむ。今かう思ひたまふるこそ。旅人に賜はせたるものは、あるじまでなむ喜びこゆる。ことごとには。

と書きたまへれば、宮包ませたまひて、御使に女の装ひ、下人に禄など賜ひて、奉りたまひつ。

\*7 一の宮の御方より、子持ちの御前の御もの御膳、稚児の御衣、襦袢、いと清う調じて奉れり。白き折櫃に黄ばみたる絵描きて、白き、黄ばみたる銭積みたり。御石の台に、例の鶴あり。洲浜に、

行く末も思ひやらるる石にのみ千歳の鶴をあまた見つれば

と\*8 大将の君の手にて書きたまへり。

(『うつほ物語』による)

注

- \* 1 おとど || 藤壺の父、源正頼。
- \* 2 宮 || ここでは藤壺の母、大宮。
- \* 3 宮 || ここでは東宮。
- \* 4 宮 || ここでは藤壺の母、大宮。
- \* 5 産養 || 誕生祝いの儀式。
- \* 6 闇に || 「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」の古歌を引く。
- \* 7 一の宮 || 藤壺の姪、次に登場する大将の君の妻。
- \* 8 大将の君 || 藤原仲忠。

問1 出産の様子として、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 月末になって、とても安産で男の子がお生まれになった。生まれる気配もないあいだにお生まれになった。人々はお生まれになったと聞かされることはなかった。

b 月がかわって、とても安産で男の子がお生まれになった。藤壺が意識を失っていらっしやるあいだにお生まれになった。人々は出産なさるとの報を聞いてかけつける間もないほどであった。

c 月末になって、とても安産で男の子がお生まれになった。藤壺が意識を失っていらっしやるあいだにお生まれになった。人々はお生まれになったと聞かされることはなかった。

d 月がかわって、とても安産で男の子がお生まれになった。生まれる気配もないあいだにお生まれになった。人々は出産なさるとの報を聞いてかけつける間もないほどであった。

e 月末になって、とても安産で男の子がお生まれになった。生まれる気配もないあいだにお生まれになった。人々は出産なさるとの報を聞いてかけつける間もないほどであった。

問2 出産後の藤壺の両親の様子として、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 藤壺の父も母もお喜びになることこの上ない。今度の出産はどうなることだろうと思っていたが、何事もなく無事に出産を終えられたので、お生まれになった皇子を、お二人ともに慈しんでいらっしやる。

b 藤壺の父も母もお喜びになることこの上ない。これから先どうなることだろうと思っていたが、何も失うことなく母子ともに無事だったので、お生まれになった皇子を、美しい皇子であると語り合っていらっしやる。

c 藤壺の父も母もお喜びになることこの上ない。今度の出産はどうなることだろうと思っていたが、何も失うことなく母子ともに無事だったので、お生まれになった皇子を、お二人ともに慈しんでいらっしやる。

d 藤壺の父も母もお喜びにならないことがあるか。これから先どうなることだろうと思っていたが、何も失うことなく母子ともに無事だったので、お生まれになった皇子を、お二人ともに慈しんでいらっしやる。

e 藤壺の父も母もお喜びにならないことがあるか。今度の出産はどうなることだろうと思っていたが、何事もなく無事に出産を終えられたので、お生まれ

になった皇子を、美しい皇子であると語り合っけいらっしやる。

問3 藤壺の父はどのような様子だったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 親しくお仕えしている人とともに御前に出て行き、藤壺にいろいろと食事の用意をしてさしあげられる。思ったように女房たちができないので、みずから準備をなさる。
- b 親しくお仕えしている人とともに御前に出て行き、藤壺に何から何までそろえてくださる。思ったように女房たちができないと、みずから準備をなさる。
- c 親しくお仕えする人を御前に呼び寄せて、藤壺にいろいろと食事の用意をしてさしあげられる。思った女房たちがやっけて来ないと、みずから準備をなさる。
- d 親しくお仕えする人を御前に呼び寄せて、藤壺にいろいろと食事の用意をしてさしあげられる。思ったように女房たちができないと、みずから準備をなさる。
- e 親しくお仕えする人を御前に呼び寄せて、藤壺に何から何までそろえてくださる。思ったように女房たちができないので、みずから準備をなさる。

問4 子どもたちから質問を受けたとき、藤壺の父はどのように答えたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 「おまえたちはまだまだ不慣れであろう。おじいさんというものはたくさんの子どもや孫の母をいたわること慣れているのだ。こんなおじいさんをこういう時はよくいたわり、気を配ってくれば、礼儀を損なうことなどないものだ。藤壺がよく思えるように、時を無駄に費やすことなく、皆で面倒をみるように」と答えた。
- b 「おまえたちはまだまだ不慣れであろう。このじいさんはたくさんの子どもや孫の母をいたわること慣れているのだ。このような産婦をこういう時はよくいたわり、気を配ってやれば、器量も損なわれないものだ。東宮が寵愛ちゅうあいしてくださっているようだから、やつれた姿でなく参内させたいものだ」と答えた。

c 「おまえたちはまだまだ不慣れであろう。このじいさんはたくさんの子どもや孫の母をいたわることに慣れているのだ。おまえたちのような者がこういう時のいたわり方を知れば、礼儀を損なうことなどないものだ。藤壺はおまえたちのことをよく思っているようだから、皆で面倒をみるように」と答えた。

d 「おまえたちはまだまだ不慣れであろう。おじいさんというものはたくさんの子どもや孫の母をいたわることに慣れているのだ。このような産婦をこういう時はよくいたわり、気を配ってやれば、器量も損なわれないものだ。藤壺はおまえたちのことをよく思っているようだから、時を無駄に費やすことなく、皆で面倒をみるように」と答えた。

e 「おまえたちはまだまだ不慣れであろう。このじいさんはたくさんの子どもや孫の母をいたわることに慣れているのだ。このじいさんをこういう時はよくいたわり、気を配ってくれば、何事もうまくゆくものだ。東宮が寵愛してくださっているようだから、やつれた姿でなく参内させたいものだ」と答えた。

問5 東宮からの手紙の前半部にはどのようなことが書かれていたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 私からのたびたびの手紙はご覧いただきましたでしょうか。あなたからのお返事がないので、どうしたことかと心配でした。安産を願っていた甲斐があつてか、何事もなくご出産されたことを心から喜んでいます。出産にかかわることはすべて見てはならないことになっており、これはあらためたく思いました。
- b あなたからのたびたびの手紙は拝見しました。ご自身でお書きではないので、どうしたことかと心配でした。いったいどうなることかと思っていました。が、何事もなくご出産されたことを心から喜んでいます。出産にかかわることはすべて見てはならないことになっており、これはあらためたく思いました。
- c 私からのたびたびの手紙はご覧いただきましたでしょうか。あなたからのお返事がないので、どうしたことかと心配でした。安産を願っていた甲斐があつてか、何事もなくご出産されたことを心から喜んでいます。あれこれご覧になっていらつしやらないことは、あらためて頂きたいものです。
- d あなたからのたびたびの手紙は拝見しました。ご自身でお書きではないので、どうしたことかと心配でした。安産を願っていた甲斐があつてか、何事もなくご出産されたことを心から喜んでいます。出産にかかわることはすべて見てはならないことになっており、これはあらためたく思いました。
- e あなたからのたびたびの手紙は拝見しました。ご自身でお書きではないので、どうしたことかと心配でした。いったいどうなることかと思っていました。が、何事もなくご出産されたことを心から喜んでいます。あれこれご覧になっていらつしやらないことは、あらためて頂きたいものです。



問6 東宮からの手紙の後半部にはどのようなことが書かれていたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a さて、これは里に下がっているあなたのためにということで贈りました。何人もの親になられて、とても愛おしく思われます。今は早く対面したいとばかり願っています。そうできるのでしたら、ほんの少しでもご自身の筆でお返事をください。夢の途中で起こされたとしても、きっとしっかり拝見いたしましょう。

b さて、これは旅に出ている私からのお祝いということでも贈りました。何人もの親になられて、とても愛おしく思われます。今は早く対面したいとばかり願っています。そうできるのでしたら、夢の中でもよいのでお返事をください。寝ている間に目が覚めたとしても、きっとしっかり拝見いたしましょう。

c さて、これは里に下がっているあなたのためにということで贈りました。何人もの親になられて、とても愛おしく思われます。今は早く対面したいとばかり願っています。それがかなわなければ、夢の中でもよいのでお返事をください。寝ている間に目が覚めたとしても、きっとしっかり拝見いたしましょう。

d さて、これは旅に出ている私からのお祝いということで贈りました。何人もの親になられて、とても愛おしく思われます。今は早く対面したいとばかり願っています。それがかなわなければ、ほんの少しでもご自身の筆でお返事をください。夢の途中で起こされたとしても、きっとしっかり拝見いたしましょう。

e さて、これは里に下がっているあなたのためにということで贈りました。何人もの親になられて、とても愛おしく思われます。今は早く対面したいとばかり願っています。それがかなわなければ、ほんの少しでもご自身の筆でお返事をください。寝ている間に目が覚めたとしても、きっとしっかり拝見いたしましょう。

問7 藤壺の手紙の前半部にはどのようなことが書かれていたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a お手紙拝読しました。「心配だ」とお書きになられていたので、臥したまま手紙を書き取らせています。どうなってしまうだろうと思いついていますが、今日まではどうしてお話をお聞きできるほどには、過ごして参りました。ですが、これから先どうしてよいかわかりません。

問8

一の宮の御方から贈られてきた作り物を説明するものとして、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- b お手紙拝読しました。「心配だ」とお書きになられていたので、臥したまま手紙を書いていきます。どうやって手紙を書こうかと思いましたが、今日まではこうしてお手紙をさしあげられるほどには、過すぎして参りました。ですが、これから先どうしてよいかわかりません。
- c お手紙拝読しました。「心配だ」とお書きになられていたので、臥したまま手紙を書いていきます。どうなってしまうだろうと思いましたが、今日まではこうしてお手紙をさしあげられるほどには、過すぎして参りました。ですが、これから先のこととはわかりません。
- d お手紙拝読しました。「心配だ」とお書きになられていたので、臥したまま手紙を書き取らせていきます。どうなってしまうだろうと思いましたが、今日まではこうしてお話をお聞きできるほどには、過すぎして参りました。ですが、これから先のこととはわかりません。
- e お手紙拝読しました。「心配だ」とお書きになられていたので、臥したまま手紙を書いていきます。どうやって手紙を書こうかと思いましたが、今日まではこうしてお話をお聞きできるほどには、過すぎして参りました。ですが、これから先のこととはわかりません。
- a 石の上には、めでたい作り物の鶴が据えられてあるのに、洲浜には「冷たい石の上に千歳を生きるという鶴がたくさんいるのが見えるので、お生まれになったばかりの皇子の将来のことが憂慮されて仕方ありません」という不吉な歌が記されていた。
- b 石の上には、めでたい作り物の鶴が据えられてあって、洲浜には「堅固な石の上に千歳を生きるという鶴が数羽いるのが見えるので、お生まれになったばかりの皇子とともに歩み続ける将来のことにあれこれ思いを馳はせませす」という喜びの歌が記されていた。
- c 石の上には、めでたい作り物の鶴が据えられてあるのに、洲浜には「冷たい石の上に千歳を生きるという鶴が数羽いるのが見えるので、お生まれになったばかりの皇子にこれから先、悪いことが起きるのではないかと思いやられて仕方ありません」という不愉快な歌が記されていた。
- d 石の上には、めでたい作り物の鶴が据えられてあるのに、洲浜には「冷たい石の上に千歳を生きるという鶴がたくさんいるのが見えるので、お生まれになったばかりの皇子のこれから先のことであれこれ不安で仕方ありません」という悲観的な歌が記されていた。
- e 石の上には、めでたい作り物の鶴が据えられてあって、洲浜には「堅固な石の上に千歳を生きるという鶴がたくさんいるのが見えるので、お生まれになっ

たばかりの皇子の末永い将来のことにあれこれ思いを馳せませす」というお祝いの歌が記されていた。

問9 傍線部④を現代語訳せよ。

次の文章は、『源氏物語』紅梅巻の一節である。大納言は死別した妻北の方との間の娘である中の君と、匂宮(本文中は「この宮」と)との結婚を望んでいるが、匂宮は、大納言の現在の妻真木柱と死別した夫螢兵部卿の宮との間に生まれた宮の御方に思いを寄せている。大納言は紅梅の花を折って、和歌を書いた便りとともに殿上童わらわとして出仕していた大夫の君(本文中は「この君」、真木柱との間の子)に託して匂宮のもとに参上させる。これを読んで、後の問いに答えよ。

ついでに忍びがたきにや、花折らせて、急ぎ参らせたまふ。(大納言)「いかがはせん。昔の恋しき御形見にはこの宮ばかりこそは。仏の隠れたまひけむ御なごりには、

\*1阿難が光放ちけんを、二たび出でたまへるか疑ふさかしき聖ひとしのありけるを。闇にまどふはるけ所に、聞こえをかさむかし」とて、

心ありて風にはほす園の梅にまづ 鶯うぐひすのとはずやあるべき

と、紅の紙に若やぎ書きて、この君の懐紙にとりませ、押したたみて出だしたてたまふを、幼き心に、いと馴なれきこえまほしと思へば、急ぎ参りたまひぬ。

(匂宮は)\*2中宮の上の御局つぼねより御宿直所とのゐに出でたまふほどなり。殿上人あまた御送りに参る中に見つけたまひて、(匂宮)「昨日は、などいとくはまかでにし。いつ参りつるぞ」などのたまふ。(大夫の君)「とくまかではべりにし悔しさに、まだ内裏うちにおはしますと人の申しつれば、急ぎ参りつるや」と、幼げなるものから馴れ聞こゆ。

(匂宮)「内裏ならで、心やすき所にも時々は遊べかし。若き人どもそこはかとなく集まる所ぞ」とのたまふ。この君召し放ちて語らひたまへば、人々は近くも参らず、まかで散りなどして、しめやかにぬれば、(匂宮)「\*3春宮には、暇いとすこしゆるされにためりな。いとしげう思ほしまとはすめりしを、時とられて人わるかめり」と

のたまへば、(大夫の君)「まつはさせたまひしこそ苦しかりしか。御前おまへにはしも」と聞こえさしてゐたれば、(匂宮)「我をば人げなしと思ひ離れたるとな。ことわりなり。さ

れど安からずこそ。古めかしき同じ筋にて、\*4東と聞こゆなるは、あひ思ひたまひてんやと忍びて語らひきこえよ」などのたまふついでに、この花を奉れば、うち笑みて、(匂宮)「恨みて後ならましかば」とて、うちも置かず御覧す。枝のさま、花ぶさ、色も香も世の常ならず。(匂宮)「園に匂へる紅の、色にとられて香なん白き梅には劣

れると言ふめるを、いとかしこくとり並べても咲きけるかな」とて、御心とどめたまふ花なれば、かひありてもてはやしたまふ。

(匂宮)「今宵は宿直なめり。やがてこなたにを」と召し籠こめつれば、春宮にもえ参らず、花も恥づかしく思ひぬべくかうばしくて、け近く臥ふせたまへるを、若き心地に

は、たぐひなくうれしくなつかしう思ひきこゆ。(句意)「\*<sub>5</sub>。この花の主は、など春宮にはうつろひたまはざりし」、(大夫の君)「知らず。心知らむ人になどこそ、聞きはべりしか」など語りきこゆ。大納言の御心ばへは、わが方さまに思ふべかめれと聞きあはせたまへど、思ふ心は異にしみぬれば、この返り事、けさやかにものたまひやらす。つとめてこの君のまかづるに、なほざりなるやうにて、

花の香にさそはれぬべき身なりせば風のたよりを過ぐさましやは

さて、(句意)「なほ、今は、\*<sub>6</sub>。翁どもにさかしらせさせで、忍びやかに」とかへすがへすのたまひて、この君も\*<sub>7</sub>。東のをばやむごとなく睦むつましう思ひましたり。なか\*<sub>8</sub>。異方の姫君は、見えたまひなどして、例のはらからのさまなれど、童心わらはこころ地に、いと重りかにあらまほしうおはする心ばへをかひあるさまにて見たてまつらばやと思ひ歩ありくに、\*<sub>9</sub>。春宮の御方のいとはなやかにもてなしたまふにつけて、同じことと思ひながらいと飽かず口惜しければ、(注)この宮をだにけ近くて見たてまつらばやと思ひ歩ありくに、うれしき花のついでなり。

#### 注

- \* 1 阿難あなん|| 仏(釈迦)の弟子。
- \* 2 中宮|| 明石の中宮。匂宮の母。
- \* 3 春宮|| 匂宮の兄。妻の大君は大納言と北の方の間の娘で、大夫の君の異母姉にあたる。
- \* 4 東ひむがしと聞こゆなる|| 宮の御方。
- \* 5 この花の主あるじ|| 宮の御方。
- \* 6 翁おきなども|| ここでは大納言たちのこと。
- \* 7 東の|| 宮の御方のこと。
- \* 8 異方の姫君|| 腹違いの姫君。
- \* 9 春宮の御方|| 大君のこと。

問 1 大納言は、和歌を書いた便りを送ろうとした時、どのようなことを考えたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 大納言は中の君と匂宮との結婚は難しいと思ったのか、「昔の恋しいお方の形見としては匂宮しかおられない。仏がお亡くなりになったあとで、弟子の阿

難が光を放ったとかいうのを仏が再来したのかと疑ったおろかな聖もいたのだから、聞にくれまどうこの気持ちの晴らしどころとして、あえてお便りをさしあげよう」と考えた。

b 大納言は中の君と匂宮との結婚は難しいと思ったのか、「昔の恋しいお方の形見の匂宮には中の君が物足りなくていらつしやるのか。仏がお亡くなりになったあとで、弟子の阿難が光を放ったとかいうのを仏が再来したのかと疑ったかしこい聖もいたのだから、聞にくれまどうこの気持ちの晴らしどころとして、あえてお便りをさしあげよう」と考えた。

c 大納言はお気持ちをこらえられなかったのか、「昔の恋しいお方の形見の匂宮には中の君が物足りなくていらつしやるのか。仏がお亡くなりになったあとで、弟子の阿難が光を放ったとかいうのを仏が再来したのかと疑ったかしこい聖もいたのだから、聞にくれまどうこの気持ちの晴らしどころとして、あえてお便りをさしあげよう」と考えた。

d 大納言はお気持ちをこらえられなかったのか、「昔の恋しいお方の形見としては匂宮しかおられない。仏がお亡くなりになったあとで、弟子の阿難が光を放ったとかいうのを仏が再来したのかと疑ったかしこい聖もいたのだから、聞にくれまどうこの気持ちの晴らしどころとして、あえてお便りをさしあげよう」と考えた。

e 大納言はお気持ちをこらえられなかったのか、「昔の恋しいお方の形見の匂宮には中の君が物足りなくていらつしやるのか。仏がお亡くなりになったあとで、弟子の阿難が光を放ったとかいうのを仏が再来したのかと疑ったおろかな聖もいたのだから、聞にくれまどうこの気持ちの晴らしどころとして、あえてお便りをさしあげよう」と考えた。

問2 大納言が詠んだ歌の内容はどのようなものだったか、また、便りを託された大夫の君の様子はどのようなだったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 大納言は「思う心があって風が匂いを運ぶ梅に、何はさておき鶯の訪れないはずがありませんか。こうしてこちらから便りをさしあげるからには、色よいご返事があってしかるべきです」と紅の紙に上手ではない手つきで書いて、大夫の君に持たせた。大夫の君は、幼心にも、匂宮に中の君と仲良くしてほ

しいと思っていたので、急いで宮中に参上した。

b 大納言は「思う心があつて風が匂いを運ぶ梅に、何はさておき鶯の訪れないはずがありませんか。あなたが宮の御方に思いを寄せるというならば、一度来ていただいて、聞いてほしいものです」と紅の紙に上手ではない手つきで書いて、大夫の君に持たせた。大夫の君は、幼心にも、匂宮にかわいがられないと思っていたので、急いで宮中に参上した。

c 大納言は「思う心があるなら、風が匂いを運ぶ梅にも、鶯の訪れることはまずないでしょう。あなたが宮の御方に思いを寄せるというならば、一度出向いて、聞いてほしいものです」と紅の紙に若者のような筆づかいで書いて、大夫の君に持たせた。大夫の君は、幼心にも、匂宮に中の君と仲良くしてほしいと思っていたので、急いで宮中に参上した。

d 大納言は「思う心があるなら、風が匂いを運ぶ梅にも、鶯の訪れることはまずないでしょう。あなたは宮の御方に思いを寄せているようですから、良いご返事をくださらないでしょうね」と紅の紙に若者のような筆づかいで書いて、大夫の君に持たせた。大夫の君は、幼心にも、匂宮にかわいがられたいと思っていたので、急いで宮中に参上した。

e 大納言は「思う心があつて風が匂いを運ぶ梅に、何はさておき鶯の訪れないはずがありませんか。こうしてこちらから便りをさしあげるからには、色よいご返事があつてしかるべきです」と紅の紙に若者のような筆づかいで書いて、大夫の君に持たせた。大夫の君は、幼心にも、匂宮にかわいがられたいと思っていたので、急いで宮中に参上した。

問3 あたりが静かになった後、匂宮は大夫の君に何と言ったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 匂宮は大夫の君に「春宮からは、少しはお暇をいただけるようだね。以前はいつもおそばにつきまとわせていたようだが、春宮の思いが変わって、あなたはばつが悪そうだね」と言った。

b 匂宮は大夫の君に「春宮からは、少しもお暇をいただけにいいよだね。以前はいつもおそばにつきまとわせることはなかったようだが、春宮の思いが変わって、春宮も人が悪いようだね」と言った。

c 匂宮は大夫の君に「春宮からは、少しもお暇をいただけにやだね。以前もいつもおそばにつきまとわけていたようだが、今も時間を割かれて、あなたはばつが悪そうだね」と言った。

d 匂宮は大夫の君に「春宮からは、少しもお暇をいただけにやだね。以前もいつもおそばにつきまとわけていたようだが、今も時間を割かれて、春宮も人が悪いようだね」と言った。

e 匂宮は大夫の君に「春宮からは、少しはお暇をいただけるようだね。以前はいつもおそばにつきまとわけていたようだが、春宮の思いが変わって、春宮も人が悪いようだね」と言った。

問4 大夫の君と匂宮は春宮やその妻大君のことについてどのように語ったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 大夫の君が「春宮が私のことをおそばにおいておられたのはつらいことでした。あなたさまのそばでしたら別でございましたが」と言ったところ、匂宮は「大君は、私のことを人柄がよくないと遠ざけていたのだね。無理もないことだ。そうはいつでもねたましいものだ」と語った。

b 大夫の君が「春宮があなたさまを絶えず見張るようになさっていたのは不都合なことでした。あなたさまに限って見張るようなくらいこともないのですが」と言ったところ、匂宮は「大君は、私のことを人柄がよくないと遠ざけていたのだね。無理もないことだ。しかし私はおもしろくないな」と語った。

c 大夫の君が「春宮があなたさまを絶えず見張るようになさっていたのはつらいことでした。あなたさまに限って見張るようなくらいこともないのですが」と言ったところ、匂宮は「大君は、私のことをまだ一人前の男でもないとお見限りだったのだね。無理もないことだ。そうはいつでもねたましいものだ」と語った。

d 大夫の君が「春宮が私のことをおそばにおいておられたのはつらいことでした。あなたさまのそばでしたら別でございましたが」と言ったところ、匂宮は「大君は、私のことをまだ一人前の男でもないとお見限りだったのだね。無理もないことだ。しかし私はおもしろくないな」と語った。

e 大夫の君が「春宮が私のことをおそばにおいておられたのは不都合なことでした。あなたさまのそばでしたら別でございましたが」と言ったところ、匂宮は「大君は、私のことをまだ取るに足りない男だとお見限りだったのだね。無理もないことだ。そうはいつでもねたましいものだ」と語った。



問5 大納言が大夫の君に託した花を大夫の君から受け取った匂宮はどのような感じだったか。最も適切なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 匂宮は「これが恨み言を言ったあとのご返事だったらくやしかなかったらうに」と言って、花を御覧になって、「園に咲き匂う紅梅は色がよいために人に取られて結局香りが白い梅に劣ってしまうとかいうようだが、まったく見事にふたつとも咲いたものだよ」としきりにほめたたえていらっしやうた。
- b 匂宮は「これが恨み言を言ったあとのご返事だったらくやしかなかったらうに」と言って、花を御覧になって、「園に咲き匂う紅梅は色がよいだけに香りは白い梅に劣っているというようだが、恐れ多くも大納言邸では紅梅も白梅もふたつそろって咲いたのだからな」としきりに取り入ろうとしていらっしやうた。
- c 匂宮は「これが恨み言を言ったあとのご返事だったらくやしかなかったらうに」と言って、花を御覧になって、「園に咲き匂う紅梅は色がよいだけに香りは白い梅に劣っているというようだが、まったく見事に色も香りもとりそろえて咲いたものだよ」としきりにほめたたえていらっしやうた。
- d 匂宮は「恨めしいことを言ってしまったあとのご返事だったのでくやしよ」と言って、花を御覧になって、「園に咲き匂う紅梅は色がよいだけに香りは白い梅に劣っているというようだが、まったく見事に色も香りもとりそろえて咲いたものだよ」としきりにほめたたえていらっしやうた。
- e 匂宮は「恨めしいことを言ってしまったあとのご返事だったのでくやしよ」と言って、花を御覧になって、「園に咲き匂う紅梅は色がよいために人に取られて結局香りが白い梅に劣ってしまうとかいうようだが、恐れ多くも大納言邸では紅梅も白梅もふたつそろって咲いたのだからな」としきりに取り入ろうとしていらっしやうた。

問6 大納言の心中を「慮おもんばか」った匂宮はどのように考えたか。最も適切なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 大納言のご意向としては、匂宮自身の意思を尊重したいと考えているようだが、匂宮自身は大納言が思う方とは別の方に傾いてしまっているので、はっきりとした返事はできないと考えた。
- b 大納言のご意向としては、匂宮自身の意思を尊重したいと考えており、大夫の君は、匂宮が別の人を思っているのを知っているが、匂宮は大納言のご意向

を汲んだ返事をしようと考えた。

c 大納言のご意向としては、ご自分の実子の中の君と結婚させたいと考えており、大夫の君は、匂宮が別の人を思っているのを知っているが、匂宮は大納言のご意向を汲んだ返事をしようと考えた。

d 大納言のご意向としては、ご自分の実子の中の君と結婚させたいと考えているようだが、中の君自身が別の人を思っているのを知っているので、はっきりとした返事ではできないと考えた。

e 大納言のご意向としては、ご自分の実子の中の君と結婚させたいと考えているようだが、匂宮自身は別の方への思いに傾いてしまっているので、はっきりとした返事ではできないと考えた。

問7 匂宮は、大夫の君が退出する時、どのように言ったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 匂宮はいいかげんな様子で、「花の香のお誘いを受けることもない私なので、風の便りを見過ぎすようなどということはありません」と歌を詠み、「やはり、今後は大納言たちによい口出しを取り入ろうと思うので、そなたがこっそりと伝えるように」と繰り返し伝えた。

b 匂宮はまじめな様子で、「花の香のお誘いを受けるに値するような私だったなら、風の便りを見過ぎすようなどがありましようか」と歌を詠み、「やはり、今後は大納言たちによい口出しを取り入ろうと思うので、そなたがこっそりと伝えるように」と繰り返し伝えた。

c 匂宮は気乗りしない様子で、「花の香のお誘いを受けることもない私なので、風の便りを見過ぎすようなどということはありません」と歌を詠み、「やはり、今後は大納言たちによい口出しをさせないで、そなたがこっそりと伝えるように」と繰り返し伝えた。

d 匂宮はまじめな様子で、「花の香のお誘いを受けるに値するような私だったなら、風の便りを見過ぎすようなどがありましようか」と歌を詠み、「やはり、今後は大納言たちによい口出しをさせないで、そなたがこっそりと伝えるように」と繰り返し伝えた。

e 匂宮は気乗りしない様子で、「花の香のお誘いを受けるに値するような私だったなら、風の便りを見過ぎすようなどがありましようか」と歌を詠み、「やはり、今後は大納言たちによい口出しをさせないで、そなたがこっそりと伝えるように」と繰り返し伝えた。

問8 大夫の君は宮の御方について、どのようなことを思っているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 宮の御方とは腹違いの姉弟だが、同腹の姫君よりもむしろよく会っていて普通の姉弟のようでもある。しかし、宮の御方が実に重々しく申し分のないご気性でいらっしゃるので、なんとかしてそれにふさわしい身の上にしてさしあげたいものだと思うのだが、大君がはなやかにもてはやされているのに比べ、宮の御方の状況を物足りなく残念に思っている。

b 宮の御方とは同腹の姉弟だが、腹違いの姫君の方がよく会っていて普通の姉弟のようでもある。しかし、宮の御方が実に重々しく申し分のないご気性でいらっしゃるので、なんとかしてそれにふさわしい身の上にしてさしあげたいものだと思うのだが、大君がはなやかにふるまっていられっしゃるのに比べ、宮の御方の状況を物足りなく残念に思っている。

c 宮の御方とは腹違いの姉弟だが、同腹の姫君よりもむしろよく会っていて普通の姉弟のようでもある。しかし、宮の御方が実に慎重な様子で理想的な気立てでいらっしゃるので、なんとかしてそれにふさわしい身の上にしてさしあげたいものだと思うのだが、大君がはなやかにもてはやされているのに比べ、宮の御方の状況に強い不満を抱いている。

d 宮の御方とは同腹の姉弟だが、腹違いの姫君の方がよく会っていて普通の姉弟のようでもある。しかし、宮の御方が実に慎重な様子で理想的な気立てでいらっしゃるので、なんとかしてそれにふさわしい身の上にしてさしあげたいものだと思うのだが、大君がはなやかにふるまっていられっしゃるのに比べ、宮の御方の状況に強い不満を抱いている。

e 宮の御方とは同腹の姉弟だが、腹違いの姫君の方がよく会っていて普通の姉弟のようでもある。しかし、宮の御方が実に重々しく申し分のないご気性でいらっしゃるので、なんとかしてそれにふさわしい身の上にしてさしあげたいものだと思うのだが、大君がはなやかにもてはやされているのに比べ、宮の御方の状況を物足りなく残念に思っている。

問9 傍線部④を現代語訳せよ。



かつて光源氏(問題文中では「殿」)の求愛を拒否した空蝉(問題文中では「帚木」「女」)は、その後常陸の介の妻となって夫の任地へ下るが、任期を終えて上京することになった。次の文章は逢坂(おうさか)の関で偶然源氏と再会することになった場面である。これを読んで、後の問いに答えよ。

伊予の介といひしは、\*<sub>1</sub>故院隠れさせたまひて又の年、常陸になりて下りしかば、かの帚木もいざなはれにけり。\*<sub>2</sub>須磨の御旅居もはるかに聞きて、人知れず思ひやりきこえぬにしもあらざりしかど、伝へきこゆべきよすがだになくて、\*<sub>3</sub>筑波嶺の山を吹き越す風も浮きたる心地して、いささかの伝へだになくて年月重なりにけり。限れることもなかりし御旅居なれど、京に帰り住みたまひて又の年の秋ぞ、常陸は上りける。

関入る日しも、この殿、\*<sub>4</sub>石山に御願はたしに詣でたまひけり。京よりかの\*<sub>5</sub>紀伊の守などいひし子ども、迎へに来たる人々、この殿かく詣でたまふべしと告げれば、道のほどさわがしかりなむものぞとて、まだ暁より急ぎけるを、女車多く、ところせうゆるぎ来るに、日たけぬ。\*<sub>6</sub>打出の浜来るほどに、「殿は\*<sub>7</sub>粟田山越えたまひぬ」とて、御前の人々、道も避りあへず来こみぬれば、関山にみな下りあて、ここかしこの杉の下に車どもかき下ろし、木隠れにあかしこまりて過ぐしたてまつる。車などかたへはおくらかし、さきに立てなどしたれど、なほ類ひろく見ゆ。車十ばかりぞ、袖口、ものの色あひなども漏り出でて見えたる、田舎びずよしありて、\*<sub>8</sub>斎宮の御下りなにぞやうのをりの物見車おぼし出でらる。殿もかく世に栄え出でたまふめづらしさに数もなき御前ども、みな目とどめたり。

九月つこもりなれば、紅葉の色々こきませ、霜枯れの草むらむらをかしよう見えわたるに、関屋よりさとくづれ出でたる旅姿どもの、色々の\*<sub>9</sub>襖のつきぎきき縫ひもの、括り染めのさまもさる方にかしよう見ゆ。御車は簾(すだれ)下ろしたまひて、かの昔の\*<sub>10</sub>小君、いま\*<sub>11</sub>右衛門佐なるを召し寄せて、「今日の御関迎へは、え思ひ捨てたまはじ」などのたまふ。御心の内いとははれにおぼし出づること多かれど、おほぞうにてかひなし。女も、人知れず昔のこと忘れねば、取り返してもあはれなり。

行くと来とせきとめがたき涙をや絶えぬ清水と人は見るらむ

え知りたまはじかしと思ふに、いとかひなし。

石山より出でたまふ御迎へに右衛門佐まゐりてぞ、まかり過ぎしかしこまりなど申す。むかし童(わらわ)にていとむつまじうらうたきものにしたまひしかば、\*<sub>12</sub>かうぶり

など得しまで、この御徳に隠れたりしを、おぼえぬ世のさわぎありしころ、ものの聞こえにはばかりて常陸に下りしをぞ、すこし心おきて年頃はおぼしけれど、色にも出だしたまはず、むかしのやうにこそあらねど、なほ親しき家人の内にはかぞへたまひけり。紀伊の守といひしも、今は河内の守にぞなりにける、その弟の\*13右近将監解けて御供に下りしをぞとりわきてなし出でたまひければ、それにぞたれも思ひ知りて、などて少しも世にしたがふ心を使ひけん、など思ひ出でける。佐召し寄せて御消息あり。今はおぼし忘れぬべきことを、心長くもおはするかな、と思ひあたり。

① 一日は契り知られしを、さはおぼし知りけむや。

わくらばに行きあふ道を頼みしもなほかひなしや塩ならぬ海

関守のさもうらやましくめざましかりしかな。

とあり。

#### 注

- \* 1 故院きりほいん 桐壺院。
- \* 2 須磨の御旅居 光源氏が須磨に退居したことを指す。
- \* 3 筑波嶺つくばね 筑波山のこと。常陸国(今の茨城県)の歌枕。
- \* 4 石山 石山寺のこと。観音信仰の霊場として知られた。
- \* 5 紀伊の守かみ 常陸の介の先妻の子。
- \* 6 打出うちいでの浜 滋賀県大津市の琵琶湖岸にある浜。
- \* 7 栗田山あはたやま 京と山科との間の山。
- \* 8 齋宮 伊勢神宮にお仕えする皇族の女性。
- \* 9 襖あを 武官の着用する表着。
- \* 10 小君 空蟬の弟。
- \* 11 右衛門佐ゑもんすけ 宮門を守衛する役職の次官。
- \* 12 かうぶりかうぶり など得し 五位になること。
- \* 13 右近将監うこんのぞう 宮中警護にあたる役職の第三等官。

(『源氏物語』関屋による)

問1 光源氏の須磨退去を常陸国で知った空蝉はどうしたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 心の内では、光源氏に思いをはせないわけではなかったが、それを伝える手段もなく、なにしろ遠方のことゆえ、ちよつとしたうわささえ聞くこともなく年月が過ぎてしまった。

b 心の内では、光源氏に手紙を出したいと思っていたが、そのつてもなく、なにしろ遠方のことゆえ、ちよつとした手紙さえ出すこともできずに年月が過ぎてしまった。

c 心の内では、光源氏に思いをはせないわけではなかったが、それを伝える手段もなく、なにしろ季節を問わず強風が吹きすさぶところでもあり、ちよつとした手紙さえ出すこともできずに年月が過ぎてしまった。

d 心の内では、光源氏に手紙を出したいと思っていたが、それを書く紙と筆がなく、なにしろ田舎住まいゆえ、ちよつとした連絡にも不便な思いをして年月が過ぎてしまった。

e 心の内では、光源氏に思いをはせないわけではなかったが、それを伝える手段もなく、なにしろ季節を問わず強風が吹きすさぶところでもあり、ちよつとしたうわささえ聞くこともなく年月が過ぎてしまった。

問2 常陸の介一行が逢坂の関を通る日の様子は、どのようであったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 光源氏が石山詣でにやってきたことを知り、途中で混雑するだろうと、まだ暗い内から急いだのだが、女性の乗る車が多く、ゆっくりとやってくるので、日も暮れてしまった。

b 伊予の介が石山詣でにやってきたことを知り、途中で混雑するだろうと、まだ暗い内から急いだのだが、女性の乗る車が多く、ゆっくりとやってくるので、日も高くなつてしまった。

c 光源氏が石山詣でにやってきたことを知り、途中で混雑するだろうと、まだ暗い内から急いだのだが、女性の乗る車が多く、道いっぱい練ってくるの

で、日も高くなってしまった。

d 光源氏が石山詣でにやってきたことを知り、途中で騒がしくなるだろうと、まだ暗い内から急いだのだが、女性の乗る車が多く、道いっぱい練つてくるので、日も暮れてしまった。

e 伊子の介が石山詣でにやってきたことを知り、途中で騒がしくなるだろうと、まだ暗い内から急いだのだが、女性の乗る車が多く、道いっぱい練つてくるので、日も高くなってしまった。

問3 常陸の介一行の車の様子はどのようなものであったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 十台ほどの車から、女房たちの袖口や衣の色などがこぼれ出て見えている、その様子は田舎くさくなく派手であって、齋宮の伊勢下向などの折の物見車を、紀伊の守は思い出すのであった。

b 十台ほどの車から、女房たちの袖口や衣の色などがこぼれ出て見えている、その様子は田舎くさくなく趣があつて、齋宮の伊勢下向などの折の物見車を、光源氏は思い出すのであった。

c 十台ほどの車から、女房たちの袖口や衣の色などがこぼれ出て見えている、その様子は田舎くさくなく質素であつて、齋宮の伊勢下向などの折の物見車を、光源氏は思い出すのであった。

d 十台ほどの車から、女房たちの袖口や衣の色などがこぼれ出て見えている、その様子は田舎くさくなく上品であつて、齋宮の伊勢下向などの折の物見車を、紀伊の守は思い出すのであった。

e 十台ほどの車から、女房たちの袖口や衣の色などがこぼれ出て見えている、その様子は田舎くさくなくきどつていて、齋宮の伊勢下向などの折の物見車を、光源氏は思い出すのであった。

問4 光源氏が右衛門佐を仲介にして空蟬に伝言をした折の、光源氏と空蟬の心境はそれぞれどのようなものであったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その



記号をマークせよ。

- a 光源氏は自身の心の内ではたいそうしみじみと思い出すことが多いけれど、通り一遍の伝言ではかいたくないことであると思う。一方、空蟬も心中ひそかに昔のことを忘れないので、思い起こしてしみじみとした気分になってくる。
- b 光源氏は空蟬の心の内を考えると、たいそうしみじみと思い出すことが多いけれど、冗談混じりの伝言ではかいたくないことであると思う。一方、空蟬も心中ひそかに昔のことを忘れないので、思い起こしてしみじみとした気分になってくる。
- c 光源氏は自身の心の内ではたいそうしみじみと思い出すことが多いけれど、口先だけの伝言ではかいたくないことであると思う。一方、空蟬も心中ひそかに幼少期のことを忘れないので、思い起こしてしみじみとした気分になってくる。
- d 光源氏は空蟬の心の内を考えると、たいそう悲しい気分になってくることが多いけれど、調子ばかりいい伝言ではかいたくないことであると思う。一方、空蟬も心中ひそかに昔のことを忘れないので、思い起こして悲しい気分になってくる。
- e 光源氏は自身の心の内ではたいそうしみじみと思い出すことが多いけれど、誠意のない伝言ではかいたくないことであると思う。一方、空蟬も心中ひそかに幼少期のことを忘れないので、思い起こしてしみじみとした気分になってくる。

問5 「行く」と来と……」の和歌の説明として、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 和歌は空蟬の作で、「行く」と来と」とは、光源氏の退居の地である須磨へ行く時も須磨から帰る時の意で、歌中の「人」とは世間の人を指す。
- b 和歌は空蟬の作で、「行く」と来と」とは、光源氏の住んでいる京へ行く時も京から帰る時の意で、歌中の「人」とは夫である常陸の介を指す。
- c 和歌は空蟬の作で、「行く」と来と」とは、夫の任地である常陸へ行く時も常陸から帰る時の意で、歌中の「人」とは世間の人を指す。
- d 和歌は空蟬の作で、「行く」と来と」とは、光源氏の住んでいる京へ行く時も京から帰る時の意で、歌中の「人」とは光源氏を指す。
- e 和歌は空蟬の作で、「行く」と来と」とは、夫の任地である常陸へ行く時も常陸から帰る時の意で、歌中の「人」とは光源氏を指す。

問6 右衛門佐に対する光源氏の接し方はどのようなものであったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 右衛門佐が幼い頃、光源氏がかわいがっていたので、五位の身分になるまで、光源氏の御恩に浴していたが、光源氏が失脚した頃、世間の非難をもとめず、常陸へ下ったので、それからは少し心を隔てていたが、そのことを光源氏は顔色にも出したりはしなかった。

b 右衛門佐が幼い頃、光源氏がかわいがっていたので、五位の身分になるまで、光源氏の御恩に浴していたが、時の帝が亡くなるということがあり、世の中に絶望し常陸へ下ったので、それから少し疎遠になったが、そのことを光源氏は顔色にも出したりはしなかった。

c 右衛門佐が幼い頃、光源氏がかわいがっていたので、後見役になってもらうなど、光源氏の御恩に浴していたが、時の帝が亡くなるということがあり、世間の目をはばかりて常陸へ下ったので、それから少し疎遠になったが、そのことを光源氏は顔色にも出したりはしなかった。

d 右衛門佐が幼い頃、光源氏がかわいがっていたので、五位の身分になるまで、光源氏の御恩に浴していたが、光源氏が失脚した頃、世間の目をはばかりて常陸へ下ったので、それからは少し心を隔てていたが、そのことを光源氏は顔色にも出したりはしなかった。

e 右衛門佐が幼い頃、光源氏がかわいがっていたので、後見役になってもらうなど、光源氏の御恩に浴していたが、光源氏が失脚した頃、世間の非難をもとめず、常陸へ下ったので、それからは少し心を隔てていたが、そのことを光源氏は非難がましいことを口に出したりはしなかった。

問7 光源氏の右近将監への遇し方を知った人々はどのように思ったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 河内の守の弟で右近将監を解かれ、光源氏のお供をして須磨に下った者を、格別に引き立てたので、だれもがその経緯を理解して、どうして時勢におもねるような態度をとったのだろう、と思った。

b 河内の守の弟で右近将監を解かれ、光源氏のお供をして須磨に下った者を、格別に引き立てたので、だれもがその経緯を理解して、どうして光源氏に取り入っておかなかったのだろう、と思った。

c 河内の守の弟に右近将監を解かれ、光源氏のお供をして須磨に下った者を、格別に引き立てたので、だれもがその経緯を理解して、どうして光源氏に取り入っておかなかったのだろう、と思った。

- d 河内の守の弟で右近将監を解かれ、光源氏のお供をして須磨に下った者を、格別に引き立てたので、だれもがその経緯を理解して、どうして右近将監と親しくしておかなかったのだろう、と思った。
- e 河内の守の弟に右近将監を解かれ、光源氏のお供をして須磨に下った者を、格別に引き立てたので、だれもがその経緯を理解して、どうして時勢におもねるような態度をとったのだろう、と思った。

問8 「わくらばに……」の和歌の説明として、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 和歌は空蟬の作で、「わくらばに」とは、「たまたま」の意。また「塩ならぬ海」とは「淡水の海」のことで、ここでは琵琶湖を指す。
- b 和歌は空蟬の作で、「わくらばに」とは、「たまたま」の意。また「頼みしも」とは、光源氏が私(空蟬)を「あてにさせておいて」の意である。
- c 和歌は光源氏の作で、「わくらばに」とは、「たまたま」の意。また「かひなしや」の「かひ」には、「甲斐なし」の「甲斐」と「貝」とが掛けられている。
- d 和歌は光源氏の作で、「わくらばに」とは、「以前から」の意。また「あふ道」には光源氏と空蟬が再会した縁で「近江路」が掛けられている。
- e 和歌は光源氏の作で、「わくらばに」とは、「以前から」の意。また「塩ならぬ海」とは、「遠浅の海」のことで、ここでは須磨の海を指す。

問9 傍線部(A)を現代語訳しなさい。

次の文章は、『大鏡』の藤原伊尹これまき伝の一節で、一条摂政と呼ばれた伊尹の孫にあたる行成が、殿上人になっていないにもかかわらず蔵人の頭に任命される場面から始まる。これを読んで、後の問いに答えよ。

おほかた昔は、前の頭さきの奉によりて、のちの頭はなることにはべりしなり。されば、殿上に、我なるべしなど思ひたまへりける人は、今宵こよひと聞きて、まゐりたまへるに、\*1いづこもとかにさしあひたまへりけるを、「たれぞ」と問ひたまひければ、御名のりしたまひて、「頭になしたびたれば、まゐりてはべるなり」とあるに、あさましとあきれてこそ、動きもせで立ちたまひたりけれ。げに思ひかけぬことなれば、道理なりや。

おほかた、この御族ぞうの頭あらそひにかたきをつきたまへば、\*2これもいかがおはすべからむ。みな人しろしめしたることなれど、\*3朝成の中納言と一条摂政とおなじりの殿上人にて、品のほどこそ一条殿にひとしからねど、身のざえ、人おぼえやむことなき人なりければ、頭になるべき次第いたりたるに、又この一条殿、さらなり、道理の人にておはしけるを、この朝成の君申したまひけるやう、「殿はならせたまはずとも、人わろく思ひ申すべきにあらず。のちのちにも御心にまかせさせたまへり。おのれは、このたびまかりはづれなば、いみじう辛かるべきことにてなむはべるべきを、このたび、申させたまはではべりなむや」と申したまひければ、「ここにも、さ思ふことなり。さらば申さじ」とのたまふを、いとうれしと思はれけるに、いかにおぼしなりにけることにか、やがて問ひごともなく、なりたまひにければ、「かくはかりたまふべしやは」と、いみじう心やましと思ひ申されけるに、御仲よからぬやうにて過ぎたまふほどに、この一条殿のつかまつり人とかやのために、なめきことしたうびたりけるを、(伊尹)「本意ほんいなしなどはかりは思ふとも、いかに、ことにふれて、われなどをば、かくなめげにもてなすぞ」と、むつかりたまふと聞きて、「あやまたぬよしも申さむ」とて、まゐられたりけるに、はやうの人は、われより高き所にまうでては、「こなたへ」となきかぎりは、うへにものぼらで、しもに立てることになむありけるを、これは六七月のいとあつたへがたきころ、かくと申させて、今や今やと、中門に立ちて待つほどに、西日もさしかかりて、あつたへがたしとはおろかなり。心地もそこなはれぬべきに、「はやう、この殿は、われをあぶりころさむとおぼすにこそありけれ。益なくもまゐりにけるかな」と思ふに、すべて悪心おこるとは、おろかなり。夜になるほどに、さてあるべきならねば、しやく笏をおさへて立ちければ、はたらと折れけるは、いかばかりの心をおこされにけるにか。さ

て家に帰って、「この族、ながく絶たむ。もし男子も女子もありとも、はかばかしくてはあらせじ。あはれといふ人もあらば、それをも恨みむ」などちかひてうせたまひにければ、代々の御悪霊とこそはなりたまひたれ。

されば、まして\*4この殿近くおはしませば、いとおそろし。\*5殿の御夢に、\*6南殿の御うしろ、かならず人のまゐるに通る所よな、そこに人の立ちたるを、たれぞとみれど、顔は戸のかみにかくれたれば、よくもみえず。あやしくて、「たそたそ」と、あまたび問はれて、「朝成にはべり」といらふるに、夢のうちにもいとおそろしけれど、念じて、「なかかくては立ちたまひたるぞ」と問ひたまひければ、「\*7頭の弁のまゐらるるを待ちはべるなり」といふとみたまひて、おどろきて、「今日は公事ある日なれば、とくまゐらるらむ。不便なるわざかな」とて、「夢にみえたまへることあり。けふは、御やまひ申しなどもして、ものいみかたくして、なにかまゐりたまふ。こまかにはみづから」とかきて、いそぎたてまつりたまへど、ちがひて、いととくまゐりたまひにけり。まもりのこはくやおはしけむ、れいのやうにはあらで、\*8北の陣より藤壺・後涼殿のはさまより通りて、殿上にまゐりたまへるに、(道長)「こはいかに。御消息たてまつりつるは、御覽せざりつるか。かかる夢をなむみはべりつるは」。手をはたとうちて、いかにぞとこまかにも問ひ申させたまはず、又ふたつものたまはで、いでたまひにけり。さて御いのりなどして、しばしはうちへもまゐりたまはざりけり。このもののけの家は、三条よりは北、西洞院よりは西なり。いまに一条殿の御族あからさまにもいらぬところなり。

注

(『大鏡』による)

- \* 1 いづこもととかにさしあひたまへりけるを<sup>||</sup>どこらあたりかではったりであわれて。
- \* 2 これ<sup>||</sup>藤原行成。
- \* 3 朝成の中納言<sup>||</sup>藤原朝成。伊尹の一族が摂関家の中で力を持っていたのに対し、朝成は伊尹に比べると傍流の家柄であった。
- \* 4 この殿<sup>||</sup>藤原行成。
- \* 5 殿<sup>||</sup>藤原道長。行成は道長政権を支えていた。
- \* 6 南殿<sup>||</sup>の御うしろ<sup>||</sup>「南殿」は紫宸殿、内裏の正殿。「御うしろ」は正殿の北廂。
- \* 7 頭の弁<sup>||</sup>藤原行成。
- \* 8 北の陣<sup>||</sup>内裏の門の一つ。朔平門。

問1 行成が蔵人の頭になったときの様子について述べたものとして、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 昔は蔵人の頭の前任者が、次の頭を推挙することになっていたのですが、行成は次は自分だと聞いていたのだが、今夜除目じょくがあると聞いて宮中にいらっしやってみると、そこにはどこかで見えた人がいた。その人が行成に名乗って「あなたを頭に推挙しておきました」とおっしゃったので、趣深く感じられて、ただ立ちつくすだけだった。それほど、行成の任用は筋の通ったものだった。

b 昔は蔵人の頭の前任者が、次の頭を推挙することになっていたのですが、次は自分だと思っていた人が、今夜除目があると聞いて宮中にいらっしやってみると、そこにはどこかで見えた人がいた。行成が名乗って「頭に選任されたので参内いたしました」と申しあげると、その人はあきれて身動きもできずたずむばかりだった。それほど、行成の任用は意外な人事だった。

c 昔は蔵人の頭の前任者が、次の頭を推挙することになっていたのですが、次は自分だと思っていた人が、今夜除目があると聞いて蔵人の頭の殿へ出かけてみると、そこにはどこかで見えた人がいた。行成が名乗ると、その人は「今度、わたしが頭に選任されるというのでやってきました」とこともなくいったので、行成はあきれて身動きもできずたずむばかりだった。それほど、行成の任用は誰にも知らされていないものだった。

d 昔は蔵人の頭の前任者が、次の頭を推挙することになっていたのですが、行成は次は自分だと聞いていたのだが、今夜除目があると聞いて蔵人の頭の殿へ出かけてみると、そこにはどこかで見えた人がいた。行成が名乗って「頭に選任されるというのかがいきました」というと、次は自分だと思っていたその人は、あきれて身動きもできずたずむばかりだった。それほど、行成の任用は道理に合わない人事だった。

e 昔は蔵人の頭の前任者が、次の頭を推挙することになっていたのですが、次は自分だと思っていた人が、今夜除目があると聞いて宮中にいらっしやってみると、そこにはどこかで見えた人がいた。行成が名乗って「どうかわたしを頭に推挙してください」と申し上げたところ、その人は行成のずうずうしさにあきれただけだった。それほど、行成の任用は不可解なものであった。

問2 伊尹と朝成とはどのような間柄であったか。また、朝成はどのような人物として描かれているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

問3 朝成は伊尹にどのように申し入れ、伊尹はどう答えたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 二人は同じ年に生まれたという間柄で、生まれた血筋こそ伊尹にかなわないものの、朝成は才能や世間の人望もともに伊尹よりも優れた人物であった。
  - b 二人は同じ時期に殿上人であった間柄で、官職こそ伊尹にかなわないものの、朝成は才能や世間の人望もともに優れた人物であった。
  - c 二人は同じ時期に殿上人であった間柄で、官職こそ伊尹にかなわないものの、朝成は身長も高くだれが見ても素晴らしい容貌の人物であった。
  - d 二人は同じ年に生まれたという間柄で、生まれた血筋こそ伊尹にかなわないものの、朝成は身長も高くだれが見ても素晴らしい容貌の人物であった。
  - e 二人は同じ時期に殿上人であった間柄で、生まれた血筋こそ伊尹にかなわないものの、朝成は才能や世間の人望もともに優れた人物であった。
- a 朝成は伊尹に「あなたは、今、蔵人の頭におなりにならなくても、だれもあなたの人物が悪いからだとはいわないでしょう。のちのちにはつきりすることです。わたしは今回を逃すと、何をいわれるかわかりません。今回は名乗りをあげないわけにはいかないのです」といったのに対して、伊尹は「わたしもそう思うので、あなたが名乗り出てください」と答えた。
- b 朝成は伊尹に「あなたがわたしを推挙してくれたところで、だれもあなたのことをとかくはいわないでしょう。のちのちには心のままにおなりになる身分の方です。わたしは今回推挙されないと、とてもつらいことになります。どうか推挙していただけませんか」といったのに対して、伊尹は「わたしもそう思います。ではわたしがあなたを推挙しましょう」と答えた。
- c 朝成は伊尹に「あなたは、今、蔵人の頭におなりにならなくても、だれもとやかくはいわないでしょう。のちのちには心のままにおなりになる身分の方です。わたしは今回を逃すと、とてもつらいことになってしまいます。どうか今回は名乗りをあげないでいただけませんか」といったのに対して、伊尹は「わたしもそう思うので、今回は名乗りをあげないでおきましょう」と答えた。
- d 朝成は伊尹に「あなたは、今、蔵人の頭におなりにならなくても、だれもあなたの人物が悪いからだとはいわないでしょう。のちのちには心のままにおなりになる身分の方です。わたしは今回を逃すと、とてもつらいことになってしまいます。どうかこの度は、わたしに名乗り出させてください」といったのに対して、伊尹は「わたしもそう思うので、あなたが名乗り出てください」と答えた。

e 朝成は伊尹に「あなたがわたしを推挙してくれたところで、だれもあなたのことをとやかくはいわないでしょう。のちのちには心のままにおなりになる身の方です。わたしは今回を逃すと、とてもつらいことになってしまいました。どうか今回はわたしを推挙していただけませんか」といったのに対して、伊尹は「わたしもそう思うので、今回は名乗りをあげないでおきましょう」と答えた。

問4 朝成と伊尹との会話の後、事態はどう展開したか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 朝成は伊尹のことばをうれしく思っていたが、その後、何か事情があったのか、伊尹が蔵人の頭てんまに推挙されてしまわれたので、伊尹は「これではだまされたことになる」と、たいそう心やましく思われ、二人の仲はそのまま疎遠になってしまい時間が過ぎていった。
- b 伊尹は朝成の申し出をうれしく思っていたが、その後、やむを得ない事情で、伊尹が蔵人の頭てんまにおなりになったので、朝成は「これは何かの計画にちがいない」と、たいそう残念に思われ、二人は何事もなかったかのようにふるまいながら時間が過ぎていった。
- c 朝成は伊尹のことばをうれしく思っていたが、その後、何の連絡もないまま、伊尹が、そのまま蔵人の頭てんまにおなりになったので、朝成は「こんなだまし方があるものか」と、たいそういまいまく思われ、二人の仲は悪くなったまま時間が過ぎていった。
- d 伊尹は朝成の申し出をうれしく思っていたが、その後、何の連絡もないまま、伊尹が、そのまま蔵人の頭てんまになってしまわれたので、朝成は「これではだまされたのと同じだ」と、たいそうお怒りになって、伊尹は何の言い訳もできないまま時間が過ぎていった。
- e 朝成は伊尹のことばをうれしく思っていたが、その後、何の連絡もないまま、伊尹が、いつのまにか蔵人の頭てんまにおなりになったので、朝成は「どんな計りごとがあったのか」と、たいそういぶかしく思われ、二人の仲は悪くなったまま時間が過ぎていった。

問5 六七月のころ、朝成が伊尹を訪ねて行ったのはどうしてか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 朝成が、伊尹に仕えている人とかいうものに無礼なことをしたというので、伊尹が「頭てんまになれなかった朝成が、どうしてわれわれに無礼なことをはたらくのだろうか」と疑問に思っておられると聞いて、朝成は、この顛末てんまつを正確に伝えようとして、伊尹の殿を訪ねた。



b 朝成が、伊尹に仕えているとかいう人から無礼なことをはたらかれたところ、伊尹が「頭になれなかった朝成にどうしてわれわれが無礼なことをしなくてはならないのか」と疑問に思っておられると聞いて、朝成は、自分が受けたことを正確に伝えようと、伊尹の殿を訪ねた。

c 朝成が、伊尹に仕えている人とかいうものに無礼なことをしたというので、伊尹が「わたしが頭になったのは、自分の責任ではないのに、われわれがなぜ無礼なことをされなくてはならないのだ」と疑問に思っておられると聞いて、朝成は、伊尹が自ら頭を望んだことは疑いのないことだということを伝えようとして、伊尹の殿を訪ねた。

d 朝成が、伊尹に仕えているとかいう人から無礼なことをはたらかれたところ、伊尹が「頭になれなかったのが残念だからといって、どうしてわれわれにそんな言いがかりをつけるのだ」といって腹を立てていると聞いて、朝成は、自分に過失はなかったことを申し開きしようと、伊尹の殿を訪ねた。

e 朝成が、伊尹に仕えている人とかいうものに無礼なことをしたというので、伊尹が「頭になれなかったのが残念だからといって、どうしてわれわれに無礼なことをはたらくのだ」といって腹を立てていると聞いて、朝成は、自分に過失はなかったことを申し開きしようと、伊尹の殿を訪ねた。

問6 伊尹を訪ねていった朝成には、どのようなことがあったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 朝成は、西日がさす中、暑い思いをして中門の前で長い間待たされたあげく、夜になっても伊尹に会うことができなかったので、そのまま待っているわけにもいかず、笏を握りしめ立ち去ろうとしたところ、どれほどの怒りを覚えることだったのだろうか、笏が折れてしまった。

b 朝成は、西日がさす中、暑い思いをして中門の前で長い間待たされたので、伊尹は自分をあぶり殺そうとしているのかと憎しみを覚えた。夜になっても結局会えず、笏を握りしめ立ち去ろうとしたところ、朝成の心をくみ取ったのか、笏が自然と折れてしまった。

c 朝成は、西日がさす中、暑い思いをして中門の前で長い間待たされたあげく、伊尹にあまり殺されそうになったので、このままだと死んでしまいかねないと、夜になってしかたなく帰ろうとしたところ、どれほどの怒りを覚えられたのか、立ち上がって笏を折ってしまった。

d 朝成は、西日がさす中、暑い思いをして中門の前で長い間待たされたので、伊尹は自分をあぶり殺そうとしているのかと、無益な行動を嘆いた。夜になっても結局会えず、そのまま待っているわけにもいかないので、おろかにも悪い心が働いたのだろうか、わけもわからず持っていた笏を折ってしまった。

e 朝成は、西日がさす中、暑い思いをして中門の前で長い間待たされたあげく、夜になっても伊尹に会うことができなかったので、自分の無分別な行動を嘆いた。そろそろ会えるかと、意を決して笏をたよりに立ち上がろうとしたところ、笏は朝成の重みに耐えかねたのだろうか、急に折れてしまった。

問7 道長の夢にあらわれた朝成はどんな様子で、道長はそれに対してどうしたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 殿上人が必ず通る紫宸殿の北廂に立っていた朝成に対して、その形相がいかに恐ろしかったけれど、道長は、意を決してどうしたのかと尋ねたところ、行成が参内するのを待っているという。道長は目が覚めてすぐに、今日の参内の予定を教えよと行成に手紙を書いた。

b 殿上人が必ず通る紫宸殿の北廂に立っていた人物が朝成だとわかり、その形相はいかに恐ろしかったけれど、道長は意を決してどうしたのかと尋ねたところ、行成が参内するのを待っているという。道長は驚いて、行成を不憫ふびんに思い、今日は参内しないようにと伝えた。

c 殿上人が必ず通る紫宸殿の北廂に立っていた朝成に対して、道長がおそろおそろではあるものの、意を決してどうしたのかと尋ねたところ、行成が参内するのを待っているという。道長は驚いて、朝成を不憫に思い、どうして参内しないのかと行成に手紙を書いた。

d 殿上人が必ず通る紫宸殿の北廂に立っていた人物が朝成だとわかり、その形相はいかに恐ろしかったけれど、道長は意を決してどうしたのかと尋ねたところ、行成が参内するのを待っているという。道長は起きてすぐに、病をおしてでも早く参内するようにと行成に手紙を書いた。

e 殿上人が必ず通る紫宸殿の北廂に立っていた朝成に対して、道長がおそろおそろではあるものの、意を決してどうしたのかと尋ねたところ、行成が参内するのを待っているという。道長は目が覚めてすぐに、今日は参内しないようにと行成に手紙を書いた。

問8 朝成の夢をみた道長が手紙を書いた後、事態はどう展開したか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 行成は手紙を読み間違っ、いつもよりずっと早く参内されたのだが、あまり早いので、門衛はちよつと怒った様子だった。いつもとは異なる経路きじょうで参内し、道長から手紙の真意を聞かされた行成は、悪霊のことに恐れおののいて、ことばを継ぐこともできず、すぐに退出しそのまま折袴きしろうなどをして、しばらくは参内されなかった。

b 行成は手紙と入れ違いに、いつもよりずっと早く屋敷をでたのだが、あまり早いので、門衛はちよつと怒った様子だった。いつもとは異なる経路をとったので悪霊に会うことなく無事に参内できた。道長から夢の話を聞いた行成は、悪霊のことに恐れおののいて、すぐに退出し、その後、祈祷などをして、しばらくは参内されなかった。

c 行成は手紙を読み間違つて、いつもよりずっと早く参内された。神仏のご加護が強かったのか、いつもとは異なる経路をとったので悪霊に会うことなく無事に参内できた。道長から手紙の真意を聞かされた行成は、悪霊のことに恐れおののいて、詳細を聞くこともなく、すぐに退出し、その後、祈祷などをして、しばらくは参内されなかった。

d 行成は手紙と入れ違いに、いつもよりずっと早く屋敷をでたのだが、神仏のご加護が強かったのか、いつもとは異なる経路をとったので悪霊に会うことなく無事に参内できた。道長から夢の話を聞いた行成は、詳細を聞くこともなく、またことばを継ぐこともなく、すぐに家に帰って、そのまま祈祷などをして、しばらくは参内されなかった。

e 行成は手紙と入れ違いに、いつもとは異なる経路で参内された。門衛はちよつと怒った様子だった。顔見知りの門衛とは違っていたからである。道長から夢の話を聞いた行成は、詳細を聞くこともなく、またことばを継ぐこともなく、すぐに家に帰って、そのまま祈祷などをして、しばらくは参内されなかった。

問9 傍線部(A)を現代語訳せよ。

光源氏が失脚し須磨に退去している間、光源氏の援助が途絶えてしまった末摘花(問題文中では「常陸の宮の君」)の生活は困窮を極めた。次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

\*<sub>1</sub> 藻塩たれつつわびたまひしころほひ、都にもさまさまにおぼし嘆く人多かりしを、さてもわが御身のよりどころあるは、一方の思ひこそ苦しげなりしか、\*<sub>2</sub> 二条の上などものどやかにて、旅の御住みかをもおぼつかならず聞こえ通ひたまひつつ、位を去りたまへる飯の御よそひをも、竹のこのよのうき節を、時々につけてあつかひきこえたまふに慰めたまひけむ、なかなかその数と人にも知られず、立ち別れたまひしほどの御ありさまをも、よそのことに思ひやりたまふ人々の、下の心くだきたまふたぐひ多かり。

常陸の宮の君は、父親王の亡<sup>う</sup>せたまひにしなごりに、また思ひあつかふ人もなき御身にていみじう心ぼそげなりしを、思ひかけぬ御ことの出<sup>い</sup>できて、とぶらひきこえたまふこと絶えざりしを、いかめしき御いきほひにこそ、ことにもあらずはかなきほどの御なさけばかりとおぼしたりしかど、待ち受けたまふ袂<sup>たもと</sup>のせばきに、\*<sub>3</sub> 大空の星の光をたらひの水に映したる心地して過ぐしたまひしほどに、かかる世のさわぎ出でて、なべての世うくおぼし乱れし紛れに、わざと深からぬ方の心ざしはうち忘れたるやうにて、遠くおはしましし後、ふりはへてもえ尋ねきこえたまはず。そのなごりにしばしは泣く泣くも過ぐしたまひしを、年月ふるままに、あはれにさびしき御ありさまなり。

古き女ばらなどは、「いでや、いとくちをしき御宿世<sup>すくせ</sup>なりけり。おぼえず神仏のあらはれたまへらむやうなりし御心ばへに、かかるよすがも人は出でおはするものなりけり、とありがたう見たてまつりしを、大方の世のことといひながら、また頼む方なき御ありさまこそかなしけれ」とつぶやき嘆く。さる方<sup>かた</sup>にありつきたりしあなたの年ごろは、いふかひなきさびしさに目なれて過ぐしたまふを、なかなかすこし世づきてならひにける年月に、いと耐へがたく思ひ嘆くべし。すこしもさてありぬべき人々は、おのづからまゐりつきてありしを、みな次々にしたがりて行き散りぬ。女ばらの命たへぬもありて、月日にしたがひては、上下人数少なくなりゆく。

もとより荒れたりし宮の内、いとど狐<sup>きつね</sup>の住みかになりて、うとましようけどほき木立に、ふくろふの声を朝夕に耳ならしつ、<sup>④</sup>人げにこそさやうのものもせかれて

影隠しけれ、木霊などけしからぬものども、所得て、やうやう形をあらはし、ものわびしきことのみ数知らぬに、まれまれ残りてさぶらふ人は、「なほいとわりなし。この受領すりやうどものおもしろき家づくり好むが、この宮の木立を心につけて、「放ちたまはせてむや」と、ほとりにつきて案内し申さずるを、さやうにせさせたまひて、いとかうものおそろしからぬ御住まひに、おぼし移るはなむ。立ちとまりさぶらふ人も、いと耐へがたし」など聞こゆれど、「あないみじや。人の聞き思はむこともあり。生ける世に、しかなごりなきわざいかげせむ。かくおそろしげに荒れはてぬれど、親の御影とまりたる心地する古き住みかと思ふに慰みてこそあれ」とうち泣きつおぼしもかけず。

御調度どもを、いと古代なに馴れたるが昔やうにてうるはしきを、なまものゆゑ知らむと思へる人、さるもの要じて、わざとその人かの人にせさせたまへると尋ね聞きて案内するも、おのづからかかる貧しきあたりと思ひあなづりていひくるを、例の女ばら、「いかがはせん。そこそは世の常のこと」とて、とりまぎらはしつ、目に近き今日明日の見苦しさをつくろはんとするときもあるを、いみじう諫めたまひて、「見よと思ひたまひてこそしおかせたまひけめ。などてかかるがろしき人の家の飾りとはなさむ。なき人の御本意がはむがあらはれること」とのたまひて、さるわざはせさせたまはず。

(『源氏物語』蓬生による)

注

\* 1 藻塩たれつつわびたまひし||「わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻塩たれつつわぶと答へよ」という古歌による表現。

\* 2 一条の上||紫上のこと。

\* 3 大空の星の光をたらひの水に映したる心地||遠く手の届かないものを身近に感じる喩え。

問1 光源氏が須磨に退去した後の紫上の心境はどのようなものであったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 紫上は暮らしに不自由なく、須磨での光源氏の住居についても、心配のない程度に手紙のやりとりをしていた。また光源氏が官位を退いてからの装束についても、折にふれお世話をして心を慰めていた。

b 紫上は暮らしに不自由なく、須磨での光源氏の住居についても、心配のない程度に人からうわさで聞いていた。また光源氏が官位を退いてからの装束につ

いても、折にふれお世話をして心を慰めていた。

c 紫上は暮らしに不自由なく、須磨での光源氏の住居についても、心配のない程度に人からうわさで聞いていた。また光源氏が官位を退いてからの装束についても、みずから縫ってさしあげ心を慰めていた。

d 紫上はのんびりとした性格で、須磨での光源氏の住居についても、心配のない程度に手紙のやりとりをしていた。また光源氏が官位を退いてからの装束についても、折にふれお世話をして心を慰めていた。

e 紫上はのんびりとした性格で、須磨での光源氏の住居についても、心配のない程度に人からうわさで聞いていた。また光源氏が官位を退いてからの装束についても、みずから縫ってさしあげ心を慰めていた。

問2 光源氏が末摘花のもとに通うようになる前と、その後の状況の説明として最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 父の親王が亡くなってからは、末摘花のお世話をする人もない状態で、たいそう頼りなげであったが、光源氏が通うようになって、生活の援助も途絶えることがなくなった。それは光源氏にしてみれば、取るに足らないことであったが、援助を受ける側にすれば、非常に大きなものと感じられるのであった。

b 父の親王が亡くなってからは、末摘花のお世話をする人もない状態で、たいそう頼りなげであったが、光源氏が通うようになって、客の訪れも途絶えることがなくなった。それは光源氏にしてみれば、ほんの気まぐれにすぎなかったが、援助を受ける側にすれば、非常にうれしく感じられるのであった。

c 父の親王が亡くなってからは、末摘花のお世話をする人もない状態で、たいそう頼りなげであったが、光源氏が通うようになって、客の訪れも途絶えることがなくなった。それは光源氏にしてみれば、取るに足らないことであったが、援助を受ける側にすれば、非常に大きなものと感じられるのであった。

d 父の親王が亡くなってからは、末摘花に同情する人もない状態で、たいそう頼りなげであったが、光源氏が通うようになって、生活の援助も途絶えることがなくなった。それは光源氏にしてみれば、ほんの気まぐれにすぎなかったが、援助を受ける側にすれば、非常に大きなものと感じられるのであった。

e 父の親王が亡くなってからは、末摘花に同情する人もない状態で、たいそう頼りなげであったが、光源氏が通うようになって、生活の援助も途絶えることがなくなった。それは光源氏にしてみれば、取るに足らないことであったが、援助を受ける側にすれば、非常にうれしく感じられるのであった。

問3 須磨に退去した後、末摘花に対する光源氏の態度はどのように変わったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 光源氏は政界失脚により、万事世の中のことをおもしろくなく悩んでいたそのあおりで、特別に深くはない仲の女性への心配りはつい忘れてしまい、須磨退去後は、わざわざその女性のもとを訪問することもなかった。

b 光源氏は政界失脚により、万事世の中のことをおもしろくなく悩んでいたそのあおりで、特別深い仲の女性への心配りもつい忘れてしまい、須磨退去後は、わざわざその女性のもとを訪問することもなかった。

c 光源氏は政界失脚により、万事世の中のことをおもしろくなく悩んでいたそのあおりで、特別に深くはない仲の女性への心配りはつい忘れてしまい、須磨退去後は、わざわざ安否を尋ねることもできなかった。

d 光源氏は政界失脚により、万事男女の仲のことをおもしろくなく悩んでいたそのあおりで、特別に深くはない仲の女性への心配りはつい忘れてしまい、須磨退去後は、わざわざその女性のもとを訪問することもなかった。

e 光源氏は政界失脚により、万事男女の仲のことをおもしろくなく悩んでいたそのあおりで、特別に深くはない仲の女性への心配りはつい忘れてしまい、須磨退去後は、わざわざ安否を尋ねることもできなかった。

問4 光源氏が末摘花のもとへ通うのが途絶えた時、古参の女房たちはどういつて嘆いたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 運のないお方だ。思いがけず神仏が出現したかのようにだった光源氏のお情けに、このように頼りになるお方に巡りあうこともあるものだったよと、稀有なけうことと拝見していたが、世の習いとはいいいながら、光源氏以外には頼るところもない境遇とはなんと悲しいことだよ、といつて嘆いた。

b 運のないお方だ。思いがけず神仏が出現したかのようにだった光源氏のお情けに、このように頼りになるお方に巡りあうこともあるものだったよと、感謝すべきことだと拝見していたが、男女関係の習いとはいいいながら、光源氏以外には頼るところもない境遇とはなんと悲しいことだよ、といつて嘆いた。

c 運のないお方だ。思いがけず神仏が出現したかのようにだった光源氏のお情けに、このように頼りになるお方に巡りあうこともあるものだったよと、稀有な

ことと拝見していたが、男女関係の習いとはいいいながら、神仏以外には頼るところもない境遇とはなんと悲しいことだよ、といって嘆いた。

d 運のないお方だ。思いがけず神仏が出現したかのようだった光源氏のお情けに、このように頼りになるお方に巡りあうこともあるものだったよと、感謝すべきことだと拝見していたが、世の習いとはいいいながら、神仏以外には頼るところもない境遇とはなんと悲しいことだよ、といって嘆いた。

e 運のないお方だ。思いがけず神仏が出現したかのようだった光源氏のお情けに、このように頼りになるお方に巡りあうこともあるものだったよと、感謝すべきことだと拝見していたが、男女関係の習いとはいいいながら、神仏以外には頼るところもない境遇とはなんと悲しいことだよ、といって嘆いた。

問5 光源氏の訪れが途絶える前と後とでは、末摘花の女房たちの態度はどのように変わったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 目先の利益にこだわる女房たちは、光源氏が末摘花のもとへ通うようになると、我先にと末摘花に奉公するようになったが、光源氏の訪れが途絶えると、みな次から次へと散り散りになってしまった。女房の中には死者も出たりして、月日がたつにつれ身分の上下を問わず女房の数はへっていった。
- b 目先の利益にこだわる女房たちは、光源氏が末摘花のもとへ通うようになると、我先にと末摘花に奉公するようになったが、光源氏の訪れが途絶えると、みな次から次へと散り散りになってしまった。女房の中には死者も出たりして、身分の低いものから順番に数はへっていった。
- c 目先の利益にこだわる女房たちは、光源氏が末摘花のもとへ通うようになると、自然と末摘花に奉公するようになったが、光源氏の訪れが途絶えると、みな次から次へと散り散りになってしまった。女房の中には死者も出たりして、月日がたつにつれ身分の上下を問わず女房の数はへっていった。
- d 多少ともまともな女房たちは、光源氏が末摘花のもとへ通うようになると、自然と末摘花に奉公するようになったが、光源氏の訪れが途絶えると、みな次から次へと散り散りになってしまった。女房の中には死者も出たりして、月日がたつにつれ身分の上のものから順番に数はへっていった。
- e 多少ともまともな女房たちは、光源氏が末摘花のもとへ通うようになると、自然と末摘花に奉公するようになったが、光源氏の訪れが途絶えると、みな次から次へと散り散りになってしまった。女房の中には死者も出たりして、月日がたつにつれ身分の上下を問わず女房の数はへっていった。

問6 末摘花邸の惨状を見かねた女房は末摘花にどのような提言をしたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。



- a 結構な家構えを好む受領どもが、このお屋敷の木立に目をつけて、「手放しませんか」と直接申し入れてきていますが、そのようになさって、こんなに恐ろしい思いをせずにはすむところに移ることをお考え下さい。ここに留まってお仕えする人ももう我慢できません、と提言した。
- b 結構な家構えを好む受領どもが、このお屋敷の木立のすきまから中をのぞいて、「手放しませんか」と直接申し入れてきていますが、これを最後の機会だと思って、こんなに恐ろしい思いをせずにはすむところに移ることをお考え下さい。ここに留まってお仕えする人ももう我慢できません、と提言した。
- c 結構な家構えを好む受領どもが、このお屋敷の木立のすきまから中をのぞいて、「手放しませんか」と人を介して申し入れてきていますが、そのようになさって、こんな恐ろしい思いをせずにはすむところに移ることをお考え下さい。ここに留まってお仕えする人ももう我慢できません、と提言した。
- d 結構な家構えを好む受領どもが、このお屋敷の木立に目をつけて、「手放しませんか」と直接申し入れてきていますが、これを最後の機会だと思って、こんなに恐ろしい思いをせずにはすむところに移ることをお考え下さい。ここに留まってお仕えする人ももう我慢できません、と提言した。
- e 結構な家構えを好む受領どもが、このお屋敷の木立に目をつけて、「手放しませんか」と人を介して申し入れてきていますが、そのようになさって、こんなに恐ろしい思いをせずにはすむところに移ることをお考え下さい。ここに留まってお仕えする人ももう我慢できません、と提言した。

問7 女房の提言に対して、末摘花はどのように応じたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a まあ、ひどいことを。光源氏さまが聞いたらなんとお思いになるでしょう。私が生きているかぎりには、昔の面影がなくなるようなことがどうしてできませんか。このように恐ろしげに荒れ果ててしまいました。父宮の面影が残っている気がする昔からの住みかだと思えばこそ心も慰むというのに、と末摘花は泣きながら問題にもしなかつた。
- b まあ、ひどいことを。光源氏さまが聞いたらなんとお思いになるでしょう。私が生きているかぎりには、昔の雰囲気がなくなるようなことがどうしてできませんか。このように恐ろしげに荒れ果ててしまいました。光源氏さまの思い出が残っている住みかだと思えばこそ心も慰むというのに、と末摘花は泣きながら問題にもしなかつた。
- c まあ、ひどいことを。世間体というものもありますよ。私が生きているかぎりには、昔の面影がなくなるようなことがどうしてできませんか。このように

恐ろしげに荒れ果ててしまいましたが、父宮の面影が残っている気がする昔からの住みかだと思えばこそ心も慰むというのに、と末摘花は泣きながら問題にもしなかった。

d まあ、ひどいことを。世間体というものもありますよ。私が生きているかぎりには、昔の面影がなくなるようなことがどうしてできませんでしたか。このように恐ろしげに荒れ果ててしまいましたが、光源氏さまの思い出が残っている気がする昔からの住みかだと思えばこそ心も慰むというのに、と末摘花は泣きながら問題にもしなかった。

e まあ、ひどいことを。世間体というものもありますよ。光源氏さまが生きているかぎりには、その思い出がなくなるようなことがどうしてできませんでしたか。このように恐ろしげに荒れ果ててしまいましたが、光源氏さまの思い出が残っている気がする昔からの住みかだと思えばこそ心も慰むというのに、と末摘花は泣きながら問題にもしなかった。

問8 女房が調度品を売り払おうとするのに対して、末摘花はどのような態度を示したか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 父君も、私が使うようにとのお考えで作らせなされたのでしょうか。どうして軽薄な者の家の飾りなどにできましようか。父君のお考えに背くことは、父君に対しても気の毒なことですよ、と調度品を売ることを末摘花は許さなかった。

b 父君も、私が使うようにとのお考えで作らせなされたのでしょうか。どうして身分の低い家の飾りなどにできましようか。父君のお考えに背くことは、悲しいことですよ、と調度品を売ることを末摘花は許さなかった。

c 父君も、私が使うようにとのお考えで作らせなされたのでしょうか。どうして身分の低い家の飾りなどにできましようか。父君のお考えに背くことは、母君に対しても気の毒なことですよ、と調度品を売ることを末摘花は許さなかった。

d 光源氏さまも、私が使うようにとのお考えで作らせなされたのでしょうか。どうして身分の低い家の飾りなどにできましようか。光源氏さまのお考えに背くことは、悲しいことですよ、と調度品を売ることを末摘花は許さなかった。

e 光源氏さまも、私が使うようにとのお考えで作らせなされたのでしょうか。どうして軽薄な者の家の飾りなどにできましようか。光源氏さまのお考えに背く

ことは、できないことですよ、と調度品を売ることを末摘花は許さなかった。

問9 傍線部④を「さやうのもの」の指している内容を明らかにしつつ現代語訳しなさい。

次の文章は、『大和物語』の一部である。これを読んで、後の問いに答えよ。

津つの国くにの難波ななばのわたりわたりに家いへしてすむ人ありけり。あひ知りて年としごろありけり。女も男も、いとまじ下種げしゆにはあらざりけれど、年としごろわたらひなどもいとわろくなりて、家もこぼれ、使つかふ人などもまじ徳ある所にいきつつ、ただふたりすみわたるほどに、さすがに下種げしゆにもあらねば、人にやとはれ、使つかはれもせず、いとわびしかりけるままに、思おもひわびて、ふたりいひけるやう、「なほいとかうわびしうては、えあらじ」、男は、「かくはかなくてのみいますかめるを見捨てては、いづちもいづちも、えいくまじ」、女も、「男を捨ててはいづちいかいかむ」とのみいひわたりけるを、男、「おのれは、とてもかくても経なむ。女のかく若きほどに、かくてあるなむ、いととほしき。京きやうにのぼり、宮仕みやつかへをもせよ。よろしきやうにもならば、われをもとぶらへ。おのれも人のこともならば、かならずたづねとぶらはむ」など泣く泣くいひ契ちぎりて、たよりの人にいひつきて、女は京きやうに來きにけり。さしはへいづこともなくて來たれば、このつきて來こし人のもとにゐて、いとあはれと思ひやりけり。前に荻あしすき、いとおほかる所になむありける。風など吹きけるに、かの津の国を思ひやりて、「いかであらむ」など、悲しくてよみける、

ひとりしていかにせましとわびつればそよとも前の荻あしぞ答こたふる  
となむひとりごちける。

さて、とかう女さすらへて、ある人のやむごととなき所にまじ宮たてたり。さて宮仕みやつかへしありくほどに、装束きやうぞく清きよげにし、むつかしきことなどもなくてありければ、いと清きよげに顔かたちもなりにけり。かかれど、かの津の国をかた時も忘れず、いとあはれと思ひやりけり。たより人に、文ふみつけてやりたりければ、「さいふ人も聞きえず」など、いとほかなくいひつつ來きけり。わがむつまじう知れる人もなかりければ、心ともえやらす、いとおぼつかなく、「いかがあらむ」とのみ思ひやりけり。かかるほどに、この宮仕みやつかへする所の北きたの方かたうせたまひて、これかれある人を召めし使つかひたまひなどする中に、この人を思うたまひけり。思ひつきて、妻めになりにけり。思ふこともなく、めでたげにてゐたるに、ただ人知れず思ふことひとつなむありける。「いかにしてあらむ。あしうてやあらむ。良よくてやあらむ。わがあり所もえ知らざらむ。人をやりてたづねさせむとすれど、うたてわが男聞きて、うたてあるさまにもこそあれ」と念ねんじつつありわたるに、なほいとあはれにおぼゆれば、男にいひけるやう、

「津の国といふ所の、いとをかしかなるに、いかで難波に\*<sup>4</sup>被へしがてらまからむ」といひければ、「いとよきこと。われももろともに」といひければ、「<sup>5</sup>そこにはな  
ものしたまひぞ。おのれひとりまからむ」といひて、いでたちていにけり。

難波に被へして、かへりなむとする時に、「このわたりに見るべきことなむある」とて、「いますこし、とやれ、かくやれ」といひつつ、この車をやらせつ。家のあ  
りしわたりを見るに、屋もなし人もなし。「いつかたへいにけむ」と悲しう思ひけり。かかる心ばへにて、ふりはへ来たれど、わがむつまじき従者もなし。かかれば、  
たづねさすべき方もなし。いとあはれなれば、車を立ててながむるに、ともの人は、「日暮れぬべし」とて、「御車うながしてむ」といふに、「しばし」といふところ  
に、蘆あしになひたる男のかたゐのやうなる姿なる、この車の前よりいきけり。それが顔を見るに、その人といふべくもあらず、いみじきさまなれど、わが男に似たり。こ  
れを見て、よく見まほしさに、「この蘆もちたるをのこよばせよ。かの蘆買はむ」といはせける。さりければ、「ようなき物買ひたまふ」とは思ひけれど、主しゆうのた  
まふことなれば、よびて買はず。「車のもと近く荷にな寄せさせよ。見む」などいひて、この男の顔をよく見るに、それなりけり。「いとあはれに、かかる物商あきなひて世  
に経ふる人、いかならむ」といひて泣きければ、ともの人は、「なほ、おほかたの世をあはれがる」となむ思ひける。かくて、「この蘆の男に物など食はせよ。物いとお  
ほく蘆の値あたひにとらせよ」といひければ、「すずろなる者に、なにか物おほくたばむ」など、ある人々いひければ、しひてもいひにくくて、「いかで物とらせむ」と思  
ふあひだに、下したすだれ簾すだれのはさまのあきたるより、この男まれば、わが妻に似たり。あやしさに、心をとどめて見るに、「顔も声もそれなりける」と思ふに、思ひあはせ  
て、わがさまのいといらなくなりたるを思ひけるに、いとほしたなくて、蘆もうち捨てて走り逃げにけり。「しばし」といはせけれど、人の家に逃げ入りて、竈かまの後方しりへ  
にかがまりをりける。この車より、「なほこの男、たづねて率あて来」といひければ、ともの人、手をあかちて、もとめさわぎけり。人、「そこなる家になむ侍りける」と  
いへば、この男に、「かくおほせごとありて召めすなり。なにの、うちひかせたまふべきにもあらず。物をこそたまはせむとすれ。をさなき者なり」といふ時に、硯すずり  
を乞こひて文を書く。それに、

君なくてあしかりけりと思ふにもいと難波の浦ぞすみ憂うれき

と書きて、\*<sup>5</sup>封じて、「これを御車に奉れ」といひければ、「あやし」と思ひてもて来て奉る。あけて見るに、悲しきことに似ず、よよとぞ泣きける。さて、返し  
はいかがしたりけむ知らず。

注

\* 1 下種<sup>げす</sup> 身分の低い者。

\* 2 徳<sup>とく</sup> 財産。

\* 3 宮たてたり 宮仕えしたの意か。

\* 4 祓<sup>はら</sup>へ 神に折<sup>か</sup>つて穢<sup>けが</sup>れを除く神事。

\* 5 封<sup>かん</sup>じて 封をして。

問 1

難波に住む女と男の様子として、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 二人は結婚したばかりで、賤<sup>いや</sup>しい身分ではなかったけれども、暮らし向きが悪くなり、家も雨漏りが激しくなり、召し使いたちも次々といなくなり、二人きりで住んでいるうちに、それでも賤しい身分ではなかったため、人にあれこれ問われたり、使われたりすることもなく、わびしい日々を過ごし、途方に暮れていた。

b 二人は結婚してから長い年月がたち、賤しい身分ではなかったけれども、暮らし向きが悪くなり、家も壊れ、召し使いたちも次々といなくなり、二人きりで住んでいるうちに、それでも賤しい身分ではなかったため、人に雇われたり、使われたりすることもなく、わびしい日々を過ごし、途方に暮れていた。

c 二人は結婚してから長い年月がたち、賤しい身分ではなかったけれども、暮らし向きが悪くなり、家も壊れ、召し使いたちも次々といなくなり、二人きりで住んでいるうちに、それでも賤しい身分ではなかったため、人にあれこれ問われたり、使われたりすることもなく、わびしい日々を過ごし、途方に暮れていた。

d 二人は結婚してから長い年月がたち、賤しい身分ではなかったけれども、暮らし向きが悪くなり、家も雨漏りが激しくなり、召し使いたちも次々といなくなり、二人きりで住んでいるうちに、すっかり賤しい身分になったけれども、人に雇われたり、使われたりすることもなく、わびしい日々を過ごし、途方に暮れていた。

e 二人は結婚したばかりで、賤しい身分ではなかったけれども、暮らし向きが悪くなり、家も壊れ、召し使いたちも次々といなくなり、二人きりで住んでいるうちに、すっかり賤しい身分になったけれども、人にあれこれ問われたり、使われたりすることもなく、わびしい日々を過ごし、途方に暮れていた。

問2 生活が成り立たないと話し合ったとき、男は何と言ったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a こんなにあれもこれもない状態で今もつらそうあなたを見捨てて、どこへも行かないことなどありまじょうか。
- b こんなに心細そうな様子でいらつしやるようなあなたを見捨てて、どこかへ行くことなどできまじょうか。
- c こんなに心細そうな様子でいらつしやるようなあなたを見捨てて、どこへも行かないことなどありまじょうか。
- d こんなにあれもこれもない状態で今もつらそうあなたを見捨てて、どこかへ行くことなどしなつたりです。
- e こんなに心細そうな様子で今もいらつしやるあなたを見捨てて、どこかへ行くしかなつたりです。

問3 京に来た女はどうしたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 一緒に京に来た人の紹介で宮仕えを始めたものの、男のことを恋しく思つていた。宮中には萩や薄すずきがとても多く、風が吹いているときに津の国を思いやつて、「一人きりで宮仕えをして、これからどうしやうかしらと、心細い気持ちでいると、庭先の萩がそよそよと風に揺れて、さうですよと答えるのです」と独り言のように歌つた。
- b 一緒に京に来た人の家で、男のことを恋しく思つていた。その家の前には萩や薄がとても多く、風が吹いているときに津の国を思いやつて、「一人きりで宮仕えをして、これからどうしやうかしらと、心細い気持ちでいると、庭先の萩がそよそよと風に揺れて、さうなだけれどと答えるのです」と独り言のように歌つた。
- c 一緒に京に来た人の紹介で宮仕えを始めたものの、男のことを恋しく思つていた。家の前には萩や薄がとても多く、風が吹いているときに津の国を思いやつて、「たった一人でこれからどうしやうかしらと、心細い気持ちでいると、庭先の萩がそよそよと風に揺れて、さうですよと答えるのです」と独り言のように歌つた。
- d 一緒に京に来た人の家で、男のことを恋しく思つていた。その家の前には萩や薄がとても多く、風が吹いているときに津の国を思いやつて、「たった一人

でこれからどうしようかしらと、心細い気持ちでいると、庭先の萩がそよそよと風に揺れて、そうですよと答えるのです」と独り言のように歌った。

e 一緒に京に来た人の家で、男のことを恋しく思っていた。宮中には萩や薄がとても多く、風が吹いているときに津の国を思いやって、「たった一人でこれからどうしようかしらと、心細い気持ちでいると、庭先の萩がそよそよと風に揺れて、そんなだけれどと答えるのです」と独り言のように歌った。

問4 女が宮仕えするようになってから起きたこととして、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 宮仕えするようになっても津の国のことを忘れず、しみじみとした気持ちで思いやっていた。ついでのある人に手紙をことづけたところ、そういう人のことは聞きませんでしたと言ってきた。親しい人もいなかったため、どうすることもできず、心配していた。やがて、宮仕えしているところの奥方が亡くなり、主人は多くの召し使いの中からこの女を思うようになった。女も心引かれて妻となった。

b 宮仕えするようになっても津の国のことを忘れず、しみじみとした気持ちで思いやっていた。ついでのある人に手紙をことづけたところ、よく知らないが、亡くなったそうだと出てきた。親しい人もいなかったため、どうすることもできず、心配していた。やがて、宮仕えしているところの奥方が亡くなり、主人はあちらこちらの召し使いを探して、ついにこの女を思うようになった。女は津の国の男への思いも尽きて、妻となった。

c 宮仕えするようになっても津の国のことを忘れず、しみじみとした思いにふけていた。頼りにしていた人に手紙をことづけたところ、よく知らないが、亡くなったそうだと出てきた。親しい人もいなかったため、どうすることもできず、心配していた。やがて、宮仕えしているところの奥方が亡くなり、主人は多くの召し使いの中からこの女を思うようになった。女も心引かれて妻となった。

d 宮仕えするようになっても津の国のことを忘れず、しみじみとした思いにふけていた。頼りにしていた人に手紙をことづけたところ、そういう人のことは聞きませんでしたと言ってきた。親しい人もいなかったため、どうすることもできず、心配していた。やがて、宮仕えしているところの奥方が亡くなり、主人はあちらこちらの召し使いを探して、この女を思うようになった。女も心引かれて妻となった。

e 宮仕えするようになっても津の国のことを忘れず、しみじみとした気持ちで思いやっていた。ついでのある人に手紙をことづけたところ、そういう人のことは聞きませんでしたと言ってきた。親しい人もいなかったため、どうすることもできず、心配していた。やがて、宮仕えしているところの奥方が亡くな



り、主人はあちらこちらの召し使いを探して、ついにこの女を思うようになった。女は津の国の男への思いも尽きて、妻となった。

問5 女は、主人との結婚後、どのように暮らしていたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 何も思いわずらうことなく、幸せそうに見えたが、人知れず思うことが一つあった。「津の国の男はどうしているだろう。暮らし向きは悪いのだろうか。それともよいのだろうか。私がいるところも知ることができずにいるだろう。人を遣わして尋ねさせようとして、もしも主人に知れてしまったら、具合の悪いことになってしまいうだろう」と我慢して暮らしていた。

b 津の国の男のことを思うこともなく、幸せそうに見えたが、人知れず思うことが一つあった。「これからどうすればよいのだろう。暮らし向きが悪くなることもあるだろうか。それともよくなるのだろうか。津の国の男に私の居場所は知られていないだろうか。人を遣わして私の居場所を探しているのを、主人が知ったら具合の悪いことになってしまいうだろう、知られませんが」に」と念じながら暮らしていた。

c 津の国の男のことを思うこともなく、幸せそうに見えたが、人知れず思うことが一つあった。「これからどうすればよいのだろう。暮らし向きが悪くなることもあるだろうか。それともよくなるのだろうか。津の国の男に私の居場所は知られていないだろうか。人を遣わして尋ねさせようとして、もしも主人に知れてしまったら、具合の悪いことになってしまいうだろう」と我慢して暮らしていた。

d 何も思いわずらうことなく、幸せそうに見えたが、人知れず思うことが一つあった。「津の国の男はどうしているだろう。暮らし向きは悪いのだろうか。それともよいのだろうか。私がいるところも知ることができずにいるだろう。人を遣わして尋ねさせようとして、津の国の男がこのことを聞いたら、具合の悪いことになってしまいうだろう」と我慢して暮らしていた。

e 何も思いわずらうことなく、幸せそうに見えたが、人知れず思うことが一つあった。「津の国の男はどうしているだろう。暮らし向きは悪いのだろうか。それともよいのだろうか。私がいるところも知ることができずにいるだろう。人を遣わして尋ねさせて、津の国の男がこのことを聞いてくれたら、会いに行くことができるのに」と、心ひそかに念じながら暮らしていた。

問6 難波での祓えを終えて帰ろうとしたときの女の行動と気持ちとして、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 「このあたりで確かめたいことがある。もう少しあちらへ、こちらへ」と言いながら、車を回させた。かつて二人で仲睦まじく住んでいた家のあったあたりには何もなく、「私はどこに来たのでしょうか」と悲しく思った。こんな気持ちで難波まで来たけれど、仲睦まじかった津の国の男も見つからない。かといって、尋ねさせようにもその方法もない。途方に暮れて車を停めて物思いにふけていた。

b 「今回の難波への渡りで確かめたいことがある。もう少しあちらへ、こちらへ」と言いながら、車を回させた。かつて二人で仲睦まじく住んでいた家のあったあたりには何もなく、「いったいあの人はどこに行ってしまったのかしら」と悲しく思った。こんな気持ちで難波まで来たけれど、親しい従者もいない。かといって、探してもらおう人もいない。途方に暮れて車を停めて物思いにふけていた。

c 「今回の難波への渡りで確かめたいことがある。もう少しあちらへ、こちらへ」と言いながら、車を回させた。かつて二人で仲睦まじく住んでいた家のあったあたりには何もなく、「いったいあの人はどこに行ってしまったのかしら」と悲しく思った。こんな気持ちで難波まで来たけれど、仲睦まじかった津の国の男も見つからない。かといって、探してもらおう人もいない。途方に暮れて車を停めて物思いにふけていた。

d 「このあたりで確かめたいことがある。もう少しあちらへ、こちらへ」と言いながら、車を回させた。かつて二人で仲睦まじく住んでいた家のあったあたりには何もなく、「私はどこに来たのでしょうか」と悲しく思った。こんな気持ちで難波まで来たけれど、親しい従者もいない。かといって、探してもらおう人もいない。途方に暮れて車を停めて物思いにふけていた。

e 「このあたりで確かめたいことがある。もう少しあちらへ、こちらへ」と言いながら、車を回させた。かつて二人で仲睦まじく住んでいた家のあったあたりには何もなく、「いったいあの人はどこに行ってしまったのかしら」と悲しく思った。こんな気持ちで難波まで来たけれど、親しい従者もいない。かといって、尋ねさせようにもその方法もない。途方に暮れて車を停めて物思いにふけていた。

問7 蘆を売る男を見つけたときの女主人の言動とそれに対する従者たちの反応として、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 女主人が「蘆を持つている男を呼びなさい。その蘆を買いましたよ」と言ったのに対しては「用のないものをお買いなさる」と思い、津の国の男と分かり

涙を流す女主人に対しては「貧しい者を見て、たいそうこの世の無常を感じていらっしやる」と思い、「蘆を売る者に何か食べさせよ。蘆の代価にたくさんのものを与えよ」と言ったのに対しては「何の関係もない者にどうして物をたくさんお与えなさるのだろう」と言った。

b 女主人が「蘆を持っている男を呼びなさい。その蘆を買いましょう」と言ったのに対しては「よくないものをお買いなさる」と思い、津の国の男と分かれ涙を流す女主人に対しては「貧しい者を見て、たいそうこの世の無常を感じていらっしやる」と思い、「蘆を売る者に何か食べさせよ。蘆の代価にたくさんのものを与えよ」と言ったのに対しては「汚らわしい者にどうして物をたくさん食べさせなさるのだろう」と言った。

c 女主人が「蘆を持っている男を呼びなさい。その蘆を買いましょう」と言ったのに対しては「用のないものをお買いなさる」と思い、津の国の男と分かれ涙を流す女主人に対しては「貧しい者を見て、ひととおりの同情を示していらっしやる」と思い、「蘆を売る者に何か食べさせよ。蘆の代価にたくさんのものを与えよ」と言ったのに対しては「汚らわしい者にどうして物をたくさんお与えなさるのだろう」と言った。

d 女主人が「蘆を持っている男を呼びなさい。その蘆を買いましょう」と言ったのに対しては「よくないものをお買いなさる」と思い、津の国の男と分かれ涙を流す女主人に対しては「貧しい者を見て、ひととおりの同情を示していらっしやる」と思い、「蘆を売る者に何か食べさせよ。蘆の代価にたくさんのものを与えよ」と言ったのに対しては「何の関係もない者にどうして物をたくさん食べさせなさるのだろう」と言った。

e 女主人が「蘆を持っている男を呼びなさい。その蘆を買いましょう」と言ったのに対しては「用のないものをお買いなさる」と思い、津の国の男と分かれ涙を流す女主人に対しては「貧しい者を見て、ひととおりの同情を示していらっしやる」と思い、「蘆を売る者に何か食べさせよ。蘆の代価にたくさんのものを与えよ」と言ったのに対しては「何の関係もない者にどうして物をたくさんお与えなさるのだろう」と言った。

問8 津の国の男は従者に見つけられたときどうしたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 従者が「京までお連れしようというのだ。なにも無理に連れて行くことではない。ものを下さろうというのだ。思慮分別のない奴め」と言ったのに対し、視を求めて女主人に、「あなたがいなくなり、蘆を刈って苦しい生活を送り、よいことはなかったと思うにつけても、ますます難波の浦は住み辛いところだと思われます」という歌を書いた。

b 従者が「お召しがあつてのことだ。なにも京に無理に連れて行くことではない。ものを下さろうというのだ。幼稚な奴め」と言ったのに対し、硯を求めて女主人に、「あなたがなくなり、蘆を刈って生活していました。蘆を買って下さってありがたいと思うけれども、ますます難波の浦は住み辛いところだと思われます」という歌を書いた。

c 従者が「お召しがあつてのことだ。なにも答<sup>とが</sup>めだてしようとしてのことではない。ものを下さろうというのだ。幼稚な奴め」と言ったのに対し、硯を求めて女主人に、「あなたがなくなり、蘆を刈って生活していました。蘆を買って下さってありがたいと思うけれども、ますます難波の浦は住み辛いところだと思われます」という歌を書いた。

d 従者が「お召しがあつてのことだ。なにも京に無理に連れて行くことではない。ものを下さろうというのだ。幼稚な奴め」と言ったのに対し、硯を求めて女主人に、「あなたがなくなり、蘆を刈って送ってきた苦しい生活を思うにつけても、難波の浦は住み辛いので京に召して下さい」という歌を書いた。

e 従者が「お召しがあつてのことだ。なにも答めだてしようとしてのことではない。ものを下さろうというのだ。思慮分別のない奴め」と言ったのに対し、硯を求めて女主人に、「あなたがなくなり、蘆を刈って苦しい生活を送り、よいことはなかったと思うにつけても、ますます難波の浦は住み辛いところだと思われます」という歌を書いた。

問9 傍線部(A)を現代語訳せよ。

次の文章は、唐での留学期間を終えた中納言が、愛する唐の<sup>きんぐ</sup>后と別れて、后との間に生まれた若君をつれて帰国してきた場面である。これを読んで後の問いに答えよ。

渡りこしほどは、世に知らずあはれに悲しく、ゆくへ知らぬ波の上に漕ぎ出<sup>い</sup>でしささまの思ひ、かぎりなしといひながら、命だにあらば、三年がうちに、かならず行き帰りなむかし、と思ふ心に、いささかなぐさみにけり。知らぬ世のいくほどの年経ざりしかども、またかへりみるべきやうもなしかし、と思ふに、何の草木も、別るあはれの世のつねなるべきならぬ中にも、さばかりたくひなき思ひをしめ、心をとどめて、いとけなき形見ばかりを名残に身に添へて、さしも荒き海の上の波よりも、泣き流す涙のよどむ時なきにくらされて、明け暮るるも知らぬやうにて、筑紫<sup>つくし</sup>におはし着くべきほど近くなりぬ、と聞きたまふ。

この若君は、\*<sub>1</sub>母君の「今は」と出て離れしあかつきに、泣く泣く抱き寄せたまひて、「道のほど、乳まぬらざらむかはりに、この葉をくくめたてまつれ」とて添へたまへりし葉のしるしにや、いささかやせおとろへ色も変はらず、いよいよ白うつくしげに、光るやうになりまさりつつ、音もつゆも泣かず、あらあらしき男の中にあつかひきこゆるに、ものむつかしう、ところせきこともなし。あさましく変化のもののやうに清らかなるを、かつはゆゆしうおぼして、かくほかの世に生まれたる人と知られては、行くさきこの世にすこし隔たるやう添はむ。のちの聞こえはありとも、なほいかでほかより率<sup>あ</sup>て渡りたるとは、人に知られじ、とおぼしまはして、\*<sub>2</sub>母上の御もとに、「このほど、たひらかにものせさせたまふにや。とみにまかり帰るべくもはべらざりつれど、いとま申しはべりしほどの過ぎはべらむも、いとおぼつかなくて、ありがたうてこそまうで来にたれば、見たてまつらむずるうれしさに、増すことはべらずなむ。さてこまかなるありさまは、今みづから申しはべるべし。  
\*<sub>3</sub>中将の乳母<sup>めのと</sup>、おぼつかなきに待ちもあへず、さま悪<sup>あ</sup>しう来向かふやうに人には思はせて、夜を昼になしてくださせたまへ。京に入りはべらぬさきに、かれにあづくべきものはべるなり。あなかしこあなかしこ、人に知らせさせたまふな」とて、「さてかの国の人々、送りにまうで来るを、帰りはべるに、めづらしう待ち見はべりぬべからむもの、取り出でさせたまひて賜はせよ。さやうのこともしたためてなむ、京へのぼりはべるべき」と書きたまふ。\*<sub>4</sub>姫君の御かたには、かの\*<sub>5</sub>宰相の君のもとへやりたまふ中にて、言葉おろかならむやは。

君によりをちの早船さしはやし<sup>④</sup>風聞も待たずこがれ来るかな

と聞こえたまふ。

京には、「かの国の王にしたてまつらむとて、とどめたまひければ、え永く帰りたまふまじかなり」とて、さまざまにいふを、世の人も惜しみ悲しみきこえさずるに、まいて母上などは、胸、心をくだきておぼしなげく折しも、かかる御消息待ち見たまふ御心地<sup>こころち</sup>の夢のやうにて、よろこび泣きにさへしも、ものをおぼえたまはず。中將の乳母にこのよし忍びてのたまへば、「さやうにのたまはせざらむにてだに、人目はさま悪しきやうなれど、参り向かはまほしく思ひたまふるに」と、うれしきなどはおろかなり。ただ急ぎに急ぎ立つを、さるべき人々なども皆参るに、「中將の乳母の、京におはし着かむも心もとなしと急ぎ出でたつめるを、さらでありぬべきやうなれど、おのれらだにおぼつかないぶせきを、まいてことわりなり。その上、夜を昼になしてくだれ、とこそたまはせしたんなれ」など、口々いひあひたり。

(『浜松中納言物語』による)

注

\* 1 母君 || 唐の後。

\* 3 中將の乳母 || 中納言付きの乳母。

\* 5 宰相の君 || 中納言の妻付きの乳母。

\* 2 母上 || 京に住む中納言の母。

\* 4 姫君 || 大將の娘で、中納言の妻。

問 1 唐の国に渡る際、中納言はどのように考えて不安な心を慰めたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 行くあてもない波の上に漕ぎ出そうとした時のさまざまな思いなど、この上もなく頼りなかったが、命さえあれば、三年たつと必ず日本に帰ることができると思い、中納言は不安な心を慰めた。

b 行くあてもない波の上に漕ぎ出そうとしている時のさまざまな思いなど、この上もなくつらかったが、命さえあれば、三年以内に必ず日本に帰ることができると思い、中納言は不安な心を慰めた。

c 行くあてもない波の上に漕ぎ出そうとしている時のさまざまな思いなど、この上もなく悲しかったが、命さえあれば、三年以内に必ず唐の国に行き着くこ

とができると思ひ、中納言は不安な心を慰めた。

d 行くあてもない波の上に漕ぎ出した時のさまざまな思いなど、この上もなくわびしかったが、命さえあれば、三年以内に必ず唐の国に行き着くことができると思ひ、中納言は不安な心を慰めた。

e 行くあてもない波の上に漕ぎ出した時のさまざまな思いなど、この上もなく心細かったが、命さえあれば、三年以内に必ず日本に帰ることができると思ひ、中納言は不安な心を慰めた。

問2 帰国の船上で、中納言はどのような思いで日々を過ごしていたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 中納言は、あれほど類まれな唐の後への慕情を胸に抱き、形見の幼い若君だけをそばに置いて、荒々しい海の上の波から、自分が泣いて流す涙まで、どれひとつ滞る時がないので、明けても暮れても昼か夜かもわからないような状態で日々を過ごしていた。

b 中納言は、あれほど類まれな若君への愛情を胸に抱き、かわいらしい妻の形見だけをそばに置いて、荒々しい海の上の波以上に、自分が泣いて流す涙が滞る時がないので、明けても暮れても時の経過もわからないような状態で日々を過ごしていた。

c 中納言は、あれほど類まれな唐の後への慕情を胸に抱き、かわいらしい妻の形見だけをそばに置いて、荒々しい海の上の波から、自分が泣いて流す涙まで、どれひとつ滞る時がないので、明けても暮れても時の経過もわからないような状態で日々を過ごしていた。

d 中納言は、あれほど類まれな若君への愛情を胸に抱き、かわいらしい妻の形見だけをそばに置いて、荒々しい海の上の波だけでなく、自分が泣いて流す涙まで、滞る時がないので、明けても暮れても昼か夜かもわからないような状態で日々を過ごしていた。

e 中納言は、あれほど類まれな唐の後への慕情を胸に抱き、形見の幼い若君だけをそばに置いて、荒々しい海の上の波以上に、自分が泣いて流す涙が滞る時がないので、明けても暮れても時の経過もわからないような状態で日々を過ごしていた。

問3 帰国の船中での若君の様子はどのようであったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 若君は、少しもやせ衰えたり、顔色が変わったりすることもなく、ますます色白でかわいらしく、輝きを増しては、泣き声もいっさい立てず、むずかったり、面倒めんどうをかけたりますこともなかった。

b 若君は、いささかやせ衰えながらも、顔色が変わることもなく、ますます色白でかわいらしく、輝きを増しては、泣き声もいっさい立てず、駄々をこねたり、文句をいったりすることもなかった。

c 若君は、いささかやせ衰えながらも、顔色が変わることもなく、ますます色白でかわいらしく、輝きを増しては、泣き声もいっさい立てず、わがままをいって扱あつかいにくいこともなかった。

d 若君は、少しもやせ衰えたり、顔色が変わったりすることもなく、ますます色白でかわいらしく、輝きを増しては、泣き声もいっさい立てず、だまりこんで、何ひとつ話すこともなかった。

e 若君は、いささかやせ衰えながらも、顔色が変わることもなく、ますます色白でかわいらしく、輝きを増しては、泣き声もいっさい立てず、不安な様子を見せることも不満をいうこともなかった。

問4 中納言は、若君の将来についてのどのようなことを考えていたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a このように異国の地に生まれた人と知られては、将来この日本では、いささか人々から遠ざけられるようなこともある。後々外聞が悪くても、何とかして異国で生まれたとは、人々に知られないようにしよう、と考えた。

b このように異国の地に生まれた人と知られては、将来この日本では、この世のものと思われないような出来事も起こるかもしれない。後々世間体が悪くても、何とかして異国から連れ帰ったとは、人々に知られないようにしよう、と考えた。

c このように異国の地に生まれた人と知られては、将来この日本では、いささか人々から遠ざけられるようなこともある。後々うわさが立っても、何とかして異国から連れ帰ったとは、人々に知られないようにしよう、と考えた。

d このように異国の地に生まれた人と知られては、将来この日本では、特別な場所に閉じ込められることもある。後々真実が明るみになっても、何とかし



て母親に内緒で連れてきたとは、人々に知られないようにしよう、と考えた。

e このように異国の地に生まれた人と知られては、将来この日本では、いささか人間関係がうまくいかないこともある。後々人に知らせるにしても、何とかして他人の子を連れ帰ったとは、人々に知られないようにしよう、と考えた。

問5 中納言は、筑紫の地から、京の母親にあてた手紙の冒頭で、どのようなことを述べたのか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 近頃御無事でいらつしやいますか。急に帰らなければならない理由もありませんが、お暇いとまを頂戴した期間が過ぎるのもひどく不安で、かろうじて帰国してきましたので、お会いできるうれしさにまさることはありません。

b 近頃御無事でいらつしやいますか。急に帰ることになってしまいました。約束をした期間が過ぎてしまうのもたいそう失礼かと思ひ、どうかして帰国してきましたので、お会いできるうれしさにまさることはありません。

c 近頃御無事でいらつしやいますか。急に帰らなければならない理由もありませんが、お別れた季節が巡ってきて、どうか帰国してきましたので、お会いできるうれしさにまさることはありません。

d 近頃御無事でいらつしやいますか。急に帰ることになってしまいました。お別れた折に約束をした時が過ぎてしまうのも申し訳なく、かろうじて帰国してきましたので、お会いできるうれしさにまさることはありません。

e 近頃御無事でいらつしやいますか。急に帰らなければならない理由もありませんが、お別れた折の悲しい記憶がうすれてしまうのも残念に思ひ、どうかして帰国してきましたので、お会いできるうれしさにまさることはありません。

問6 中納言は、京の母親にあてた手紙の中で、挨拶に続けて何を依頼したのか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 中将の乳母が、若君のことが気がかりで待つにも待ちきれず、不恰好にも若君を迎えに来るように世間の人には思わせて、昼夜を分かつ筑紫へ下るように指示下さい、と依頼した。

- b 中将の乳母が、私のことが気がかりで待つにも待ちきれず、不格好にも私を迎えに来るように世間の人には思わせて、昼夜を分かつ筑紫へ下るようにご指示下さい、と依頼した。
- c 中将の乳母が、若君のことが気がかりで待つにも待ちきれず、不格好にも若君を迎えに来るように世間の人には思わせて、夜から昼にかけて筑紫へ下るようにご指示下さい、と依頼した。
- d 中将の乳母が、私のことが気がかりで待つにも待ちきれず、乳母らしくもない服装で私を迎えに来るように世間の人には思わせて、夜から昼にかけて筑紫へ下るようにご指示下さい、と依頼した。
- e 中将の乳母が、若君のことが気がかりで待つにも待ちきれず、乳母らしくもない服装で迎えに来るように世間の人には思わせて、昼夜を分かつ筑紫へ下るようにご指示下さい、と依頼した。

問7

- 中納言の母から、中納言の頼みごとを聞かされた中将の乳母は、どのような様子だったのか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。
- a 中納言様がそのようにおっしゃらなくても、体裁は悪いようですけれど、中納言様のところへ参りたく存じます、とそのうれしがりは、いささかおろかなほどであった。
  - b 母上様がそのようにおっしゃらなくても、体裁は悪いようですけれど、中納言様のところへ参りたく存じます、とそのうれしがりは、いささかおろかなほどであった。
  - c 中納言様がそのようにおっしゃらなくても、意地が悪いようですけれど、中納言様のところへ参りたく存じます、とそのうれしがりは、とても言葉では言い尽くせないほどであった。
  - d 中納言様がそのようにおっしゃらなくても、体裁は悪いようですけれど、中納言様のところへ参りたく存じます、とそのうれしがりは、とても言葉では言い尽くせないほどであった。
  - e 母上様がそのようにおっしゃらなくても、意地が悪いようですけれど、中納言様のところへ参りたく存じます、とそのうれしがりは、いささかおろか

なほどであった。

問8 中将の乳母が京を出立することを聞いた周囲の人々はどのように言い合ったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 中将の乳母が、中納言様が京に到着するのも待ち遠しいと、急に出立するようだが、そうまでしなくてもよさそうなもの、われわれでさえ気がかりで胸につかえる思いがするのを、まして乳母となればもつともだ、と言い合った。

b 中将の乳母が、中納言様が筑紫を出発するまでにたどり着けるかどうかおぼつかないと、急に出立するようだが、そうまでしなくてもよさそうなもの、われわれには想像もできないが、乳母となればもつともだ、と言い合った。

c 中将の乳母が、中納言様が京に到着するのも待ち遠しいと、急に出立するようだが、そうまでする理由があるのかどうか、われわれには想像もできないが、乳母となればもつともだ、と言い合った。

d 中将の乳母が、中納言様が筑紫を出発するまでにたどり着けるかどうかおぼつかないと、急に出立するようだが、そうまでする理由があるのだろうか、われわれでさえ気がかりなのを、まして乳母となればもつともだ、と言い合った。

e 中将の乳母が、中納言様が京に到着するのも待ち遠しいと、急に出立するようだが、そうまでする理由がありそうなもの、われわれには想像もできず、頼りなくて落ち着かないのを、まして乳母となればもつともだ、と言い合った。

問9 傍線部(A)を、かけこぼ掛詞に注意して現代語訳せよ。

次の文章は、『源氏物語』宿木巻の一部である。薫は、宇治に住んでいた八の宮(本文中では、故宮)の遺児である二人の娘のうち、姉の<sup>おおいぎみ</sup>大君(本文中では、故姫君に思いを寄せていたが、大君はそれを拒み続けて亡くなり、妹の中<sup>なか</sup>君(本文中では、宮、宮の御方)は今<sup>に</sup>は<sup>おもうのみや</sup>匂宮の妻となつて都に住んでいる。大君を忘れられない薫は、宇治の旧八の宮邸の寝殿を寺に改築し、そこに大君に似た像を置こうと考え、その計画を進めるために宇治に来ている。夕刻、彼は、留守居役としてただ一人そこに留まつている老女、弁の尼(本文中では、尼君)と言葉を交わす。これを読んで、後の問いに答えよ。

はかなく暮れぬれば、その夜はとどまりたまひぬ。このたびばかりこそ見<sup>おぼ</sup>めと思<sup>おも</sup>ひて、立ちめぐりつつ見たまへば、仏もみな<sup>き</sup>かの寺に移してければ、尼君の行ひの具のみあり。いとほかなげに住まひたるを、あはれに、いかにして過ぐすらんと見たまふ。「この寝殿は、変へて造るべきやうあり。造り出<sup>い</sup>でんほどは、かの<sup>き</sup>廊にものしたまへ。<sup>き</sup>京の宮にとり渡さるべき物などあらば、<sup>さう</sup>荘の人召して、あるべからむやうにものしたまへ」など、まめやかなることどもを語らひたまふ。ほかにては、かばかりにさだ過ぎなん人を、何かと見入れたまふべきにもあらねど、夜も近く<sup>ふ</sup>臥せて、昔物語などせさせたまふ。<sup>き</sup>故権大納言の君の御ありさまも、聞く人なきに心やすくて、いとこまやかに聞こゆ。「いまはとなりたまひしほどに、めづらしくおはしますらん御ありさまをいぶかしきものに思ひきこえさせたまふめりし御<sup>けしき</sup>気色などの思ひたまへ出でらるるに、かく思ひかけはべらぬ世の末に、かくて見<sup>おぼ</sup>たてまつりはべるなん、かの御世に<sup>むつ</sup>睦ましく仕うまつりおきししのおのづからはべりけると、うれしくも悲しくも思ひたまへられはべる。心憂き命のほどにて、さまさまの<sup>き</sup>ことを見たまへ過ぐし、思ひたまへ知りはべるなん、いと恥づかしく心憂くはべる。宮よりも、時々は参りて見<sup>おぼ</sup>たてまつれ、おぼつかなく絶え籠りはてぬるは、こよなく思ひ隔てけるなめりなどのたまはするをりはべれど、ゆゆしき身にてなん、阿<sup>あ</sup>弥<sup>み</sup>陀<sup>だ</sup>仏より外には、見<sup>おぼ</sup>たてまつらまほしき人もなくなりてはべる」など聞こゆ。故姫君の御事ども、はた<sup>き</sup>尽きせず、年<sup>とし</sup>ごろの御ありさまなど語りて、何のをり何とのたまひし、花紅葉の色を見ても、はかなく詠みたまひける。<sup>き</sup>歌語りなどを、つきなからず、うちわななきたれど語るに、<sup>こ</sup>児め<sup>こ</sup>かしく言<sup>ことば</sup>少ななるものからをかしくける人の御心ばへかなとのみ、いとど聞きそへたまふ。宮の御方は、いますこしいまめかしきものから、心ゆるさざらん人のためには、はしたなくもてなしたまひつべくこそものしたまふめるを、我にはいと心深く情け情けしとは見えて、いかで過<sup>と</sup>ごしてんとこそ思ひたまへれ、など、心の中に思ひくらべたまふ。

さて、ものついでに、\*6かの形代のことを言ひ出でたまへり。「京に、このごろ、はべらんとはえ知りはべらず。人づてにうけたまはりしことの筋なり。故宮の、まだかかる山里住みもしたまはず、故北の方の亡<sup>う</sup>せたまへりけるほど近かりけるころ、中将の君とてさぶらひける\*7上臈の、心ばせなどもけしうはあらざりけるを、いと忍びてはかなきほどにものたまはせけるを、知る人もはべらざりけるに、女子<sup>をむな</sup>をなん産みてはべりけるを、さもやあらんと思ふことのありけるからに、あいなくわづらはしくものしきやうに思しなりて、またとも御覽じ入ることなかりけり。あいなくそのことに思し懲りて、やがておほかた<sup>ひじり</sup>聖にならせたまひにけるを、<sup>④</sup>はしたなく思ひてえさぶらはずなりにけるが、陸奥<sup>みちのくに</sup>国の守の妻になりたりけるを、一年<sup>ひとせ</sup>、上りて、その君たひらかにものしたまふよし、このわたりにもほめかし申したりけるを、聞こしめしつけて、さらにかかる消息<sup>せうそく</sup>あるべきことにもあらずとのたまはせ放ちければ、かひなくてなん嘆きはべりける。さて、また、常陸<sup>ひたち</sup>になりて下りはべりにけるが、この年<sup>とし</sup>この音にも聞こえたまはざりつるが、この春、上りて、かの宮には尋ねまゐりたりけるとなん、ほのかに聞きはべりし。かの君の年は、二十<sup>はたち</sup>ばかりにはなりたまひぬらんかし。いとうつくしく生ひ出でたまふがかなしきなどこそ、中ごろは、文にさへ書きつづけてはべめりしか」と聞こゆ。

#### 注

- \*1 かの寺<sup>てら</sup>八の宮の師であつた阿闍梨<sup>あじかり</sup>がいる山寺。
- \*2 廊<sup>ろう</sup>片側または両側に部屋が作られている渡り廊下<sup>わたりの</sup>。渡殿。
- \*3 京の宮<sup>みや</sup>中君のいる京の二条院。
- \*4 故権大納言<sup>こごん</sup>薫の実の父親、柏木<sup>かしわざき</sup>。薫は光源氏の子とされているが、実は柏木と源氏の妻である女三の宮の密通によって生まれた。そのことが源氏に知られ、柏木は苦悩のうちに没した。薫は以前に、弁の尼から自分の出生の秘密を聞いている。
- \*5 歌語り<sup>うたがたり</sup>和歌が詠まれた事情など、和歌にまつわることを語る口頭の話。
- \*6 かの形代<sup>かたしろ</sup>大君とよく似ているあの異母妹。大君の身代わりの人形という意味でこう言っている。薫は中君からその異母妹の存在を聞いたがまだ詳細は知らずにいる。
- \*7 上臈<sup>じやうらふ</sup>身分の高い女房。

問1 薫は、宇治の邸を見て回った際、どのように思い、その後、弁の尼にどのように言ったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 邸内には勤行の道具だけあっても仏像もなく、弁の尼はとても貧しそうに暮らしている様子なので、生活の苦しさに同情し、「この寢殿は建て替える予定なので、改築している間は荘園の者に手伝わせて荷物を送り、都の中君の邸の渡殿に移って暮らすようにせよ」と言った。

b 邸内には勤行の道具だけあっても仏像もなく、弁の尼はとても心細く暮らしている様子なので、その状態に同情し、「この寢殿は建て替える予定なので、その間はここの渡殿に住み、中君の邸に送るべきものがあれば、荘園の者に手伝わせて送るようにせよ」と言った。

c 邸内には勤行の道具だけあっても仏像もなく、弁の尼は心のよりどころもなく暮らしている様子なので、その寂しさに同情し、「この寢殿は建て替える予定なので、荘園の者に生活の援助を依頼して、改築している間は都の中君の邸の渡殿に移って暮らすようにせよ」と言った。

d 邸内には勤行の道具だけあっても仏像もないが、弁の尼は一心に仏道に帰依して暮らしている様子なので、その状態に同情し、「この寢殿は建て替える予定なので、その間は他の人といっしょに渡殿に住み、中君の邸に送るべきものがあれば、荘園の者に手伝わせて送るようにせよ」と言った。

e 邸内には勤行の道具だけあっても仏像もないが、弁の尼は寂しさに耐えてけなげに暮らしている様子なので、その気持ちに感心し、「この寢殿は建て替える予定なので、その間はここの渡殿に住み、中君の邸に送るべきものがあれば、荘園の者に手伝わせて送るようにせよ」と言った。

問2 弁の尼は薫に、まずどんなことを語ったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 薫の実の父である柏木をモデルにして作られた、誰も読んでいない昔の物語を、くわしく読み聞かせた。

b 薫の実の父である柏木について、今まで誰にも聞かせていない昔のできごとをくわしく語って聞かせた。

c 薫の実の父である柏木にまつわる昔のできごとを、誰もそばで聞いていないので、くわしく語って聞かせた。

d 薫の実の父である柏木のことを知る人がおらず残念なので、昔のできごとをくわしく語って聞かせた。

e 薫の実の父である柏木の本当の姿を知る人がおらず、何でも言えるので、気楽にくわしく語って聞かせた。

問3 弁の尼は、自分が長生きして薫にめぐり会ったことについて、どのように伝えたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 柏木の死後も悲しみを忘れられなかったが、柏木が会いたがっていた薫に、このような老齢になってめぐり会ったことは、生前の柏木に親しく仕えていた結果だろうと思われ、今回の出会いをあらためてつらく恥ずかしく思っていますと申し上げた。

b 自分が生まれ変わる前の世で柏木に親しく仕えていたおかげで、生まれ変わってからこのような老齢になって、柏木の子の薫に、ようやくめぐり会うことができたことに、前世からの因縁をあらためて悲しく思い出しながらも、喜んでいますと申し上げた。

c 自分が生まれ変わる前の世で臨終りんじゆうの時の柏木のお世話をしていたおかげで、生まれ変わってからこのような老齢になって、柏木の子の薫に、ようやくめぐり会うことができたことを、嬉しいうれだけでなく、つらく恥ずかしくも思っていますと申し上げた。

d 臨終の時の柏木が会いたいと言っていた薫にこうしてめぐり会ったことも、柏木に親しく仕えていたおかげだろうと喜びながら、これまでいろいろな思いを体験してこのような老齢まで生き延びてしまったことを、つらく恥ずかしく思っていますと申し上げた。

e 柏木の死後も悲しみを忘れられなかったが、このような老齢になってその子の薫に、ようやくめぐり会うことができたことは、生前の柏木に親しく仕えていたおかげだろうと思われ、今回の出会いまで生き延びたことを心から嬉しく思っていますと申し上げた。

問4 都の中君は弁の尼にどのようなことを贈り、弁の尼はそれに対してどう思っていたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 中君は、時々は自分のところに顔を出すようにということばを贈ったが、弁の尼は、自分は出家した身なので、もう中君にさえも会いたくないと思っ  
た。

b 中君は、時々は薫のところに顔を出すようにということばを贈ったが、弁の尼は、自分は出家した身なので、もう阿弥陀仏以外は誰にも会いたくないと  
思っていた。

c 中君は、時々来るのならともかく、閉じこもってしまうなら心も隔たってしまうということばを贈ったが、弁の尼は、穢けがれの多い自分にはもう誰にも会

たくなかった。

d 中君は、時々宇治に行つて会いたいの会つてくれないのは心が隔たつてしまつてゐるからだといふことを贈つたが、弁の尼は、もう誰にも会いたくないと思つてゐた。

e 中君は、薫が時々宇治に行つてゐるのに彼とも会おうとしないのは心が隔たつてゐるからだといふことを贈つたが、弁の尼は、もう誰にも会いたくないと思つてゐた。

問5 薫は、大君と中君の性格をどのよつて考へてゐたか。最も適當なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 大君はおつとりしてゐて言葉数が少ない中にも風情があつた。中君はもう少し現代風ではつきりした性格であり、心を許さない人からは扱ひにくく思われそうだが、自分にはやさしいよつに見える、と考へてゐた。

b 大君はおつとりしてゐて言葉数が少ない中にも風情があつた。中君はもう少し現代風ではつきりした性格であり、心を許さない人からは冷淡な態度を取りそうだが、自分にはやさしいよつに見える、と考へてゐた。

c 大君は歌が上手で声を震わせながら子どもつぽく語つても風情があつた。中君はもう少し現代風ではつきりした性格であり、心を許さない人からは冷淡な態度を取りそうだが、自分にはやさしいよつに見える、と考へてゐた。

d 大君は歌が上手で声を震わせながら子どもつぽく語つても風情があつた。中君はもう少し現代風ではつきりした性格であり、心を許さない人からはどつちつかずの態度を取りそうだが、自分にはやさしいよつに見える、と考へてゐた。

e 大君は歌が上手で声を震わせながら子どもつぽく語つても風情があつた。中君はもう少し現代風ではつきりした性格であり、心を許さない人からは扱ひにくく思われそうだが、自分にはやさしいよつに見える、と考へてゐた。

問6 大君と中君の異母妹である「かの形代」が生まれた事情について、弁の尼はどのよつに語つたか。最も適當なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。



問7

大君と中君の異母妹である「かの形代」は、その後どのように育てられたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 異母妹は、八の宮邸で養育されたが、八の宮は母にあたる中將の君が娘と面会することも許さず、両者の手紙のやりとりもいっさい禁止した。
  - b 異母妹は、八の宮邸で養育されたが、やがて八の宮の意向によって中將の君に引き取られ、八の宮は面会はもちろん安否のたよりも受け取ろうとしなかった。
  - c 異母妹は、八の宮邸で養育されたが、八の宮は母にあたる中將の君にその異母妹を会わせようとせず、中將の君が娘の安否を聞いても答えようともしなかった。
  - d 異母妹は、母である中將の君のもとで養育されたが、八の宮はその子を自分の子だとは認めず、安否のたよりもいっさい受け取ろうとしなかった。
  - e 異母妹は、母である中將の君のもとで養育されたが、八の宮はその子を自分の子であると知りながら、二度と母子に会おうとしなかった。
- a 北の方の死後まもなく、八の宮は中將の君という、気の置けない女房を内密に寵愛することがあり、やがて中將の君は女の子を産んだが、八の宮はそれが自分の子ではないと考え、二度と会おうとしなかった。
  - b 北の方の死後まもなく、八の宮は中將の君という、気立ても悪くない女房を内密に寵愛することがあり、やがて中將の君が女の子を産むと、妻にしようかとも考えたが、その後、八の宮の態度は急に冷たくなった。
  - c 北の方の死後まもなく、八の宮は中將の君という、気立ても悪くない女房を内密に寵愛することがあり、やがて中將の君は女の子を産んだが、八の宮はそれが自分の子ではないと考え、やっかいなことだと思った。
  - d 北の方の死後まもなく、八の宮は中將の君という、気の置けない女房を内密に寵愛することがあったが、中將の君は誰も知らない別の相手との間に女の子を産み、それを八の宮の子と言いつらした。
  - e 北の方の死後まもなく、八の宮は中將の君という、気立ても悪くない女房を内密に寵愛することがあり、やがて中將の君は女の子を産んだが、八の宮はそれが自分の子だと考えて、やっかいなことだと思った。

問8 弁の尼は、大君と中君の異母妹である「かの形代」のその後の様子についてどのように述べているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 母親の中将の君が地方に下っていたので、母と子は長らく互いに音信がなかったが、最近母親が上京し、娘が中君といっしょに住んでいる二条院を訪ねてきたらしいと述べている。
- b 母親の中将の君が地方に下っていたので、母と子は長らく互いに音信がなかったが、上京した母親は最近娘と再会し、中君が住んでいる二条院をいっしょに訪ねたらしいと述べている。
- c 母親の中将の君とともに地方に下っていたので、弁の尼には長らく音信がなかったが、最近母親といっしょに上京し、中君が住んでいる二条院を訪ねたらしいと述べている。
- d 母親の中将の君とともに地方に下っていたので、弁の尼には長らく音信がなかったが、最近母親といっしょに上京し、薫が住んでいる二条院を訪ねたらしいと述べている。
- e 母親の中将の君とともに地方に下っていたので、弁の尼には長らく音信がなかったが、最近母親といっしょに上京し、自分が住んでいるこの邸にも一度訪ねてきたらしいと述べている。

問9 傍線部(A)を、主語を補って現代語訳せよ。

次の文章は、『うつほ物語』の一節である。藤原仲忠(本文中では「仲忠の侍従」「侍従」)はあて宮(本文中では「あて宮」「宮」)のことを想い、あて宮に仕える孫王(そおう)の君を介して、歌を贈ろうとしている。これを読んで、後の問いに答えよ。

月のおもしろき夜、\*<sub>1</sub>今宮、あて宮、簾すのもとに出でたまひて、琵琶ひは、箏さうの琴、おもしろき手を遊ばし、月見たまひなどするを、仲忠の侍従、隠れ立ちて聞くに、調べよりはじめ、違たがふ所なく、わが弾く手と等しくと聞くに、静心なし。身はいたづらになるとも、取りや隠してまじなど思ふにも、\*<sub>2</sub>母北の方の御ことを思ふに、なほいとほしく思ほゆ。思ひわづらひて、隠れたる簀子すのこに立ち入りて、\*<sub>3</sub>孫王の君に、「などか、一日の御返りはのたまはずなりにし」。いらへ、「\*<sub>4</sub>侍従の君と御碁遊ばす折なりしかばなむ」。侍従、「風間からにやありけむ。あはれ手つき思ひやられても遊ばすなるかな。箏の御琴はさななり。琵琶は誰たが遊ばすぞ」。いらへ、「一の宮にやおはしますらむ」。侍従、「今だにかかる御琴ども、いかにあらむとすらむ。いでやかくものの覚ゆればや、人の誤りをもすらむ。限りなく思ひ忍べど、え堪ふまじくもあるかな」。いらへ、「よくもあらぬ者こそさる心もあれ。うたてものたまふかな」。侍従、「いくそ度か思ひ返さぬ。されどさてのみはえこそあるまじけれ。いかがせむ」。孫王の君、「ものなのたまひそ」とて立ち入れば、「見たまへ。さ聞こゆとも、よに悪しきわざせじや」などで引きとどめて、「まめやかには、いかでよそながらもの一言聞こえさせてしがな。さはありぬべしや」。「いであなむくつけ。時々たまふ返りごと、いと聞こえがたうしたまふを、とかくしてこそあれ。思はしだにかくるこそいとめさましけれ」。「あやしや。うちにては、仁寿殿などにてても、時々召して、ものたまひなどはせずやは。など人はえのたまひ触れぬこそあれ」。いらへ、「それも人してこそは聞こえたまはめ。ここにもおのらは聞こえずやは」などいふ。侍従、\*<sub>5</sub>龍胆の花押し折りて、白き蓮はらすの花に\*<sub>6</sub>箏の先して、かく書きつけて奉る。

「浅き瀬に嘆きて渡るいかだ師はいくらのくれかながれ来ぬらむ

かく思つたまへては久しくなりぬるを、いかで今宵だに、一言だに聞こえさせてしがな。いらへこそそのたまはざらめ。聞こしめすばかりには、何の罪もあらじ」とてなむ奉る。

宮見たまひて、「いづこにあるぞ」とのたまふ。孫王の君、「東の簀子に」。「さは琴弾きつるは聞きつらむな。あな恥づかしや。みな上手ぞや。われは聞かじ」と入りたまひぬ。

侍従聞きて、「あな心憂のことや。なほあが君仏、今宵ならずともたばかりたまへ。人よりも親に仕うまつらむと思ふ心深きを、かかる思ひつきにしより、片時世に経べくは思ほえねば、今更に不孝ふけつの人になりぬべきがいみじければ、いささか思ひ静まるやとてなむ」と、泣く泣く夜一夜物語し明かして、つとめて、\*<sub>7</sub>黒方に白銀の鯉こひくはせて、その鯉にかく書きつけて奉れり。

夜もすがらわれ浮かみつる涙川なみ尽きせずこひのあるぞわびしき

とて\*<sub>8</sub>奉れたり。あて宮、ものものたまはず。孫王の君、「この度はなほのたまはせよ。殊にもものたまはせず静かなる人の、心魂もなく泣き惑ひたまへば、いとほしくなむ」と聞こゆれば、「聞きにくきこと出で来ば、君の御罪になさむ」とて、\*<sub>9</sub>白銀の川に沈せんの松灯ともして、沈の男に持たせ、書きつけてつかはず。

川の瀬に浮かべるおのが篝火かがりびの影をやおのがこひと見つらむ  
などのたまふ。

注

(『うつほ物語』祭の使による)

- \* 1 今宮いまのみや||女一の宮(本文中では「一の宮」とも)。あて宮の姉である仁寿殿女御(本文中では「仁寿殿」とも)の子。
- \* 2 母北の方||仲忠の母。
- \* 3 孫王の君||あて宮づきの女房。
- \* 4 侍従の君||源仲澄。あて宮の同腹の兄。
- \* 5 龍胆りんとんの花||リンドウの花。
- \* 6 筥かうがい||髪を整えるための箸状の道具。
- \* 7 黒方くろほうに白銀の鯉こひくはせて||黒方は薫物たきものの一種。黒方を銀でできた鯉の作り物にくわえさせて。
- \* 8 奉れたり||「奉り入れたり」と同じ意味。
- \* 9 白銀の川に沈の松灯して、沈の男に持たせ||沈は香木たきものの一種。銀の岸に沈で作ったたいまつを、同じく沈で作った男に持たせて。

問1 仲忠は琵琶や箏の琴の音色を聞いて、どのようなことを考えていたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 今宮とあて宮の奏でる音が、自分の弾く調子と同じだと聞くにつれ落ち着いてはられず、もし自分が破滅しそうなれば母親はあて宮を隠してしまうだろうと思ひ、そんな母親がわずらわしく思われた。

b 今宮とあて宮の奏でる音が、自分の弾く調子と同じだと聞くにつれ落ち着いてはられず、たとえ自分が破滅してしまってもあて宮を奪いたい、母親のことは思ひ浮かぶものの、あて宮がいとおしく思われた。

c 今宮とあて宮の奏でる音が、自分の弾く調子と同じだと聞くにつれ落ち着いてはられず、たとえ自分が破滅してしまってもあて宮を奪いたいと思うが、母親のことが思ひ浮かび、そんな母親がわずらわしく思われた。

d 今宮とあて宮の奏でる音が、自分の弾く調子と同じだと聞くにつれ心が騒ぎ、もし自分が破滅してしまつたらあて宮も気持ちを見せてくれるだろうと思ひ、母親のことを思うとやはり心が痛んだ。

e 今宮とあて宮の奏でる音が、自分の弾く調子と同じだと聞くにつれ心が騒ぎ、たとえ自分が破滅してしまつてもあて宮を奪いたいと思うが、母親のことを思うとやはり心が痛んだ。

問2 仲忠は、琴の音色について孫王の君にどのように語ったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 仲忠は「今でさえもこのように外で聞いてもすばらしい音色でお弾きになるのですから、近くで聞いたらいっそうすばらしい音色なのでしょう。こんなに心がひかれるから、人が過ちを犯すことになるのでしょうか。私は一所懸命に我慢していますが、もうあて宮への思いをこらえられそうにありません」と孫王の君に語った。

b 仲忠は「今でさえもこのように琴を上手にお弾きになるのですから、将来はどんなになられるでしょう。こんなにももの覚えがよいと、間違えることもないのでしょいか。私は一所懸命に我慢していますが、この感動をこらえられそうにありません」と孫王の君に語った。

c 仲忠は「今でさえもこのように外で聞いてもすばらしい音色でお弾きになるのですから、近くで聞いたらもっとすばらしい音色なのでしょう。こんなにも覚えがよいと、間違えることもないのでしょいか。私は一所懸命に我慢して練習をしていますが、間違いをなくすことができません」と孫王の君に語った。

d 仲忠は「今でさえもこのように琴を上手にお弾きになるのですから、将来はどんなになられるでしょう。こんなに心がひかれるから、人が過ちを犯すことになるのでしょい。私は一所懸命に我慢していますが、もうあて宮への思いをこらえられそうにありません」と孫王の君に語った。

e 仲忠は「今でさえもこのように琴を上手にお弾きになるのですから、将来はどんなになられるでしょう。こんなに心がひかれるから、人が過ちを犯すことになるのでしょい。私は強くあて宮のことを思っていますが、あて宮はこの思いに承えてくださらないのでしょいか」と孫王の君に語った。

問3 問2の仲忠の発言に続けて、孫王の君と仲忠はどのような会話をかわしたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 孫王の君が「性格のよくない人こそ清らかな心を持つべきですよ。情けないことをおっしゃいますね」と言ったところ、仲忠は「これから一切あて宮のことを振り返ることはしません。しかし、最後までお言葉をいただけないままでもいられません」と言ったので、孫王の君は「もう何もおっしゃらないでください」と答えた。

b 孫王の君が「性格のよくない人こそ清らかな心を持つべきですよ。気味の悪いことをおっしゃいますね」と言ったところ、仲忠は「何度あて宮のことを思い返したることか。でも、あて宮はこれでいいのでしょいか。どうしたらよいでしょいか」と言ったので、孫王の君は「もう何もおっしゃらないでください」と答えた。

c 孫王の君が「分別のない者がそのようなお気持ちになるのですよ、困ったことをおっしゃいますね」と言ったところ、仲忠は「何度あて宮への思いを伝えようとしたことか。どうしたらよいでしょいか」と言ったので、孫王の君は「もう何もおっしゃらないでください」と答えた。

d 孫王の君が「分別のない者がそのようなお気持ちになるのですよ、嘆かわしいことをおっしゃいますね」と言ったところ、仲忠は「これから一切あて宮のことを振り返ることはしません。しかし、最後までお言葉をいただけないままでもいられません」と言ったので、孫王の君は「もう何もおっしゃらないで

ください」と答えた。

e 孫王の君が「分別のない者がそのようなお気持ちになるのですよ、いやなことをおっしゃいますね」と言ったところ、仲忠は「何度あて宮のことを思い返したことか。でも、このままではいられません。どうしたらよいでしょうか」と言ったので、孫王の君は「もう何もおっしゃらないでください」と答えた。

問4 仲忠が、奥に入ろうとした孫王の君をひきとめたときのやりとりはどのようだったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 仲忠が「何度も申し上げますが、なんとかして一言、声だけでも聞きたいのです。できそうありませんか」と聞いたところ、孫王の君は「いいかげんなことですね。時々おっしゃるお返事も、申し上げにくくなさっているのを、あれこれ説得申しているのです。直接お会いしたいとお思いなさるだけであつたことです」と答えた。

b 仲忠が「何度も申し上げますが、なんとかして一言、声だけでも聞きたいのです。できそうありませんか」と聞いたところ、孫王の君は「お気の毒なことですね。時々あなたがおっしゃるお返事も、聞きたくなさそうにしていらつしやるのを、あれこれ説得申しているのです。お会いできる方法が思いつくならどんなにすばらしいことでしょう」と答えた。

c 仲忠が「まじめに申し上げますが、なんとかして一言、声だけでも聞きたいのです。できそうありませんか」と聞いたところ、孫王の君は「みっともないことですね。時々あなたがおっしゃるお返事も、聞きたくなさそうにしていらつしやるのを、あれこれ説得申しているのです。直接お会いしたいとお思いなさるだけでも心外です」と答えた。

d 仲忠が「まじめに申し上げますが、なんとかして一言、物越しにでもお話し申し上げたいのです。できそうありませんか」と聞いたところ、孫王の君は「いやなことですね。時々おっしゃるお返事も、申し上げにくくなさっているのを、あれこれ説得申しているのです。直接お会いしたいとお思いなさることだけでも心外です」と答えた。

e 仲忠が「まじめに申し上げますが、なんとかして一言、物越しにでもお話し申し上げたいのです。できそうありませんか」と聞いたところ、孫王の君は「つらいことですね。時々おっしゃるお返事も、申し上げにくくなさっているのを、あれこれ説得申しているのです。お会いできる方法が思いつくならど

なにすばらしいことでしょう」と答えた。

問5 仲忠はあて宮にあてた手紙で、どのようなことを伝えたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 仲忠は「浅い瀬を嘆いて川を渡っているいかだ師は、どれほどの夕暮れを嘆いてきたことでしょうか」という歌を詠み、「長い間このように思っというらっしゃるようですが、今夜だけ、一言だけでも直接お話ししたいのです。申し上げるだけなら何の問題もないでしょう」とあて宮に伝えた。

b 仲忠は「浅い瀬を嘆いて川を渡っているいかだ師は、どれほどの夕暮れを嘆いてきたことでしょうか。私の思いが浅いと思っというのでしょうか」という歌を詠み、「長い間このように思っというらっしゃるようですが、今夜もまた、一言さえも話を聞いてくださらないのですね。お聞きくださるだけなら何の問題もないでしょう」とあて宮に伝えた。

c 仲忠は「浅い瀬を嘆いて川を渡っているいかだ師は、どれほどの夕暮れを嘆いてきたことでしょうか。私もあなたの思いの浅さを嘆いています」という歌を詠み、「このように長い時間悲しい思いをしましたが、今夜だけ、一言だけでも直接お話ししたいのです。お答えいただくだけなら何の問題もないでしょう」とあて宮に伝えた。

d 仲忠は「浅い瀬を嘆いて川を渡っているいかだ師は、どれほどの夕暮れを嘆いてきたことでしょうか。私もあなたの思いの浅さを嘆いています」という歌を詠み、「このように長い時間悲しい思いをしましたが、今夜もまた、一言さえも話を聞いてくださらないのですね。お聞きくださるだけなら何の問題もないでしょう」とあて宮に伝えた。

e 仲忠は「浅い瀬を嘆いて川を渡っているいかだ師は、どれほどの夕暮れを嘆いてきたことでしょうか。私もあなたの思いの浅さを嘆いています」という歌を詠み、「このように長い時間悲しい思いをしましたが、今夜だけ、一言だけでも直接お話ししたいのです。お聞きくださるだけなら何の問題もないでしょう」とあて宮に伝えた。



問6 仲忠の手紙を見たあて宮と、その反応を伝え聞いた仲忠の様子はどのようだったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a あて宮は、近くに仲忠がいたことを知って、「私の琴を聞いてしまわれたのでしょね。まあ気がひけること。皆のほうが私より上手なのですよ。もうあの方のおっしゃることなど聞きません」と言って、奥に入ってしまった。仲忠は孫王の君に「情けないことだ。やはり、孫王の君、今夜でなくともごまかしておいてください」とお願いした。

b あて宮は、近くに仲忠がいたことを知って、「私の琴を聞いてしまわれたのでしょね。まあきまりの悪いこと。あの方はなんでも上手なのですよ。もうあの方のおっしゃることなど聞きません」と言って、奥に入ってしまった。仲忠は孫王の君に「情けないことだ。でも、孫王の君、今夜でなくとも取り計らってください」とお願いした。

c あて宮は、近くに仲忠がいたことを知って、「私の琴を聞いてしまわれたのでしょね。まあきまりの悪いこと。あの方はなんでも上手なのですよ。もうあの方のおっしゃることなど聞きません」と言って、奥に入ってしまった。仲忠は孫王の君に「つらいことだ。でも、孫王の君、今夜でなくともごまかしておいてください」とお願いした。

d あて宮は、近くに仲忠がいたことを知って、「私の琴を聞いてしまわれたのでしょね。まあ気がひけること。皆のほうが私より上手なのですよ。もうあの方のおっしゃることなど聞きません」と言って、奥に入ってしまった。仲忠は孫王の君に「つらいことだ。やはり、孫王の君、今夜でなくとも取り計らってください」とお願いした。

e あて宮は、近くに仲忠がいたことを知って、「私の琴を聞いてしまわれたのでしょね。まあ気がひけること。あの方はなんでも上手なのですよ。もうあの方のおっしゃることなど聞きません」と言って、奥に入ってしまった。仲忠は孫王の君に「不愉快なことだ。でも、孫王の君、今夜でなくともごまかしておいてください」とお願いした。

問7 仲忠は一晚中泣きながら語らう中で、孫王の君にどのようなことを語ったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 仲忠は「私はほかの人よりも親にお仕えしようという孝心が深いのに、あて宮を恋慕う気持ちが起こってからは、あて宮のために少しでも長く生きてい

たいと思うようになったので、今さらに不孝の人になりそうなのが悲しいのです。あて宮と直接お話ができれば、少しはあて宮への思いが静まり、親のお世話もできるでしょう」と語った。

b 仲忠は「私はほかの人よりも親にお仕えしようという孝心が深いのに、急にあて宮に会いたいと思いついたために、少しも親のそばにいたいとは思わなくなってしまい、親不孝なことになっているのが残念なのです。あて宮と直接お話ができれば、少しは心も落ち着くと思っています」と語った。

c 仲忠は「私はほかの人よりも親にお仕えしようという孝心が深いのに、あて宮を恋慕う気持ちが起こつてからは、片時も生きていけるとは思われないので、今さらに不孝の人になりそうなのが悲しいのです。あて宮と直接お話ができれば、少しは心も落ち着くと思っています」と語った。

d 仲忠は「私はほかの人よりも親にお仕えしようという孝心が深いのに、急にあて宮に会いたいと思いついたために、片時も生きていけるとは思われないので、今さらに不孝の人になりそうなのが悲しいのです。あて宮と直接お話ができれば、少しはあて宮への思いが静まり、親のお世話もできるでしょう」と語った。

e 仲忠は「私はほかの人よりも親にお仕えしようという孝心が深いのに、あて宮を恋慕う気持ちが起こつてからは、少しも親のそばにいたいとは思わなくなってしまい、親不孝なことになっているのが残念なのです。あて宮と直接お話ができれば、少しはあて宮への思いが静まり、親のお世話もできるでしょう」と語った。

問8 仲忠とあて宮はどのように和歌を贈答したか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 仲忠が「夜が来るたびごとに、私はあなたを思う涙の川に浮かんで、あなたへの恋心が尽きてしまいそうほど寂しいのです」と詠んだところ、あて宮は「川の瀬に映った、ご自分が持っている篝火の影を、ご自分の恋だと思っていらいっしやるでしょう」と返歌をした。

b 仲忠が「一晩中、私はあなたを思う涙の川に浮かんで、尽きないあなたへの恋心に悩み続けています」と詠んだところ、あて宮は「川の瀬に映った、ご自分が持っている篝火の影を、ご自分の恋だと思っていらいっしやるでしょう」と返歌をした。

c 仲忠が「一晩中、私はあなたを思う涙の川に浮かんで、尽きないあなたへの恋心に悩み続けています」と詠んだところ、あて宮は「川の瀬に浮かべること

ができるほど軽い恋として、〽️自分が持っている篝火の影を、私の恋だと思っていらいっしやるのでしょ

d 仲忠が「一晩中、私はあなたを思う涙の川に浮かんで、あなたへの恋心が尽きてしまいそうなほど寂しいのです」と詠んだところ、あて宮は「川の瀬に浮かべることができるほど軽い恋として、〽️自分が持っている篝火の影を、〽️自分の恋だと思っていらいっしやるのでしょ」と返歌をした。

e 仲忠が「夜が来たたびごとに、私はあなたを思う涙の川に浮かんで、尽きないあなたへの恋心に悩み続けています」と詠んだところ、あて宮は「川の瀬に浮かんでいる、〽️自分が持っている篝火の影を、私の恋だと思っていらいっしやるのでしょ」と返歌をした。

問9 傍線部④を現代語訳せよ。

次の文章は、橘氏忠が遣唐使となつて唐の国へわたり、そこでさる老人から聞いて知つた華陽公主(唐の皇帝の皇女で、琴の名手)を、琴の師とすべく尋ねる場面である。これを読んで、後の問いに答えよ。

暮れもはてぬに急ぎ出でて、\*<sub>1</sub>聞きしかたに尋ね行く。いみじき馬をいとうち早めつつ、夜中にもなりぬらむと見ゆるほどに、同じごと高き楼の上に、琴の声聞くゆ。はるかに尋ね登れば、道いと遠し。これは鏡のごと光を並べ、いらかを連ねて造れるものから、屋敷少なく、かりそめなる屋に人住むべしと見ゆれど、わざと木陰に隠れつつ、楼を尋ね登れば、言ひしに変はらず、えもいはずめでたき玉の女、ただひとり琴を弾きあたり。

乱るる心あるなどはさばかりいひしかど、うち見るよりもおほえず、そこら見つる舞姫の花の顔も、ただ土のごとくになりぬ。ふるさとにていみじと思ひし\*<sub>2</sub>神奈備の皇女も、見あはするに、ひなびみだれたまへりけり。あまりことごとしくも見ゆべきかんざし、髪上げたまへる顔つき、さらけ遠からず。あてになつかしう、きよくらうたげなること、ただ秋の月のくまなき空に澄みのぼりたるこちぞするに、いみじきまどひをおさへて、念じ返しつつ、かの琴を聞けば、よろづのものねひとつに合ひて、空に響き通へること、げにありしに多くまさりたり。

とかくのたまふこともなければ、ただ夢路にまどふこちながら、\*<sub>3</sub>この得し琴を取りて掻き立つるを見て、もとの調べを弾きかへて、はじめより人の習ふべき手をとどこほるところなく、ひとわたり弾きたまふを聞くままに、やがてたどらずこのねにつけて掻き合はすれば、我が心も澄みまさるからに、すずろに深きところ添ひて、やがて同じ声にねの出づれば、手に任せてもるともに弾くに、たどるところなく弾き取りつ。

これも月の明け行けば、琴をおしやりて、帰らんとしたまふ時に、悲しきことものに似ず、おほえぬ涙こぼれ落ちて、言ひ知らぬこちするに、公主もいたうものをおぼし乱れたるさまにて、月の顔をつくづくとながめたまへるかたはらめ、似るものなく見ゆ。例の文作り交して別れなむとする時、「この残りの手は、九月十三夜より五夜になん尽くすべき」とのたまふ。

雲に吹く風も及ばぬ波路より問ひ来む人はそらに知りなき

とのたまへば、

雲の外遠ほかつさかひの国人もまたかばかりの別れやはせし

と聞こゆるほどもなく、人びと迎へにまゐる音すれば、はしのかたの山の陰より、のたまふまに隠るへ出でぬ。

明けはてぬ先にと急ぎ帰れど、巳みの時ばかりにぞうちやすみたまへど、身には心も添はずながめられて、「さらにいみじき心の乱れも出できぬべきかな」と、心ひとつにのみぞ思ひくたくる。こよひは便なげにのたまひつれど、かひなきながら、おはすらむさまをいかに見むと思へど、帝、月の宴したまひて、よすがら遊び明かしたまふ。

次の日もいとま許されず、まつはし暮らさせたまふ。雨いみじく降りて、心細き旅寝も、いまさらに面影添へるは、げにあぢきなき身の思ひなり。知らざりし思ひを旅の身に添へていとど露けき夜の雨かな

(『松浦宮物語』による)

注

\*1 聞きしかた老人から聞いていた方角。

\*2 神奈備かむなびの皇女みこ橘氏忠が日本にいた時に恋した女性。

\*3 この得し琴老人から橘氏忠がもらった琴。

問1 華陽公主の様子は、橘氏忠にはどのように感じられたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a たいそう仰々しく見えるかんざしや、髪をあげた顔つきは、近寄りたく、小柄でいじらしくて、清楚でいかにも可憐かれんな華陽公主の様子は、まるで秋の月が曇りのない空に澄み昇っているような気持ちでした。

b あまりに仰々しくも見られそうなかんざしや、髪をあげた顔つきは、決してよそよそしくなく、上品で好感がもて、清らかでいかにも愛らしい華陽公主の様子は、まるで秋の月が曇りのない空に澄み昇っているような気持ちでした。

- c たいそう仰々しく見えるかんざしや、髪をあげた顔つきは、決してよそよそしくなく、飾り気がなく人なつっこくて、清潔でいかにも子どもじみた華陽公主の様子は、まるで秋の月が曇りのない空に澄み昇っているような気持ちでした。
- d たいそう仰々しく見えるかんざしや、髪をあげた顔つきは、近寄りがたく、寡黙で少し気取ってこざっぱりした、いかにも皇女らしい華陽公主の様子は、まるで秋の月が曇りのない空に澄み昇っているような気持ちでした。
- e あまりに仰々しくも見られそうなかんざしや、髪をあげた顔つきは、決してよそよそしくなく、無頓着であつさりして、ものにこだわらない素朴な華陽公主の様子は、まるで秋の月が曇りのない空に澄み昇っているような気持ちでした。

問2 華陽公主が弾く琴の音はどのようなものであったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 今また聞くことになった華陽公主の弾く琴の音は、さまざまなものの音とひとつに調和しており、空に響きわたっているのは、なるほど以前聞いた華陽公主の琴の音にくらべてはるかに優れていた。
- b 華陽公主の弾く琴の音は、さまざまなものの音とひとつに調和しており、空に響きわたっているのは、なるほど以前聞いた老人の琴の音にくらべてはるかに優れていた。
- c 華陽公主の弾く琴の音は、さまざまなものの音とひとつに調和しており、空に響きわたっているのは、なるほど今、橘氏忠自身の弾いた琴の音にくらべてはるかに優れていた。
- d 今また聞くことになった華陽公主の弾く琴の音は、すべての人の歌声とひとつに調和しており、空に響きわたっているのは、なるほど以前聞いた華陽公主の琴の音にくらべてはるかに優れていた。
- e 華陽公主の弾く琴の音は、すべての人の歌声とひとつに調和しており、空に響きわたっているのは、なるほど今、橘氏忠自身の弾いた琴の音にくらべてはるかに優れていた。

問3 橘氏忠が、老人からもらった琴を弾くのを見て、華陽公主はどうしたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 華陽公主は、それまで橘氏忠が弾いていた楽曲を改めて、だれでもが習わなければならない弾き方で初心者向けの曲目を始めから、さらさらと一通りお弾きになられた。

b 華陽公主は、それまで自身が弾いていた楽曲を改めて、だれでもが習わなければならない曲目を始めから、さらさらと一通りお弾きになられた。

c 華陽公主は、それまで自身が弾いていた琴を取り換えて、だれでもが習わなければならない琴で初心者向けの曲目を始めから、ゆっくり丁寧にお弾きになられた。

d 華陽公主は、それまで橘氏忠が弾いていた楽曲を改めて、初心者ならだれでも習わなければならない曲目を、さらさらと一通りお弾きになられた。

e 華陽公主は、それまで橘氏忠が弾いていた楽曲を改めて、初心者ならだれでも習わなければならない弾き方で同じ曲目を、ゆっくり丁寧にお弾きになられた。

問4 華陽公主が琴を弾くのを聞いて、橘氏忠はどのように反応したか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 橘氏忠は、すぐに躊躇ちゅうちよせず華陽公主の音色のあとに続いて合奏すると、自分の心も澄みきってゆくとともに、思いがけず深いところが加わって、ただちに華陽公主と同じ音色が出るようになった。

b 橘氏忠は、初めは華陽公主の演奏にうまくついてゆけず、見よう見まねで合奏すると、いつしか自分の心も澄みきってゆくとともに、次第に深いところが加わって、やがては華陽公主と同じ音色が出るようになった。

c 橘氏忠は、やがて華陽公主の音色のあとを間違えることなく続いて合奏すると、自分の心も澄みきってゆくとともに、思ったとおり深いところが加わって、やがては華陽公主と同じ音色が出るようになった。

d 橘氏忠は、途中から華陽公主の演奏にうまくついてゆけず、しどろもどろに合奏している内に、いつしか自分の心も澄みきってゆくとともに、次第に深いところが加わって、やがては華陽公主と同じ音色が出るようになった。

e 橘氏忠は、やがて緊張を解きほぐして華陽公主の音色のあとを間違えることなく続いて合奏すると、自分の心も澄みきってゆくとともに、思いがけず深いところが加わって、ただちに華陽公主と同じ音色が出るようになった。

問5 華陽公主が琴の演奏を止めて帰ろうとするとき、橘氏忠と公主はそれぞれどんな様子であったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 橘氏忠の悲しいことはたとえようもなく、心当たりのない涙が落ち、いいようのない気持ちがするが、華陽公主はひどく感動している様子で、月をじつとながめている後姿は、たとえようもなく美しく見えた。

b 橘氏忠の悲しいことはたとえようもなく、かつて経験をしたこともない涙が落ち、いいようのない気持ちがするが、華陽公主は茫然自失の様子で、月をじつとながめている立ち姿は、たとえようもなく美しく見えた。

c 橘氏忠の悲しいことはたとえようもなく、自然と涙が落ち、いいようのない気持ちがするが、華陽公主はおどろきのあまり心乱れている様子で、月をじつとながめている泣き顔は、たとえようもなく美しく見えた。

d 橘氏忠の悲しいことはたとえようもなく、忘れられないほど涙が落ち、いいようのない気持ちがするが、華陽公主はひどく心配のあまり心乱れている様子で、月をじつとながめて恥じらっている姿は、たとえようもなく美しく見えた。

e 橘氏忠の悲しいことはたとえようもなく、思わず涙が落ち、いいようのない気持ちがするが、華陽公主はひどく思い乱れている様子で、月をじつとながめている横顔は、たとえようもなく美しく見えた。

問6 「雲の外…」の和歌についての説明として、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 「雲の外…」という和歌は、雲を隔てるほど遠い国からやってきたあなたを迎える私も、これほど悲しい別れをしたことはありませんでした、という内容で、橘氏忠のよんだ「雲に吹く…」の和歌に対して華陽公主がよんだものである。

b 「雲の外…」という和歌は、雲を隔てるほど遠い国からやってきたあなたを迎える私も、これほど悲しい別れをしたことはありませんでした、という内容



で、自身の「雲に吹く…」の和歌にひき続き華陽公主がよんだものである。

c 「雲の外…」という和歌は、雲を隔てるほど遠い国からやってきた私も、これほど悲しい別れをしたことはありませんでした、という内容で、華陽公主のよんだ「雲に吹く…」の和歌に対して橘氏忠がよんだものである。

d 「雲の外…」という和歌は、雲を隔てるほど遠い国からやってきた私も、これほど悲しい別れをしたことはありませんでした、という内容で、自身の「雲に吹く…」の和歌にひき続き橘氏忠がよんだものである。

e 「雲の外…」という和歌は、雲を隔てるほど遠い国からやってきたあなたも、これほど悲しい別れをしたことはないでしょう、という内容で、橘氏忠のよんだ「雲に吹く…」の和歌に対して華陽公主がよんだものである。

問7 夜明け前に急ぎ帰り床にいた橘氏忠の胸中は何のようなものであったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 虚しさに身体が浮かび上がったようにもの思いにふけて、「まったく正気を逸した状態になってしまいそうだ」と、ひとり心のうちに思い悩むのであった。

b 虚しさに身体が浮かび上がったようにもの思いにふけて、「いっそう恋い慕う心が増してしまいそうだ」と、ひとり心のうちに思い悩むのであった。

c 魂が身体から抜け出たようにもの思いにふけて、「たいそう心を乱したままで出かねなければならない」と、ひとり心のうちに思い悩むのであった。

d 魂が身体から抜け出たようにもの思いにふけて、「この上ひどい心の迷いも生じてしまいそうだ」と、ひとり心のうちに思い悩むのであった。

e 魂が身体から抜け出たようにもの思いにふけて、「またはや相手の心を乱してしまいそうだ」と、ひとり心のうちに思い悩むのであった。

問8 「知らざりし…」の和歌についての説明として、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a この和歌は、旅のつらさに恋の物思いが付け加わって、草葉の露と夜の雨とでいっそうしめっぽくなることだよ、というもので、「露」には、自然現象の「露」と「まったく」の意が掛けられている。

- b この和歌は、旅のつらさに恋の物思いが付け加わって、草葉の露と夜の雨とでいっそうしめっぽくなることだよ、というもので、「露」には自然現象の「露」と「少しも」の意が掛けられている。
- c この和歌は、旅のつらさに帝の仕打ちが付け加わって、涙と夜の雨とでいっそうしめっぽくなることだよ、というもので、「知らざりし」は「これまで経験したこともなかった」の意である。
- d この和歌は、旅のつらさに帝の仕打ちが付け加わって、涙と夜の雨とでいっそうしめっぽくなることだよ、というもので、「知らざりし」は「帝がこんなに冷たい人だとは知らなかった」の意である。
- e この和歌は、旅のつらさに恋の物思いが付け加わって、涙と夜の雨とでいっそうしめっぽくなることだよ、というもので、「露けき」は、「雨でしめっぽくなる」と「涙でしめっぽくなる」の意が掛けられている。

問9 傍線部④を、動作主を明らかにした上で現代語訳せよ。

次の文章は、『土佐日記』の一部である。これを読んで、後の問いに答えよ。

二十七日。\*<sub>1</sub>大津より\*<sub>2</sub>浦戸を指してこぎいづ。

かくあるうちに、きやうにて生まれたりしをむなぐ、国にてはかにうせにしかば、このごろのいでたちいそぎをみれど、なにこともいはず。きやうへ帰るに、をむなごのなきのみぞ悲しび恋ふる。あるひとびともえたはず。このあひだに、あるひとの書きていさせる歌、

みやこへとおもふをものかなしきはかへらぬひとのあればなりけり

また、ある時には、

あるものとわすれつなほなきひとをいづらととふぞかなしかりける

といひける間に、\*<sub>3</sub>鹿児の崎といふ所に、かみの兄弟、はるかろまたことひと、これかれ、酒なにと持て追ひ来て、磯に下りあて、別れ難きことをいふ。かみの館たてのひとびとの中に、この来たるひとびとぞ、心あるやうには、いはれほのめく。かく別れ難くいひて、かのひとびとの、\*<sub>4</sub>くち網も諸持ちにて、このうみべにて、になひいさせる歌、

をしと思ふひとやとまると葦鴨やしがなのうちむれてこそわれはきにけれ

といひてありければ、いといたくめでて、行くひとの詠めりける、

さをさせこそこひも知らぬわたつみの深き心を君にみるかな

といふ間に、かちとり、もののあはれも知らで、おのれし酒をくらひつれば、早くいなむとて、「潮満ちぬ。風も吹きぬべし」とさわげば、船に乗りなむとす。このをりに、あるひとびと、をりふしにつけて、漢詩からうたども、時に似つかはしきいふ。また、あるひと、西国なれど\*<sub>5</sub>甲斐歌などいふ。「かく歌ふに、船屋形ちりの塵も散り、空行く雲も漂ひぬ」とぞいふなる。

こよひ、浦戸にとまる。\*<sub>6</sub>藤原のときざね、橘のすゑひら、ことひとびと、追ひ来たり。

二十八日。浦戸よりこぎいでて、\*<sub>7</sub>大湊を追ふ。

この間に、以前のかみの子、\*<sub>8</sub>山口のちみね、酒、よきものども持て来て、船に入れたり。行く行く飲み食ふ。

二十九日。大湊にとまれり。

医師、ふりはへて、\*<sub>9</sub>屠蘇、白散、酒くはへて持て来たり。こころざしあるに似たり。

元日。なほ同じとまりなり。

白散を、ある者、夜のまとて、船屋形にさしはさめりければ、風にふきならさせて、海に入れて、え飲まずなりぬ。\*<sub>10</sub>芋莖、荒布も、菌固もなし。かうやうのものなき国なり。求めしもおかず。ただ、\*<sub>11</sub>押鮎の口をのみぞすふ。このすふひとびとの口を、押鮎、もし思ふやうあらむや。「今日は都のみぞ思ひやらるる。\*<sub>12</sub>小家の門の注連縄の鱈の頭、終ら、いかにぞ」とぞいひあへなる。

二日。なほ大湊にとまれり。

講師、もの、酒おこせたり。

三日。同じ所なり。

もし、風波の、しばしとをしむ心やあらむ。こころもとなし。

四日。風吹けば、えいでたたず。

\*<sub>13</sub>まさつら、酒、よきものたてまつれり。この、かうやうにもの持て来るひとに、なほしもえあらで、\*<sub>14</sub>いさをけわざせさす。ものもなし。にぎははしきやうなれど、負くるこちちす。

五日。風波止まねば、なほ、同じ所により。

ひとびと、絶えず訪ひに来。

六日。昨日のごとし。

七日になりぬ。同じ港にあり。

今日は\*<sub>5</sub>白馬を思へど、かひなし。ただ、波の白きのみぞみゆる。

かかる間に、ひとの家の、池と名ある所より、鯉こひはなく、鮒ふなよりはじめて、川のも海のも、ことものども、\*<sub>16</sub>長櫃ながびになひ続けておこせたり。若菜ぞ今日をば知らせたる。歌あり。その歌、

浅茅生あさぢふの野辺にしあれば水もなき池に摘みつる若菜なりけり

いとをかし。この池といふは、所の名なり。よきひとの、男につきて下りて、住みけるなり。この長櫃ながびのものは、みなひと、童わらはまでにくれたれば、飽き満ちて、船子どもは腹鼓を打ちて、海をさへおどろかして、波たてつべし。

かくて、この間にこと多かり。今日、\*<sub>17</sub>破籠やぶろう持たせて来たるひと、その名などぞや、今思ひいでむ。このひと、歌詠まむと思ふ心ありてなりけり。とかくいひいて、「波のたつなること」と憂うれへいひて、詠める歌、

行く先にたつ白波の声よりも遅れて泣かむ我やまさらむ

とぞ詠める。いと大声なるべし。持て来たるものよりは、歌はいかがあらむ。この歌を、これかれあはれがれども、ひとりも返しせず。しつべきひとまじれど、これをのみいたがり、ものをのみ食ひて、夜更けぬ。この歌主、「まだ罷まからず」といひてたちぬ。あるひとの子の童なる、ひそかにいふ。「まろ、この歌の返しせむ」といふ。驚きて、「いとをかしきことかな。詠みてむやは。詠みつべくは、はやいへかし」といふ。「罷まからず」とてたちぬるひとを待ちて詠まむ」とて求めけるを、夜更けぬとにやありけむ、やがて往いにけり。「そもそも、いかが詠んだる」と、いぶかしがりて問ふ。この童、さすがに恥ぢていはず。しひて問へば、いへる歌、

行くひととまとまるも袖の涙川みきは江えのみこそ濡れまさりけれ

となむ詠める。かくはいふものか。うつくしければにやあらむ、いと思はずなり。「童言わらふことばにては何かはせむ。媪おむな、翁おきな、手て擦おしつべし。悪しくもあれ、いかにもあれ、便りあらばやらむ」とて、置かれぬめり。

八日。障さはることありて、なほ同じ所なり。

こよひ、月は海にぞ入る。これを見て、業平の君の、「\*<sub>18</sub>山の端逃げて入れずもあらなむ」といふ歌なむ思ほゆる。⑧もし海辺うみべにて詠まましかは、さ「波たち障へて

入れずもあらなむ」とも詠みてましや。今、この歌を思ひいでて、あるひとの詠めりける、

照る月の流るるみれば天の川いづるみなとは海にざりける

とや。

九日のつとめて、大湊より\*1。奈半のとまりを追はむとて漕ぎいでけり。

注

- \* 1 大津おほつ 高知市大津付近。
- \* 2 浦戸うらど 高知市浦戸付近。
- \* 3 鹿兒の崎かこ さき 高知市大津鹿兒付近。
- \* 4 ぐち網あみも諸持ちにて 皆で協力して。
- \* 5 甲斐歌 甲斐国かひうた（現在の山梨県）の歌。
- \* 6 藤原のときざね、橘のすゑひら ともに土佐国府の役人か。
- \* 7 大湊おほみなと 高知県南国市前浜付近か。
- \* 8 山口のちみね 前国守の子。
- \* 9 屠蘇とつそ、白散びやくさん ともに漢方薬の一種。酒に入れて正月に飲むと邪気を払うとされた。
- \* 10 芋茎いもし、荒布あらふ、齒固はがため ともに正月用の食物。
- \* 11 押鮎おしあゆ 塩押しにした鮎。土佐の名物。
- \* 12 小家の門こへ かどの注連繩しりくべなはの鮎なよしの頭かしら、柎ひびらぎ 京都の一般家庭の正月の飾り。
- \* 13 まさつら 不詳。親しい人か。
- \* 14 いささけわざせさす ちよつとした返礼をさせる。
- \* 15 白馬あをむま 一月七日の宮廷行事。
- \* 16 長櫃ながびつ 蓋のついた横長の木箱。二人で担ぐ。
- \* 17 破籠わりご 檜の薄板で作った食物の容器。

\* 18 山の端逃げて入れずもあらなむⅡ在原業平の「飽かなくにまだきも月の隠るるか山の端逃げて入れずもあらなむ」（『古今集』）の歌のこと。

\* 19 奈半なはⅡ安芸郡奈半利町附近。

問1 「きやうにて生まれたりしをむなご」をめぐる説明として、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 都で生まれた女の子が故郷で急に亡くなってしまい、急いで都へ帰ろうとするけれども、何も話す気になれない。ある人は「都へ帰ろうとしても悲しいことは、生き返ることのない女の子が故郷にいるからであった」と歌を詠んだ。また、亡くなったことをふと忘れて、女の子がどこにいるのかと尋ねてしまふのは悲しいことである。

b 都で生まれた女の子が任地で急に亡くなってしまい、急いで都へ帰ろうとするけれども、何も話す気になれない。ある人は「都へ帰ろうとしても悲しいことは、一緒に帰ることのない女の子がいるからであった」と歌を詠んだ。また、亡くなった女の子の事情について、あれこれと尋ねられるのは悲しいことである。

c 都で生まれた女の子が任地で急に亡くなってしまい、都に帰る準備をするのを見ても、何も話す気になれない。ある人は「都へ帰ろうとしても悲しいことは、一緒に帰ることのない女の子がいるからであった」と歌を詠んだ。また、亡くなったことをふと忘れて、女の子がどこにいるのかと尋ねてしまうのは悲しいことである。

d 都で生まれた女の子が故郷で急に亡くなってしまい、都に帰る準備をするのを見ても、何も話す気になれない。ある人は「都へ帰ろうとしても悲しいことは、生き返ることのない女の子が故郷にいるからであった」と歌を詠んだ。また、亡くなった女の子の事情について、あれこれと尋ねられるのは悲しいことである。

e 都で生まれた女の子が任地で急に亡くなってしまい、急いで都に帰ろうとするけれども、何も話す気になれない。ある人は「都へ帰ろうとしても悲しいことは、生き返ることのない女の子がいるからであった」と歌を詠んだ。また、亡くなったことをふと忘れて、女の子がどこにいるのかと尋ねてしまうのは悲しいことである。

問2 国守の帰任を惜しむ人々は、何とってその気持ちを表したか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a あなたさまが都へ帰りたいと思う、その気持ちが私にとつて、とても悲しいものがあります。ここに残る私たちがいることをどうぞ忘れないでください。
- b あなたさまがいつまでもここにいると思っていて、いつかいなくなることを忘れてしまいました。帰られる人はどこにいますのでしよと問うと悲しくなります。

c この地を離れて帰ってしまうのが惜しく思われます、そんなあなたさまが、もしかすると留まってくれるかもしれないと思つて、皆でこうしてやつて来たのです。

d 棹をさして測ろうにも、底までは余りにも深いものがあります。そんな海のような深い心をあなたさまに見出しました。どうぞ帰らないでください。

e もうそろそろ満潮の時刻がやつて来ます。また、もうすぐ風も吹き出すでしょう。悲しいことですが、船に乗つて出発しなければなりません。

問3 一行は大湊で足止めされてしまう。この時、大湊に留まらなければならない状況についてどのよう考えたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 一行の内のひとりが病を得て、医師を呼んだところ、白散などの薬を酒に加えて飲ませることになったが、薬を飲むのをいやがったために留まらざるを得ないと考えた。

b お正月を迎えたにもかかわらず、田舎であるために、本来であれば正月に長寿を願つて食するはずのものもない上、飾るべき注連縄もなく、こんなに何も無い状態では、出航などできるはずがないと考えた。

c 風が激しく、波も荒いために出航できないのだが、それを、風や波でさえも、我々にもう少しここに留まっていて欲しいと思つているのだろうかと思つた。

d 毎日のようにお酒や食物を差し入れてくれる人があり、そうした人々の好意に甘えているうちに、残りたいという気持ちに負けて、このまま出航しなくて



もよいと考えた。

e 最初は仕方ないと思っていたが、何日経過しても出航できず、白馬の節会の日になってしまい、何をしても何の甲斐もないため、どうにでもなれと考えた。

問4 七日にあったことの説明として、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 池というところに鯉はいないけれど、鮒をはじめ川で採れるもの、海で採れるもの、その他たくさんものを長櫃に入れて持って来てくれた。添えられていた歌には「夏に穂を出す萱かやの生えている野なので、水もない池ですが、そこで摘んだ若菜です」とあった。身分の高い女性が夫とともに来て住んでいるのである。長櫃のものは童にまで渡すほどたくさんあり、水夫たちは満腹になって腹鼓を打ち、海神までも目覚めさせて波を立ててしまいそうだ。

b 池というところには鯉も鮒もないけれど、川で採れるもの、海で採れるもの、その他たくさんものを長櫃に入れて持って来てくれた。添えられていた歌には「夏に穂を出す萱の生えている野なので、水もない池ですが、そこで摘んだ若菜です」とあった。身分の高い男性が妻とともに来て住んでいるのである。長櫃のものは童にまで渡すほどたくさんあり、水夫たちは満腹になって腹鼓を打ち、海神までも目覚めさせて波を立ててしまいそうだ。

c 池というところに鯉はいないけれど、鮒をはじめ川で採れるもの、海で採れるもの、その他たくさんものを長櫃に入れて持って来てくれた。添えられていた歌には「夏に穂を出す萱の生えている野なので、水があるので、そこで摘んだ若菜です」とあった。身分の高い女性が夫とともに来て住んでいるのである。長櫃のものは童にまであきれてしまうほどであり、水夫たちは腹鼓を打っては、海神までも目覚めさせて波を立てようとしている。

d 池というところには鯉も鮒もないけれど、川で採れるもの、海で採れるもの、その他たくさんものを長櫃に入れて持って来てくれた。添えられていた歌には「夏に穂を出す萱の生えている野なので、水があるので、そこで摘んだ若菜です」とあった。身分の高い女性が夫とともに来て住んでいるのである。長櫃のものは童にまであきれてしまうほどであり、水夫たちは腹鼓を打っては、海神までも目覚めさせて波を立てようとしている。

e 池というところに鯉はいないけれど、鮒をはじめ川で採れるもの、海で採れるもの、その他たくさんものを長櫃に入れて持って来てくれた。添えられていた歌には「夏に穂を出す萱の生えている野なので、水もない池ですが、そこで摘んだ若菜です」とあった。身分の高い男性が妻とともに来て住んで

いるのである。長櫃のものは童まであきれてしまうほどであり、水夫たちは満腹になって腹鼓を打ち、海神までも目覚めさせて波を立ててしまいそうだ。

問5 「行く先にたつ白波の声よりも」の歌について、「いと大声なるべし」と評している理由として、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 「破籠持たせて来たる人」は、歌を詠めるという。そして、白波の立つことを憂いて、あなたの悲しみの泣き声よりも私の悲しみの泣き声の方が勝っていると歌った。たしかに「破籠持たせて来たる人」の方が悲しみが深そうなので、「たしかにあなたの泣き声の方が大きいでしょうね」と負けを認めている。
- b 「破籠持たせて来たる人」は、歌人である。そして、憂いを含みながら、これから立つだろう白波の音を思うと、大声で泣いてしまいますと歌った。たしかに旅立とうとしている自分も、これから先の苦難を思うと、大声で泣いてしまうことはよくわかることから「本当に大きな声で泣いてしまいます」と賛同している。
- c 「破籠持たせて来たる人」は、歌人である。そして、白波の立つことを憂いて、波の音よりもあなたと別れて後に残された私の悲しみの泣き声の方が大きいと歌った。しかし、泣き声の大きさを競うような歌は下品であることから、「そんなに大きな声で泣くのですか」と不審に思っている。
- d 「破籠持たせて来たる人」は、歌を詠めるという。そして、白波の立つことを憂いて、白波の立てる音よりもあなたと別れて後に残された私の悲しみの泣き声の方が大きいと歌った。しかし、波の音より泣き声の方が大きいとは、いかにも大げさなので、「さぞかしあなたの泣き声は大きいでしょうよ」と呆あきれている。
- e 「破籠持たせて来たる人」は、歌を詠めるという。そして、憂いを含みながら、これから白波の立つ海を渡るあなたを思うと、辛さの余り大声で泣くことなどではできないと歌った。たしかに、これから続く長旅を思うと、私の方が大声を上げて泣いてしまいそうなことから、「私は大声で泣いてしまうだろう」と想像している。

問6 「破籠持たせて来たるひと」が「行く先にたつ白波の声よりも」の歌を詠んだ後、どのようになったか、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 歌を詠んだ男は「まだ罷らず」といつてそのまま座っていた。その後、童が素晴らしい返歌を詠んだの聞き、その童の歌を手元に置き、喜んでいた。

b 誰も返歌をしない中、歌を詠んだ男は「まだ罷らず」といつて席を立った。その後、童が「帰って来られたら私が歌を返しませう」といつたが、とうとう帰って来なかった。

c 歌を詠んだ男は「まだ罷らず」といつてそのまま帰ってしまった。仕方がないので、童の詠んだ歌を、作者を偽ってその人のもとに送り届けた。

d 誰も返歌をしない中、歌を詠んだ男は「まだ罷らず」といつて席を立った。その後、男は童が詠んだ返歌を聞き「そんな上手にどうやって詠んだのだ」と不審がった。

e 歌を詠んだ男は「まだ罷らず」といつて席を立った。席に戻り、恥ずかしがる童が無理に返歌を歌わせたかと思うと、いつのまにか家に帰ってしまった。

問7 「行くひととまるも袖の涙川」の歌について述べたものとして、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 「出立する人も後に残る人も、袖を濡らす涙は川のようにであり、その涙川の水際ばかりが濡れてゆくように、私たちの袖もいっそう濡れることです」と、出発する人と見送る人の両方へ目配りしつつ、自らの涙をも表現している。また、初句と結句は「破籠持たせて来たる人」の歌と呼応し、童が作ったとは思えないほどのできばえである。

b 「先に帰ってしまった人も、後に残っている人も、「行く先に」の歌に感心して流す涙は川の水が増えてゆくようであり、その涙川の水際にいる私もまた泣いてしまいました」と、場を共にしている人々と自らの涙とを表現している。また、初句と結句は「破籠持たせて来たる人」の歌と呼応し、童が作ったとは思えないほどのできばえである。

c 「行く人がとどまるほど、袖を濡らす涙は川のようにであり、その涙川の水際ばかりが濡れてゆくように、私たちの袖もいっそう濡れることです」と「行く先に」の歌に対する感動を表現しつつ、その感動をその場全員のものとしている。また、「破籠持たせて来たる人」の歌との呼応は、童が作っただけであってかわいらしいものの、返歌としては中途半端である。

d 「出立する人も後に残る人も、袖を濡らす涙は川のようにであり、その涙川の水際ばかりが濡れてゆくように、私たちの袖もいっそう濡れることです」と、

出発する人と見送る人の両方へ目配りしつつ、自らの涙をも表現している。また、「破籠持たせて来たる人」の歌との呼応は、童が作っただけあってかわいらしいものの、返歌としては中途半端である。

e 「先に帰ってしまった人も、後に残っている人も、「行く先に」の歌に感心して流す涙は川の水が増えてゆくようであり、その涙川の水際にいる私もまた泣いてしまいました」と、場を共にしている人々と自らの涙とを表現している。また、「破籠持たせて来たる人」の歌との呼応は、童が作っただけあってかわいらしいものの、返歌としては中途半端である。

問8 「照る月の流るるみれば」の歌の説明として、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 月が海に沈み行く様子から業平の歌を思い起こし、照る月が流れて海に入ると、天の川の港は海には面していなかったのだと納得している。
- b 月が海に沈み行く様子から業平の歌を思い起こし、月光が海面を輝かせているのを見ると、天の川の流れ出る河口は海ではなかったのだと納得している。
- c 月が海に沈み行く様子から業平の歌を思い起こし、照る月が流れて海に入ると、天の川から出航する港は海だったのだと納得している。
- d 月が海に沈み行く様子から業平の歌を思い起こし、月光が海面を輝かせているのを見ると、天の川の港から月が海に出て行くのだと納得している。
- e 月が海に沈み行く様子から業平の歌を思い起こし、照る月が流れて海に入ると、天の川の流れ出る河口は海だったのだと納得している。

問9 傍線部①を現代語訳せよ。

次の文章は、光源氏(問題文中では「男」「源氏の君」)が、宮中で行われた花の宴で知り合った臙月夜(右大臣の娘、問題文中では「有明の君」と右大臣邸で再会する場合である。これを読んで、後の問いに答えよ。

かの有明の君は、はかなかりし夢をおぼし出でて、いともの嘆かしうながめたまふ。春宮には四月ばかりとおぼし定めれば、いとわりなうおぼし乱れたるを、男も尋ねたまはむにあとはかなくはあらねど、いづれとも知らで、ことにゆるしたまはぬあたりにかかづらはむも人わるく、思ひわづらひたまふに、三月の二十余日、\*  
 「右大殿の弓の結けちに上達部かむだわめ、親王たち多く集へたまひて、やがて藤の宴したまふ。花ざかりは過ぎにたるを、\*<sub>2</sub>「ほかの散りなむ」とや教へられたりけん、おくれて咲く桜ともの二木ぞいとおもしろき。新しう造りたまへる殿を、\*<sub>3</sub>宮たちの御装もぎ着の日、磨きしつらはれたり、はなばなともしたまふ殿のやうにて、何ごともいまめかしうもてなしたまへり。

源氏の君にも、一日、内裏うちにて、御対面たためのついでに聞こえたまひしかど、おはせねば、口惜しう、もののはえなしとおぼして、御子の四位少将をたてまつりたまふ。  
 わが宿の花しなべての色ならば何かはさらに君を待たまし

内裏におはするほどにて、上に奏したまふ。「したり顔なりや」と笑はせたまひて、「わざとあめるを、早うものせよかし。\*<sub>4</sub>女御子たちなども生ひ出づるところなれば、なべてのさまには思ふまじきを」などのたまはず。御装よそひなどひきつくろひたまひて、いたう暮るるほどに、待たれてぞ渡りたまふ。\*<sub>5</sub>桜さくらの唐からの綺きの御直衣なほし、\*<sub>6</sub>葡萄染ぶどうねの下襲しり、裾しりいと長く引きて、皆人は\*<sub>7</sub>袍衣ほろなるに、\*<sub>8</sub>あざれたるおほきみ姿のなまめきたるにて、いつかれ入りたまへる御さま、げにいとことなり。花のにほひもけおされて、なかなかことさましになん。遊びなどいとおもしろうしたまひて、夜すこし更けゆくほどに、源氏の君、いたく酔ひなやめるさまにもてなしたまひて、紛れ立ちたまひぬ。

寝殿に女一の宮、女三の宮のおはします、東の戸口におはして、寄りあたまへり。藤はこなたのつまにあたりてあれば、御格子ども上げわたして、人びと出でるたり。袖口など、\*<sub>9</sub>踏歌ふみうたのをりおぼえて、ことさらめきもて出でたるを、ふさはしからずと、まづ藤壺ふたばわたりおぼし出でらる。「なやましきに、いといたう強ひられてわび

にてはべり。かしこけれど、この御前にこそは、蔭かげにも隠させたまはめ」とて、\*10 妻戸みすの御簾みすをひき着たまへば、「あな、わづらはし。よからぬ人こそ、やむことなきゆかりはかこちはべるなれ」といふ気色を見たまふに、重重しうはあらねど、おしなべての若人どもにはあらず、あてにをかしきけはひしるし。空薫物そらたぎりいとけぶたうくゆりて、衣きぬの音ねなひいとほなやかにふるまひなして、心にくく奥まりたるけはひは立ちおくれ、いまめかしきことを好みたるわたりにて、やむことなき御方がたもの見たまふとて、この戸口は占しめたまへるなるべし。さしもあるまじきことなれど、さすがにをかしうおもほされて、いづれならむ、と胸うちつぶれて、\*11 「扇を取られてからき目をみる」と、うちおほどけたる声に言ひなして、寄りゐたまへり。「あやしくもさま変へける高麗人こまらびとかな」といらふるは、心知らぬにやあらん。いらへはせて、ただ時どきうち嘆くけはひする方に寄りかかりて、几帳きちやうごしに手をとらへて、

「あづさゆみいるさの山にまどふかなほのみし月の影や見ゆると

何ゆゑか」とおしあてにのたまふを、え忍しのはぬなるべし。

心いる方ならませば弓張りの月なき空に迷はましやは

と言ふ声、ただそれなり。いとうれしきものから。

注

(『源氏物語』花の宴による)

- \* 1 右大殿の弓の結むす 右大臣邸での弓の競技会。
- \* 2 「ほかの散りなむ」 〓 「見る人もなき山里の桜花ほかの散りなむのちぞ咲かまし」(古今集)による表現。
- \* 3 宮たち 〓 朧月夜の姉である、弘徽殿女御腹こきでんの姫君たち。
- \* 4 女御子たち 〓 光源氏の異腹の姉妹にあたる。
- \* 5 桜の唐の綺の御直衣 〓 桜襲さくらむす表が白で裏が蘇芳の舶来の綾織物を素材とする貴族の平服。
- \* 6 葡萄染えびの下襲 〓 赤紫色をした、袖なしの短い衣服の下に着る服。
- \* 7 袍衣うへのきぬ 〓 貴族の正装。この時、光源氏以外の人々はみな正装をしていた。

\* 8 あざれたるおほきみ姿 Ⅱ しゃれた皇子の姿。

\* 9 踏歌 Ⅱ 正月の宮中行事のひとつで、集団で舞う舞のこと。

\* 10 妻戸の御簾をひき着たまへば Ⅱ 妻戸（両開きの扉）の簾をかぶって半身を入れると。

\* 11 「扇を取られてからき目をみる」 Ⅱ 「石川の 高麗人に 帯を取られてからき悔いする…」（さいばら）（催馬楽）による表現。宮中の花の宴の折、光源氏と朧月夜は扇を取り交わした。

問1 光源氏と知り合ったのち、右大臣邸で暮らす朧月夜の心境はどのようなものであったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 朧月夜は、まるではかない夢のようであった光源氏との宮中での出会いを頭に思い浮かべて、たいそうやるせないもの思いにふけていた。東宮への入内も迫っており、まったくどうしようもなく、思い悩んでいた。

b 朧月夜は、昨日見たばかりのはかない夢の中で光源氏との出会いを頭に思い浮かべて、いつそう嘆かわしげにも思いにふけていた。東宮への入内も迫っており、ひたすらどうしようかと、とまどっていた。

c 朧月夜は、まるではかない夢のようであった光源氏との宮中での出会いを急に思い出して、いつそうやるせないもの思いにふけていた。東宮への入内も迫っており、ひたすらどうしようかと、とまどっていた。

d 朧月夜は、昨日見たばかりのはかない夢の中で光源氏との出会いを頭に思い浮かべて、たいそうやるせないもの思いにふけていた。東宮への入内も迫っており、いよいよどうしようかと、思い悩んでいた。

e 朧月夜は、まるではかない夢のようであった光源氏との宮中での出会いを頭に思い浮かべて、いつそう嘆かわしげにも思いにふけていた。東宮への入内も迫っており、いよいよどうしようかと、とまどっていた。

問2 朧月夜と知り合ったのち、光源氏の心境はどのようなものであったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 光源氏は、女を探しあてようと思ったが、そのつてもなく、どのあたりに住んでいるかも分からず、それにとりわけ自分には好意をよせていない一家にかわりを持つのも、体裁が悪いことだと、思いあきらめていた。
- b 光源氏は、女を探しあてようと思ったら、あてがないわけではないが、どの姫君であるとも分からず、それにとりわけ自分には好意をよせていない一家にかわりを持つのも、体裁が悪いことだと、ためらっていた。
- c 光源氏は、女を探しあてようと思ったが、そのつてもなく、またどの姫君であるとも分からず、それにとりわけ女との関係を許してくれそうもない一家とかわりを持つのも、体裁が悪いことだと、思いあきらめていた。
- d 光源氏は、女を探しあてようと思ったが、よく考えると、どの姫君であるとも分からず、それにとりわけ女との関係を許してくれそうもない一家とかわりを持つのも、体裁が悪いことだと、ためらっていた。
- e 光源氏は、女を探しあてようと思ったら、あてがないわけではないが、どのあたりに住んでいるかも分からず、それにとりわけ心を許してくれそうもない女にかわりを持つのも、体裁が悪いことだと、ためらっていた。

問3

光源氏が、右大臣の招きで藤の宴に出かけるまでに、どのような経緯があったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 先日、右大臣は宮中で光源氏に対面した折、自邸にお招きしたいと伝えていたのだが、光源氏のお出ましがなく、残念だ、これではせっかくの宴もはえないとあって、子息の四位少将を迎えにさしむけた。
- b 先日、右大臣は宮中で帝に対面した折、光源氏を自邸にお招きしたいとお伝えしたのだが、光源氏のお出ましがなく、心外だ、これではせっかくの宴もはえないとあって、子息の四位少将を迎えにさしむけた。
- c 先日、右大臣は宮中で帝に対面した折、光源氏を自邸にお招きしたいとお伝えしたのだが、その場に光源氏はいらつしやらなかったで、これではせっかくの宴もはえないと、宴の当日、子息の四位少将を案内にいかせた。
- d 四月一日、右大臣は宮中で光源氏に対面した折、自邸にお招きしたいと伝えていたのだが、光源氏のお出ましがないので、心外だ、せっかくの宴もはえない



いといって、やむなく子息の四位少将を宴に参列させた。

e 四月一日、右大臣は宮中で帝に対面した折、光源氏を自邸にお招きしたいとお伝えしたのだが、その場には光源氏はいらつしやらなかったもので、不安に思  
い、宴の当日、改めて子息の四位少将を案内にいかせた。

問4 右大臣が詠んだ和歌の内容はどのようなものであったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 私の家の藤の花を、この世で一番美しいとはとうてい申しませんが、もしも気が向くようでしたら、ぜひともお出かけください、というもので、右大臣が  
自邸の藤の花の美しさを光源氏に謙遜してみせた内容となっている。

b 私の家の藤の花が、もしもすべての藤の花に劣るならば、どうしてことさらにあなたをお誘いしましょうか、というもので、右大臣が自邸の藤の花の美しさ  
を光源氏に自慢してみせた内容となっている。

c 私の家の藤の花が、もしもおとろえた色をしていたならば、どうしてあなたをこんなに強くお誘いしましょうか、というもので、右大臣が自邸の藤の花の  
美しさを光源氏に見せびらかす内容となっている。

d 私の家の藤の花が、もしも並みの美しさならば、どうしてことさらにあなたをお待ちしましょうか、というもので、右大臣が自邸の藤の花の美しさを光源  
氏に強く印象付ける内容となっている。

e 私の家の藤の花が、もしも美しいものであったとしても、どうしてあなたの美しさに勝ることがありましょうか、というもので、右大臣が自邸の藤の花を  
だしに光源氏にこびた内容となっている。

問5 光源氏が右大臣邸の藤の宴に招かれていることを聞いた帝は、光源氏に向かって何といったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a わざわざのご招待のようだから、早く行きなさい。あなたの姉妹たちにも子どもが生まれたところだから、あなたを歓迎してくれるでしょう。

b わざわざのご招待のようだから、早く行きなさい。あなたの姉妹たちも育ってきたところだから、あなたを赤の他人だとは思ってはいないでしょう。

- c わざわざのご招待のようだから、早く行きなさい。あなたにも妹が先日生まれたところだから、並一通りの喜びようではないでしょう。
- d わざわざのご招待のようだから、早く行きなさい。あなたの姉妹たちも先に着いているところだから、待ち遠しがっていることでしょう。
- e わざわざのご招待のようだから、早く行きなさい。あなたの姉妹たちも藤の宴を楽しみにしているところだから、手厚くもてなしてくるでしょう。

問6 右大臣一家を待たせて藤の宴に現れた光源氏の様子はどのようなものであったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 他の客人は皆正装をしていたのに、光源氏だけは、うちとけた皇子の姿の色気を放つ装いで、丁重にかしずかれながら登場する姿は、いかにもたいそう異様だという感じである。
- b 他の客人は皆正装をしていたのに、光源氏だけは、ふざけたような皇子の姿の世慣れた装いで、丁重にかしずかれながら登場する姿は、いかにもたいそう風変わりという感じである。
- c 他の客人は皆正装をしていたのに、光源氏だけは、うちとけた皇子の姿の優雅な装いで、丁重にかしずかれながら登場する姿は、いかにもたいそう別格という感じである。
- d 他の客人は皆正装をしていたのに、光源氏だけは、ふざけたような皇子の姿のどこか女性っぽい装いで、丁重にかしずかれながら登場する姿は、いかにもたいそう不似合いだという感じである。
- e 他の客人は皆正装をしていたのに、光源氏だけは、うちとけた皇子の姿の若若しい装いで、丁重にかしずかれながら登場する姿は、いかにもたいそう事ごとしい感じである。

問7 光源氏は、右大臣邸の女房たちに向かって何といったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 右大臣邸にうかがおうかどうかと悩んでいたところ、帝から必ず行くようにといわれてまいりました。おそれいりますが、こちらさまにて、私を物蔭にでも休ませてください。

b 朧月夜に会うにはどちらへ行ったものと迷っていたところ、右大臣からこの部屋へ行けといわれてまいりました。おそれいりますが、こちらさまにて、私の相談にのってください。

c 体調のよくない折から、右大臣邸に無理やり招かれて困っております。おそれおいいことですが、こちらさまにて、私を物蔭にでも休ませてください。

d 右大臣邸のどの女性が朧月夜なのか分からず悩んでいます。おそれおいいことですが、こちらさまにて、それを私に教えてください。

e 気分が悪いのに、ひどくお酒を無理じいされて困っております。おそれおいいことですが、こちらさまにて、私を物蔭にでも隠れさせてください。

問8 右大臣邸の様子はどのようであったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 右大臣邸の様子は、空薫物がもうもうと煙たいくらいにたかれていて、女房たちはきぬずれの音もことさら派手にふるまっており、どちらかというとき奥ゆかしくも深みのある風情がただよっていて、あくまで静寂さがみなぎるものであった。

b 右大臣邸の様子は、空薫物がとても煙たいくらいにくすぶっており、女房たちは衣の音を派手に立てながら行き来しており、いささか奥ゆかしさに欠けるような風情であって、あくまで若者好みの派手なものであった。

c 右大臣邸の様子は、空薫物がとても煙たいくらいにくすぶっており、女房たちはきぬずれの音もことさら派手にふるまっており、あやしく神秘的なところはいささかも感じられず、あくまでも単純明快そのものであった。

d 右大臣邸の様子は、空薫物がもうもうと煙たいくらいにたかれていて、女房たちは衣の音を派手に立てながら行き来しており、とてもさわがしくて落ち着いたところはまったくなく、あくまでも今風な女性の好みを反映したものであった。

e 右大臣邸の様子は、空薫物がとても煙たいくらいにくすぶっており、女房たちはきぬずれの音もことさら派手に立ちふるまい、奥ゆかしく深みのある風情には欠けるところがあつて、あくまで今風な派手好みのものであった。

問9 傍線部④を、主語をすべて明らかにして現代語訳せよ。



次の文章は、『落窪物語』の一節である。落窪の姫君(本文中では、女君)は中納言邸で、継母である北の方に虐げられていたが、少将に見初められ結婚することになる。少将は姫君へのいじめに対する復讐(しゅうぼう)のため、痴れ者(し)としてさげすまれている兵部の少輔を、自分の身代わりとして、中納言と北の方との間の娘である四の君と結婚させることにし、兵部の少輔を中納言邸へ向かわせた。これを読んで、後の問いに答えよ。

人びと\*<sub>1</sub>さうぞきそして待つに、「おはしたり」と言へば、入れたてまつりつ。その夜は痴れも見えて、灯のほの暗きに、容体細やかに、あてなりければ、\*<sub>2</sub>御達は、人に誉められたまふ君ぞかしと思ふに、「うちつけに、細やかになまめきても入りたまひぬるかな」と言ひあへるを、聞きたまひて、北の方笑みかけて、「かしこくも取りつるかな。我はさいはひありかし。思ふやうなる婿(むこ)どもを取るかな。ただ今、この君、\*<sub>3</sub>おとどがね」と吹き散らしたまへば、人びと、「げに」と聞こゆ。女、かかる痴れ者とも知らで臥(ふ)したまひにけり。明けぬれば出でぬ。

少将、いかならむと思ひやられてをかしければ、女君に、「中納言殿には、昨夜(よべ)婿(むこ)どりしたまひにけり」「誰ぞ(たれ)とのたまへば、「まろが叔父にて、治部卿(ちぶきやう)なる人の手児(てこ)、兵部の少輔、かたちいとよく、鼻いとをかしげなるを婿(むこ)どりたまへる」とのたまへば、女君、「ことに人のとりわきて誉めぬ所よ」と笑ひたまへば、「なにか。すぐれてをかしげなる所を聞こゆるぞかし。今見たまひてむ」とて、\*<sub>4</sub>侍に出でたまひて、少輔のがり文やりたまふ。

「いかにぞ。文やりたまひつや。まだしくは、かう書きてやりたまへ。いとをかしきことぞ」とて、書きてやりたまふ。

「世の人のけふのけさには恋すとか聞きしにたがふこちこそすれ

\*<sub>5</sub>。たままへくすの」

と書きてやりたまへれば、少輔、文やらむとて、歌を\*<sub>6</sub>。によひをるほどに、かくて賜(たま)へれば、よきことと思ひて、急ぎ書きてやりつ。

少将の返事(かへりじ)には、

「昨夜は事成りにき。笑はず成りにしかば、うれしくなむ。くはしくは対面に。文はまだしくはべりつるほどに、喜びながら、これをなむつかはしつる」と言へば、少将いとほしく、女に恥を見するぞなど思へども、とくいかでこれが報いせむと思ひしほどに、とけて後に、引きかへてかへり見むと思すこと深くてなりけり。<sup>①</sup>女君は、なほ思ひわびたるけしきいとほしうて、聞かせたまはず。心ひとつにをかしければ、\*帯刀になむ語りて笑ひたまひければ、帯刀、「いとうれしうせさせたまひたり」と喜ぶ。

かの殿には、御文待つほど、持て来たれば、いつしか取り入れ、奉る。見たまふに、かかれは、いみじう恥づかしく、えうちも置きたまはず、すくみたるやうにて居たまへり。北の方、「御手はいかがある」とて見たまふに、死ぬるこちすること、かの落窪といふ名聞かれて、思ひしよりもまさるこちすべし。北の方うち見て、あやしう、さきさきの婿どりの文見る中に、かかれは、いかならむと、胸つぶれぬ。おとど、おし放ち、引き寄せて見たまへど、え見たまはで、「色好みの、いと薄く書きたまひけるかな。これ読みたまへ」とのたまへば、ふと取りて、\*藏人の少将のつとめての文のおぼえけるをうち読みて、「\*。堪へぬは人の」となむ書きたまへり」と言へば、おとどうち笑ひて、「すき者なれば、いひ知りためり。はや御返事、をかしくしたまへ」とて立ちたまふを聞くに、四の君のかたはらいたく、わびしくおぼえて寄り伏しぬ。北の方、\*<sub>1</sub>三の君と、「いかにのたまへるならむ」と嘆けば、\*<sub>2</sub>女の御方、「いみじく思ふとも、かう言はむやは。なほおしなべて、「今日<sup>②</sup>は恋し」など言はむことの古めきたれば、様変へてと思ひたまへるにや。心得ず、あやしきもあるかな」とのたまふ。北の方、「さななり。色好みは人のせぬやうをせむとなむ思ふなる」と言ひて、「はや返事したまへ」と申したまへど、親、はらから居立ちて、かくあやしがり嘆きたまふを聞くに、さらに起き上がるべきこちもあらで、伏したまへれば、「我聞こえむ」とて、北の方書きたまふ。

「老いの世に恋もし知らぬ人はさぞ今日のけさをも思ひわかれじ

口惜しうとなむ、女は思ひきこゆる」

とて、使に物かづけてやりつ。四の君は起き上がりて臥し暮らしつ。

#### 注

\*1 さうぞきそして＝熱心に着飾つて。

\* 2 御達ごたち 四の君の女房たち。

\* 3 おとどがね 大臣候補。

\* 4 侍さむらい 侍所。

\* 5 たままくくずの 秋萩の玉まくくずのうるさうるさ我をなこひそあひも思はず（『古今六帖』）を引き歌とする。

\* 6 によひをる 和歌を苦吟する。

\* 7 帯刀たはき 少将の従者。

\* 8 藏人くらひんの少将 三の君の婿。

\* 9 堪へぬは人の けふそへに暮れざらめやはと思へどもたへぬは人の心なりけり（『後撰和歌集』）を引き歌とする。

\* 10 三の君 四の君の姉。

\* 11 女むすめの御方 三の君のこと。

問1 少輔が中納言邸を訪れたとき、女房たちや北の方は少輔に対してどのように反応したか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 人々は、少輔の体つきがほっそりとしていて美しかったので、まさに世間でほめられるお方だと思い、「婿君は優雅な身のこなしで、礼儀正しく姫君のお部屋にお入りになったことだなあ」と言い合った。北の方も「良い具合に婿を取ったものだ。私たちは幸せ者で理想的な婿を取った。この君は大臣候補だ」と吹聴していた。

b 人々は、少輔の体つきがほっそりとしていてきちんとしている様子だったので、まさに世間でほめられるお方だと思い、「婿君は優雅な身のこなしで、礼儀正しく姫君のお部屋にお入りになったことだなあ」と言い合った。北の方も「良い具合に婿を取ったものだ。私たちは幸せ者で理想的な婿を取った。この君は大臣候補だ」と吹聴していた。

c 人々は、少輔の体つきがほっそりとしていて上品だったので、まさに世間でほめられるお方だと思い、「婿君は優雅な身のこなしで、唐突に姫君のお部屋にお入りになったことだなあ」と言い合った。北の方も「良い具合に婿を取ったものだ。私たちは幸せ者で理想的な婿を取った。この君は大臣候補だ」と吹聴していた。

d 人々は、少輔の体つきがほっそりとしていて端麗だったので、まさに世間でほめられるお方だと思い、「婿君は優雅な身のこなしで、ぶしつけに姫君のお

部屋にお入りになったことだなあ」と言い合った。北の方も「良い具合に婿を取ったものだ。私たちは幸運にも、うまくだまして婿を取ることができた。この君は大臣候補だ」と吹聴していた。

e 人々は、少輔の体つきがほっそりとしていて見事だったので、まさに世間でほめられるお方だと思い、「婿君は優雅な身のこなして、突然姫君のお部屋にお入りになったことだなあ」と言い合った。北の方も「良い具合に婿を取ったものだ。私たちは幸運にも、うまくだまして婿を取ることができた。この君は大臣候補だ」と吹聴していた。

問2 少将と姫君は、少輔の婿入りについてどのように語り合ったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 少将は姫君に、「私のいとこの兵部の少輔という人で、見た目がすばらしく、鼻のたいそう立派な人が、中納言邸に婿入りしました」と伝えたところ、姫君は、「鼻とは、人の格別ほめないところですね」と笑った。

b 少将は姫君に、「私のいとこの兵部の少輔という人で、体つきがすばらしく、鼻だけが少しおかしな人が、中納言邸に婿入りしました」と伝えたところ、姫君は、「鼻とは、特別人がほめないところですからね」と笑った。

c 少将は姫君に、「私のいとこの兵部の少輔という人で、体つきがすばらしく、鼻のたいそう珍しい人が、中納言邸に婿入りしました」と伝えたところ、姫君は、「鼻とは、人の格別ほめないところですね」と笑った。

d 少将は姫君に、「私の叔父の兵部の少輔という人で、見た目がすばらしく、鼻のたいそう立派な人が、中納言邸に婿入りしました」と伝えたところ、姫君は、「鼻なんて、あなたは少し違った視点でほめるのですね」と笑った。

e 少将は姫君に、「私の叔父の兵部の少輔という人で、見た目がすばらしく、鼻だけが少し珍しい人が、中納言邸に婿入りしました」と伝えたところ、姫君は、「鼻なんて、あなたは少し違った視点でほめるのですね」と笑った。

問3 少将と少輔はどのようなやりとりをしたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。



a 少将は、「昨夜はどうでしたか。手紙は送りましたか。まだ送るような時期でないとしてもこのように書いて送ってください。見事なことですよ」と少輔に手紙をお送りになった。少輔は、これは幸いだと思い、少将に「昨夜はうまくいきました。笑わずにすみましたので、嬉しく思っています。手紙を書いておりませんでしたので、喜んであなたのおっしゃるとおり送りました」と返事をした。

b 少将は、「昨夜はどうでしたか。手紙は送りましたか。まだ送っていないのならこのように書いて送ってください。四の君はたいそう喜びますよ」と少輔に手紙をお送りになった。少輔は、これは幸いだと思い、少将に「昨夜はうまくいきました。笑わずに事を果たせましたので、嬉しく思っています。手紙を書いておりませんでしたので、喜んであなたのおっしゃるとおり送りました」と返事をした。

c 少将は、「昨夜はどうでしたか。手紙は送りましたか。まだ送っていないのならこのように書いて送ってください。北の方は立派にお思になることですよ」と少輔に手紙をお送りになった。少輔は、これは幸いだと思い、少将に「昨夜はうまくいきました。笑わずに事を果たせましたので、うまくいったと思っっています。手紙を書いておりませんでしたので、喜んであなたのおっしゃるとおり送りました」と返事をした。

d 少将は、「昨夜はどうでしたか。手紙は送りましたか。まだ送るような時期でないとしてもこう書いて送ってください。四の君はたいそう喜びますよ」と少輔に手紙をお送りになった。少輔は、これは幸いだと思い、少将に「昨夜はうまくいきました。笑わずに事を果たせましたので、うまくいったと思っっています。手紙を書いておりませんでしたので、喜んであなたのおっしゃるとおり送りました」と返事をした。

e 少将は、「昨夜はどうでしたか。手紙は送りましたか。まだ送っていないのならこのように書いて送ってください。趣深いことですよ」と少輔に手紙をお送りになった。少輔は、これは幸いだと思い、少将に「昨夜はうまくいきました。笑わずにすみましたので、嬉しく思っています。手紙を書いておりませんでしたので、喜んであなたのおっしゃるとおり送りました」と返事をした。

問4 少輔が四の君へ送った手紙はどのようなものだったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 「世間の人は結婚の翌朝は妻を恋しく思うものだと言いましたが、私はいつこうにそんな気がしません」という歌を書き、さらに「「たまたまくず」の歌のようにわずらわしいものです、私のことを思わないでください。両思いではありませんので」と、歌の一節を添えて送った。

b 「世間の人はいつも朝には妻を恋しく思うものだと聞きましたが、私はいつこうにそんな気がしません」という歌を書き、さらに「「たままくず」の歌のようにわずらわしいものです、私のことを名残惜しく思っているでしょう。両思いではなかったの」と、歌の一節を添えて送った。

c 「世間の人は結婚の翌朝は夫を恋しく思うものだと聞きましたが、あなたもそんな気持ちになってほしいものです」という歌を書き、一方で「「たままくず」の歌のようにいとわしいものです、私のことを思わないでください。私はあなたのことを思っていますので」と、歌の一節を添えて送った。

d 「世間の人はいつも朝には夫を恋しく思うものだと聞きましたが、あなたもそんな気持ちになってほしいものです」という歌を書き、一方で「「たままくず」の歌のようにわずらわしいものです、私のことを名残惜しく思っているでしょう。両思いではありませんでしたのに」と、歌の一節を添えて送った。

e 「世間の人は結婚の翌朝は妻を恋しく思うものだと聞きましたが、私はいつこうにそんな気がしません」という歌を書き、さらに「「たままくず」の歌のように執念深いものです、私のことを名残惜しく思っているでしょう。両思いではありませんでしたのに」と、歌の一節を添えて送った。

問5 少将は中納言邸の人々にどのような感情を抱いていたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 少将は、四の君に恥をかかせることには思っているが、四の君が自分に復讐してくるかもしれないと思っっているので、四の君には、思いを遂げたのちに会って、すべてのことを伝えようと思っっている。

b 少将は、四の君に恥をかかせることには思っっているが、なんとかして北の方に復讐しようと思っっている。思いを遂げたのちに改めて四の君の世話をしようと思っっている。

c 少将は、四の君に恥をかかせることには思っっているが、少輔との結婚こそが四の君へ報いることになると思っっており、結婚の後にも引き続き四の君の世話をしようと思っっている。

d 少将は、四の君に恥をかかせることには思っっているが、なんとかして北の方に復讐しようと思っっている。復讐を遂げたのちは、北の方の態度を改めさせようと思っっている。

e 少将は、四の君に恥をかかせることになるとは思っているが、四の君が自分に復讐してくるかもしれないと思っているので、少輔との結婚の後にも引き続き四の君の世話をしようと思っている。

問6 少輔からの手紙を受け取って、四の君はどのように反応したか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 四の君は手紙を見て、たいそう気づまりで、自分の心を落ち着けることもできず、すくむようにしていた。北の方に返事をするように言われるものの、親や姉がじっとしてられないで、少輔の卑しい筆跡を嘆くので、いっそう起き上がる気持ちにもなれず、一日中横になって過ごしていた。

b 四の君は手紙を見て、たいそう動揺して、手紙を置くこともできず、すくむようにしていた。北の方に返事をするように言われるものの、親や姉がじっとしてられないで、少輔の卑しい筆跡を嘆くので、まったく起き上がる気持ちにもなれず、一日中横になって過ごしていた。

c 四の君は手紙を見て、たいそう恐れ多くて、自分の心を落ち着けることもできず、すくむようにしていた。北の方に返事をするように言われるものの、親や姉がじっとしてられないで、怪しがつたり嘆いたりするので、いっそう起き上がる気持ちにもなれず、一日中横になって過ごしていた。

d 四の君は手紙を見て、たいそう気が引けて、手紙を置くこともできず、すくむようにしていた。北の方に返事をするように言われるものの、親や姉がじっとしてられないで、見苦しいほど嘆いているので、まったく起き上がる気持ちにもなれず、一日中横になって過ごしていた。

e 四の君は手紙を見て、たいそうきまりが悪くて、手紙を置くこともできず、すくむようにしていた。北の方に返事をするように言われるものの、親や姉がじっとしてられないで、怪しがつたり嘆いたりするので、まったく起き上がる気持ちにもなれず、一日中横になって過ごしていた。

問7 少輔からの手紙を受け取ったことを聞き、中納言はどのように反応したか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 中納言は年のせいで手紙をよく読むことができず、「好色な人が、とても薄情なことをお書きになったのでしょうか。これを読んでください」と北の方に頼んだ。北の方が別の手紙の内容を伝えたところ、中納言は「あなたのことが好きだから、これ以上ない言い方をしているのでしよう。あなたも早くお返事を上手にしなさい」と四の君に伝えた。

b 中納言は年のせいで手紙をよく見ることができず、「好色な人が、とても薄くお書きになったのですね。これを読んでください」と北の方に頼んだ。北の方が別の手紙の内容を伝えたと、中納言は「あなたが好きだから、これ以上ない言い方をしているのでしょう。あなたも早くお返事を立派にしないさい」と四の君に伝えた。

c 中納言は年のせいで手紙をよく読むことができず、「好色な人が、とても薄情なことをお書きになったのでしょうか。これを読んでください」と北の方に頼んだ。北の方が別の手紙の内容を伝えたと、中納言は「あなたが好きだから、少し変わった言い方をしているのでしょう。あなたも早くおもしろおかしくお返事をしないさい」と四の君に伝えた。

d 中納言は年のせいで手紙をよく見ることができず、「好色な人が、とても薄くお書きになったのですね。これを読んでください」と北の方に頼んだ。北の方が別の手紙の内容を伝えたと、中納言は「風流な人だから、言い方をよく知っているようです。あなたも早くお返事を上手にしないさい」と四の君に伝えた。

e 中納言は年のせいで手紙をよく読むことができず、「好色な人が、とても薄情なことをお書きになったのでしょうか。これを読んでください」と北の方に頼んだ。北の方が別の手紙の内容を伝えたと、中納言は「風流な人だから、言い方をよく知っているようです。あなたも早くおもしろおかしくお返事をしないさい」と四の君に伝えた。

問8 少輔からの手紙を受け取って、三の君と北の方はどのように反応したか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 三の君が「世間並みに言うことが古くさいので、墨のすり方を変えて歌を贈ろうと思われたのでしょうか。よくわからず、みっともないことです」と言い、北の方も「それは違う。風流な人は他人のしたことを踏まえて物事をしようと思うものだ」と言った。北の方は、伏せている四の君の代わりに、「娘は、あなたの手紙を情趣がないことだと思っております」と手紙を書いて、少輔のところに送らせた。

b 三の君が「世間並みに言うことが古くさいので、墨のすり方を変えて歌を贈ろうと思われたのでしょうか。よくわからず、みっともないことです」と言い、北の方も「そうに違いない。風流な人は他人のしないようなことをしようと思うようだ」と言った。北の方は、伏せている四の君の代わりに、「娘

は、あなたの手紙をつらいと思っております」と手紙を書いて、少輔のところを送らせた。

c 三の君が「世間並みに言うことが古くさいので、趣向を変えて歌を贈ろうと思われたのでしょうか。よくわからず、つまらないことです」と言い、北の方も「そうに違いない。風流な人は他人のしないようなことをしようと思うようだ」と言った。北の方は、伏せている四の君の代わりに、「娘は、あなたの手紙を卑しいことだと思っております」と手紙を書いて、少輔のところを送らせた。

d 三の君が「世間並みに言うことが古くさいので、趣向を変えて歌を贈ろうと思われたのでしょうか。よくわからず、不思議なことです」と言い、北の方も「それは違う。風流な人は他人のしたことを踏まえて物事をしようと思うものだ」と言った。北の方は、伏せている四の君の代わりに、「娘は、あなたの手紙を情けないと思っております」と手紙を書いて、少輔のところを送らせた。

e 三の君が「世間並みに言うことが古くさいので、趣向を変えて歌を贈ろうと思われたのでしょうか。よくわからず、不思議なことです」と言い、北の方も「そうに違いない。風流な人は他人のしないようなことをしようと思うようだ」と言った。北の方は、伏せている四の君の代わりに、「娘は、あなたの手紙を残念に思っております」と手紙を書いて、少輔のところを送らせた。

問9 傍線部(A)を「聞かせたまはず」の主語を明らかにして現代語訳せよ。

次の文章は、『紫式部日記』の一節である。これを読んで、後の問いに答えよ。

様さまよう、すべて人はおいらかに、すこし心おきてのどかに、おちみぬるをもととしてこそ、ゆゑもよしも、をかしく心やすけれ。もしは、色めかしくあだあだしけれど、本性ほんじやうの人がらくせなく、かたはらのため見えにくきませずだになりぬれば、にくうははべるまじ。われはと、くすしくならひもち、けしきことごとしくなりぬる人は、立居たちあにつけて、われ用意せらるるほども、その人には目とどまる。目をしとどめつれば、かならずものをいふ言葉の中にも、来てあるふるまひ、立ちていくうしろでも、かならず癖は見つけらるるわざにはべり。ものいひすこしうちあはずなりぬる人と、人のうへうちおとしめつる人とは、まして耳も目もたてらるるわざにこそはべるべけれ。人のくせなきかぎりには、いかではかなき言の葉をも聞ことこえじとつみ、なげの情なさけつくらまほしうはべり。

人すすみて、にくいことし出でつるは、わるきことを過あやまちたらむも、いひ笑はむに、はばかりなうおぼえはべり。いと心よからむ人は、われをにくむとも、われはなほ、人を思ひうしろむべけれど、いとさしもえあらず。慈悲ふかうおはする仏ぶつだに、\*<sub>1</sub>三宝そしる罪は浅しとやは説いたまふなる。まいて、かばかり濁り深き世の人は、なほつらき人はつらかりぬべし。それを、われまさりていはむと、いみじき言の葉をいひつけ、向かひみてけしきあしうまもりかはすと、さはあらずもてかくし、うはべはなだらかなるとのけちめぞ、心のほどは見えはべるかし。

左衛門の内侍さいもといふ人はべり。あやしうすすろによからず思ひけるも、え知りはべらぬ、心憂きしりうことの、おほう聞こえはべりし。

\*<sub>2</sub>内裏のうへの、源氏の物語人に読ませたまひつづつ聞こしめしけるに、「この人は\*<sub>3</sub>日本紀をこそ読みたるべけれ。まことに才さいあるべし」と、のたまはせけるを、ふと推おしはかりに、「いみじうなむ才がある」と、殿上てんじやうびと人などにいひ散らして、日本紀の御局みつぼねとぞつけたりける、いとをかしくぞはべる。このふる里の女の前にてだに、つづみはべるものを、さむところにて才さかし出でべらむよ。

この\*<sub>4</sub>式部の丞じやうといふ人の、童わらはにて書読ふみみはべりし時、聞きならひつづつ、かの人はおそう読みとり、忘るるところをも、あやしきまでぞさとくはべりしかば、書に心入れたる親は、「口惜くちをしう、男子をのこにて持たらぬこそ幸ひなかりけれ」とぞ、つねに嘆かれはべりし。

それを、「をのこだに才がりぬる人は、いかにぞや、はなやかならずのみはべるめるよ」と、やうやう人のいふも聞きとめて後、<sup>のち</sup>一といふ文字をだに書きわたしはべらず、いとてづつに、あさましくはべり。読みし書などいひけむもの、目にもとめずなりてはべりしに、いよいよ、かかること聞きはべりしかば、いかに人も伝へ聞きてにくむらむと、恥づかしさに、御屏風<sup>みびやうぶ</sup>の上に書きたることをだに読まぬ顔をしはべりしを、<sup>おまへ</sup>\*5宮の、御前にて、\*6文集のところどころ読ませたまひなどして、さるさまのこと知ろしめさまほしげにおぼいたりしかば、いとしのびて、人のさぶらはぬもののひまひまに、<sup>にくわん</sup>をとこしの夏ごろより、\*7楽府といふ書二巻をぞ、しどけながら教へたてきこえさせてはべる、隠しはべり。宮もしのびさせたまひしかど、\*8殿も\*9うちもけしきを知らせたまひて、御書どもをめでたう書かせたまひてぞ、殿はたてまつらせたまふ。まことにかう読ませたまひなどすること、はた、かのものいひの内侍は、え聞かざるべし。知りたらば、いかにそしりはべらむものと、すべて世の中ことわざしげく憂きものにはべりけり。

注

- \*1 三宝<sup>さんぼう</sup> || 仏教の宝である「仏」「法」「僧」を言う。
- \*2 内裏<sup>うち</sup>のうへ || 一条天皇。(寛和二(九八六)年〜寛弘八(一〇一二年)在位)
- \*3 日本紀<sup>にほんぎ</sup> || 『日本書紀』をはじめとする日本の歴史書。
- \*4 式部の丞 || 紫式部の兄弟、藤原惟規<sup>のぶのり</sup>。
- \*5 宮 || 中宮藤原彰子<sup>ちよし</sup>。
- \*6 文集 || 『白氏文集』、中国の詩人白居易の詩文集。
- \*7 楽府<sup>がふ</sup> || 白居易が書いた「新楽府」をさす。
- \*8 殿 || 藤原道長。中宮彰子の父。
- \*9 うち || 「内裏のうへ」に同じ。

問1 作者は、宮廷に仕える女性にとつてどんなことが重要であると述べているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a ささまざまな美点を持った女性がいるが、その中でも人に注目されるような、すぐれた能力を身につけておくことが重要である。

- 問2
- 人からいやなことをされたときの自分について作者はどのように述べているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。
- a 相手が自分を憎んでも自分の方では好意を持って相手のことを考えるので、自分でも仏のように慈悲深いことだと思っている。
  - b 相手が自分を憎んでも自分の方では好意を持って相手のことを考えるので、自分はきっと仏のご加護を受けるだろうと思っている。
  - c 相手が自分を憎んでも自分の方では好意を持って相手のことを考えるべきだと思いつながら、実際にはそのようにできずにいると思つていて、すべてはなかなか許せないが、慈悲深い仏も三宝をおろそかにするふるまいを許しているのだから、自分も許すよう努力すべきだと思つていて、慈悲深い仏はすべてを許すが、人間の場合、こちらが許しても冷たい人は何も変わらないので、それも空しいことだと思つていて、ふるまいにも気をつけ、うっかりしたことを言わないように気をつけることが重要である。

- 問3
- 人からいやなことをされたときの態度について作者はどのように述べているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。
- a どうせ濁り深い末の世に生まれたのだから、人から冷淡にされたらこちらも冷淡にして同じくらいひどい言葉を投げかけるのが当然だ。
  - b どうせ濁り深い末の世に生まれたのだから、人から冷淡にされても自分の方がより正しい意見を言つて相手と向き合おうとするのが当然だ。
  - c 人から冷淡にされたら、心ではいろいろ腹立たしく思つてもまったく顔に出さず、表向きはおだやかにふるまつてることが大切だ。
  - d 人から冷淡にされたら、心では腹立たしく思つてもまったく顔に出さず、表向きはおだやかにふるまいながらきびしい言葉を投げかけるのが最高だ。
  - e 人から冷淡にされたら、自分の方がまさつていて、自分を教えるためにきびしい言葉で相手を非難し、その一方で表向きはおだやかにふるまうのが最高だ。



問4 左衛門の内侍はどんなことをしたと述べられているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 『源氏物語』を人にお読ませになってお聞きになった帝が、「この物語の作者は『日本書紀』を読んでいるらしい、本当に学識がある」とおっしゃったのを聞いて、その言葉を人々に言い広め、「日本紀の御局」という呼び名をつけて、作者を賞賛した。
- b 『源氏物語』を人にお読ませになってお聞きになった帝が、「この物語の作者は『日本書紀』を読んでいるらしい、本当に学識がある」とおっしゃったのを聞いて、その言葉をわざわざ人々に言い広め、「日本紀の御局」という呼び名をつけて、作者を皮肉った。
- c 『源氏物語』を人にお読ませになってお聞きになった帝が、「この物語の作者は『日本書紀』を読んでいるらしい、本当に学識がある」とおっしゃったのを聞いて、その言葉が誤っていると言い広め、「日本紀の御局」という呼び名をつけて、作者を皮肉った。
- d 『源氏物語』を人にお読ませになってお聞きになった帝が、「左衛門の内侍は『日本書紀』を読んでいるらしい、本当に学識がある」とおっしゃったのを聞いて、人々がその言葉を言い広め、「日本紀の御局」と名づけたので、左衛門の内侍は恥ずかしがっていた。
- e 『源氏物語』を人にお読ませになってお聞きになった帝が、「左衛門の内侍は『日本書紀』を読んでいるらしい、本当に学識がある」とおっしゃったのを聞いて、その言葉をわざわざ人々に言い広めて自慢し、「日本紀の御局」と自ら名のつて、得意がった。

問5 作者の兄弟である藤原惟規についてどのようなことが述べられているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 藤原惟規は子どものころ、本を読んだり暗記したりするのがとても苦手で、なかなか上達しなかったので、作者から「残念なことに、男の子なのに学才を持たずに生まれてきたのは不幸せだ」とさんさん馬鹿にされていた。
- b 藤原惟規は子どものころ、本当は漢籍についての優れた学才があったが、それをむやみにひけらかしすぎ、そのために両親は「残念なことに、男の子なのに世間を知らず、不幸せな人生を送ることになるだろう」と嘆いていた。
- c 藤原惟規は子どものころ、本を読むのがとても苦手で、なかなか上達しなかったので、両親は「残念なことに、男の子なのに学才を持たずに生まれてきたのは不幸せだ」と嘆いた。

- d 藤原惟規は子どものころ、本を読んだり暗記したりするのが苦手で、そばにいる作者の方が早く進んだので、両親は「残念なことに、この子が男の子として生まれなかったのが不幸だった」と嘆いた。
- e 藤原惟規は子どものころ、学問がとても苦手だったので、両親は「残念なことに、この子のほかにもっと優れた男の子を持たなかったのが不幸だった」と嘆いた。

問6 左衛門の内侍のことを聞いた作者は、どのようにふるまったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 左衛門の内侍がそうだったようにむやみに学才をひけらかすと不幸になるとわかったので、ひたすら屏風の字も読めないふりをしてすごした。
- b 左衛門の内侍がそうだったようにむやみに学才をひけらかすと不幸になるとわかったので、惟規と同じように屏風の字も読めないふりをしてすごした。
- c 学才をひけらかすと不幸になると言われ、注意していたが、左衛門の内侍に賞賛されていると知ってからは、屏風の字も読めないふりをしてすごした。
- d 学才をひけらかすと不幸になると言われ、注意していたが、左衛門の内侍が陰口を言っていると知ってからは、屏風の字も読めないふりをしてすごした。
- e 学才をひけらかすと不幸になると言われてもあきれるばかりで無視していたが、左衛門の内侍が陰口を言っていると知ってからは注意してすごした。

問7 中宮彰子が『白氏文集』を学びたい様子だったのを受けて、作者や道長はどのようにふるまったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 中宮彰子が『白氏文集』を学びたい様子だったので、その中の「楽府」二巻を作者が教えたが、そのことは人には隠していた。しかし、道長がそれを知って、りっぱに書かれた写本を作らせて、中宮に献上した。
- b 中宮彰子が『白氏文集』を学びたい様子だったので、その中の「楽府」二巻を作者が教えたが、そのことは父の道長以外には隠していた。道長も、それを左衛門の内侍に知られないよう、自ら写本を作らせ、中宮に献上した。
- c 中宮彰子が『白氏文集』を学びたい様子だったので、その中の「楽府」二巻を作者が教えたが、そのことは左衛門の内侍だけには隠していた。道長も、そ

れを左衛門の内侍に知られないよう、自ら写本を作らせ、中宮に献上した。

d 中宮彰子が『白氏文集』を学びたい様子だったので、道長の命によってその中の「楽府」二巻を作者が教えたが、そのことは人に隠していた。道長は、自分でも「楽府」についてのすばらしい著作を書き、中宮に献上した。

e 中宮彰子が『白氏文集』を学びたい様子だったので、その中の「楽府」二巻を作者が教えたが、よい写本を使っていなかったため、人には隠していた。道長はそれを知って、りっぱに書かれた写本を作らせて、中宮に献上した。

問8 作者が左衛門の内侍について、懸念していることは何か。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 作者が『白氏文集』を教えていることは、左衛門の内侍はまだ知らないだろうが、もし知ったら、どんなにか道長に告げ口を言うことだろうと思うと、世の中は何かと煩雑で、うっとうしいものだと思う。

b 作者が『白氏文集』を教えていることは、左衛門の内侍はまだ知らないだろうが、もし知ったら、どんなにか作者をけなすことだろうと、世の中は何かと煩雑で、憂鬱ゆううつなものだと思う。

c 作者が『白氏文集』を教えていることは、左衛門の内侍はまだ知らないだろうが、もし知ったら、どんなにか作者に悪口を言うだろうと思うと、世の中のことわざで多く言われているように、うるさいものだと思う。

d 道長が『白氏文集』を献上したことは、左衛門の内侍はまだ知らないだろうが、もし知ったら、どんなにか作者をけなすことだろうと、世の中は何かと煩雑で、つらいものだと思う。

e 道長が『白氏文集』を献上したことは、左衛門の内侍はまだ知らないだろうが、もし知ったら、どんなにか道長の評判を落とすことだろうと、世の中のことわざで多く言われているように、わずらわしいものだと思う。

問9 傍線部(A)を「さ」ところ」の内容を明らかにして現代語訳せよ。ただし、「ふる里の女」とは作者の実家の侍女たちを言う。



次の文章は、光源氏の息子の夕霧(問題文中では「中納言の君」)が、娘である女三宮の婿選びに頭を悩ませている朱雀院のもとを訪れた場面である。これを読んで、後の問いに答えよ。

中納言の君参りたまへるを、御簾みすの内に召し入れて、御物語こまやかなり。[\*<sub>1</sub>故院の上の、今はのきさまに、あまたの御遺言ありし中に、\*<sub>2</sub>この院の御こと、\*<sub>3</sub>今の内裏うちの御ことなむ、とり分きてのたまひおきしを、\*<sub>4</sub>おほやけとなりて、こと限りありければ、内々の心よせは変はずながら、はかなきことのあやまりに、心おかれたてまつることもありけむと思ふを、年ごろことにふれて、その恨み残したまへる気色をなむ漏らしたまはぬ。さかしき人といへど、身の上になりぬれば、こと違たがひて心動き、必ずその報い見え、ゆがめることなむ、いにしへだに多かりける。いかならむ折にか、その御心ばへほころぶべからむと、世人もおもむけ疑ひけるを、つひに忍び過ぐしたまひて、\*<sub>5</sub>東宮などにも心をよせきこえたまふ。今、はた、またなく親しかるべき仲となり、睦むつび交はしたまへるも、限りなく心には思ひながら、本性ほんじょうの愚かなるに添へて、\*<sub>6</sub>子の道の闇にたち交じり、かたくななるさまにやとて、なかなかよそのことに聞こえ放ちたるさまにてはべる。内裏の御ことは、かの御遺言違へず、つかうまつりおきてしかば、かく末の世の明らけき君として、きし方の御面をもおこしたまふ、本意ほんいのごと、いとうれしくなむ。\*<sub>7</sub>この秋の行幸の後、いにしへのこととり添へて、ゆかしくおぼつかなくなむ覺えたまふ。対面たいめんに聞こゆべきことどもはべり。必ず自らとぶらひものしたまふべきよし、催し申したまへ」など、うちしほたれつつのたまはず。

中納言の君、「過ぎはべりにけむ方は、ともかくも思うたまへわきがたくはべり。年まかり人りはべりて、おほやけにも仕うまつりはべる間、世の中のことを見たまへまかりありくほどには、大小のことにつけても、内々のさるべき物語などのついでにも、いにしへのうれはしきことありてなむなど、うちかすめ申さるる折ははべらずなむ。かくおほやけの御後見うしろみを仕うまつりさして、しづかなる思ひをかなへむと、ひとへに籠りぬし後は、何事をも知らぬやうにて、故院の御遺言のごとも、え仕うまつらず、御位におはしましたし世には、年齢よはひのほども、身の器物うつはものも及ばず、かしき上人々多くて、その志を遂げて、御覽せらるることもなかりき。今かくまつりごとをさりて、しづかにおはしますころほひ、心の内をも隔てなく、参りうけたまはらまほしきを、さすがに何となく所せき身のよそほひにて、おのづから月日を過

ぐすこととなむ、折々嘆き申したまふ」など奏したまふ。

二十にもまだわづかなるほどなれど、いとよく整ひすくして、容貌かたちも盛りにほひて、いみじく清らなるを、御目にとどめて、うちまもらせたまひつつ、<sup>⑧</sup>このもてわづらはせたまふ姫宮の御後見にこれをやなど、人知れず思し寄りけり。「太政大臣のわたりには、今は住みつかれにたりとな。年ごろ心得ぬさまに聞きしが、いとほしかりしを、耳やすきものから、さすがにねたく思ふことこそあれ」と、のたまはする御気色を、いかにのたまはするにかと、あやしく思ひめぐらすに、\*この姫君をかしく思しあつかひて、さるべき人あらばあづけて、心安く世をも思ひ離ればやとなむ思しのたまはすると、おのづから漏り聞きたまふ便りありければ、さやうの筋にやとは思ひぬれど、ふと心得顔にも何かは答こたへへきこえさせむ。ただ、「はかばかしくもはべらぬ身には、よるべもさぶらひがたくのみなむ」とばかり奏してやみぬ。

(『源氏物語』若菜上による)

#### 注

- \* 1 故院の上||光源氏と朱雀院の父親である桐壺院のこと。
- \* 2 この院||六条院すなわち光源氏のこと。
- \* 3 今の内裏||今上すなわち冷泉帝のこと。
- \* 4 おほやけとなりて||帝となつて。
  - \* 5 東宮||朱雀院の皇子である皇太子のこと。
- \* 6 子の道の闇||「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」(『後撰集』)による表現。
- \* 7 この秋の行幸||光源氏の住む六条院へ帝と一緒に出かけたことを指す。
- \* 8 この姫君||朱雀院の皇女である女三宮のこと。

問1 過去をふりかえつて、朱雀院は光源氏との関係をどのように思っているのか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 亡き桐壺院が臨終の折に、遺言で光源氏のことと冷泉帝のことを特別に頼まれたが、位につくと制約があり、心の中の好意は変わらぬものの、ちよつとした行き違いから、光源氏に恨まれることもあつたかと思つている。

b 亡き桐壺院が臨終の折に、遺言で光源氏のことを特別に頼まれたが、位につくとつい慢心して、心の中では小馬鹿にし、ちよつとした行き違いから、光源氏に恨まれることもあったかと思っている。

c 亡き桐壺院が臨終の折に、遺言で光源氏のことと冷泉帝のことを特別に頼まれたが、位につくと制約があり、心の中で嫌うことは変わらなかつたけれども、そらぞらしく謝ったことでも、光源氏に恨まれることもあったかと思っている。

d 亡き桐壺院が臨終の折に、遺言で光源氏のことと冷泉帝のことを特別に頼まれたが、位につくとつい慢心して、心の中の悪意は隠してはいても、それとなく態度に表れて、光源氏に恨まれることもあったかと思っている。

e 亡き桐壺院が臨終の折に、遺言で光源氏のことと冷泉帝のことを特別に頼まれたが、位につくと制約があり、内輪での気安さから、大きく道理にはずれたふるまいをして、光源氏に恨まれることもあったかと思っている。

問2 朱雀院の光源氏に対する仕打ちに、光源氏はどのような態度を示していたのか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a どんなに賢明な人であっても、自分のこととなると冷静でいられず、必ず復讐をし、道を踏みはずすもので、いったいいつ怒りの心が爆発するのかと世間の人も注目してきたが、光源氏もやはり最後には我慢しきれなくなった。

b どんなに賢明な人であっても、自分のこととなると心が動揺して、必ず復讐をし、道を踏みはずすもので、いったいいつ恨みの心が抑えられずに出るのかと世間の人も疑い見ていたが、光源氏はどうとう最後まで辛抱しとおした。

c どんなに賢明な人であっても、身内のこととなると心が動揺して、無礼な行動をし、失敗をするもので、いったいいつ怒りの心が我慢しきれなくなるのかと世間の人も注目してきたが、光源氏はどうとう最後まで辛抱しとおした。

d どんなに賢明な人であっても、自分のこととなると興奮して、必ず権力に頼り、失敗をするもので、いったいいつ荒々しい本性が出るのかと世間の人も待ち構えていたが、光源氏はどうとう最後まで理性を保ったままでいた。

e どんなに賢明な人であっても、身内のこととなると心が動揺して、必ず理性を失くし、失敗をするもので、いったいいつ妥協するのかと世間の人も疑って

きたが、光源氏はとうとう最後まで自分を貫きとおした。

問3 朱雀院は光源氏に関して、夕霧にどのようなことを頼んだのか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 昔のことも思い出されて、なつかしくお会いしたい気持ちです。直接お目にかかって申し上げたいこともあります。必ず御自身でお訪ねくださるよう、おすすめください。

b 昔のことも思い出されて、光源氏のこと心配でたまりません。直接お目にかかって申し上げたいこともあります。必ず私の方から出かけていきたいと思います。

c 昔のことはとかく忘れがちですから、元気なうちに早くお目にかかりたいものです。直接お目にかかって申し上げたいこともあります。必ず私の方から出かけていきますので、その旨お伝えください。

d 昔のことも思い出されて、なつかしくお会いしたい気持ちです。夕霧のことで申し上げたいこともあります。必ず御自身でお訪ねくださるよう、おすすめください。

e 昔のことも思い出されて、なつかしいお気持ちでいっぱいでしょう。直接お目にかかって申し上げたいこともあります。必ず御自身でお訪ねくださるよう、おすすめください。

問4 夕霧は朱雀院にむかって光源氏の過去の言動をどのように語ったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 成人して、朝廷にお仕えしている間、世間のことを勉強してあるく内に、大小さまざまなことにつけても、内輪の話のついでにも、「昔うれしいことがあつて」など、ほめかしていることありませんでした。

b 成人して、朝廷にお仕えしている間、世間のことを勉強してあるく内に、大小さまざまなことに会おうにつけても、内々のはずかしいことでも、「昔悲しい目にあつて」など、あからさまにいうことありませんでした。



c 成人して、朝廷にお仕えしている間、世間のことを勉強してあるく内に、大小さまざまなことに会うにつけても、内々の誇らしいことでも、「昔誇らしいことがあって」など、ほめかしていることもありませんでした。

d 成人して、朝廷にお仕えしている間、世間のことを勉強してあるく内に、大小さまざまなことにつけても、内輪の話のついでにも、「昔大変な目にあっ

て」など、あからさまにいうこともありませんでした。

e 成人して、朝廷にお仕えしている間、世間のことを勉強してあるく内に、大小さまざまなことにつけても、内輪の話のついでにも、「昔ひどい目にあっ

て」など、ほめかしていることもありませんでした。

問5 夕霧の容貌について、どのように描写されているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 夕霧は、年齢はまだ二十歳をわずかに出たばかりであるが、とても立派になって、顔も今を盛りにつやつやと、まことにきれいだ。

b 夕霧は、年齢はまだ二十歳をわずかに出たばかりであるが、体型もほどよく、体じゅうからよい香りもし、まことにきれいだ。

c 夕霧は、年齢はまだ二十歳にあと少しというぐらいだが、とても立派になって、顔も今を盛りにつやつやと、まことにきれいだ。

d 夕霧は、年齢はまだ二十歳にあと少しというぐらいだが、体型もほどよく、体じゅうからよい香りもし、まことに清潔そうである。

e 夕霧は、年齢はまだ二十歳にあと少しというぐらいだが、とても立派になって、頭髪からよい香りもし、まことに清潔そうである。

問6 夕霧の結婚について、朱雀院はどのような感想をもちましたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a あなたは、太政大臣の邸に今は落ち着かれたとか。結婚問題で長年思うようにならないと聞いて、悲しく思っておりましたが、無事にいい人があったという

ことで安心しましたもの、私としてはまだ心配に思うことがあります。

b あなたは、太政大臣の邸に今は落ち着かれたとか。結婚問題が長年妙な具合になっていたと聞いて、お気の毒に思っておりましたが、無事に解決したという

ことで安心しましたもの、私としてはやはり残念に思うことがあります。

- c あなたは、太政大臣の邸に今は落ち着かれたとか。結婚問題が長年こじれて困っておられると聞いて、心配をしておりましたが、無事にいい人があったと  
いうことで安心しましたので、私としてはゆっくり休めるように思います。
- d あなたは、太政大臣の邸に今は落ち着かれたとか。結婚問題について長年不満に思っていると聞いて、内心ほくそえんでおりましたが、無事に解決して安  
心なさっているとのことで、私としては心からは喜べないこともあります。
- e あなたは、太政大臣の邸に今は落ち着かれたとか。結婚問題について長年よい相手がみつからないと聞いて、同情しておりましたが、無事に解決したとい  
うことで安心しましたので、私としては心からお祝いを申し上げます。

問7 女三宮の結婚問題について、朱雀院がどのような意向を持っていると、夕霧は聞いていたのか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a この女三宮のことを、このように心配して、適当な親戚筋の人があったならその世話を頼んで、気楽な身分の状態で出家したいものだという意向を持つて  
いる。
- b この女三宮のことを、このように心配して、しかるべき地位にある人があったらその世話を頼んで、何の憂いもない状態で死を迎えたいものだという意向  
を持つている。
- c この女三宮のことを、このように心配して、経済的に恵まれた人があったらその世話を頼んで、何のわだかまりもない状態で出家したいものだという意向  
を持つている。
- d この女三宮のことを、このように心配して、あとを託すのに適当な人があったらその世話を頼んで、何の気がかりもない状態で出家したいものだという  
意向を持つている。
- e この女三宮のことを、このように心配して、現在の妻と離婚をしても女三宮と一緒にいる人があったらその世話を頼んで、澄んだ気持ちで死を迎えたい  
ものだという意向を持つている。

問8 夕霧の結婚について述べられた朱雀院の言葉に対し、夕霧はどのような反応を示したか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 夕霧は、女三宮との縁談の件ではないかと思ったが、すぐに、お断わりいたしますとも、お答えすることもできず、ただ、「一人前でもない私には、とても考えられないお話で」とだけ申し上げるにとどまった。

b 夕霧は、女三宮との縁談の件ではないかと思ったが、すぐに、承知しましたとも、お答えすることもできず、ただ、「一人前でもない私には、まことに結構なお話で」とだけ申し上げるにとどまった。

c 夕霧は、女三宮との縁談の件ではないかと思ったが、すぐに、わかっていたかのように、お答えすることもできず、ただ、「一人前でもない私には、頼りにできる人もなくて」とだけ申し上げるにとどまった。

d 夕霧は、女三宮との縁談の件ではないかと思ったが、すぐに、待っていたかのように、お答えすることもできず、ただ、「一人前でもない私には、もう少し時間をいただければ」とだけ申し上げるにとどまった。

e 夕霧は、女三宮との縁談の件ではないかと思ったが、すぐに、納得できないとも、お答えすることもできず、ただ、「一人前でもない私には、ひとり決めることもできませんで」とだけ申し上げるにとどまった。

問9 傍線部④を、「これ」の指す内容を明らかにして現代語訳せよ。

次の文章は、『狭衣物語』の一節である。狭衣の君(本文中では「大将」)が弘徽殿にある典侍の局を訪れようとして、偶然、他の室内を垣間見たところ、女房達や姫君達がちょうど狭衣の君の噂話をしているところだった。これを読んで、後の問いに答えよ。

(ある女房)「\*<sub>1</sub>中務宮の姫君にぞ、\*<sub>2</sub>その夜の事を語りきこえさせしを、やがてそのままに絵にかきたまひたりし\*<sub>3</sub>御子の御容貌は、うるはしく、めでたうて、いとようこそ似たりしか。『大将の御ありさまぞ、すべて及ぶべくもあらぬ』とて、果ては破りたまひてき」など語れば、\*<sub>4</sub>三の宮とおぼえたまふ少し起きあがりて、(女三の宮)「その絵、など見せざりける、心憂かりける」と恨みたまふけはひ幼びて、ふくらかに愛敬づき、うつくしげにぞ見えたまふ。(ある女房)「御覽せさせんとせしかど、散らさじと隠されしかば、口惜しくこそ。かの姫君こそ大将の\*<sub>5</sub>具にはせまほしく見えたまへ」など、うちとけたる物語どもすれど、\*<sub>6</sub>いま一所はものたまはず、箏を\*<sub>7</sub>手まさぐりにしつづ、人のもの言ひ笑ふを見やりて、少しほほ笑みたまへる口つき、まみ、面\*<sub>8</sub>様などよりはじめて、ほのかなればにや、げに、これぞ類なき人の御容貌なめれと、よそに思ひつるよりは、こよなう心とまりて、とみにも立ち出でられぬほどに、出でたりける夜居の僧参りて、妻戸もあららかに懸けつる音すれば、いとわりなくて、え出でずなりぬるにや、いかにせん、と思ふ思ふ、なほ見立ちたまへれば、宮の物語しつる人は「\*<sub>9</sub>蓬が門」と言ひし歌も語り出でつづ、(ある女房)「姫君の御乳母子の小宰相と言ひしが、しかじか聞こえたりし」など語る。誰ならんと思ひしを、さればよと聞きたまふもをかし。

少しおとなしかりつる、(乳母)「例の乱り心地、悪しうなりにたり。今宵はよも起こらじとこそ思ひつれ。夜(こと)にさへなりぬるなりけり。\*<sub>10</sub>大宮のおはしまさぬほどに、わりなきわざかな。\*<sub>11</sub>宮も御かたはらにさぶらはせたまへよ」と言ひて、下るは\*<sub>12</sub>御乳母なるべし。もの言ひつる人、(中将)「三の宮の御前には\*<sub>13</sub>中将さぶらはん」とて、御衣ひきたてまつらせなどするこそ、この宮の御乳母子ありと聞きしなりけりと思しぬる。『更けさぶらひぬるなめり。御帳参らせたまへ』と申せど、昼の御座に、うたたねにみな臥したまひぬ。

箏弾きたまへるは、やがて枕にて御顔ひき入れて臥したまへる様体なども、人にも似ず、心苦しげに見たまふなど、ただかばかり見たてまつり置きて出でんが、口惜しうぞおぼえなりぬる。さばかり、御簾の外をだに、むつかしうわづらはしきあたりと思しつるは、たがひぬる御心の中、我ながら憎し。(狭衣の君)「ただかくなん、

け近きほどにて見たてまつる」とばかり、\*<sub>12</sub>かの御耳に聞こえさせざらんも、あまり埋もれいたかりぬべければ、やをら寄りて、奥の御座に少しひき入れたてまつりたまふに、思しあへず、(女二の宮)「こは誰ぞ」と言はれたまふ御けはひ、世に知らずらうたげなり。

(狭衣の君)死にかへり待つに命ぞ絶えぬべきなかなか何に頼みそめけん

とのたまふ御けはひを、いみじき御心まどひにも、この人とや聞き知らせたまひけん、いとど恥づかしういみじきに、ものもおぼえたまはず、ただひき被きて泣きたまふ御けはひなど、いとど近まさりして、年ころの心のほどよりは、かばかりにて立ちのかんとはおぼえねば、かの夜半の\*<sub>13</sub>身のしろ衣、さりともし思しかへさんやはと、頼もしきにも、\*<sub>14</sub>苔の乱れまさりつつ、(狭衣の君)「大宮便なげにのたまはずなるが心憂さに、かばかりも近くて聞こえさせんとてなん。心のどかに思しめせ。④上」の御ゆるしはんべらざらんほどは、なめげなる心のほどはよも見えまぬらせじ」とて、げに疎ましかるべきにもあらねど、かばかりも知らぬ人に見えさせたまふ、あさましく恥づかしく思されて、なよなよとあてに心苦しきものから、ただ御衣にまつはれて、思ししほれたるさま、なのめならずらうたげなり。

## 注

- \* 1 なかつかさのみや 中務宮の姫君中務卿である親王の姫君。
- \* 2 その夜のことこれより前の場面、天稚御子が降臨し、狭衣の君を天上へ連れて行こうとした事件のことをさす。
- \* 3 御子天稚御子。
- \* 4 三の宮噂話をしていた姫君のうち、末の姫君。
- \* 5 具配偶者。
- \* 6 いま一所三の宮の姉の女二の宮のこと。
- \* 7 蓬が門以前、ある女から狭衣の君に、「しらぬまのあやめはそれと見えずとも蓬が門は過ぎずもあらなん」という歌が送られていた。
- \* 8 大宮皇太后。姫君たちの母。
- \* 9 宮噂話の場にいる姉宮。
- \* 10 御乳母女三の宮の乳母。
- \* 11 中将乳母(\*10)の子。
- \* 12 かの御耳女二の宮のこと。
- \* 13 身のしろ衣「みのしろも我脱ぎ着せん返しつと思ひなわびそ天の羽衣」という歌をふまえる。天稚御子降臨事件(\*2)の際、帝が女二の宮を狭衣の君に

与えようとしたときに詠んだ歌。

\* 14 苔の乱れまさりつつ逢うことを待つ心がますます乱れつのもつて。「逢ふことをいつかその日とまつ木の苔の乱れて恋ふるこのころ」(『古今六帖』)による表現。

問1 ある女房は中務宮の姫君のことをどのように語ったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 中務宮の姫君は、私その夜のことを語った後、しばらくしてその様子を絵にお描きになりましたが、その天稚御子の容貌は整っていて美しく、とてもよく似ていました。しかし、中務宮の姫君は、狭衣の君のありさまはこの世のどのような人にもまったく及ばない、と最後に言い捨てるようにおっしゃいました。

b 中務宮の姫君は、私その夜のことを語った後、すぐにその様子を絵にお描きになりましたが、その天稚御子の容貌は端麗で美しく、とてもよく似ていました。しかし、中務宮の姫君は、狭衣の君のありさまはどんな絵を描いても及ばない、と最後には絵を破ってしまわれました。

c 中務宮の姫君は、私その夜のことを語った後、すぐにその様子を絵にお描きになりましたが、その天稚御子の容貌は立派で美しく、とてもよく似ていました。しかし、中務宮の姫君は、狭衣の君のありさまは天稚御子にはまったく及ばない、と最後には絵を破ってしまわれました。

d 中務宮の姫君は、私その夜のことを語った後、すぐにその様子を絵にお描きになりましたが、その天稚御子の容貌は不吉なほど美しく、とてもよく似ていました。しかし、中務宮の姫君は、狭衣の君のありさまはこの世のすべての絵にもまさる美しさである、と最後に言い捨てるようにおっしゃいました。

e 中務宮の姫君は、私その夜のことを語った後、しばらくしてその様子を絵にお描きになりましたが、その天稚御子の容貌は上品で美しく、とてもよく似ていました。しかし、中務宮の姫君は、狭衣の君のありさまにはまったく及ばない、と最後には絵を破ってしまいそうなお様子でした。

問2 狭衣の君は、女二の宮の様子を垣間見してどうしたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 女二の宮は、ほほえんでいる口元、目元、顔立ちをはじめ、はっきりと見えないせいか、その様子は比類ない美貌の持ち主のようだと、狭衣の君は、関心

のなかったときと比べるとこの上なく心ひかれて、すぐに退出することができなかった。

b 女二の宮は、ほほえんでいる口元、目元、顔立ちをはじめ、温和な表情をしているので、その様子は間違いなく比類ない美貌の持ち主だと、狭衣の君は、関心のなかったときと比べるとこの上なく心ひかれて、すぐに退出することができなかった。

c 女二の宮は、ほほえんでいる口元、目元、顔立ちをはじめ、温和な表情をしているので、もしかしたら比類ない美貌の人物であるかもしれないと、狭衣の君は、女一の宮や女三の宮と比べるとこの上なく心ひかれて、すぐに退出することができなかった。

d 女二の宮は、ほほえんでいる口元、目元、顔立ちをはじめ、はっきりと見えないせいか、その様子は比類ない美貌の持ち主のようだと、狭衣の君は、関心のなかったときと比べるとこの上なく心ひかれて、今すぐ女二の宮の近くまで出て行くことができるだろうかと思案した。

e 女二の宮は、ほほえんでいる口元、目元、顔立ちをはじめ、温和な表情をしているので、もしかしたら比類ない美貌の人物であるかもしれないと、狭衣の君は、女一の宮や女三の宮と比べるとこの上なく心ひかれて、今すぐ女二の宮の近くまで出て行くことができるだろうかと思案した。

問3 夜居の僧が参上したとき、狭衣の君は何を考え、どのように行動したか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 夜居の僧が参上して、荒々しく妻戸を開けて金具を止める音がするので、とても恥ずかしく、女二の宮の前に出られなくなってしまったのだろうか、どうしようと思ったが、同じように垣間見を続けた。

b 夜居の僧が参上して、荒々しく妻戸を閉めて鍵をかける音がするので、とてもつまらなく、女二の宮の前に出られなくなってしまったのだろうか、どうしようと思ったが、それでもやはり垣間見を続けた。

c 夜居の僧が参上して、荒々しく妻戸を開けて金具を止める音がするので、とても意地悪だと思い、この局から出られなくなってしまったのだろうか、と、まどいながらも、垣間見を続けた。

d 夜居の僧が参上して、荒々しく妻戸を開けて金具を止める音がするので、とてもたえがたく、女二の宮の前に出られなくなってしまったのだろうか、どうしようと思ったが、それでもやはり垣間見を続けた。

e 夜居の僧が参上して、荒々しく妻戸を閉めて鍵をかける音がするので、とても困って、この局から出られなくなってしまったのだろうか、とまどいながらも、そのまま垣間見を続けた。

問4 乳母と思われる人物が退出するときの様子は、どのようだったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 乳母と思われる人物は、ややおとなびた女性で、「いつもの持病が悪くなっていました。今夜はもう発作が起こることはあるまいと思っていました。夜じゅうずつと起こるようになってしまいました。姉宮様も妹宮様のおそばにいてさしあげてくださいよ」と言って退出した。

b 乳母と思われる人物は、ややおとなしそうな女性で、「いつもの持病が悪くなっていました。今夜はまさか発作が起こることはあるまいと思っていました。夜じゅうずつと起こるようになってしまいました。姉宮様も妹宮様のおそばにいてさしあげてくださいよ」と言って退出した。

c 乳母と思われる人物は、ややおとなびた女性で、「いつもの持病が悪くなっていました。今夜はまさか発作が起こることはあるまいと思っていました。毎晩起こるようになってしまいました。姉宮様も妹宮様のおそばにいてさしあげてくださいよ」と言って退出した。

d 乳母と思われる人物は、ややおとなしそうな女性で、「いつもの持病が悪くなっていました。今夜は決して発作が起こらないでほしいと思っています。毎晩起こるようになってしまいました。姉宮様も妹宮様のおそばにいてさしあげてくださいよ」と言って退出した。

e 乳母と思われる人物は、ややおとなびた女性で、「いつもの持病が悪くなっていました。今夜は決して発作が起こらないでほしいと思っています。夜じゅうずつと起こるようになってしまいました。姉宮様も妹宮様のおそばにいてさしあげてくださいよ」と言って退出した。

問5 女二の宮が横になったのを見た狭衣の君の心情はどのようなものだったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 狭衣の君には、女二の宮のお休みになった姿が、並大抵の女性の姿ではなく、胸がつまるほどせつない様子と見えたので、このまま放って出るのはみっともない気持ちになった。これまでは、弘徽殿の御簾の外を通るのさえやかいで気味の悪いあたりだと思っていたのに、まったく変わってしまった心持ちは、我ながらはしたなく思われた。



b 狭衣の君には、女二の宮のお休みになった姿が、並大抵の女性の姿ではなく、胸が苦しそうな様子と見えたので、このまま放って出るのには感心しない気持ちになった。これまでは、弘徽殿の御簾の外を通るのさえ気味が悪く病気にでもなりそうだと思っていたのに、間違った心持ちだったと、これまでの自分がはしたなく思われた。

c 狭衣の君には、女二の宮のお休みになった姿が、他の女性と違って、悩みをかかえていて心配している様子と見えたので、このまま放って出ると情がないような気持ちになった。これまでは、弘徽殿の御簾の外を通るのさえやかいかいでいやなあたりだと思っていたのに、まったく変わってしまった心持ちは、我ながらはしたなく思われた。

d 狭衣の君には、女二の宮のお休みになった姿が、他の女性と違って、胸がつまるほど困った様子と見えたので、このまま放って出るのがいやな気持ちになった。これまで、弘徽殿の御簾の外を通るのさえやかいかいで重苦しいあたりだと思っていたのは、間違った心持ちだったと、これまでの自分のはしたなく思われた。

e 狭衣の君には、女二の宮のお休みになった姿が、他の女性と違って、胸がつまるほどいたわしい様子と見えたので、このまま放って出るのが残念な気持ちになった。これまでは、弘徽殿の御簾の外を通るのさえやかいかいでいやなあたりだと思っていたのに、まったく変わってしまった心持ちは、我ながらはしたなく思われた。

問6 狭衣の君が女二の宮のところに寄ったところ、女二の宮はどのような様子だったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 狭衣の君が、静かに女二の宮のところに寄って、奥の帳台に少し引き入れ申し上げようとなさったところ、何も考えず、「これは誰」と言った女二の宮の様子は、世間知らずで子どもっぽく見えた。

b 狭衣の君が、そっと女二の宮のところに寄って、奥の帳台に少し引き入れ申し上げようとなさったところ、何も考えず、「これは誰」と言った女二の宮の様子は、この上なくかわいらしく見えた。

c 狭衣の君が、大胆に女二の宮のところに寄って、奥の帳台に少し引き入れ申し上げようとなさったところ、何も考えず、「これは誰」と言った女二の宮の

様子は、世間知らずでかわいらしく見えた。

d 狭衣の君が、少しずつ女二の宮のところに寄って、奥の帳台に少し引き入れ申し上げようとなさったところ、何も考えず、「これは誰」と言った女二の宮の様子は、この上なく子どもっぽく見えた。

e 狭衣の君が、おもむろに女二の宮のところに寄って、奥の帳台に少し引き入れ申し上げようとなさったところ、何も考えず、「これは誰」と言った女二の宮の様子は、この上なく強情そうに見えた。

問7 狭衣の君が詠んだ歌に対する女二の宮の反応はどのようなものだったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 狭衣の君が歌を詠みかけたところ、女二の宮は、ひどく取り乱していても、狭衣の君だと声を聞いてわかったのか、ますますきまりが悪くみじめな思いで、正気もなく、ただ衣を被って泣いていた。

b 狭衣の君が歌を詠みかけたところ、女二の宮は、ひどく取り乱していて、狭衣の君だとはっきりとわからず、ますますきまりが悪く情けない思いだったが、狭衣の君の声とは似ていない気がしたので、ただ衣を被って泣いていた。

c 狭衣の君が歌を詠みかけたところ、女二の宮は、ひどく取り乱していたために、狭衣の君だと聞いてもわからなかったので、ますますきまりが悪く困った思いで、狭衣の君の声を思い出すことができず、ただ衣を被って泣いていた。

d 狭衣の君が歌を詠みかけたところ、女二の宮は、ひどく取り乱していたさなかに、狭衣の君が自分だと知らせたからか、ますますきまりが悪くつらい思いで、何が起ったかもわからない様子で、ただ衣を被って泣いていた。

e 狭衣の君が歌を詠みかけたところ、女二の宮は、ひどく取り乱していたさなかに、狭衣の君が自分だと知らせたからか、ますますきまりが悪く恐ろしい思いで、正気もなく、ただ衣を被って泣いていた。

問8 狭衣の君と対面した後の女二の宮の様子は、どのようなものだったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 女二の宮は、必ずしも、狭衣の君の様子に好感が持てないわけではなかったが、こんなにまで知らない人を身近でごらんになるのは、不思議なことで恥ずかしくお思いいになった。
- b 女二の宮は、実は、狭衣の君のことをいやな気がしたわけではなかったが、こんなにまで知らない人だと思ってしまうのは、あきれほど情けなく恥ずかしくお思いいになった。
- c 女二の宮は、決して、狭衣の君の様子を気味悪く思ったわけではなかったが、こんなにまで知らない人に恐れを感じたことを、あきれほど恥ずかしくお思いいになった。
- d 女二の宮は、実際は、狭衣の君と疎遠というほどのことはなかったが、こんなにまで知らない人のような態度を取ってしまったのは、浅はかなことだと恥ずかしくお思いいになった。
- e 女二の宮は、ほんとうに、狭衣の君のことがいとわしいわけではなかったが、こんなにまで知らない人に身近に姿を見られるのは、あきれほど恥ずかしくお思いいになった。

問9 傍線部(A)を現代語訳せよ。

次の文章は、日本の中納言が遣唐使となって唐の国に渡り、唐の大臣の五の君(問題文中では「むすめの君」「五にあたりはべるむすめ」とある)を訪ねる場面である。これを読んで、後の問いに答えよ。

この家のいきほひ、いみじく造りかざられたるさま、<sup>だいら</sup>内裏にことならず磨き立てたり。入りたまふほど、\*<sub>1</sub>乱声し、\*<sub>2</sub>樂のしる。男ども七、八人、大納言、中納言などにて、あるかぎりいとやむごとなくてありけるに、ことごとしく迎へられて、水のもととなる、えもいはぬ花のかけ、柳の下に\*<sub>3</sub>胡床ども立てなめて、左右の\*<sub>4</sub>樂屋して、舞をして、文を作り遊びたまふさま、いかめしくおもしろし。御まうけさらなり。いかならむめづらしきことを尽くさむとおぼしたり。大臣うちに入りて見たまへば、錦の帳のうちに、いととなく沈み臥したまへるむすめの君、玉の簪あざやかにて、御簾のもと近く、いとよく笑みて見出でてゐたまへり。

大臣、「あはれ、かくやすかりけることを、今までのたまはで、なやまし聞こえけるよ」とのたまふも、世にはたがへることなりかし。いみじうおもしろうて暮れぬるに、「今宵はかくておはしませ」と、せちにとどめて御簾のうちに入るに、いと恐ろしと聞きあたりを、いかにしつることぞと、いみじくむつかしくおぼえて、大臣の三郎にあたる中納言といふ、つねに来つつ語らふを呼び出でて、「いかにおぼしてとどめさせたまへるにかあらむ。内々うけたまはりてこそ参り来め」とのたまへば、「五にあたりはべるむすめの、すぐれたる\*<sub>5</sub>愛子にはべり。この月ごろなやみわづらひて、起き上がることもはべらざりつるを、なげきかなしみてさぶらひつるに、『日本の中納言を見たてまつらば、心地はやみなむ』と申されければ、ただその心をなぐさめむとはべり」とありのままに聞こゆるも、世づかずあさましく、わがままにうち聞こゆれば、この国のやうは、つくろふことなくものいふなるべし。この人、いささかたはならず、才、ありさまもきらしくやむごとなきが、かくいふはあしからぬことにこそ、と聞こえながら、わが世の人いみじく飾りつくろふならひに、いとをかしう、うち笑はれて、「そは、いとやすき御なぐさめにこそはべるなるを、などか。今まで、かやうにてさぶらひ御覽せられむことはやすかるべきを、この世をかりそめに思ひたまふるやうありて、人の御あたりに近く馴れ御覽せらるることはべらざりし。かやうに、おのづから心とどまる人もはべらましかば、はるかに思ひ寄りかはらましや。ただ推し量りたまへ。すずるにあくがれはべりしあまり、かくまで思ひなりはべりしなり。思へば世づかぬことなり。世のつねのありさまにてはえ聞こえじ。ただ時々かやうに召しはべらむ折々参りはべりなむ。世の

つねのすぢに思ひ寄せたまふにや」とのたまふを、入りて父君に、「かく」と聞こえたまへば、さ聞きしことぞかし、とおぼえて、「しきみなうけたまはりてはべれば。ただ若き人の、めづらしく見たてまつらまほしがりはべるを、いつもいつも、たづね知らせたまへ、とばかりになむ」とて、ただ入れに入るるを、あまり「いな」とて逃げ出づべきにあらねば、入りたまひぬ。

(『浜松中納言物語』による)

注

- \* 1 乱声らんじやう 舞楽に用いられた乱調子の調べ。
- \* 2 楽ののしる 音楽を盛大に演奏すること。
- \* 3 胡床あぐら 楽人が演奏する折に用いた折り畳み式のこしかけ。
- \* 4 楽屋 楽人が演奏する場所と舞人が装束を着ける場所。
- \* 5 愛子あいし 親がかわいがっている子。

問1 家の中に入って、笑みを浮かべている五の君を見て、大臣は何と聞いたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a ああ、何とということだ。このようにわけなく実行できることを、今まであなたが口に出さずにいたために、あなたは私を悩ませなざったことだよ、と大臣は言った。
- b ああ、よかった。このようにわけなく実行できることを、今まであなたが口に出さずにいたために、あなたは私を悩まさずにすんだことだよ、と大臣は言った。
- c ああ、何と奇妙なことだ。このようにわけなく実行できることを、今まであなたが口に出さずにいたために、あなたがお悩みだということを風のたよりに聞くことになったよ、と大臣は言った。
- d ああ、気の毒だ。このようにわけなく実行できることを、今まであなたが口に出さずにいたために、あなたは私を悩ますことになったよ、と大臣は言った。

e ああ、かわいそうに。このようにわけなく実行できることを、今まであなたが口に出さずにいたために、私はあなたを悩まし申し上げることになったよ、と大臣はいった。

問2 大臣家にいた日本の中納言は、その日の暮れにどのようなことをいわれ、どのような感情を抱いたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 日本の中納言は、「今夜はこうしてお過ごしなさいませ」と熱心にひきとどめられて御簾のうちに入れられたため、かねてからたいそう恐ろしいと聞いていた家だったのに、いったいどうしたことかと、ひどくやつかいに感じられた。
- b 日本の中納言は、「今夜はこうしてお過ごしなさいませ」と突然ひきとどめられて御簾のうちに入れられたため、かねてからたいそう恐ろしいと聞いていた家だったのに、いったい何をたくらんでいるのかと、ひどく気味が悪かった。
- c 日本の中納言は、「今夜はこうしてお過ごしなさいませ」としきりにひきとどめられて御簾のうちに入れられたため、かねてからたいそう恐ろしいと聞いていた家だったのに、いったい私が何をしたのかと、ひどく不愉快に思った。
- d 日本の中納言は、「今夜はこうしてお過ごしなさいませ」と急にひきとどめられて御簾のうちに入れられたため、かねてからたいそう恐ろしいと聞いていた家だったのに、いったい今までの何が悪かったのかと、ひどくきまり悪く思った。
- e 日本の中納言は、「今夜はこうしてお過ごしなさいませ」と親切にひきとどめられて御簾のうちに入れられたため、かねてからたいそう恐ろしいと聞いていた家だったのに、いったい何を信じればよいのかと、じれったく思った。

問3 唐の国の中納言を呼び出して、日本の中納言はどのようなことをいったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a あなたはどうお考えになって、この私をひきとどめなさったのでしょうか。内緒で用件をおうかがいしてから、改めて参上いたしますのに、といった。
- b 大臣はどうお考えになって、この私をひきとどめなさったのでしょうか。内々に御意向をうけたまわってから、改めて参上いたしますのに、といった。

c 大臣はどうお考えになって、この私をひきとどめなさったのでしょうか。お身内の話をしていたから、改めて参上いたすかどうか考えてみますのに、といった。

d 大臣はどうお考えになって、この私をひきとどめなさったのでしょうか。内密の用事をすませてから、改めて参上いたしますのに、といった。

e あなたはどうお考えになって、この私をひきとどめなさったのでしょうか。家にいったん戻ってから、改めてお話をうかがいますのに、といった。

問4 日本の中納言の発言に対して、唐の国の中納言はどのように説明したか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 五の君がこの数か月病気で苦しみ、起き上がることもできないでいたのを、父が嘆き悲しんでおりましたところ、五の君が「日本の中納言の顔を拝見したら治るでしょう」といったので、父はただ五の君の気持ちを紛らわせようとしているのです、と説明した。

b 五の君がこの数か月病気で苦しみ、起き上がることもできないでいたのを、私が嘆き悲しんでおりましたところ、五の君が「日本の中納言の顔を拝見したら治るでしょう」といったので、私はただ五の君の気持ちを紛らわせようと思っているのです、と説明した。

c 私がこの数か月病気で苦しみ、起き上がることもできないでいたのを、父が嘆き悲しんでおりましたところ、私が「日本の中納言の顔を拝見したら治るでしょう」といったので、父はただ私の気持ちを紛らわせようとしているのです、と説明した。

d 私がこの数か月病気で苦しみ、起き上がることもできないでいたのを、父が嘆き悲しんでおりましたところ、五の君が「日本の中納言の顔を拝見したら、治るでしょう」といったので、父はただ私の気持ちを紛らわせようとしているのです、と説明した。

e 五の君がこの数か月病気で苦しみ、起き上がることもできないでいたのを、父が嘆き悲しんでおりましたところ、私が「日本の中納言の顔を拝見させたら、治るでしょう」といったので、父はただ五の君の気持ちを紛らわせようとしているのです、と説明した。

問5 唐の国の中納言のもののいい方について、日本の中納言はどのように受け取っているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 唐の国の中納言は多少の難点があるものの、才学や容姿は堂々として立派な生まれなのに、このように素直なものいいをするのは、当地ではけっして悪い

ことではないのであろう、と受け取っている。

b 唐の国の中納言は多少の難点があるものの、才学や容姿は堂々として高貴な方なのに、このようにもってまわったものいいをするのは、当地ではけっして悪いことではないのであろう、と受け取っている。

c 唐の国の中納言は多少の難点があるものの、才学や容姿は堂々として高貴な方なのに、このようにくせのあるものいいをするのは、当地ではけっして悪いことではないのであろう、と受け取っている。

d 唐の国の中納言は少しも難点がなく、才学や容姿も堂々として高貴な方なのに、このようにあらわなものいいをするのは、当地ではけっして悪いことではないのであろう、と受け取っている。

e 唐の国の中納言は少しも難点がなく、才学や容姿も堂々として立派な生まれなのに、このようにとげのあるものいいをするのは、当地ではけっして悪いことではないのであろう、と受け取っている。

問6 唐の国の中納言から五の君の事情について聞かされた日本の中納言はどのように説明したか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 「五の君にお会いするなどというのは、たいそう安易なお心休めでございます。どうしてそのような手段をとることがございましょうか。今までは、この現世というものをほんのひと時だけの仮の人生だと思いうことがあって、女の人のおそば近くでうちとけるなどということとはなかったのでございます」と、日本の中納言は説明した。

b 「五の君にお会いするなどというのは、たいそう安易なお心休めでございまして、どうしてそのような手段をとることがございましょうか。今までは、このような女性との縁というものをほんの間に合わせだと思いうことがあって、女の人のおそば近くにいっても本當にうちとけるなどということはなかったのでございます」と、日本の中納言は説明した。

c 「五の君にお会いするなどというのは、たいそうたやすいお心休めでございまして、どうして差支えなどがございましょうか。今までは、このような女性との縁というものをほんの間に合わせだと思いうことがあって、五の君のおそば近くにいってうちとけようなどと思ったことはなかったのでございます」と



と、日本の中納言は説明した。

d 「五の君にお会いするなどというのは、たいそうたやすいお心休めでございますのに、どうして差支えなどがございましょうか。今までは、この唐の国に渡つてからの人生というものをほんのひと時だけの飯の人生だと思ふことがあつて、唐の人のおそば近くでうちとけるなどということはなかったのだから、日本の中納言は説明した。」

e 「五の君にお会いするなどというのは、たいそうたやすいお心休めでございますのに、どうして差支えなどがございましょうか。今までは、この現世というものをほんのひと時だけの飯の人生だと思ふことがあつて、女の人のおそば近くでうちとけるなどということはなかったのだから、日本の中納言は説明した。」

問7 日本の中納言は、婿入りのことについて、唐の国の中納言にどのように述べたか。最も適當なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 日本の中納言は、「私は世間の常識から外れています。だから世間並みの男の立場で婿入りの話について申し上げることはできません。ただ時々、このようにお召しがある折々に参上しましょう。大臣は私のことを世間にありきたりの婿とお考えになっているのでしようか」と、唐の国の中納言に述べた。

b 日本の中納言は、「私は世俗に染まっている人間ではありません。だから世間並みの男の立場で婿入りの話について申し上げることはできません。ただ時々、このようにお召しがある折々に参上しましょう。あなたは私のことを世間にありきたりの婿とお考えになっているのですか」と、唐の国の中納言に述べた。

c 日本の中納言は、「私は世間の常識から外れています。だから世間並みの婿としての評判は立たないでしょう。ただ時々、このようにお召しがあるならば、その折々に参上しましょう。大臣は私のことを世間にありきたりの婿とお考えになっているのでしようか」と、唐の国の中納言に述べた。

d 日本の中納言は、「私は世間の常識から外れています。だから世間並みの男の立場で婿入りの話について申し上げることはできません。ただ時々、このようにお召しがある折々に参上しましょう。大臣はそれより世間にありきたりの婿をお探しになつていらつしやるのでしようか」と、唐の国の中納言に述べた。

e 日本の中納言は、「私は世俗に染まっている人間ではありません。だから世間並みの婿としての評判は立たないでしょう。ただ時々、このようにお召しがある折々に参上しましょう。あなたは私のことを世間にありきたりの婿としてお考えになっているのですか」と、唐の国の中納言に述べた。

問8 日本の中納言の五の君に対する気持を伝え聞いた父の大臣は、日本の中納言に対して何といったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a あなたがそのような方だということは十分承知しております。ただ、若い娘が珍しく男性と仲良くなりたがっているので、お暇な折には、お訪ねの上身の話をさせてやってくださいと願うばかりです、と大臣はいった。
- b あなたがそのような方だということは十分承知しております。ただ、若い娘が珍しく男性と仲良くなりたがっているので、たとえお忙しくても、お訪ねの上娘の近況をお知らせくださいと願うばかりです、と大臣はいった。
- c あなたがそのような方だということは十分承知しております。ただ、若い娘があなたに心ひかれてお会いしたがっているので、暇ができたときには必ず、お訪ねの上話を聞いてやってくださいと願うばかりです、と大臣はいった。
- d あなたがそのような方だということは十分承知しております。ただ、若い娘があなたに心ひかれてお会いしたがっているの、我慢をしても、お訪ねの上娘の様子をお知らせくださいと願うばかりです、と大臣はいった。
- e あなたがそのような方だということは十分承知しております。ただ、若い娘があなたに心ひかれてお会いしたがっているの、いつなりとも、お訪ねの上仲良くしてやってくださいと願うばかりです、と大臣はいった。

問9 傍線部(A)を、「かく」の内容を明らかにして現代語訳せよ。

次の文章は、『源氏物語』桐壺巻の一節である。桐壺の更衣(文中では「御息所」<sup>みやすじろ</sup>)が亡くなった後、代わって藤壺(本文中では「先帝の四の宮」<sup>きさい</sup>)「后の宮の姫宮」<sup>きみぎ</sup>が、桐壺の帝のもとに入内<sup>しゅだい</sup>してきた場面である。これを読んで、後の問いに答えよ。

年月にそへて、御息所の御ことをおぼし忘るる折なし。慰むやと、さるべき人々参らせたまへど、なずらひにおぼさるるだにいとかたき世かなと、うとましようのみ、よろづにおぼしなりぬるに、\*<sub>1</sub>先帝の四の宮の、御かたちすぐれたまへる聞こえ高くおはします、母后世になくかしづき聞こえたまふを、上にさぶらふ\*<sub>2</sub>典侍は、先帝の御時の人にて、かの宮にも親しう参りなれたりければ、いはけなくおはしましし時より見たてまつり、今もほの見たてまつりて、「うせたまひにし御息所の御かたちに似たまへる人を、\*<sub>3</sub>三代の宮仕へに伝はりぬるに、え見たてまつりつけぬを、后の宮の姫宮こそ、いとようおぼえて、生ひ出でさせたまへりけれ。ありがたき御かたち人になん」と奏しけるに、まことにやと御心とまりて、ねんごろに聞こえさせたまひけり。母后、「あな、おそろしや。\*<sub>4</sub>東宮の女御のいとさがなくて、桐壺の更衣の、あらはにはかなくもてなされにためしもゆゆしう」と、おぼしつみで、すがすがしうもおほし立たざりけるほどに、后もうせたまひぬ。

心ぼそきさまにておはしますに、「ただわが女御子たちの同じ列<sup>つら</sup>に思ひ聞こえむ」と、いとねんごろに聞こえさせたまふ。さぶらふ人々、御うしろみたち、御せうとの\*<sub>5</sub>兵部卿の親王など、かく心細くておはしまさむよりは、内裏住み<sup>うち</sup>させさせたまひて、御心も慰むべくなど、おぼしなりて、参らせたてまつりたまへり。

藤壺と聞こゆ。げに御かたち、ありさまあやしきまでぞおぼえたまへる。これは、人の御きはまさりて、思ひなしめでたく、人もえおとしめ聞こえたまはねば、うけばりてあかぬことなし。かれは、人の許し聞こえざりしに、御ころざしあやにくなりしぞかし。おぼしまぎるとはなけれど、<sup>⑥</sup>おのづから御心うつろひて、こよなくおほし慰むやうなるも、あはれなるわざなりけり。

源氏の君は、御あたり去りたまはぬを、ましてしげく渡らせたまふ御方は、え恥ぢあへたまはず。いづれの御方も、われ人に劣らむとおぼいたるやはある。とりどりにいとめでたけれど、うちおとなびたまへるに、いと若うつくしげにて、せちに隠れたまへど、おのづから漏り見たてまつる。

母御息所も、かげだにおぼえたまはぬを、「いとよう似たまへり」と、典侍の聞こえけるを、若き御心地にいとあはれと思ひ聞こえたまひて、常に参らまほしく、な

づさひ見たてまつらばやと、おぼえたまふ。上もかぎりなき御思ひどちにて、「なうとみたまひそ。あやしくよそへ聞こえつべき心地なむする。なめしとおぼさで、らうたくしたまへ。つらつき、まみなどは、いとよう似たりしゆゑ、通ひて見えたまふも、にげなからずなむ」など聞こえつけたまへれば、幼心地にも、はかなき花、紅葉につけても、こころざしを見えたまつる。こよなう心よせ聞こえたまへれば、\*。弘徽殿の女御、またこの宮とも、御仲そばそばしきゆゑ、うちそへて、もとよりの憎さも立ち出でて、ものしとおぼしたり。

世にたぐひなしと見たてまつりたまひ、名高うおはする宮の御かたちにも、なほにははしさはたとへむ方なく、うつくしげなるを、世の人、光る君と聞こゆ。藤壺ならびたまひて、御おぼえもとりどりなれば、かかやく日の宮と聞こゆ。

## 注

\* 1 先帝 || 先代の帝。

\* 2 典侍 || 内侍司の次官。

\* 3 三代の宮仕へ || 先々代の帝から三代にわたつて宮仕えをした、の意。

\* 4 東宮の女御 || 東宮の母である女御の意で、ここでは弘徽殿こうきでんの女御のこと。

\* 5 兵部卿 || 兵部省の長官。

\* 6 弘徽殿の女御 || 注 4 参照。

問 1 典侍は、先帝の四の宮(後の宮の姫宮)のことを、帝に対してどのように紹介したか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a この私、三代の帝に仕えてまいりました。この間、亡くなった御息所に似た方を、ついぞお見かけすることもありませんでしたが、後の宮の姫君こそは、御息所にたいそう似てお生まれになられた、ありがたいお方です。

b この私、三代の帝に仕えてまいりました。この間、亡くなった御息所に似た方を、ついぞお見かけすることもありませんでしたが、後の宮の姫君こそは、御息所にたいそう似て成人された、珍しい器量よしのお方です。

c この私、三代の帝に仕えてまいりました。この間、亡くなった御息所に似た方を、ついぞお見かけすることもありませんでしたが、後の宮の姫君こそは、

御息所をたいそう思い出させる、珍しい風貌のお方です。

d この私、三代の帝に仕えてまいりました。この間、亡くなった御息所に似た方を、ついぞお見かけすることもありませんでしたが、後の宮の姫君こそは、今まで御息所のことを忘れもしない、珍しいほど記憶力のよいお方です。

e この私、三代の帝に仕えてまいりました。この間、亡くなった御息所に似た方を、ついぞお見かけすることもありませんでしたが、後の宮の姫君こそは、御息所から受けた恩義を忘れることもない、珍しいほど律儀なお方です。

問2 娘を帝のもとに入内させるよう要請を受けた母后は、どのような態度を示したか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a ああ、おそろしいことだ。東宮の女御が性悪のため、桐壺の更衣があらさまに冷たくされた前例もいとわしい、と娘を隠してしまい、すんなりとは決心しなかった。

b ああ、おそろしいことだ。東宮の女御が性悪のため、桐壺の更衣が明らかに軽く扱われた前例も不吉だ、とこの話を周囲の人には内緒にし、きっぱりと断ってしまった。

c ああ、おそろしいことだ。東宮の女御が性悪のため、桐壺の更衣がだれの目にも無視された前例も腹立たしい、と無反応な態度を示し、のらりくらりと決心を引き延ばした。

d ああ、おそろしいことだ。東宮の女御が性悪のため、桐壺の更衣が露骨にひどい目にあわされた前例もいまわしい、と用心して、すっきりとは決心しなかった。

e ああ、おそろしいことだ。東宮の女御が性悪のため、桐壺の更衣が正視に耐えぬほどいじめられた前例も忘れたい、と警戒して、なかなか決心しなかった。

問3 母后亡き後、再度娘を入内させるよう帝から要請があったとき、娘の周囲の人々はどうのような反応を示したか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号

をマークせよ。

- a お仕えする女房たちや後見人、それから兄の兵部卿の親王などは、「このように頼りなく不安な状態にいるよりは、宮中に住んで、気も紛れるように」と考えて、帝のもとに参上させた。
- b お仕えする女房たちや後見人、それから親族にあたる兵部卿の親王などは、「このように母親を恋しがってばかりいるよりは、宮中にお仕えして、悲しみを忘れるように」と考えて、帝のもとに出仕させた。
- c お仕えする女房たちや後見人、それから兄の兵部卿の親王などは、「このように孤独でさみしい思いをするよりは、宮中に住んで、楽な暮らしができるように」と考えて、帝のもとに参上させた。
- d お仕えする女房たちや後見人、それから弟の兵部卿の親王などは、「このように独身で頼りない状態にいるよりは、宮中に住んで、安定した生活ができるように」と考えて、帝のもとに参上させた。
- e お仕えする女房たちや後見人、それから親族にあたる兵部卿の親王などは、「このように一人で生活するよりは、宮中に部屋を借りて、周囲の人々と楽しく暮らせるように」と考えて、帝のもとに出仕させた。
- 問4 この物語の語り手は、藤壺と桐壺の更衣とを比較して、その人物像をどのように述べているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。
- a 藤壺は、身分が高く、その上見た目もよくて、人々も悪くいうことができないから、わがままにふるまってだれも注意をしなかったが、一方桐壺の更衣は、人々も認めていない、人々も認めていなかったように、帝のご寵愛もそれほどでもなかった。
- b 藤壺は、身分が高く、帝のお気に入り、人々も悪くいうことができないから、自分勝手な行動もしたい放題であったが、一方桐壺の更衣は、人々も認めていなかったのに、あいにくと帝のご寵愛を得ようとする気持ちが深すぎたのだった。
- c 藤壺は、身分が高く、いささか見た目もよく、人々も悪くいうことができないから、出過ぎた真似ばかりしていたが、一方桐壺の更衣は、人々も認めていなかったように、万事が思いどおりにならなかった。

d 藤壺は、身分が高く、気のせいか申し分なく、人々も悪くいうことができないから、思う存分ふるまって不足なこともなかったが、一方桐壺の更衣は、人々も認めていなかったのに、あいにくと帝のご寵愛が深すぎたのだった。

e 藤壺は、身分が高く、周囲への気配りもよくて、人々も悪くいうことができないから、何事も自分の思いどおりになったが、一方桐壺の更衣は、人々も認めていなかったのに、簡単に本音を打ち明けて裏切られてしまうのであった。

問5 入内後の藤壺の様子は、どのように描かれているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 桐壺の帝に召された方々は、皆それぞれに上品そうであったが、いずれのお方も一様におとなしい性格でいらっしやる中であって、藤壺だけはたいそう若くて、かわいらしかった。
- b 桐壺の帝に召された方々は、皆それぞれに出自がよさそうであったが、いずれのお方も一様におとなしい性格でいらっしやる中であって、藤壺だけはたいそう若くて、快活であった。
- c 桐壺の帝に召された方々は、皆それぞれにおきれいだだったが、いずれのお方も一様に大人びていらっしやる中であって、藤壺だけはたいそう若くて、純真であった。
- d 桐壺の帝に召された方々は、皆それぞれに上品そうであったが、いずれのお方も一様にもの静かでいらっしやる中であって、藤壺だけはたいそうわがままで、かわいらしかった。
- e 桐壺の帝に召された方々は、皆それぞれにおきれいだだったが、いずれのお方も一様にお年をめしていらっしやる中であって、藤壺だけはたいそう若くて、かわいらしかった。

問6 典侍から今は亡き母親のことを聞かされて、光源氏はどのように思ったのか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 光源氏は、母親の顔は少しも記憶にないのだが、「藤壺が今は亡き母親とそっくりである」と典侍から聞かされて、幼心にもうれしく思い、始終藤壺のそ

ばに参りたく、またお近づきになりたいと思った。

b 光源氏は、母親の顔はかすかに記憶にあったが、「藤壺が今は亡き母親とそっくりである」と典侍から聞かされて、幼心にもうれしく思い、始終帝のそばに参りたく、またそこで藤壺の顔を見たいと思った。

c 光源氏は、母親の顔は少しも記憶にないのだが、「光源氏が今は亡き母親とそっくりである」と典侍から聞かされて、幼心にも悲しく思い、早く母親のところに参りたく、またあの世で母親と親しくしたいと思った。

d 光源氏は、母親の顔はかすかに記憶にあったが、「光源氏が藤壺にそっくりである」と典侍から聞かされて、幼心にもうれしく思い、始終藤壺のそばに参りたく、またそこで藤壺に触れてみたいと思った。

e 光源氏は、母親の顔は少しも記憶にないのだが、「光源氏が桐壺の帝とそっくりである」と典侍から聞かされて、幼心にもうれしく思い、始終帝のそばに参りたく、またそこかわいがってもらいたいと思った。

問7 桐壺の帝は、藤壺に対して、光源氏のことをどのように述べたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 不思議なほど、あなたを光源氏の母親のように見てしまいそうな気がします。光源氏と母親は、顔だちや目もとがよく似ていたため、あなたが母親のように見えるのも、不似合いなことはありません。

b 不思議なほど、あなたを光源氏の母親のように見てしまいそうな気がします。光源氏とあなたは、顔だちや目もとがよく似ているので、あなたが母親のように見えるのも、不似合いなことはありません。

c 不思議なほど、あなたを光源氏の母親のように見てしまいそうな気がします。光源氏の母親はあなたと、顔だちや目もとがよく似ていたため、あなたが母親のように見えるのも、不都合なことではありません。

d 不思議なほど、あなたを光源氏の母親のように見てしまいそうな気がします。光源氏と母親は、顔だちや目もとがよく似ていたため、光源氏があなたの所に通っている様子が見られるのも、不似合いなことはありません。



e 不思議なほど、あなたを光源氏の母親のように見てしまいそうな気がします。光源氏の母親はあなたと、顔だちや目もとがよく似ていたのので、光源氏があなたの所に通っている様子が見られるのも、不都合なことではありません。

問8 光源氏が藤壺に対して好意を寄せていることを知って、弘徽殿の女御はどのように反応したか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 弘徽殿の女御は、また光源氏とも仲がよくないたために、藤壺によく似ていた桐壺の更衣に対する昔の憎しみが復活してきて、光源氏のことを不愉快な子だと思つた。

b 弘徽殿の女御は、また桐壺の更衣とも仲がよくなかつたために、その息子である光源氏に対する昔の憎しみが復活してきて、藤壺のことを不愉快な人だと思つた。

c 弘徽殿の女御は、また藤壺とも仲がよくないたために、光源氏に対する昔の憎しみが復活してきて、ふたりの間柄を不愉快だと思つた。

d 弘徽殿の女御は、また光源氏とも仲がよくないたために、光源氏が母と慕う藤壺に対する憎しみが生じてきて、ふたりの間柄を不愉快だと思つた。

e 弘徽殿の女御は、また藤壺とも仲がよくないたために、光源氏が母と慕う藤壺に対する憎しみが生じてきて、藤壺のことを不愉快な人だと思つた。

問9 傍線部④を動作主を明らかにして現代語訳せよ。

次の文章は、『住吉物語』の一節である。中納言には妻が二人いて、延喜の帝の娘(問題文では「母宮」)との間に姫君を、諸大夫の娘(問題文では「継母」)との間に中の君、三の君をもうけていたが、姫君の母親は亡くなってしまふ。そこで、中納言は姫君を引き取ることにした。これを読んで、後の問いに答えよ。

西の対をしつらひて、住ませたてまつりければ、継母、心の中にはいかが思ひけん、人聞きには「この姫君、母宮におくれたまひて後は、迎へたてまつらまほしけれども、今はと思ひて過ぎつるに、若き人々と、たがひにつれづれ慰みておはすれば、今はよに心やすくこそ」とて、「いかに幼き御心にも、母宮の御ことおぼしめし出づらん」とて、ねんごろに語りたまへば、乳母も「まことに年頃あやしげなる所に埋もれておはしまししかば、さていかがおはしまさんと、うちくもり悲しくさぶらひつるに、これを見たてまつりさぶらひぬれば、晴るる心地して、\*<sub>1</sub>黄泉路もやすくうれしくはべる」と語りつづけて、涙を流しける。

\*<sub>2</sub>嫡腹にてはべれば、中の君は、\*<sub>3</sub>左兵衛佐にておはしける人にあはせけり。姫君は西の対に住ませたまへば、中の君、三の君など遊びつつ、たがひにむつましく思ひて、明かし暮らしたまひける。

さて、右大臣にておはしける人の御子に、\*<sub>4</sub>四位の少将とて、世にすぐれたる人おはしける。「いかで思ふさまならんことを」とおぼしめしけれども、さるべきたよりもなくてはべるほどに、右大臣殿の\*<sub>5</sub>端者にそらさへといひけるが、大人しくなりては、筑前といふ者あり。この姫君の母宮の御もとに、\*<sub>6</sub>主殿司なりける者の妻にてありければ、朝夕姫君をぞ見たてまつりける。

この筑前、右大臣の家の北の方にて、人のよしあしきを語りけるに、「中納言殿の宮腹の姫君、幼生せきなほひめでたく、たぐひなくうつくしかりけるが、故宮失せたまひて後は、この七、八年参らねば、見たてまつらず。いかにいかに、年月重なりたまふままに、うつくしく見えさせたまふらん」といひけるを、立ち聞きて、ある隙ひまに筑前を呼びてのたまひけるは、「さもある人はおほせられさぶらへども、もの憂くてのみ過ぐるなり。中納言の宮腹の姫君、見たてまつりしか」とのたまへば、筑前申すやう、「をどこにてはんべりし者、宮の御内にさぶらひしかば、見たてまつりはべる。よにうつくしく、この世にはためし少なきとこそ見えたまひしか。中納言殿は、宮仕ひとぞはんべるが、継母うち添ひたまはで、おぼしめすかひなくとぞうけたまはる」と申しければ、「そのこと言ひ寄りて、文など伝へてんや」とのたまへば、\*<sub>7</sub>

7 いなせのことは、え知りはべらねども、文持ちて参らせてこそ見はべらめ」と言へば、少将喜びたまひて、神無月のころにやありけん、\*8紅葉襲の薄様に、

初時雨けふ降りそむる紅葉もみぢの色の深さを思ひ知れとぞ

と書きて、引き結びたるを、筑前取りて、その日の暮れほどに、中納言殿に参りたりければ、人々珍しみあひける中にも、\*侍従進み出で会ひて「あなゆゆし。いかに思ひ出でて参りたまふかと、そのいにしへ、昔の心地して、いとむつましくこそ」などいへば、筑前、「はかなきことのみにて、今まで心ならず参らざりつることの、わが身ながらつらく過ぎつるを、さてのみやはとて参りてこそさぶらへ。いつもと申しながら、年まかり寄りて、過ぎにし方の恋しさのかたくなはしきは、人々をも見たてまつらんとて参りたる」などいへば、姫君もいとあはれに聞きたまへり。

さて、出でざまに、侍従を呼びて申しけるは、「右大臣殿の御子、四位の少将と申す人の文なり。かやうのことは、伝へにくきことなれども、やことなき人の、いたく仰せられさぶらへば、いなみがたさに」と申せば、侍従、「いさや、げにとはおぼえねども、仰せあはすることなれば」とて、姫君に、「しかしかの文」とて、広げて御前に置きたれば、顔うち赤めて、とかくの御返事もなし。

### 注

- \* 1 黄泉路よみぢ|| 死後の世界に行く道。
- \* 2 嫡腹むかへはら|| 本妻(ここでは継母)の生んだ子。
- \* 3 左兵衛佐さひやうゑのすけ|| 佐兵衛府の次官。
- \* 4 四位の少将|| 位階が四位で近衛府の少将。
- \* 5 端者はしたもの|| 召使いの少女。
- \* 6 主殿司とのちうかさ|| 宮家の掃除・照明・燃料の役を勤める者。
- \* 7 いなせ|| いなせ、の転じたもの。否か諾か、の意。
- \* 8 紅葉襲もみぢがさねの薄様うすやう|| 表が赤で裏が青の薄い紙。
- \* 9 侍従|| 姫君の乳母子。

問1 継母は、西の対に住む姫君の乳母に対してどのような言葉をかけたのか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a この姫君が、母宮に先立たれてからは、こちらにお迎えしたいと思いつつも、今は具合が悪いと思いつつも、日々を我慢して過ごしていたのですが、こうして若い人同士互いに仲良くしているので、今はひと安心です。

b この姫君が、母宮に先立たれてからは、私も死んでしまいたいと思いつつも、今は我慢だと思いつつも、日々が過ぎていったのですが、こうして若い人同士互いに仲良くしているので、今はひと安心です。

c この姫君が、母宮に先立たれてからは、こちらにお迎えしたいと思いつつも、今は様子を見てと思いつつも、日々が過ぎていったのですが、こうして若い人同士互いに励まし合っているのです、今はひと安心です。

d この姫君が、母宮に先立たれてからは、こちらにお迎えしたいと思いつつも、今すぐには思いつつも、日々が過ぎていったのですが、こうして若い人同士互いに手持ちぶさたを紛らわしているのです、今はひと安心です。

e この姫君が、母宮に先立たれてからは、私も死んでしまいたいと思いつつも、今はその時ではないと思いつつも、日々が過ぎていったのですが、こうして若い人同士互いに手持ちぶさたを紛らわしているのです、今はひと安心です。

問2 継母の言葉に対して、姫君の乳母はどのように答えたのか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 姫君は、ここ数年まことにいやしげなところひっそりとお住みになっていたので、このままでは、どのように成長なさるか、心も曇り、悲しく思っておりますが、今のありさまを拝見すると、気が晴れる心地がして、いつそのこと私も早くあの世に行ければ、幸いに存じます。

b 姫君は、ここ数年まことに不思議なところひっそりとお住みになっていたので、このままでは、将来もはたしてどうかと、心も曇り、悲しく思っておりますが、今のありさまを拝見すると、気が晴れる心地がして、私の来世もたのしく存じます。

c 姫君は、ここ数年まことにあやしげなところひっそりとお住みになっていたので、このままでは、どんな結婚ができるだろうか、心も曇り、悲しく

思っておりますが、今のありさまを拝見すると、気が晴れる心地がして、亡き母宮もあの世で安心していらつしやるだろうと存じます。

d 姫君は、ここ数年まことに質素なところにひっそりとお住みになっていたので、このままでは、はなやかな生活も知らずじまいで、心も曇り、悲しく思っておりますが、今のありさまを拝見すると、明るい社交界が待っている心地がして、うれしく存じます。

e 姫君は、ここ数年まことに見苦しいところにひっそりとお住みになっていたので、このままでは、どのようにお暮らしになるのかと、心も曇り、悲しく思っておりますが、今のありさまを拝見すると、気が晴れる心地がして、私もいつ死んでも心配なく、うれしく存じます。

問3 筑前は、右大臣の北の方に対して、中納言の宮腹の姫君のことをどのように話したのか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 中納言の宮腹の姫君は、幼少時の頃のご器量がよく、非常に美しくいらつしやいましたが、母宮がお亡くなりになられた後は、この七、八年参りませんでしたので、姫君をお見受けしておりません。年月のたつままに、どんなにか美しくおなりでしょう。

b 中納言の宮腹の姫君は、成長なさってからはそれまでと違い、見違えるほど美しくいらつしやいましたが、母宮がゆくえをくらまされた後は、七、八年参りませんでしたので、姫君をお見受けしておりません。年月のたつままに、どんなにか美しくおなりでしょう。

c 中納言の宮腹の姫君は、生まれついてご器量がよく、非常に美しくいらつしやいましたが、母宮が他家へとつがれた後は、七、八年参りませんでしたので、姫君と直接お話をする機会もございませんでした。年月のたつままに、どんなにか美しくおなりでしょう。

d 中納言の宮腹の姫君は、幼少時のご性格がよく、その上、非常に美しくいらつしやいましたが、母宮がお亡くなりになられた後は、七、八年参りませんでしたので、姫君をお見受けしておりません。年月のたつままに、今でも美しさを保っておられるでしょうか。

e 中納言の宮腹の姫君は、幼少時から立派な家にお育ちになり、その上、非常に美しくいらつしやいましたが、母宮がお亡くなりになられた後は、七、八年参りませんでしたので、お見受けしておりません。年月がたつままに、そのご器量もどんなにか変わったことでしょうか。

問4 中納言の宮腹の姫君を見たのかという四位の少将の質問に対して、筑前はどのように答えたのか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

問5

- a 私の息子が、宮の内にお仕えしていましたので、姫君のお顔を拝見しております。この上なく美しく、この世にたぐい稀まれな方だとお見受けしました。中納言殿は、宮仕えに出そうかとお考えでしたが、継母すらいいのではないのでは、何かと不便だろうというのであきらめたのは残念であると、うかがっています。
- b 私の息子が、宮の内にお仕えしていましたので、姫君のお顔を拝見しております。この上なく美しく、この世にたぐい稀な方だとお見受けしました。中納言殿は、宮仕えに出そうかとお考えでしたが、継母がいい顔をしないので、思うようにいかなくて残念であると、うかがっています。
- c 私の夫が、宮の内にお仕えしていましたので、姫君のお顔を拝見しております。この上なく美しく、この世にたぐい稀な方だとお見受けしました。中納言殿は、宮仕えに出そうかとお考えでしたが、継母が出過ぎたまねをして話がこわれたのは残念であると、うかがっています。
- d 私の夫が、宮の内にお仕えしていましたので、姫君のお顔を拝見しております。この上なく美しく、この世にたぐい稀な方だとお見受けしました。中納言殿は、宮仕えに出そうかとお考えでしたが、継母が三の君を強く推して結局話がまとまらなかったのは残念であると、うかがっています。
- e 私の夫が、宮の内にお仕えしていましたので、姫君のお顔を拝見しております。この上なく美しく、この世にたぐい稀な方だとお見受けしました。中納言殿は、宮仕えに出そうかとお考えでしたが、継母が後押しされず、思いどおりにいかなくて残念であると、うかがっています。
- 「初時雨…」の歌の説明として、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。
- a 初句の「初時雨」は、十月という季節にはふさわしいもので、初冬に降ったりやんだりする雨のことである。また、四句目の「色の深さ」とは、紅葉の「色の深さ」であると同時に、姫君に寄せる四位の少将の「思いの深さ」をも意味している。
- b 初句の「初時雨」とは、秋の初め頃に降るにわか雨のことで、紅葉の季節にふさわしい表現である。また五句目の「思ひ知れ」とは、姫君も片思いをして、苦しい私(四位の少将)の心の内を思いついてほしい、と訴えかけているのである。
- c 二句目の「けふ降りそむる」の「ふり」には、初時雨が降る意の「降り」と、時間が経過する意の「経より」とが掛けられている。また、四句目の「色の深さ」の「色」には、文字どおり紅葉の「色」の意と、四位の少将の「顔色」の意とが掛けられている。
- d 二句目の「降りそむる」の「そむる」には、紅葉の葉を「染める」の意と、初時雨が降り始める意の「初そめる」とが掛けられている。また、五句目の「思

ひ知れ」とは、あなたの思いの深さがこれで十分理解できました、といったほどの意である。

e 三句目の「紅葉は」とは、文字どおり植物の紅葉の葉の意と、私(四位の少将)の苦しい胸の内の意とが掛けられている。また、五句目の「思ひ知れとぞ」は、この後に、普通の文章なら「思ふ」とでもいうような語が省略された形だと考えられる。

問6 侍従は、中納言の邸を訪ねてきた筑前に対してどのような挨拶をしたのか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a まあ、不吉なこと。何がきっかけで思い出して来て下さったのかしら。まるで昔に帰った心地がして、腹立たしいことだわ。
- b まあ、殊勝なこと。何がきっかけで思い出して来て下さったのかしら。まるで昔に帰った心地がして、本当に親しみをおぼえるわ。
- c まあ、おおげさなこと。何がきっかけで思い出して来て下さったのかしら。相も変わらず昔のままのお姿で同情したくなるわ。
- d まあ、いまいましいこと。何がきっかけで思い出して来て下さったのかしら。まるで昔に帰った心地がして、本当に迷惑なことだわ。
- e まあ、お気の毒なこと。何がきっかけで思い出して来て下さったのかしら。相も変わらず昔のままのお姿で同情したくなるわ。

問7 侍従の挨拶に対して、筑前は何と答えたのか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a つまらない用事ばかりで、今まで不本意ながらもうかがわなかったことを、我ながら情けなく思っていました。このままではいけないと決心して、うかがったのです。
- b 身内に不幸が重なりまして、今まで不本意ながらもうかがわなかったことを、我ながらうらめしく思っていました。どうしてもあなたにお会いしたいと決心して、うかがったのです。
- c どうしても手放せない用事があって、今まで不本意ながらもうかがわなかったことを、我ながら悲しく思っていました。私に残された時間も少ないと決心して、うかがったのです。
- d ぼんやりしている内に月日が経過して、今まで不本意ながらもうかがわなかったことを、我ながらくやしく思っていました。今日あなたに会える

のも何かの縁と決心して、うかがったのです。

e ちよつとした遠慮があつて、今まで不本意ながらもうかがわなかつたことを、我ながら薄情だと思つて過ぎてきましたが、このままでは後悔すると決心して、うかがつたのです。

問8 筑前は侍従に対して、四位の少将からの手紙について何といったのか。最も適當なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 右大臣様の御子の四位の少将と申す方の手紙です。私のようないやしい者からは、姫君には伝えにくいことではありますが、義理ある方が熱心に仰せられるので、お断わりしにくくて、と筑前はいった。

b 右大臣様の御子の四位の少将と申す方の手紙です。世間から非難されるようなことは、姫君には伝えにくいことではありますが、私が直接お仕えしている方が熱心に仰せられるので、お断わりしにくくて、と筑前はいった。

c 右大臣様の御子の四位の少将と申す方の手紙です。男女の仲介などといったことは、姫君には伝えにくいことではありますが、身分の高い方が熱心に仰せられるので、お断わりしにくくて、と筑前はいった。

d 右大臣様の御子の四位の少将と申す方の手紙です。父上が反対していることは、姫君には伝えにくいことではありますが、身分の高い方が熱心に仰せられるので、お断わりしにくくて、と筑前はいった。

e 右大臣様の御子の四位の少将と申す方の手紙です。なにしろ浮気性の方が申すことは、姫君には伝えにくいことではありますが、時の権勢者が仰せられるので、お断わりしにくくて、と筑前はいった。

問9 傍線部(A)を「さもある人」の内容を明らかにして現代語訳せよ。



次の文章は、『落窪物語』において、七十を越えた中納言忠頼が大納言に昇進できぬまま重病の床についたところで、娘(女君)の婿である大将殿が加持祈禱きじょうをして治癒を願う場面から開始される。これを読んで、後の問いに答えよ。

かくて、やうやう中納言重く悩みたまへば、大将殿いとほしく思おぼし嘆なげきて、修法ずほふなどあまたせさせたまへば、中納言、「何かは。今は思ふこともはべらねば、命惜しくもはべらず。わづらはしく何かは祈りせさせたまふ」と申したまふ。

弱るやうになりたまへば、「なほ死ぬべきなめり。今しばし生きてあらばやと思ふは、我、年ごろ沈みて、昨日今日の若人わかびとども多く越えられて、なりおとりつるになむ、恥に思ひける。わが君のかばかりかへりみたまふ御世に、命だにあらば、なりぬと思ひぬるに、またかく死ぬれば、わが身の大納言になるまじき報はうにてこそありけれど、これのみぞ飽かずおぼゆること。さても、老いはて、死にのほての面立おもたたしさは、おのれにまさる人よにあらじ」とのたまふを、大将聞きたまひて、あはれにおぼゆること限りなし。

女君、「いかで大納言をがな。一人なしたてまつりて、飽かぬことなしと思はせてまつらむ」とのたまふを聞きたまひて、げにさせばやと思せど、数よりほかの大納言なさむことは難し。人のはた取るべきにあらず。

わがを譲らむの御心つきて、\*<sub>1</sub>父大臣の御許もとにまうでたまひて、「かくなむ思ひたまふるを。幼き者ども多くはべれど、それが徳を見すべく、行く末あるべきことにもあらぬ代はりには、このことをなむしはべらむと思ひはべる。御けしきよろしう定めさせたまへ」と申させたまふ。

「何かはさ思はむを。はやうさるべきやうに\*<sub>2</sub>奏を奉らせよ。大納言はなくてもあしくもあらじ。わが心なる世なれば」と思ひてのたまへば、限りなく喜びたまひて、申して、奏奉らせたまひて、中納言、大納言になりたまふ\*<sub>3</sub>。宣旨のたまひくだしたまひつ。これを聞きて、大納言わづらふ心地こころちに泣く泣く喜びたまふさま、親にかく喜ばれたまふに、功德ならむと見ゆ。

喜びに、起き立ちて願立てさす。「\*<sub>4</sub>定業の命にても、給へ」と、心にも願立てさするけにや、少しおこたりて、思ひ強つよりて起きあて、内裏うちへ参るべき日見せ、と

かくせさすべきことあておこなふとても、「わが子ども七人あれど、かく現世げんぜ、後生ごじきやううれしき目見せつるやありつる。かかりける仏を、少しにてもおろかなりけむは、わが身の不幸なる目を見むとてこそありけれ。子二、三人、婿むことりたれど、今に我にかかりてこそはありつめれ。\*あまさへ、うき恥の限りこそ見せつれ。④この殿は塵ちりばかりつかうまつることもなければ、御かへりみを、かくこよなく見る、かへりては恥づかしき心地して。我死なば、代はりには、男子おのこにもまれ、女子をんなにもまれ、君につかうまつれ」と、いとさかしう言ひいます。かかれれば、北の方、憎し、とく死ねかしと思ふ。

その日になりて、いと清げにさうぞきて、男君、女君、一所ひとところにおはするほどにて、拝みたてまつりたまへば、「いとかしこし」と聞こえたまへば、「おのれは、おほやけもかしこもおはしませず。ただあが君のみこそうれしくかたじけなくおぼえたまへ。この世につかうまつらで死ぬとも、大方おほかたまもりともなりはべりてなど念じはべる」と申したまふ。それよりまかてたまひて、右の大おほい臣のちに参りたまひて、また内裏うちに参りたまふ。人々に禄賜ろくくふことも同じやうにて、猛まうなることどもなれば、書かず。

大納言はその日より臥ふして、また重く苦しうしたまふ。「今は塵ばかり思ふことなければ、死なむ命も惜しからず」と言ひ臥したまへり。「いと弱くなりたまふ」と聞きたまひて、大將殿の北の方、渡りたまへり。おとど、かたじけなく、うれしと思ひたまへり。御女むすめ五人つどひて、つかうまつり嘆きたまふ。おとど、他御子どもことみこのつかうまつりたまふは、ものとも思さず、大將殿の北の方添そひおはするをうれしと、いみじうめでたきものに思して、添そひまゐりたまひける。湯づけをなむまゐりたまひける。

頼もしげなくなりてたまひて、「生ける時、処分さうぶんしてむ。子どもの心見るに、はらから思ひせず、女たちの中にもうとうとしくあめれば、論ろんなう恨みごとども出で来なむ」とて、\*越前守も御前に呼びすゑて、所どころの庄の券、帯など取り出でて、選えらせたまふに、少しよろしきは、ただ大將殿の北の方にのみ奉りたまひて、「他子どもこと、これうらやましとだに思ふべからず。同じやうに力入り、親に孝したるなし。少し人々しきになむよろしき物取らす。いはむや、ここの年ごろかへりみるを、思にやと思へ」と、いとさかしうのたまふを、君達きんだちはことわりと思したり。「この家も古ふるりてこそあめれど、広うよろしき殿なり」とて、大將殿の北の方に奉りたまへば、北の方聞きて泣きぬ。

注

- \* 1 父大臣おとじ||大将殿の父の右大臣のこと。
- \* 2 奏そう||奏上する文書。
- \* 3 宣旨||天皇の仰せを伝える文書。
- \* 4 定業ぢやうごふ||前世から定められた寿命。仏教語。
- \* 5 あまさへ||そのうえ。
- \* 6 越前守||忠頼の長男のこと。

問1 中納言がもう少し長く生きていたいと思っただけはどのようなものだったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 中納言は長い年月ずっと病気がちで役所に出るのもままならず、そのため最近官職についたばかりの若い人たちに追い越されて、遅れをとったことを恥ずかしく思っていた。かしく思っていたのをなんとか取り戻そうと思っただけから。
- b 中納言は長い年月ずっと病気がちで昇進もままならず、最近官職についたばかりの若い人たちに追い越されて、遅れをとったことを恥ずかしく思い、結局悩ましく思う気持ちをもったまま死んでいくだろうと思っただけから。
- c 中納言はこのところ不遇で昇進もままならず、最近官職についたばかりの若い人たちに追い越されて、遅れをとったことを恥ずかしく思いつつ、もう少し生きながらえて大将殿がさらに出世するようすを見たいと思っただけから。
- d 中納言は長い年月ずっと不遇で昇進もままならず、最近官職についたばかりの若い人たちに追い越されて、遅れをとったことを恥ずかしく思い、もう少し生きながらえていけば昇進ができるかと思っただけから。
- e 中納言は長い年月ずっと不遇で昇進もままならず、最近官職についたばかりの若い人たちに追い越されても、遅れをとったことを悔いたり、生きていることを恥ずかしく思ったりすることもなかったから。

問2 このまま亡くなることになった場合のわが身のことを、中納言はどのように感じていたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 自分が大納言に任命されないのは前世からの応報である不満に思うとともに、老後のことや死に際にも腹立たしいことがあって、晩年の不幸は自分さまさる人はないだろうと恨んでいた。

b 自分が大納言に任命されないのは前世からの応報である不満に思う気持ちが、老後のことや死に際の不名誉につながっているのだと思って、自分ほどの不幸はないとつよく感じていた。

c 自分が大納言に任命されないのは前世からの応報である不満に思いつつも、老後のことや死に際の名誉は自分にまさる人はないだろうと喜んでた。

d 自分が大納言に任命されないのは前世からの応報である不満に思いつつも、老後のことや死に際の不名誉は自分にふさわしくないと腹立たしく思っていた。

e 自分が大納言に任命されないのは前世からの応報である不満に思いつつも、老後のことや死に際の名誉は自分にとって身に余るものだったと喜んでた。

問3 病床における中納言の発言を耳にして、女君と大将はそれぞれのどのような思いをもったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 女君はなんとかして父一人を特別に大納言に昇進させてあげて、まったく不満がないと思わせたいと考えたのに対して、かたや大将のほうも、一人ぐら一定員を超えてもいいとして、どうしても実現してあげようと思った。

b 女君はなんとかして父一人を特別に大納言に昇進させてあげても、またきつと不満が出てくるにちがいないと思ったのに対して、かたや大将のほうも、女君の気持ちに同調し、定員以外に大納言を任ずることはできないと考えた。

c 女君はなんとかして父一人を特別に大納言に昇進させてあげて、まったく不満がないと思わせたいと考えたのに対して、かたや大将のほうも、女君の気持ちに同調しつつも、定員以外に大納言を任ずることはできないと思った。

d 女君は父一人だけ無理に大納言にすることはどうしてもできないと考えたのに対して、かたや大将のほうは、女君と逆に、一人ぐら一定員を超えてもいい

として、どうしても実現してあげようと思った。

e 女君は父一人だけ無理に大納言にすることはどうしてもできないと考えたのに対して、かたや大将のほうは、女君と逆に、他人の地位を取り上げてでも、なんとかして実現してあげようと思った。

問4 大将は美父の右大臣のもとに行つて、中納言に関してどのようなことを申し出たか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 中納言には孫に当たるわたしたちの子どもたちが、この祖父中納言に孝養を見せるような時間はもう残されていないので、その代わりに、わたし自身の大納言という位を譲ってさしあげようと思うという申し出をした。

b 中納言には孫に当たるわたしたちの子どもたちが出世するような未来の姿を、この祖父中納言に見せることはできない代わりに、現在大納言の位についているわたしを子どもたちの将来に重ねて見てもらおうという申し出をした。

c 中納言には孫に当たるわたしたちの子どもたちに、大納言へ昇進する姿を見せられるような時間はもう残されていないので、その代わりに、わたし自身の大納言という位を譲ってさしあげようと思うという申し出をした。

d 中納言には孫に当たるわたしたちの子どもたちが、この祖父中納言を満足させるような地位につく将来は見られないが、その代わりに、わたし自身の大納言の姿をじっくり見てもらえるようにしたいという申し出をした。

e 中納言には孫に当たるわたしたちの子どもたちが、この祖父中納言に孝養を見せるような将来はありえないので、その代わりに、わたし自身の大納言と今の中納言の位とを入れ替えてみてはどうかという申し出をした。

問5 望みが実現することになった中納言はどのようなようすであったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 病床から起きあがって、神仏に向かって願を立てて、せめて自分に定まった寿命だけでもあればと念じると、病氣も軽くなって、宮中に参内すべきめでたい日程を見立てさせて、やるべきことを家来にさせることとなった。

- b 病床から起きあがって、神仏に向かって願を立てて、せめて自分に定まった寿命だけでもあればと念じると、思い切って怠け癖を振りきり、どうしても宮中に参内できるよう、予定を組むように家来に指示した。
- c 病床から起きあがって、前世から定まった寿命であってもせひ延ばしてほしいと願ったこともあり、また病気を克服し、怠け癖を振りきって、どうしても宮中に参内できるよう、予定を組むように家来に指示した。
- d 病床から起きあがって、前世から定まった寿命であってもせひ延ばしてほしいと願ったせいであろうか、病気のための怠け癖から立ち直り、自分の心に強い気持ちをもって、思い切って宮中に参内する準備をととのえた。
- e 病床から起きあがって、前世から定まった寿命であってもせひ延ばしてほしいと願ったためであろうか、病気も軽くなって、宮中に参内すべきめでたい日程を見立てさせて、やるべきことを家来にさせることとなった。

問6 昇進当日、大将と女君がそろっているところに新大納言が行き、二人に拝礼すると、大将がもつたいないと告げたのに対して、新大納言はどのように答えたか。

最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 自分が大納言になったのは、朝廷の思し召しのおかげですが、それと同時に大将のあなたがうれしくもありがたいご配慮をしてくださったためで、自分がこの世でご奉仕するとともに、死んでも魂があなたを守護するでしょう。
- b 自分が大納言になったのは、朝廷の思し召しのおかげとはいえ、何より大将のあなただけがうれしくもありがたいご配慮をしてくださったためで、自分がこの世でご奉仕はできないにしても、わたしの魂があなたを守護するでしょう。
- c 自分が大納言になったのは、朝廷の思し召しのおかげとはいえ、大将のあなただけがうれしくもありがたいご配慮をしてくださったためで、自分がこの世に生きている限りは、あなたをずっと守り続けるでしょう。
- d 自分が大納言になったのは、朝廷の思し召しのおかげとはいえ、大将のあなただけがうれしくもありがたいご配慮をしてくださったのですが、それを公に言うことはできないので、死んでもずっと御恩は忘れませんと言っておきます。

e 自分が大納言になったのは、朝廷の思し召しのおかげですが、それと同時に大将のあなたがうれしくもありがたいご配慮をしてくださったためで、わたしのお守りのようにひたすら感謝しております。

問7 新大納言はふたたび病床にいたが、見舞いに来た娘たちに対して抱いた感じ方がそれぞれ異なっていたのはどうしてか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、

その記号をマークせよ。

a 五人の娘が集まって看病して嘆いてくれることに対してとくに何も言うことがないなか、そのうち一人大将殿の北の方が付き添ってくれることに対してだけ、うれしくまたありがたいと感じるのは、大将が昇進を計ってくれたからである。

b 五人の娘が集まって看病して嘆いてくれることに対してとくに何も言うことがないなか、そのうち一人大将殿の北の方が付き添ってくれることに対してだけ、うれしくありがたいと感じるのは、仏のように美しい娘だったからである。

c 五人の娘が集まって看病して嘆いてくれることに対してとくに何も言うことがないなか、そのうち一人大将殿の北の方が付き添ってくれることに対してだけ、うれしくありがたいと感じるのは、病床につきっきりになってくれるからである。

d 五人の娘が集まって看病して嘆いてくれることに対してとくに何も言うことがないなか、そのうち一人大将殿の北の方が付き添ってくれることに対してだけ、うれしくありがたいと感じるのは、生きる気力を与えてくれるからである。

e 五人の娘が集まって看病して嘆いてくれることに対してとくに何も言うことがないなか、そのうち一人大将殿の北の方が付き添ってくれることに対してだけ、うれしくありがたいと感じるのは、最愛の娘だからである。

問8 新大納言が生き続けられないと感じて、遺産の分配を言い渡したようすはどのようなものだったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 兄弟・姉妹どうしの思いやりがよくないので、遺産分割でもめることがないようにと、長男の越前守だけには格別の遺産を分け与えたうえで、残りについ

ては、大将殿の北の方にこの家と少々よい物を分けて、他の少しりっぱな娘にだけ相当のものを与え、それ以外の娘には何もやらないと言が残す。

b 兄弟・姉妹どうしの思いやりがよくないので、遺産分割でもめることがないようにと、長男の越前守を呼んで遺産を選別させ、自分の分を自由に取らせたうえで、あとは世話になった大将殿の北の方だけ特別扱いしてこの家とすべてのよい物を分け与え、親不孝な他の娘らには何もやらないと言が残す。

c 兄弟・姉妹どうしの思いやりがよくないので、遺産分割でもめることがないようにと、長男の越前守を呼んで遺産を選別させようえて、娘たちにはこれまでに面倒みてきたことを親の恩と思えと言う一方、大将殿の北の方にはこの家と少々よい物すべてを与えると言が残す。

d 兄弟・姉妹どうしの思いやりがよくないので、遺産分割でもめることがないようにと、長男の越前守だけには欲しいものを選別させようえて、あとは娘たちに等分に遺産を分けさせ、さらに大将殿の北の方に向かって、この家だけは与えると特別に言い残す。

e 兄弟・姉妹どうしの思いやりがよくないので、遺産分割でもめることがないようにと、長男の越前守を呼んで遺産を選別させようえて、娘たちにはこれまでにのことを親の恩と思えと言うと、娘たちは不満だったが、その夫たちはもつともだと納得したので、あとは大将殿の北の方にこの家を与えると言が残す。

問9 傍線部(A)を、「この殿」が誰かを明らかにして現代語訳せよ。



次の文章は、『源氏物語』句兵部卿卷の一部である。光源氏(文中では「院」「光る君」)の晩年の子の薫(文中では「この君」)は、実は光源氏の妻であった女三の宮(文中では「母宮」「宮」)と柏木の間の密通によって生まれたが、そのことは内密にされ、成人した薫自身も詳しい真相を知らないまま落ち着かない気持を抱き続けている。柏木は密通を知った光源氏の怒りにふれて心痛のために没し、その後光源氏も世を去っている。これを読んで、後の問いに答えよ。

母宮は、今はただ御行ひを静かにしたまひて、月ごとの御念仏、年に二たびの\*<sub>1</sub>御八講、をりをりの尊き御宮みばかりをしたまひて、つれづれにおはしませば、この君の出で入りたまふを、かへりては親のやうに頼もしき蔭に思したれば、いとあはれにて、\*<sub>2</sub>院にも内裏にも召しまつはし、東宮も、次々の宮たちも、なつかしき御遊びがたきにてともなひたまへば、暇なく苦しく、いかで身を分けてしがなとおぼえたまひける。

幼心地にほの聞きたまひしことの、をりをりいぶかしくおぼつかなく思ひわたれど、問ふべき人もなし。宮には、事のけしきにても知りけりと思されん、かたはらいたき筋なれば、世ととももの心にかけて、「いかなりけることには。何の契りにて、かう安からぬ思ひそひたる身にしもなり出でけん。\*<sub>3</sub>善巧太子のわが身に問ひけん悟りをも得てしがな」とぞひとりごたれたまひける。

おぼつかない誰に問はましいかにしてはじめもはても知らぬわが身ぞ

答ふべき人もなし。事にふれて、わが身につがある心地するも、ただならずもの嘆かしくのみ思ひめぐらしつつ、宮もかく盛りの御容貌をやつしたまひて、何ばかりの御道心にてか、にはかにおもむきたまひけん、かく、思はずなりける事の乱れに、かならずうしと思しなるふしありけん、人もまさに漏り出で知らじやは、なほつむべき事の聞こえにより、我には気色を知らする人のなきなめり、と思ふ。明け暮れ勤めたまふやうなめれど、はかもなくおほどきたまへる女の御悟りのほどに、蓮の露も明らかに、玉と磨きたまはんことも難し、\*<sub>4</sub>五つのながしもなほうしるめたきを、我、\*<sub>5</sub>この御心地を、同じうは後の世をだに、と思ふ。\*<sub>6</sub>かの過ぎたまひ

にけんも安からぬ思ひにむすぼほれてや、など推しはかるに、世をかへても対面せまほしき心つきて、元服はものうがりたまひけれど、すみひはず、おのづから世の中にもてなされて、まばゆきまで華やかなる御身の飾りも心につかずのみ、思ひしづまりたまへり。

内裏にも、\*<sub>7</sub>母宮の御方さまの御心寄せ深くて、いとあはれなるものに思され、\*<sub>8</sub>後の宮、はた、もとよりひとつ殿にて、宮たちももろともに生ひ出で遊びたまひし御もてなし、をさを改めたまはず。「末に生まれたまひて、心苦しう、おとなしうもえ見おかぬこと」と、院の思しのたまひしを思ひ出できこえたまひつつ、おろかならず思ひきこえたまへり。\*<sub>9</sub>右大臣も、わが御子ども<sup>みこ</sup>の君たちよりも、この君をば、こまやかにやむことなくもてなしかしづきたてまつりたまふ。

昔、光る君と聞こえしは、さるまたなき御おぼえながら、そねみたまふうちそひ、母方の御後見<sup>うしろみ</sup>なくなどありしに、御心さまもの深く、世の中を思しなだめしほどに、並びなき御光をまばゆからずもてしづめたまひ、つひに\*<sub>10</sub>さるいみじき世の乱れも出で来ぬべかりしことをも事なく過ぐしたまひて、後の世の御勤めもおくらかしたまはず、よろづさりげなくて、久しくのどけき御心おきてにこそありしか、この君は、まだしきに世のおぼえいと過ぎて、思ひあがりたることこよなくなどぞものしたまふ。げに、さるべくて、いとこの世の人とはつくり出でざりける、仮に宿れるかとも見ゆることそひたまへり。顔容貌も、そこはかと、いづこなむすぐれたる、あなきよらと見ゆるところもなきが、ただいとなまめかしう恥づかしげに、心の奥多かりげなるけはひの人に似ぬなりけり。

#### 注

- \* 1 <sup>みはつかう</sup>御八講 || 法華経を講ずる法会。
- \* 2 院 || 上皇である冷泉院。
- \* 3 <sup>ぜんげたいし</sup>善巧太子 || 仏教經典に出てくる人名。
- \* 4 五つのなながし || 五障。女性が成仏するには五つの障害があるとされた。その障害のこと。
- \* 5 この御心地を || 「この御心地を助けて」の意。
- \* 6 かの過ぎたまひにけん || かすかに聞かされたことのある自分の父をいう。
- \* 7 母宮の御方さまの御心寄せ深くて || 天皇は、女三の宮の兄にあたる。

\* 8 后きさきの宮みやは光源氏の娘の明石の中宮。薫の姉。薫は、光源氏の六条院で、明石の中宮が生んだ皇子たちといっしょに育った。

\* 9 右大臣みぎのおとどは光源氏の長男、夕霧。

\* 10 さるいみじき世の乱れも出で来ぬべかりしことは光源氏が謀反の疑いをかけられそうになり、明石や須磨にさすられたこと。

問1 女三の宮と薫の様子は最近どのような様子だったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 女三の宮は仏教の勤行や法会ばかりしていたので、薫は手持ちぶさたで、親のように思っている上皇や天皇の所にばかり出かけていた。

b 女三の宮は息子の薫に対し、わが子ながら自分の親であるかのように頼っており、薫はそれをよくわかってはいたが、他の人々にもかわいがられていて、とても多忙だった。

c 女三の宮は仏教の勤行や法会ばかりしていて手持ちぶさただったので、薫を連れて、親のように思っている上皇や天皇の所にいつも出かけていた。

d 女三の宮は仏教の勤行や法会ばかりしていて上皇や天皇の所にいつも出かけており、薫といっしょにいる時間がなかったため、薫は手持ちぶさただった。

e 女三の宮は仏教の勤行や法会ばかりしていて、いつも薫を上皇や天皇の所に連れて行ったため、薫は忙しくてなにもできず、自分の体を二つに分けたいと思うほどだった。

問2 自分の出生の事情について薫はどう思っていたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 幼い頃にほのかに聞いたことを詳しく聞きたいと思っていたが、聞くことができる人もいなかったため、いつか女三の宮に、自分の出生の事情を聞き、心を落ち着かせたいと思っていた。

b 幼い頃にほのかに聞いたことを詳しく聞きたいと思っていたが、聞くことができる人もいなかったため、いつか女三の宮に、大体の事情だけでも聞こうと思っていたものの、気が引けることなのでそれではできなかった。

c 幼い頃にほのかに聞いたことを詳しく聞きたいと思っていたが、聞くことができる人もなく、宮中の人々は大体の事情だけでも知っているかと思つたもの

の、高貴な人たちなので聞けなかった。

d 幼い頃にほのかに聞いたことを詳しく聞きたいと思っていたが、自分が事情を知っていると女三の宮に思われることは気が引けることなので、どうしようか悩んでいた。

e 幼い頃にほのかに聞いたことを詳しく聞きたいと思っていたが、自分が事情を知っていると宮中の人々に思われることは気が引けることなので、どうしようか悩んでいた。

問3 女三の宮の出家の事情について、薫はどう推測していたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 女盛りなのに突然出家されたのは、仏教的な気持からではなく、思ってもみなかった密通事件をつらく思ったことだったのだろうと推測していた。

b 女盛りなのに突然出家されたのは、仏教的な気持からではなく、光源氏が亡くなった後の世間の予想外の混乱を悲しんだことだったのだろうと推測していた。

c 女盛りなのに突然出家されたのは、仏教的な気持からではなく、望みどおりにならなかった政治的混乱を不愉快に思われてのことだったのだろうと推測していた。

d 女盛りなのに突然出家されたのは、とても強い仏教的な思いがあったからであろうが、その後の予想外ななりゆきに、出家をきつと後悔しておられるだろうと推測していた。

e 女盛りなのに突然出家されたのは、とても強い仏教的な思いがあったからであろうが、その後の予想外ななりゆきに、この世をさらに嫌うようになられたのだろうと推測していた。

問4 薫は、自分の出生の事情を人々が知っているかどうかについて、どう考えていたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 人々が事情を知っているかどうかは不明だが、ともかく秘密にしなければならないという天皇の命令があるので、自分に教えてくれる人がいないのだ、と

考えていた。

b ほとんどの人々が事情を知っているとは思えず、知っている一部の人たちも、秘密にしなければならないという上皇の命令があるので、自分に教えてくれる人がいないのだ、と考えていた。

c ほとんどの人々が事情を知っているとは思えず、知っている一部の人たちも、秘密にしなければならないことなので、自分に教えてくれる人がいないのだ、と考えていた。

d 人々も事情を知っているに違いないが、秘密にしなければならないという女三の宮の命令があるので、自分に教えてくれる人がいないのだ、と考えていた。

e 人々も事情を知っているに違いないが、秘密にしなければならないことなので、自分に教えてくれる人がいないのだ、と考えていた。

問5 薫は、出家した尼としての女三の宮の様子について、どう考えていたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 毎日しっかり仏事にはげんでおられるようだけれど、それだけでなく女性として考えられないほど大きな悟りを得ていらっしやるので、極楽往生は間違いないが、自分も少しでも助けてあげたい、と考えていた。

b 毎日しっかり仏事にはげんでおられるようだけれど、それだけでなく女性として考えられないほど大きな悟りを得ていらっしやるので、極楽往生は間違いないが、自分も極楽に行けるよう、少しでも助けてもらいたいものだ、と考えていた。

c 毎日しっかり仏事にはげんでおられるようだけれど、女性でもあり、頼りなくおっとりとしておられるので、悟りを得て極楽往生するのはむずかしく、自分が少しでも助けてあげたい、と考えていた。

d 毎日しっかり仏事にはげんでおられるようだけれど、頼りなくおっとりとしておられるので、悟りを得て極楽往生するのはむずかしく、女三の宮とともに自分も極楽に行けるよう、少しでも助けてもらいたいものだ、と考えていた。

e 毎日しっかり仏事にはげんでおられるようだけれど、頼りなくおっとりとしておられるので、悟りを得て極楽往生するのはむずかしいが、自分が力を貸す

ことよって、間違いないと極楽に行けるだろう、と考えていた。

問6 薫は、自分の実の父親について、どう考えていたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 実の父がすでに世を去ったことを知らず、悩み苦しんでいるに違いない父と、どんなことがあっても対面したい、と考えていた。
- b 実の父がすでに世を去ったことを知らず、悩み苦しんでいるに違いない父と対面し、父のもとで元服を受けたい、と考えていた。
- c 実の父が悩み苦しんで世を去ったことはよく知っていて、せめて自分の死後にでもいいからあの世で対面したい、と考えていた。
- d 実の父は世を去ったらしいと聞いていて、おそらく悩み苦しんだのだろうと推測し、自分の死後にあの世で対面したい、と考えていた。
- e 実の父は世を去ったらしいと聞いていて、悩み苦しんだのだろうと推測し、できればその父のもとで元服を受けたかったが、それができず残念だ、と考えていた。

問7 物語の語り手は光源氏についてどのように述べているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 天皇から寵愛ちようあいされていたが、妬む人がいたり母親の援助がなかったりなど恵まれない点もあった。しかし、思慮深く目立たないように行動し、後世の準備もしつかりし、遠い将来のことを考えて穏やかにすごしておられた。
- b 天皇から寵愛されていたが、妬む人がいたり母親の援助がなかったりなど恵まれない点もあった。しかし、思慮深く目立たないように行動し、後世の準備もしつかりし、将来の出世を考えて穏やかにすごしておられた。
- c 天皇から寵愛されていたが、妬む人がいたり母方の一族の援助がなかったりなど恵まれない点もあった。しかし、思慮深く目立たないように行動し、後世の準備もしつかりし、遠い将来のことを考えて穏やかにすごしておられた。
- d 天皇から寵愛されていたが、妬む人がいたり母方の一族の援助がなかったりなど恵まれない点もあった。しかし、薫と同じように思慮深く目立たないように行動し、後世の準備もしつかりし、将来のことを考えて穏やかにすごしておられた。

e 天皇から寵愛されていたが、妬む人がいたり母方の一族の援助がなかったりなど恵まれない点もあった。しかし、思慮深く目立たないように行動し、薫と違って後世の準備もしっかりし、子孫のことを考えて穏やかにすごしておられた。

問8 物語の語り手は薫について、光源氏と比べてどのようであったと述べているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 薫は、光源氏と違って若い時から世間の評価が高く、気位も高かったが、顔かたちにはこれといったすぐれた所もなく、奥深い心の持ち主であった。

b 薫は、光源氏と違って若い時から世間の評価が高すぎ、この世の人とは思えないほど自尊心も強かったが、顔かたちにはこれといったすぐれた所もないのに、妙に奥深い心の持ち主であった。

c 薫は、若い時から世間の評価が高く、この世の人とは思えないほど気位も高かった反面、光源氏と違って顔かたちにはこれといったすぐれた所もなく、ただ奥深い心の持ち主であった。

d 薫は、光源氏と違って若い時から世間の評価が高く、自尊心が強すぎて、この世の人ではないような雰囲気のある、何を考えているかわからない心の持ち主であった。

e 薫は、光源氏と違って若い時から世間の評価が高く、気位も高かったが、なるほどこの世の人ではないような雰囲気のある、奥深い心の持ち主であった。

問9 傍線部(A)を、「生まれたまひて」の主語を明らかにして現代語訳せよ。

次の文章は、主人公の中納言が唐の国へ渡り、その地の后を見かけ、その美しさに感動している場面である。これを読んで、後の問いに答えよ。

十月一日、ほかよりも紅葉の盛りすぐれたる、内裏だいりの西に、\*<sub>1</sub>洞庭といへるところに、御門御幸みかみゆきしたまひ、中納言もつかうまつりたまへるを見たてまつらむと、遠き国の人びとさへ残りなくつどひて、かたちありさま見るに、肝消えて思はぬなく、及ぶまじきは病になりぬべく、われはと思ふ人びとぞ「かくておはするほどだにも、見え知られたてまつらばや」と心をかけて思はぬはなかりける。皇子みこたち大臣公卿集まりて、文作り、遊びをしたまふにも、この中納言にしくものなく、「めづらかに、いみじかりける世の人かな」と、御門をはじめたてまつりて、あるかぎりの人、めづらしがることかぎりもなし。

そのまたの日、「皇子、\*<sub>2</sub>河陽県に出でたまひぬ」と聞きて、参りたまへれば、風すさまじき夕べに、時雨ときどきうちそそくほどのむら雲立ちわたりて、心細げなることかぎりなし。ものあはれなるに、また知らずおもしろき琴きんの声を聞きつけたる、うれしきことかぎりなくて、さるべきもののくまに立ち隠れて見れば、おはしますところは、京の檜皮ひはだの色もせず、紺青を塗りかへしたるやうに、ただおほかたの調度は赤きに、朱塗りたるさまにて、錦にしきの縁へりさしたる御簾みすども、かけ渡し飾られたるに、辰巳たつみの方に、大きな山より滝高く落ちたるを、湧きかへり待ち受けたる岩のたたずまひ、世の常ならず。たがりて流れ出でたる水のほとりに、いろいろ移ろひわたれる菊の花の、いとおもしろきをもてあそばるるなるべし。そなたのつまの御簾捲まき上げて、いみじう装束きたる女房、うるはしく髪上げ、\*<sub>3</sub>裙帯、\*<sub>4</sub>領巾などして、いろいろ団扇うちばをさし隠しつつ、錦を敷ける縁えんに、十余人ばかりならびゐたり。上手の描かきたりし唐絵からゑにたがはず。上げたる御簾のほどに、紫の唐の裾濃すそこの御几帳みきちやううち上げて、\*<sub>5</sub>唐組の紐ひぼ、長やかにうるはしきを押しやりて、琴弾きたまふなり。

「后のおはする」と、ことごとく見れば、御年二十ばかりやおはすらむとおぼえて、御顔のやうたい、細くもあらず、ふくらにもあらず、よきほどなるが、中すこし盛りたる心地して、御色の白きは、\*<sub>6</sub>はりせらむといふとも、これにはまさらざりけむとおぼゆるに、あいぎやう、いみじくにほひかをりて、眉まゆものよりけだかく見なしたまふに、くちびるは丹にといふもの塗りたるやうに、いささかもねぢけたるところなく、あたりまでにほひて、髪上げうるはしき御さまにて、のどかにながめ出でつつ琴を弾きたまふ。「この世にかかることを見るや」と、あさましきまでおぼゆ。



「日本の人は、ただうち垂れ、額髪も縊りかけなどしたるこそ、わがかたざまに、なつかしく、なまめきたることなれ、と思ひ出づるに、うるはしくて、かむざし響して髪上げられたるも、人がらなりければにや、これこそめでたく、さまことなりけれ」と見るに、ものの音さへ世に知らず聞こゆるに、若き女房七、八人ばかり、天降りけむ乙女の姿かくやと見えて、菊の花もてあそびつつ、「\*蘭蕙苑の嵐の」と若やかなる声合はせて誦ずんじたる、めづらかに聞こゆ。御簾の内なる人びとも、「\*この花開けて後」と口ずさび誦するなり。「ことに男子は歌詠むめるを、女はえ詠まぬにや、花を見ても文を誦をのこじ合へるは」と知らまほしきに、后、御簾をおろして入りたまひぬ。あかずなかなか、半ばなる月を見る心地するに、え堪へず花のもとにあゆみ出でたるを、いたうあきれおどろきたるけしきもなし。すこし、はた隠れつつあるところに、花を取りて立ち寄りたまひて、

ふるさとを恋ふる心を忘るるはこの花見つる夕べなりけり

と、こころみに言ひかけたれば、団扇さし出で、ただ待ちとるほど、わが世の人にことならず。

枯れでさはこの花やがてにははなむふるさと恋ふる人あるまじく

と、答へたるけはひ、㊦言はぬにはあらざりけりと、をかしくおぼさる。

注

\*1 洞庭 湖南省北部にある洞庭湖を指す。

\*2 河陽 河南省(今の孟県)の地名。

\*3 裙帯くたたい 裳の左右に垂らす帯状の飾り。

(『浜松中納言物語』による)

- \* 4 領巾ひれ||首から左右に垂らす带状の飾り。
- \* 5 唐組の紐||五色の糸で編んだ唐風の紐。
- \* 6 はりせらむ||中国の美人の名かと思われるが不明。
- \* 7 蘭蕙苑らんけいゑんの風かぜ||菅原文時(平安時代の漢学者)の漢詩の一節。
- \* 8 この花開けて後||元稹げんしん(中唐の詩人)の漢詩の一節。

問1 中納言の容姿を見て唐の国的女性たちはどのように思ったのか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 唐の国的女性たちは、肝がつぶれるほどびっくりして中納言に思いをかけない者はなく、また、中納言の相手として釣り合うほどの容姿をもたない者は病気になるてしまいうで、自分こそはと思っっている女性たちだけが、せめて自分が独身でいる間だけでも、中納言と知り合いになりたい、と思っった。
- b 唐の国的女性たちは、肝がつぶれるほどびっくりして中納言に思いをかけない者はなく、また、中納言に対する自分の思いが届かない者は病気になるてしまいうで、自分こそはと思っっている女性たちだけが、せめて自分が独身でいる間だけでも、中納言と知り合いになりたい、と思っった。
- c 唐の国的女性たちは、肝がつぶれるほどびっくりして中納言に思いをかけない者はなく、また、中納言の相手として身分違いの者は病気になるてしまいうで、自分こそはと思っっている女性たちだけが、せめて中納言が唐の国にいた間だけでも、自分の存在を相手に知られたい、と思っった。
- d 唐の国的女性たちは、肝がつぶれるほどびっくりして中納言に思いをかけない者はなく、また、中納言の相手として年齢の釣り合いがとれない者は病気になるてしまいうで、自分こそはと思っっている女性たちだけが、せめて中納言がもう少し年をとっていたら、自分とかかわることはなかったのに、と思っった。
- e 唐の国的女性たちは、肝がつぶれるほどびっくりして中納言に思いをかけない者はなく、また、中納言と遠く離れた地に住んでいる者は病気になるてしまいうで、自分こそはと思っっている女性たちだけが、せめて后がいる間にでも、後の力で中納言と知り合いになりたい、と思っった。

問2 河陽県の皇子の滞在する邸で、琴の音を耳にした中納言はどのような感慨を抱いたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 中納言は、ほれほれとした思いにひたっている折、ほかでは聞いたこともない演奏法の琴の音色を耳にして、この上なくうれしいものだ、との感慨を抱いた。

b 中納言は、心細さに打ちひしがれている折、ほかでは聞いたこともない珍しい琴の音色を耳にして、この上なくうれしいものだ、との感慨を抱いた。

c 中納言は、喜びの情にひたっている折、ほかでは見たこともないおもしろい形をした琴の音色を耳にして、この上なくうれしいものだ、との感慨を抱いた。

d 中納言は、悲しみの情にひたっている折、ほかでは見たこともない変わった形をした琴の音色を耳にして、この上なくうれしいものだ、との感慨を抱いた。

e 中納言は、しみじみとした思いにふけっている折、ほかでは聞いたこともないすばらしい琴の音色を耳にして、この上なくうれしいものだ、との感慨を抱いた。

問3 中納言が偶然、唐の后に出会った時の様子はどのようなものだったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 端正に着飾った女房たちが伺候している様子は、名人の描いた唐絵そのものだった。几帳をたくしあげた、長く美しい唐組の紐を押しつけて、后は琴を弾いていらっしやった。

b 端正に着飾った女房たちが伺候している様子は、名人の描いた唐絵と見間違うほどだった。几帳をたくしあげた、長く美しい唐組の紐を押しつけて、后は女房に琴を弾かせていらっしやった。

c 端正に着飾った女房たちが伺候している様子は、名人の描いた唐絵も及ばないほど壮麗であった。几帳をたくしあげた、長く美しい唐組の紐を押しつけて、后は琴を弾いていらっしやった。

d 端正に着飾った女房たちが伺候している様子は、名人の描いた唐絵そのものだった。几帳をたくしあげた、長く美しい唐組の紐を押しつけて、后は女房に

琴を弾かせていらつしやった。

e 端正に着飾った女房たちが伺候している様子は、名人の描いた唐絵も及ばないほど壮麗であった。几帳をたくしあげた、長く美しい唐組の紐を押しのかけて、后は女房に琴を弾かせていらつしやった。

問4 唐の後の顔つきについてどのように述べられているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 唐の後の顔つきは、細おもてでもなく、また丸顔でもなく、品のある顔つきであったが、たとえようもなく白すぎる肌は人間離れしていた。眉も誰よりも気高く見えたが、唇は丹というものを塗っているかのように鮮やかで、少しも塗り過ぎたところはなく、あたり一面清浄感があふれていた。

b 唐の後の顔つきは、細おもてでもなく、また丸顔でもなく、ほどよいぐらいで、いよいよもなく色白の美人であった。眉は誰よりも気高く見え、唇は丹というものを塗っているかのように鮮やかで、少しも歪ゆがんでいるところはなく、あたり一面照り映えて見えた。

c 唐の後の顔つきは、細おもてでもなく、また丸顔でもなく、后にふさわしい顔つきであったが、たとえようもなく白すぎる肌は人間離れしていた。眉は誰よりも気高く見え、唇は丹というものを塗っているかのように鮮やかで、少しもまたらに見えるところはなく、あたり一面とてもよい香りがしていた。

d 唐の後の顔つきは、細おもてでもなく、また丸顔でもなく、ほどよいぐらいで、たとえようもなく白すぎる肌は人間離れしていた。眉は誰よりも気高く見え、唇は丹というものを塗っているかのように鮮やかで、少しも塗り損じたところはなく、あたり一面まぶしいほど光り輝いていた。

e 唐の後の顔つきは、細おもてでもなく、また丸顔でもなく、品のある顔つきで、いよいよもなく色白の美人であった。眉は誰よりも気高く見え、唇は丹というものを塗っているかのように鮮やかで、少しも歪ゆがんでいるところはなく、あたり一面丹の香が匂っていた。

問5 日本の女性と比較して、唐の後の髪形を、中納言はどのように見ているのか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 日本の女性は、髪がそのまま下に垂れ、額髪も縫って前にかけて垂らしているのが、ひいき目に見えていうのではないが、親しみが持て、あでやかであるが、唐の国の后は、簪で髪が結び上げられているのも、まじめな性格からであろうか、これこそ正直で素直である、と中納言は見えていた。

b 日本の女性は、髪がそのまま下に垂れ、額髪も縫って前にかけて垂らしているのが、いかにも日本人向きに親しみやすく、優雅であるが、唐の国の後は、簪で髪が結い上げられているのも、品格からだろうか、これこそ立派で美しい、と中納言は見ていた。

c 日本の女性は、髪がそのまま下に垂れ、額髪も縫って前にかけて垂らしているのが、ふり返ってみると、日本にいた頃を思い出させ、いかにも女らしいが、唐の国の後は、簪で髪が結い上げられているのも、外国人のせいかな、これこそほれぼれとしてうるわしい、と中納言は見ていた。

d 日本の女性は、髪がそのまま下に垂れ、額髪も縫って前にかけて垂らしているのが、厳しい目でみると、親しみやすさはあるが、芯こゝろが強そうではなく、唐の国の後は、簪で髪が結い上げられているのも、品格からだろうか、これこそ負けずらいでさっそうとしている、と中納言は見ていた。

e 日本の女性は、髪がそのまま下に垂れ、額髪も縫って前にかけて垂らしているのが、日本らしくはあるけれども、なんとはなしに弱い弱い、唐の国の後は、簪で髪が結い上げられているのも、外国人のせいかな、これこそ行動的でしっかりしている、と中納言は見ていた。

問6 唐の国の女房たちが思い思いに漢詩を口ずさんでいるのを聞いて、中納言はどんな感想を抱いたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 唐の国の男性は、和歌をたしなむのに違いないが、女性の方は、和歌を詠もうとしないのであろうか、せっかく花を見ても漢詩を吟じたりしているのは、と中納言は事実を知りたく思った。

b 唐の国の男性は、和歌をたしなむようだが、女性の方は、和歌を詠みたくないのであろうか、せっかく花を見ても漢詩を吟じたりしているのは、と中納言は事実を知りたく思った。

c 唐の国の男性は、和歌をたしなむのに違いないが、女性の方は、和歌を詠むのを禁じられているのであろうか、せっかく花を見ても漢詩を吟じたりしているのは、と中納言は事実を知りたく思った。

d 唐の国の男性は、和歌をたしなむようだが、女性の方は、和歌を詠むことができないのであろうか、せっかく花を見ても漢詩を吟じたりしているのは、と中納言は事実を知りたく思った。

e 唐の国の男性は、和歌をたしなむようだが、女性の方は、和歌を詠むことは恥ずかしいのであろうか、せつかく花を見ても漢詩を吟じたりしているのは、と中納言は事実を知りたく思った。

問7 唐の后が御簾の中へ入ってしまった後の中納言の行動と、それを見た女房たちの反応はどのようなものか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 中納言はもの足りなく、これではかえって半分欠けた月を見ているような中途半端な心地がするので、我慢しきれずに花の咲いているところへ歩み出ると、女房たちはあきれて驚いた、といった様子もない。

b 中納言は寂しさに襲われ、これではかえって夜空に出かかったまま雲に隠れた月を見ている心地がするので、ゆっくりと花の咲いているところへ歩み出ると、女房たちはあきれて驚いた、といった様子もない。

c 中納言は未練を残しつつ、これでは西の山に沈むまでいまだ道半ばの月を見る心地がするので、こっそりと花の咲いているところへ歩み出ると、女房たちはあきれて驚いた、といった様子もない。

d 中納言は御簾が再び上げられないことに我慢できず、これではかえって月が雲に隠れてしまったような心地がするので、怒りのあまり花の咲いているところへ歩み出ると、女房たちはあきれて驚いた、といった様子もない。

e 中納言はなかなか開かない扉を待ちかねて、これではまるで東の山から一向に出てこない月を待っているような心地がするので、気をしずめようと花の咲いているところへ歩み出ると、女房たちはあきれて驚いた、といった様子もない。

問8 唐の国の女房が詠んだ「枯れできは…」の和歌のおおよその意味として、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a この花はひとたび枯れても、あなたのいうとおり、いつかは美しく照りがやくに違いありません。日本を恋しがって悲しむ人がないように。

b この花は枯れることもなく、あなたのいうとおり、いつかはすばらしい香りを放つようになるに違いありません。日本を恋しがって悲しむ人がこの世から

なくなるまでは。

- c この花はひとたび枯れても、あなたのいうとおり、いつかはすばらしい香りを放ってほしいものです。日本を恋しがって悲しむ人を引きとどめるために。
- d この花は枯れることもなく、あなたのいうとおり、このまま美しく照りかがやくに違いありません。日本を恋しがって悲しむ人を慰めるために。
- e この花は枯れることもなく、あなたのいうとおり、このまま美しく照りかがやいてほしいものです。日本を恋しがって悲しむ人がないように。

問9 傍線部(A)を、動作主を明らかにして現代語訳せよ。

次の文章は、今は亡き常陸の親王の娘の住む邸に、光源氏が初めて訪れた時の場面を描いたものである。これを読んで、後の問いに答えよ。

左衛門の乳母として、\*<sub>1</sub>大式のさしつぎに思いたるがむすめ、大輔の命婦として、内裏にさぶらふ、\*<sub>2</sub>わかむどほりの兵部の大輔なるむすめなりけり。いといたう色好める若人にてありけるを、君も召し使ひなどしたまふ。母は筑前の守の妻にて下りにければ、父君のもとを里にて行き通ふ。

故常陸の親王の、末にまうけていみじうかなしうかしづきたまひし御むすめ、心細くて残り居たるを、ものついでに語り聞こえければ、「あはれのことや」として、御心とどめて問ひ聞きたまふ。「心ばへ容貌など、深き方はえ知りはず。かいひそめ人疎うもてなしたまへば、さべき宵など、物越しにてぞ語らひはべる。琴をぞなつかしき語らひ人と思へる」と聞こゆれば、「\*<sub>3</sub>三つの友にて、今一種やうたてあらむ」として、「われに聞かせよ。父親王のさやうの方にいとよしづきてもものしたまうければ、おしなべての手づかひにはあらじと思ふ」と語らひたまふ。「さやうに聞こし召すばかりにはあらずやはべらむ」といへど、御心とまるばかり聞こえなすを、「いたう気色ばましや。この頃の朧月夜に忍びてもせむ。まかでよ」とのたまへば、「わづらはし」と思へど、内裏わたりものどやかなる春のつれづれにまかでぬ。父の大輔の君は、ほかにぞ住みける。ここには時々ぞ通ひける。命婦は、継母のあたりは住みもつかず、姫君の御あたりを睦びて、ここには来るなりけり。のたまひしもしるく、十六夜の月をかしきほどにおはしたり。「いとかたはらいたきわざかな。ものの音澄むべき夜の様にもはべらざめるに」と聞こゆれど、「なほあなたにわたりて、ただ一声もよほし聞こえよ。むなしくて帰らむが、ねたかるべきを」とのたまへば、うちとけたる住処にすゑたてまつりて、「うしろめたう、かたじけなし」と思へど、寝殿に参りたれば、まだ格子もさながら、梅の香をかしきを見出だしてもしたまふ。「よき折かな」と思ひて、「御琴の音いかにまさりはべらむ、と思ひたまへらるる夜の気色に、誘はればべりてなむ。心あわたたしき出入りに、え承らぬこそ口惜しけれ」といへば、「聞き知る人こそあなれ。\*<sub>4</sub>百敷に行きかふ人の聞くばかりやは」とて召し寄するも、あいなう、「いかが聞きたまはむ」と胸つぶる。

ほのかに掻き鳴らしたまふ、をかしう聞こゆ。何ばかり深き手ならねど、物の音がらの筋ことなるものなれば、聞きにくくも思されず。「いといたう荒れわたりて、さびしき所に、さばかりの人の、古めかしう、所狭く、かしづきすゑたりけむ名残りなく、いかに思ほし残すことなからむ、かやうの所にこそは、昔物語にもあはれな



ることどももありけれ」など思ひつづけても、「ものやいひ寄らまし」と思せど、<sup>④</sup>「うちつけにや思さむ」と心はつかしくてやすらひたまふ。

命婦、かどある者にて、「いたう耳ならさせたてまつらじ」と思ひければ、「曇りがちにはべるめり。客人の来むとはべりつる、いとひ顔にもこそ。いま心のかにを。御格子まありなむ」とて、いたうもそのかさで帰られたれば、「なかなかなるほどにても止みぬるかな。もの聞き分くほどにもあらで、ねたう」とのたまふ気色、をかしと思したり。「おなじくは、け近きほどの立ち聞させさせよ」とのたまへど、「心にくくて」と思へば、「いでや、いとかすかなる有様に思ひ消えて、心苦しげにもものしたまふめるを、うしろめたき様にや」といへば、「げにさもあること、にはかにわれも人もうちとけて語らふべき人の際は、際とこそあれ」など、あはれに思さるる人の御ほどなれば、「なほさやうの気色をほめかせ」と語らひたまふ。

(『源氏物語』末摘花巻による)

注

- \* 1 大式||光源氏がもつとも重んじていた乳母の名前。
- \* 2 わかむどほり||皇族の血統。
- \* 3 三つの友||琴・詩・酒を指す。中国の詩人白楽天の言による。
- \* 4 百敷||宮中のこと。

問1 大輔の命婦の説明として、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 大輔の命婦は、父はもとをただせば皇族の血を引く兵部の大輔で、母は左衛門の乳母。日頃は宮中にお仕えしているが、たいそう気の多い性格の人で、光源氏も召し使っている女性である。
- b 大輔の命婦は、父は兵部の大輔で、母はもとをただせば皇族の血を引く左衛門の乳母。日頃は宮中にお仕えしているが、たいそう明るい性格の人で、光源氏も召し使っている女性である。
- c 大輔の命婦は、父は兵部の大輔で、母はもとをただせば皇族の血を引く左衛門の乳母。日頃は宮中にお仕えしているが、たいそう派手な性格の人で、光源

氏も召し使っている女性である。

d 大輔の命婦は、父はもとをたただせば皇族の血を引く兵部の大輔で、母は大式の娘。日頃は宮中にお仕えしているが、たいそう社交的な性格の人で、光源氏も召し使っている女性である。

e 大輔の命婦は、父はもとをたただせば皇族の血を引く兵部の大輔で、母は左衛門の乳母。日頃は宮中にお仕えしているが、たいそうおしゃべり好きな性格の人で、光源氏も召し使っている女性である。

## 問2

大輔の命婦は故常陸の親王の娘のことをどのような人物として光源氏に語ったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 故常陸の親王の娘は、日頃無口で、人に会ってもほとんど話をするともなく、私どもの越しに話をしておりませんが、琴に向かってひとり言をいったりする方です、と語った。

b 故常陸の親王の娘は、日頃人が来ても、物陰に隠れてほとんど会うこともなく、私どもの越しに話をしておりませんが、琴しか演奏しない方です、と語った。

c 故常陸の親王の娘は、日頃人と話をする折も、小さな声でしか話をせず、私どもの越しに話をしておりませんが、琴をまるで人のように話し相手としている方です、と語った。

d 故常陸の親王の娘は、日頃大変な恥ずかしがり屋で、面と向かって人と話をするともなく、そのため私どもの越しに話をしておりませんが、失くした琴をなつかしがっている方です、と語った。

e 故常陸の親王の娘は、日頃ひっそり暮らし、ほとんど人に会わないので、私どもの越しに話をしておりませんが、琴だけを睦まじい友としている方です、と語った。

## 問3

大輔の命婦から故常陸の親王の娘の話聞いた光源氏は、どのように返事をしたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a その琴の音を私に聞かせてくれ。亡くなられた父上は、音楽の道にはそれほど造詣ぞうげいの深い方ではなかったが、姫君はさぞかし立派な演奏家であろうと思  
う、と光源氏は返事をした。
- b その琴の音を私に聞かせてくれ。亡くなられた父上は、音楽の道にたいそう造詣の深い方であったが、姫君の腕前がそれほどなくても、我慢はしよ  
うと思う、と光源氏は返事をした。
- c その琴の音を私に聞かせてくれ。亡くなられた父上は、音楽の道にはそれほど造詣は深い方ではなかったが、姫君は案に相違してきつと素晴らしい演奏家  
であろうと思う、と光源氏は返事をした。
- d その琴の音を私に聞かせてくれ。亡くなられた父上は、音楽の道にたいそう造詣の深い方であったが、姫君の腕前がどれほどのものか、おおいに興味があ  
る、と光源氏は返事をした。
- e その琴の音を私に聞かせてくれ。亡くなられた父上は、音楽の道にたいそう造詣の深い方であったから、姫君もきつと並の演奏家ではあるまいと思う、と  
光源氏は返事をした。

#### 問4

故常陸の親王の娘の住む邸におもむいた大輔の命婦は、姫君にどのような挨拶をしたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 琴の音がどんなによく聞こえるかと思われる、そんな夜の気配に誘われてうかがいました。いつもいそがしくしていて、ゆっくり演奏を聞くことができな  
いのは残念なことです、と大輔の命婦は挨拶をした。
- b 琴の音がどんなによく聞こえるかと思われる、そんな夜の気配に誘われてうかがいました。せっかちな性分のため、いつも演奏の途中で失礼させていただ  
いて申し訳ありません、と大輔の命婦は挨拶をした。
- c 琴の音がどんなによく聞こえるかと思われる、そんな夜の気配に誘われてうかがいました。いつもいそがしくしていて、ゆっくり演奏法を教えてくださいな  
まがないのは残念なことです、と大輔の命婦は挨拶をした。
- d 琴の音がどんなによく聞こえるかと思われる、そんな夜の気配に誘われてうかがいました。いつもおいそがしそうで、ゆっくり演奏してもらえないのが残

念なことです、と大輔の命婦は挨拶をした。

e 琴の音がどんなによく聞こえるかと思われる、そんな夜の気配に誘われてうかがいました。いつもそがしくしていて、ゆっくりお話を聞くことができないのは残念なことです、と大輔の命婦は挨拶をした。

問5 故常陸の親王の娘が弾いた琴の音を光源氏はどうのように聞いたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 姫君がかすかにかき鳴らす、その音は結構なものに聞こえる。どれほど稽古を積んだわけではないが、きん琴という楽器は初心者もよい音がでるものなので、聞き苦しいとも光源氏には感じられない。

b 姫君がかすかにかき鳴らす、その音は結構なものに聞こえる。それほどすばらしい楽器ではないが、弾き手が上手なので、聞き苦しいとも光源氏には感じられない。

c 姫君がかすかにかき鳴らす、その音は結構なものに聞こえる。聞き手に高い鑑賞能力があるわけではないが、何しろ楽器がすばらしいので、聞き苦しいとも光源氏には感じられない。

d 姫君がかすかにかき鳴らす、その音は結構なものに聞こえる。格別に演奏が上手というほどでもないが、琴という楽器はもともと音色が優れているものなので、聞き苦しいとも光源氏には感じられない。

e 姫君がかすかにかき鳴らす、その音は結構なものに聞こえる。それほど琴という楽器に適した手つきではないが、邸の雰囲気ですばらしいだけに、聞き苦しいとも光源氏には感じられない。

問6 故常陸の親王の娘の演奏する琴の音を聞いて、光源氏はどうのような感慨を催したか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 常陸の親王ほどの人が、古風に厳しく育てたのに、今はあとかたもなく荒れ果て淋しくなってしまった邸で、どんなにか姫君は思い残すことなく気ままに生活していることであろう、と光源氏は感慨を催した。

- b 常陸の親王ほどの人が、年をとり行動もままならぬにもかかわらず一所懸命育てたのに、今はあとかたもなく荒れ果て淋しくなってしまった邸で、どんなにか姫君は後悔することが多いことであろう、と光源氏は感慨を催した。
- c 常陸の親王ほどの人が、昔風に窮屈なほど大事に育てたのに、今はあとかたもなく荒れ果て淋しくなってしまった邸で、どんなにか姫君は悩みが多いことであろう、と光源氏は感慨を催した。
- d 常陸の親王ほどの人が、昔風に狭苦しいまでに物をあふれさせていたのに、今はあとかたもなく荒れ果て淋しくなってしまった邸で、どんなにか姫君は豪華だった昔の生活をしのんでいることであろう、と光源氏は感慨を催した。
- e 常陸の親王ほどの人が、妻を亡くし肩身の狭い思いをしながら育てたのに、今はあとかたもなく荒れ果て淋しくなってしまった邸で、どんなにか姫君は父を恋しがっていることであろう、と光源氏は感慨を催した。

問7 故常陸の親王の娘の琴の演奏を止めさせ、光源氏が待っていた所にやってきた大輔の命婦に向かって、光源氏はどのようなことをいったか。最も適当なものを選

択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a なかなかよい演奏だと感心していた所で終わってしまったことだよ。音のよしあしを聞き分ける間もなく残念なことだ、と光源氏はいった。
- b かえって聞かなければよかったと思うような所で演奏が終わってしまったことだよ。それに音が小さくてしつかりと聞き分けることもできなかったのはまことに残念なことだ、と光源氏はいった。
- c かえって聞かなければよかったと思うような所で演奏が終わってしまったことだよ。音のよしあしを聞き分ける間もなく残念なことだ、と光源氏はいった。
- d なかなか終わらないなあと思っていたらちょうどその時演奏が終わってしまったことだよ。音のよしあしを聞き分けるには音量が小さかったのが残念なことだ、と光源氏はいった。
- e かえって聞かなければよかったと思うような所で演奏が終わってしまったことだよ。自分に音のよしあしを聞き分ける能力がないのは残念なことだ、と光

源氏はいった。

問8 もう少し近くで故常陸の親王の娘の様子をうかがわせてほしいと頼む光源氏に向かって、大輔の命婦はどのようなようにいったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a いえもう、姫君はたいそう心細い暮らしで、かろうじて生活しており、見ている気の毒な様子なのに、そんなことまでするのはよくないではありませんか、と大輔の命婦はいった。

b いえもう、姫君はたいそう心細い暮らしで、心も弱り、見ている気の毒な様子なのに、そんなことまでするのは気が引けはしませんか、と大輔の命婦はいった。

c いえもう、姫君はたいそう心細い暮らしで、とかくもの思いがらで、見ている気の毒な様子なのに、そんなことまでするのは卑怯ひきようではありませんか、と大輔の命婦はいった。

d いえもう、姫君はたいそう心細い暮らしで、心もうつろになり、見ている気の毒な様子なのに、そんなことまでするのは嫌気がさしませんか、と大輔の命婦はいった。

e いえもう、姫君はたいそう心細い暮らしで、すっかりやせ細り、見ている気の毒な様子なのに、そんなことまでするのは不安になりませんか、と大輔の命婦はいった。

問9 傍線部④を動作主を明らかにして現代語訳せよ。

次の文章は、『狭衣物語』の一節である。狭衣の君(本文中では「大将」)は、愛していた飛鳥井の女君とのあいだに生まれた姫君が一品の宮(本文中では「宮」)に養われていると聞きつけ、一品の宮の住む一条院(本文中では「一条の宮」)のようすを探っていた。これを読んで、後の問いに答えよ。

忍びたる所より、夜深く帰りましたまひて、やがて一条の宮へおはするに、この宮の御門いと疾く開きて、いづれの殿上人の車にか、夜もすがら立ち明かしけると見ゆるは、いかなる局つぼねより出づべきならんと、見入れたまふに、\*<sub>1</sub>院は昨夜内裏へ入らせたまひしを、宮もや入りたまひにけん、さらば、\*<sub>2</sub>幼き人は人少なにてやと思しやるも、過ぎがたうて、例の、やをら入りたまひぬ。

常の立ち聞きの戸口に寄りゐたまへれば、局へとて下りける女房の、押しも閉てずなりにけるに、いと広う開きたるを、人起きにけりと見るはつつましけれど、宮のおはせぬほどに人少なならば、やをら抱きてや出でぬべきと思して、御前の方を見入れたまへば、御殿油消えがたにまたたきて、奥は暗うて、物も見えず。ここかしこ、人あまた寝たりと見ゆれど、幼き人はいづれとも見えず。臥したらん所も知らねば、たどり寄らん方もなくて、つくづくと見入れらるるも、\*<sub>3</sub>弘徽殿の南の戸口は、まづぞ思ひ出でられたまひける。

思ふままなるは、我がためも人のためも、あぢきなくもいとほしくも悔しうもあるわざぞかした、いくらの年の積りならねど、思ひ知られたまふことなれば、わづらはしくて、やをら出でたまふに、ありつる車の人にや、烏帽子直衣なる人の、ふとさし合ひたるに、答へどころのびんなければ、袖して顔隠して、馬道の戸口に立ち帰りましたまひぬれど、\*<sub>4</sub>闇はあやなき御にほひより始め、人にまがふべくもなき御ありさまなれば、かくこそはありけれと見出でて、見ぬ顔にて、\*<sub>5</sub>御乳母子の中納言の君といふ人に、心ざしあり顔を見せつつ通ひけるを、今となりては、ほのめかし出でつつ責めわたるを、いとめづらかにあさましき心地して、今はをさをさ対面することもせぬに、昨夜は、いとど、宮は留らせたまひて、院も内裏に入らせたまひて、\*<sub>6</sub>母の内侍の乳母も風邪にわづらひて、え上らずなりにしかば、(内侍の乳母)「代りに御かたはらにとて参りたまへ」と言ひしを、(大納言)「かかると人少ななるほどにて、近きわたりにするべせよ」と、よき折にとうかがひて、あやにくに取りこめて、責め明かしたまひつれば、御かたはらにも参らずなりにしなりけり。世の中を思ふさまに誇りかにもてなして、物言ひなども、少しはばかりなきさまなるを、**見や知**

られぬらんと、いとほしうぞ、大将は思しける。

その後、中納言の君に会ひて、\*<sub>7</sub>大納言の、ありし暁のこと語り出でてや、(大納言)「かかれば、さしもことの外にのたまふなりけり。さはありとも、内親王<sup>みこと</sup>たちをも、何とも思ひきこえぬ人を。あな、をこがましや。よし、聞かんかし。内や院などに聞かせたまひては、さらに、憎くも、まめやかに御覽せられじ。いかに口清くあらがひ逃れんとすらんものを。御後見たちのめで惑ひて、かくしたまへるなめりかし」などあるに、いとあさましくなりぬ。

(中納言の君)「早うこそ、さやうのけしき見えしかど、あるべきことにもあらずとて、聞こえ放たせたまひにしかば、さて止<sup>や</sup>みたまひにしことを。まして今は内の御けしきに従ひて、今日明日にても、世を背きなんとこそ思しめしたれ。ゆゆしきことをかけてものたまふ。まことしう言ひなす人もこそあれ」と、けざやかに言ふを、(大納言)「されば、われは知りたまはぬななり。いまおのづから聞きたまひてん。世にあることは、しばしぞ隠る。少しにぶにぶしきことを見たらばこそあらめ、口清くものたまふかな」とのたまふさまの戯<sup>たはぶ</sup>れげしきにはあらねば、げにも天下に見ざらんことをば、かくはいかでか言はん、ただ一夜まではかくも言はざりしをとあやしければ、母の内侍の乳母に「かくこそそのたまひしか」と忍びて言へば、(内侍の乳母)「\*<sub>8</sub>少将命婦のいづぞや、かく、このころ立ち返りたまひてなど語りしに、あな、苦し、\*<sub>9</sub>嵯峨院の宮たちをうち代り預けさせたまへど、聞き入れたまはぬに、まいて盛り過ぎさせたまひぬ、あな恥づかし、おぼろけの人見えたまふべくやはとて止みにしを、少将命婦の局になん、時々寄りたまふとぞあなりしを、人の言ひなすならん。すべて候<sup>さぶら</sup>ふ人につけてなど、かかることは出で来るなめり。またまねびをだになしたまひそ」と、むづかられて止みぬるに、大将の思しやりしもしく、大納言は、いとけざやかに出でておはせしを見てしかば、ことにはばかりもなく言ふを、聞き継ぐ人のあまたになりつつ、内裏わたり、院の辺などにも、やうやう言ひ出でければ、近う候ふ人々は、「あさましきことかな。かかる物まねびなせそ」と、かたみに言ひささめけど、片端だに出でせめぬれば、(女房たち)「その夜、その暁に出でたまひし御車、そこそこに立てりしこと。夜深く、その事、御格子、妻戸の開きたりしは、さにこそありけれ」と、折々の立ち聞き、垣間<sup>かいはみ</sup>見のほどをも、ほの見ける人々、その折は何とも目留むるもなかりけれど、かかること出で来て後は、忍びつつおのおの言ひ合せなどしけり。

注

\*1 院Ⅱ女院。一品の宮の母。

(『狭衣物語』による)



\* 2 幼き人||狭衣と飛鳥井の女君との間に生まれた姫君。

\* 3 弘徽殿||弘徽殿での女二宮との逢瀬おうせのことをさす。女二宮は嵯峨院の娘。狭衣と女二宮はそれまでに結婚していたものの、女二宮は狭衣の不誠実な態度に絶望し、出家した。

\* 4 闇はあやなき御にほひ||「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やは隠るる」(古今集をふまえた表現)。

\* 5 御乳母子の中納言の君||一品の宮の女房。内侍の乳母(\*6)の娘。

\* 6 母かかの内侍の乳母||一品の宮の乳母。中納言の君の母。

\* 7 大納言||太政大臣の息子の権大納言のこと。

\* 8 少将命婦||一品の宮の女房。狭衣の君と一品の宮の仲介役をしていた。

\* 9 嵯峨院の宮たちをうち代り預けさせたまへど||過去に嵯峨院が狭衣の君に自らの娘をあてがい、結婚させようとしたことをさす。

問1 一条院の邸内をのぞきこんでいた狭衣の君はどのように考え、どのように行動したか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 女院が昨夜、幼い姫君を内裏にお移しになろうとしていたので、一品の宮も同行されたはずであり、姫君はもういらっしやらないのではないかと思いがらも、通り過ぎることができず、いつものように急いで邸内にお入りになった。

b 女院が昨夜、幼い姫君を内裏にお移しになろうとしていたので、一品の宮も同行されたはずであり、姫君はもういらっしやらないのではないかと思いがらも、通り過ぎることができず、いつものようにそっと邸内にお入りになった。

c 女院が昨夜、内裏にお入りになったので、一品の宮も同行されたはずであり、幼い姫君はお付きの女房も少なくないかと思うと、通り過ぎることができず、いつものように急いで邸内にお入りになった。

d 女院が昨夜、内裏にお入りになったので、一品の宮も同行されたはずであり、幼い姫君はお付きの女房も少なくないかと思うと、通り過ぎることができず、いつものようにそっと邸内にお入りになった。

e 女院が昨夜、幼い姫君を内裏にお移しになろうとしていたので、一品の宮も同行されたはずであり、姫君の部屋は人が少なくしのびこみやすいのではないかと思うと、通り過ぎることができず、いつものようにそつと邸内にお入りになった。

問2 邸内に入った狭衣の君はどのように行動したか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a いつも立ち聞きしている戸口に近寄ってたたずんでいると、もう女房たちが起きてるように見えて、気兼ねされるもの、もし一品の宮がいらっしゃらないで、お付きの女房も少なければ、姫君を抱きかかえて連れ出せるかもしれないと思いい邸内を見入っていたが、部屋が暗いために姫君がどこにも見つからず、居場所もわからないので、じっくり室内を見入っていた。

b いつも立ち聞きしている戸口に近寄ってたたずんでいると、もう女房たちが起きてるように見えて、気兼ねされるもの、もし一品の宮がいらっしゃらないで、お付きの女房も少なければ、姫君を抱きかかえて連れ出せるはずだと思いい邸内を見入っていたが、姫君を隠している場所がわからないので、姫君が飛鳥井の女君に似ていることを期待し、しみじみともの思いにふけていた。

c いつも立ち聞きしている戸口に近寄ってたたずんでいると、もう女房たちが起きてるように見えて、気兼ねされるもの、もし一品の宮がいらっしゃらないで、お付きの女房も少なければ、姫君を抱きかかえて連れ出せるかもしれないと思いい邸内を見入っていたが、部屋が暗いために姫君が邸内にいるかどうかもわからず、どうしたらよいかもわからなくて、もの寂しい気持ちでいた。

d いつも立ち聞きしている戸口に近寄ってたたずんでいると、起きてしまった女房に見られてしまい、恥ずかしく思っていたものの、もし一品の宮が内裏に行っておられず、お付きの女房も少ないのならば、姫君を抱きかかえて連れ出すことなどできないだろうと思いいながら邸内を見入っていたが、部屋が暗くて何も見えないので、誰が誰なのかもわからず、じっくり室内を見入っていた。

e いつも立ち聞きしている戸口に近寄ってたたずんでいると、起きてしまった女房に見られてしまい、恥ずかしく思っていたものの、もし一品の宮が内裏に行っておられず、お付きの女房も少ないのならば、姫君を抱きかかえて連れ出すことなどできないだろうと思いいながら邸内を見入っていたが、姫君が中にいるかどうかもわからないので、姫君が飛鳥井の女君に似ていることを期待し、しみじみともの思いにふけていた。

問3 女二宮との逢瀬を思い出した狭衣の君は、その後どのように行動したか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a このように自由に出入りができるのは、自分のためにも相手のためにも張り合いがなく、相手はかわいらしくはあるものの、自分の方も後悔することだよ  
と思いきらされているので、つらいことだと思いつつ、退出なさったところ、烏帽子直衣姿の大納言と不意に出くわしてしまったが、応じるにも具合が悪かったため、袖で顔を隠し、馬道の戸口に帰って行った。

b このように自由に出入りができるのは、自分のためにも相手のためにも張り合いがなく、相手にはかわいそうでもあり、自分の方も後悔することだよと思いきらされているので、面倒なことになるのを恐れて、退出なさったところ、烏帽子直衣姿の大納言と不意に出くわしてしまったが、応対するには失礼な場所だったので、袖で顔を隠し、馬道の戸口に帰って行った。

c このように自由に出入りができるのは、自分のためにも相手のためにも張り合いがなく、相手にはかわいそうでもあり、自分の方も後悔することだよと思いきらされているので、面倒なことになるのを恐れて、退出なさったところ、烏帽子直衣姿の大納言と不意に出くわしてしまったが、とっさによい答えが浮かばなかったため、袖で顔を隠し、馬道の戸口に帰って行った。

d このように自由に出入りができるのは、自分のためにも相手のためにも望ましいことではなく、相手には気の毒でもあり、自分の方も後悔することだよと思いきらされているので、つらいことだと思いつつ、退出なさったところ、烏帽子直衣姿の大納言と不意に出くわしてしまったが、とっさによい答えが浮かばなかったため、袖で顔を隠し、馬道の戸口に帰って行った。

e このように自由に出入りができるのは、自分のためにも相手のためにも望ましいことではなく、相手には気の毒でもあり、自分の方も後悔することだよと思いきらされているので、面倒なことになるのを恐れて、退出なさったところ、烏帽子直衣姿の大納言と不意に出くわしてしまったが、応じるにも具合が悪かったため、袖で顔を隠し、馬道の戸口に帰って行った。

問4 狭衣の君と出会うまでの大納言の行動はどのように描かれているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 大納言は、最初は中納言の君への思いをはっきりとは示さずに通っていたものの、その後、中納言の君への思いを示して、応えてくれるよう強く迫ったため、中納言の君は大納言の意外なほどの愛情に応えしつかりと対面をするようになった。そこで、昨夜は一品の宮が邸内にとどまっていたため、大納言はよい機会と見て取って、中納言の君を局から出さずに、一晚中結婚を催促していた。

b 大納言は、最初は中納言の君への思いをはっきりとは示さずに通っていたものの、その後、中納言の君への思いを示して、応えてくれないのを責めるようになったため、中納言の君はあきれたことと見て対面していなかった。しかし、昨夜は一品の宮が邸内にとどまっていたため、大納言はよい機会と見て取って、中納言の君を局から出さずに、一晚中結婚を催促していた。

c 大納言は、最初は中納言の君に思いがあるようにして通っていたものの、その後、一品の宮への思いを示しはじめて一品の宮のことをあれこれ聞き出そうとしたため、中納言の君は大納言の一品の宮に対する意外なほどの愛情に気づき、ときどき対面を続けていた。しかし、昨夜は一品の宮が邸内にとどまっていたため、大納言はよい機会と見て取って、中納言の君を局から出さずに、一晚中一品の宮への手引きを催促していた。

d 大納言は、最初は中納言の君に思いがあるようにして通っていたものの、その後、一品の宮への思いを示しはじめて仲立ちを強要したため、中納言の君はあきれたことと見て対面していなかった。しかし、昨夜は一品の宮が邸内にとどまっていたため、大納言はよい機会と見て取って、中納言の君を局から出さずに、一晚中一品の宮への手引きを催促していた。

e 大納言は、最初は中納言の君に思いがあるようにして通っていたものの、その後、一品の宮への思いを示しはじめて一品の宮のことをあれこれ聞き出そうとしたため、中納言の君はあきれたことと見て対面していなかった。しかし、昨夜は一品の宮が邸内にとどまっていたため、大納言はよい機会と見て取って、一品の宮を局から出さずに、一晚中結婚を催促していた。

問5 大納言は、狭衣の君と出くわした後、中納言の君にどのようなことを話したか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 「このような事情だからあなたは、言い寄るのはもつてのほかだとおっしゃったのだなあ。そうだとしてもあの狭衣の君は皇女たちに関心を持つなど聞いたことがない人なのに。ああ、出過ぎているやつだ。帝や女院がお聞きになったら真剣な結婚の申し出とは御覧にならないだろうが、狭衣の君はうまく

言い逃れをするだろう。後見役の女房たちも狭衣の君に目がくらんで、隠れて狭衣の君と一品の宮との仲をとりもつたのだろう」と恨み言を言った。

b 「このような事情だからあなたは、言い寄るのはもつてのほかだとおっしゃったのだなあ。そうだとってもあの狭衣の君は皇女であろうが関心を持たない人なのに。ああ、ばかげたことだ。帝や女院がお聞きになつたら真剣な結婚の申し出とは御覧にならないだろうが、狭衣の君はうまく言い逃れをするだろう。後見役の女房たちも狭衣の君に目がくらんで、狭衣の君と一品の宮との仲をとりもつたのだろう」と恨み言を言った。

c 「このような事情だからあなたは、言い寄るのはもつてのほかだとおっしゃったのだなあ。そうだとってもあの狭衣の君は皇女たちに関心を持つなど聞いたことがない人なのに。ああ、ばかげたことだ。帝や女院がお聞きになつたら真剣な結婚の申し出とは御覧にならないだろうが、狭衣の君はうまく言い逃れをするだろう。後見役の女房たちも困つてしまつて、一品の宮を隠してしまつたのだろう」と恨み言を言った。

d 「このような事情だから狭衣の君は、言い寄るのはもつてのほかだとおっしゃったのだなあ。そうだとってもあの狭衣の君は皇女であろうが関心を持たない方なのに。ああ、出過ぎてているやつだ。帝や女院がお聞きになつたら真剣な結婚の申し出とは御覧にならないだろうが、狭衣の君はうまく言い逃れをするだろう。後見役の女房たちも狭衣の君に目がくらんで、狭衣の君と一品の宮との仲をとりもつたのだろう」と恨み言を言った。

e 「このような事情だから狭衣の君は、言い寄るのはもつてのほかだとおっしゃったのだなあ。そうだとってもあの狭衣の君は皇女であろうが関心を持たない方なのに。ああ、出過ぎてているやつだ。帝や女院がお聞きになつたら真剣な結婚の申し出とは御覧にならないだろうが、狭衣の君はうまく言い逃れをするだろう。後見役の女房たちも困つてしまつて、一品の宮を隠してしまつたのだろう」と恨み言を言った。

問6 中納言の君は大納言に、狭衣の君と一品の宮との関係についてどのように話したか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 「以前、狭衣の君は一品の宮に結婚を申し出ようりましたが、一品の宮が結婚などありえないとはっきりとお断りになつたので、そのまま終わってしまいました。まして今、一品の宮は狭衣の君に近いうちに出家してほしいと思つていらつしやるので、二人が結婚することはないのですが、まことしやかに言う人がいそうで心配です」と丁寧話した。

b 「以前、狭衣の君は一品の宮に結婚を申し出ようりましたが、一品の宮が結婚などありえないとはっきりとお断りになつたので、そのまま終わってしま

いました。まして今、一品の宮は自らのこの世での命が長くないとすら思っていたらっしゃるので、二人が結婚することはないのですが、まことしやかに噂する人もいるでしょう」と丁寧と話した。

c 「以前、狭衣の君は一品の宮に結婚を申し出ようとはしましたが、一品の宮が結婚などありえないとはっきりとお断りになったので、そのまま終わってしまいました。まして今、一品の宮は近いうちに出家しようとしていらっしゃるので、二人が結婚することはないのですが、まことしやかに言う人がいそうで心配です」ときっぱりと話した。

d 「以前、狭衣の君は一品の宮に結婚を申し出ようとはしましたが、帝が結婚などありえないとはっきりと強くおっしゃったので、そのまま終わってしまいました。まして今、一品の宮は近いうちに出家しようとしていらっしゃるので、二人が結婚することはないのですが、まことしやかに言う人がいそうで心配です」ときっぱりと話した。

e 「以前、狭衣の君は一品の宮に結婚を申し出ようとはしましたが、帝が結婚などありえないとはっきりと強くおっしゃったので、そのまま終わってしまいました。まして今、一品の宮は自らのこの世での命が長くないとすら思っていたらっしゃるので、二人が結婚することはないのですが、まことしやかに噂する人もいるでしょう」と丁寧と話した。

問7 内侍の乳母は中納言の君に、狭衣の君のことについてどのように話したか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 「一品の宮は若さの盛りが過ぎていて、言い寄られるのはとても恥ずかしいことであり、狭衣の君には一品の宮のような普通の人では釣り合うはずがない。狭衣の君は、少将命婦の局に時々お立ち寄りになるということだったので、そのことを誰かがいわくありげに言いふらしているのだろうと思われる。何事もお仕えする人の心がけにつけてこのような問題も生じるのだから、二度と狭衣の君のことを口にしてはならない」と話した。

b 「一品の宮は若さの盛りが過ぎていて、言い寄られるのはとても恥ずかしいことであり、狭衣の君には年相応の普通の人がちやうど釣り合うだろう。狭衣の君は、少将命婦の局に時々お立ち寄りになるということだったので、そのことを誰かがいわくありげに言いふらしているのだろうと思われる。何事もお仕えする人の心がけにつけてこのような問題も生じるのだから、また狭衣の君のような問題は起こりうるだろう」と話した。

c 「一品の宮は若さの盛りは過ぎていても立派な方なので、狭衣の君にはそうではない普通の人がちやうど釣り合うだろう。狭衣の君は、少将命婦の局に時々お立ち寄りになるということだったので、そのことを誰かがいわくありげに言いふらしているのだろうと思われる。何事もお仕える人の心がけにつけてこのような問題も生じるのだから、あなたも狭衣の君のような行動をしてはいけない」と話した。

d 「一品の宮は若さの盛りはまだ過ぎておらず、とても立派な方なので、普通の人では釣り合うはずがない。狭衣の君は、少将命婦の局に時々お立ち寄りになるということだったので、そのことを誰かがいわくありげに言いふらしているのだろうと思われる。何事もお仕える人の心がけにつけてこのような問題も生じるのだから、また狭衣の君のような問題は起こりうるだろう」と話した。

e 「一品の宮は若さの盛りが過ぎていて、とても不審なことではあるが、狭衣の君とは一品の宮のような普通の人でも釣り合うのかもしれない。狭衣の君は、少将命婦の局に時々お立ち寄りになるということだったので、そのことを誰かがいわくありげに言いふらしているのだろうと思われる。何事もお仕える人の心がけにつけてこのような問題も生じるのだから、二度と狭衣の君のことを口にしてはならない」と話した。

問8 その後の周りの人々の反応はどのようであったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 大納言は、狭衣の君が一品の宮のところに通っていたことを、はばかりなく言いふらしたので、帝や女院の周辺でもだんだんと口にする人が増えてきて、「意外なことです。このようなことを言うてはいけません」と過去のことであるので互いに自制するようになったものの、一旦噂が出てきてしまうと、狭衣の君が折々に立ち聞きしたり、垣間見したりしているのを見た人々が、見聞きしたことを話し合っていた。

b 大納言は、狭衣の君が一品の宮のところに通っていたことを、はばかりなく言いふらしたので、帝や女院の周辺の人々もすぐに口にするようになって、「みっともないことです。このようなことを言うてはいけません」と互いにひそひそ語り合っていたものの、一旦噂が出てきてしまうと、狭衣の君が折々に立ち聞きしたり、垣間見したりしているのを見た人々が、見聞きしたことを話し合っていた。

c 大納言は、狭衣の君が懸念していたように、はばかりなく狭衣の君のことを言いふらしたので、帝や女院の周辺の人々もすぐに口にするようになって、「みっともないことです。このようなことを言うてはいけません」と過去のことであるので互いに自制するようになったものの、一旦噂が出てきてしま

と、狭衣の君が折々に立ち聞きしたり、垣間見したりしているのを見た人々が、見聞きしたことを話し合っていた。

d 大納言は、狭衣の君が懸念していたように、はばかりなく狭衣の君のことを言いふらしたので、帝や女院の周辺でもだんだんと口にする人が増えてきて、「意外なことです。狭衣の君のまねをしてはいけません」と互いにひそひそ語り合っていたものの、一旦噂が出てきってしまうと、狭衣の君が折々に立ち聞きしたり、垣間見したりしているのを見た人々が、見聞きしたことを話し合っていた。

e 大納言は、狭衣の君が懸念していたように、はばかりなく狭衣の君のことを言いふらしたので、帝や女院の周辺でもだんだんと口にする人が増えてきて、「みつともないことです。このようなことを言うてはいけません」と互いにひそひそ語り合っていたものの、一旦噂が出てきってしまうと、狭衣の君が折々に立ち聞きしたり、垣間見したりしているのを見た人々が、見聞きしたことを話し合っていた。

問9 傍線部(A)を現代語訳せよ。



次の文章は、『無名草子』の一部で、夕刻、京の東山あたりを歩いていた老尼が、風情のある屋敷を見つけて歩み入り、そこにいた若い女性たちと会話を交わしたり、経を読んだりしている場面の続きである。これを読んで、後の問いに答えよ。

「今は休みはべりなむ」とて寄り臥しぬれど、この人々はぞろごとども言ひ、経のよきあしきなどほめそしり、花・紅葉・月・雪につけても、心ごころとりどりに言ひあへるも、いとをかしければ、つくづくと聞き臥したるに、三四人はなほ居つつ、物語をしめじめとうちしつ、「さてもさても、何事か、この世にとりて第一に捨てがたきふしある。おのおの、心におぼされむことのためへ」と言ふ人あるに、「花・紅葉をもてあそび、月・雪にたはるるにつけても、この世は捨てがたきものなり。情けなきもあるをも嫌はず、心なきをも数ならぬをもわかぬは、かやうの道ばかりにこそはべらめ。それにとりて、夕月夜ほのなるより有明の心細き、をりも嫌はず所もわかぬものは、月の光ばかりこそはべらめ。夏も、まして秋冬など、月明かき夜は、そぞろなる心も澄み、情けなき姿も忘られて、知らぬ昔・今・行く先も、まだ見ぬ高麗・唐土も、残る所なくはるかに思ひやらるることは、ただこの月に向かひてのみこそあれ。されば、\*<sub>1</sub>王子猷は戴安道を尋ね、\*<sub>2</sub>蕭史が妻の、月に心を澄まして雲に入りけむも、ことわりとぞおぼえはべる。この世にも、月に心を深く染めたるためし、昔も今も多くはべるめり。\*<sub>3</sub>勢至菩薩にてさへおほしますなれば、\*<sub>4</sub>暗きより暗きに迷はむしるべまでも、とこそ、たのみをかけ奉るべき身にてはべれ」と言ふ人あり。また、「かばかり濁り多かる末の世まで、いかでかかる光のとどまりけむと、昔の契りもかたじけなく思ひ知らるることは、この月の光ばかりこそはべるを、同じ心なる友なくてただひとりながむるは、いみじき月の光もいとすさまじく、見るにつけても恋しきこと多かるこそ、いとわびしけれ」。また、「この世にいかでかかることありけむと、めでたくおぼゆることは、文にこそはべるなれ。『枕草子』に返す返す申してはべるめれば、こと新しく申すに及ばねど、なほいとめでたきものなり。はるかなる世界にかき離れて、いくとせあひ見ぬ人なれど、文といふものに見つれば、ただいまさし向かひたる心地して。なかなかうち向かひては思ふほども続けやらぬ心の色もあらはし、言はまほしきことをもこまごまと書きつくしたるを見る心は、めづらしくうれしく、あひ向かひたるに劣りてやはある。つれづれなるをり、昔の人の文見出でたるは、ただそのをりの心地して、いみじくうれしくこそおぼゆれ。ましてなき人などの書きたるものなど見るは、いみじくあはれに、年月の多くつもりたるも、ただいま筆うちぬらして書きたるやうなるこそ、返す

返すめでたけれ。<sup>④</sup>たださし向かひたるほどの情けばかりにてこそはべれ。これは、昔ながらつゆ変はることなきも、めでたきことなり。いみじかりける<sup>※</sup>。延喜・天曆の御時のふることも、唐土・天竺の知らぬ世のことも、この文字といふものなからましかば、今の世の我らがかたはしもいかでか書き伝へまし、など思ふにも、なほかばかりめでたきことはよもはべらじ」と言へば、また、「何のすちとさだめて、いみじと言ふべきにもあらず、あだにはかなきことに言ひ慣らはしてあれど、夢こそあはれにいみじくおぼゆれ。はるかに跡絶えにしなかなれど、夢には関守も強からで、もと来し道もたち帰ること多かり。昔の人も、ありしながらの面影をさだかに見ることは、ただこの道ばかりはべり。<sup>\*</sup>上東門院の、

<sup>\*7</sup>逢ふこともいまはなきねの夢ならでいつかは君をまたは見るべき

とよませたまへるも、いとこそあはれにはべれ」など言ふ人あり。

(『無名草子』による)

注

- \* 1 王子猷は戴安道を尋ね、晋の王子猷が月の美しい夜に友人の戴安道を訪ね、夜が明けたので門前から引き返した故事。
- \* 2 蕭史が妻の、月に心を澄まして雲に入りけむ<sup>しよう</sup>。簫の名手だった蕭史が、秦の穆公の娘と結ばれ、ともに天に昇った故事。
- \* 3 勢至菩薩<sup>せいしぼさつ</sup>は阿弥陀如来の右側にいる脇侍の菩薩。月の本体は勢至菩薩であるとも考えられている。
- \* 4 暗きより暗きに迷はむしるべ<sup>いんきよりあんきにまよはむしるべ</sup>。和泉式部の歌「暗きより暗き道にぞ入りぬべきはるかに照らせ山の端の月」(『拾遺集』)による表現。
- \* 5 延喜・天曆の御時<sup>えんぎ・てんりやく</sup>は醍醐天皇、天曆は村上天皇の治世の年号。後世から、すぐれた時代だったとして仰ぎ見られた。
- \* 6 上東門院<sup>じやうとうもんゐん</sup>は藤原道長の娘で一条天皇の中宮となった彰子。
- \* 7 逢ふ<sup>あ</sup>ことも：『新古今集』にのる歌で、上東門院が、夫である一条天皇の死を悲しんだ歌。

問1 経を読み終わり「私はもう休みましょう」と言って横になった老尼のそばにいた女性たちの様子はどのようだったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 老尼が読んでいた経のことを、気楽にほめたりけなしたりしていたが、やがてしんみりとした口調で、花・紅葉・月・雪や『源氏物語』のような物語のどれに心が引かれるかを語り始めた。

b 老尼が読んでいた経のことを、気楽にほめたりけなしたりして、花・紅葉・月・雪についても口々によしあしを述べていたが、やがてしんみりした口調でいろいろなことを語り始めた。

c 老尼が読んでいた経のことを、気楽にほめたりけなしたりして、花・紅葉・月・雪についても口々によしあしを述べていたが、やがてしんみりした口調で『源氏物語』のような物語のことを語り始めた。

d 老尼が読んでいた経のことを、わけもなく強い口調でほめたりけなしたりしていたが、その後、花・紅葉・月・雪、そして『源氏物語』のような物語のどれに心が引かれるかをしんみりと語り始めた。

e 老尼が読んでいた経のことを、わけもなく強い口調でほめたりけなしたりしていたが、花・紅葉・月・雪についても口々に述べ、やがてしんみりした口調でいろいろなことを語り始めた。

問2 「この世で最も捨てがたいものは何か」という問いに対して、最初に発言した女性はどうか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 花・紅葉・月・雪は、もてあそびたわむれるにつけて、老尼のように出家してこの世を捨てることができなくなってしまうものだが、その中でも特に、月は心を澄みきった状態にしてくれる、と答えた。

b 花・紅葉・月・雪は、もてあそびたわむれるにつけて、老尼のように出家してこの世を捨てることができなくなってしまうものだが、その中でも月には最も、心を強く動かされてしまう、と答えた。

c 花・紅葉・月・雪は、もてあそびたわむれるにつけて、老尼のように出家してこの世を捨てることができなくなってしまうものだが、その中でも特に、月は遠い過去や異国のことまで思わせる、特別なものだ、と答えた。

d 花・紅葉・月・雪は、どのような人の心もわけへだてなく動かすが、その中であって月は、はるかに遠い過去や異国のことまで思わせる点が他と違って特別だ、と答えた。

e 花・紅葉・月・雪は、どのような人の心もわけへだてなく動かすが、その中でも特に、月を見てみると、仏のいる天にまで昇っていけそうな気持ちになっ  
てしまう、と答えた。

問3 最初に発言した女性は、月についてどう考えているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 月に心を奪われてしまうと、死後、暗い世界に迷うことになるので、罪深い身である自分は、勢至菩薩に何とか救ってもらえるよう、願いをかけなければいけないと考えている。

b 月に心を奪われてしまうと、死後、暗い世界に迷うことになると、勢至菩薩も説いているので、罪深い身である自分は、そうならないようつとめたいものだ  
だと願っている。

c 異国には月によって心を澄みきった状態にした話が多いが、日本でもこれと同様の話は多く、罪深い身である自分も、月の光によって救われたいものだと  
願っている。

d 異国には月によって心を澄みきった状態にした話が多いが、日本では月に心を奪われて暗い道に迷うことになる話ばかりが多いので、勢至菩薩に救っても  
らいたいと願っている。

e 異国には月に心を奪ってしまった話が多いが、日本では月は勢至菩薩の化身だと言われているので、異国と違ってそれによって迷いの道から救われるこ  
とができると考えている。

問4 二番目に発言した女性は、月についてどう述べているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a こんな濁った末の世にまで、澄み切った月の光が残っていることを、自分のめぐまれた宿世すくせのおかげだとありがたく思うが、月の光は、たった一人で見て昔が恋しくてたまらないところが残念だ。
- b こんな濁った末の世にまで、澄み切った月の光が残っていることをとてもありがたく思うが、月の光は、昔契りをかわしたなつかしい恋人と離れて一人で見るとさびしくてたまらないところが残念だ。

c こんな濁った末の世にまで、澄み切った月の光が残っていることをとてもありがたく思うが、月の光は、昔いつまでも親しくしようと誓った友と離れて一人で見るとさびしくてたまらないところが残念だ。

d こんな濁った末の世にまで、澄み切った月の光が残っていることは、そう定めてくださった昔の仏のありがたい誓いの結果だが、月の光は、そういった事情を知っているにもかかわらず、一人で見るとさびしくてたまらないところが残念だ。

e こんな濁った末の世にまで、澄み切った月の光が残っていることは、そう定めてくださった昔の仏のありがたい誓いの結果だが、月の光は、親友もおらずたった一人で見るとさびしくてたまらないところが残念だ。

問5 三番目に発言した女性は、どのようなことを述べているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 『枕草子』がくり返し言っているように、月よりも手紙の方が、もっとすばらしい。手紙は直接会って話すのにも劣らず、時間がたっても変わらずに残る点では、むしろそれ以上である。

b 『枕草子』がくり返し手紙のすばらしさを力説しているが、本当はそれよりもっとすばらしい。手紙は直接会って話すのにも劣らず、時間がたっても変わらずに残る点では、むしろそれ以上である。

c 『枕草子』がくり返し言っているように、手紙は本当にすばらしい。手紙は直接会って話すのにもまったく劣らず、時間がたっても変わらずに残る点では、むしろそれ以上である。

d 『枕草子』がくり返し手紙のすばらしさを力説しているが、本当はそれよりももっとすぐれている。ところが『枕草子』は、手紙が直接会って話すよりもっとすばらしいと述べていない。

e 『枕草子』がくり返し言っているように、月よりも手紙の方が、ずっとすぐれている。ところが『枕草子』は、手紙が直接会って話すよりもっとすばらしいと述べていない。

問6 最後に発言した女性は、どのようなことを述べているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 夢はすばらしい。すっかり縁が切れてしまった恋の場合、夢の中では恋の守り神は強く守ってくれず、結局逢えずに引き返してしまうことが多いが、それでも夢の中で、相手の顔をはっきりと見ることだけはできるのだ。

b 夢はすばらしい。すっかり縁が切れてしまった恋でも、夢の中では誰もじやまをすることもなく、昔の恋を復活させることができ、夢の中では、なつかしい相手の顔をはっきりと見ることができるのだ。

c 夢はすばらしい。遠く離れてしまった友人どうしても、夢の中では途中の関所の神も強くじやまはせず、昔とまったく同じように友人と逢って、昔と変わらない相手の顔を夢の中ではっきりと見ることができるのだ。

d 夢はすばらしい。長い間夢を見なくなってしまっているのだが、たまに見る夢の中では守り神は強く守ってくれず、恋人に逢えずに引き返すことが多いが、それでも夢の中で、相手の顔をはっきりと見ることだけはできるのだ。

e 夢はすばらしい。長い間夢を見なくなってしまっているのだが、たまに見る夢の中では関所の守り神は強くじやまはせず、昔とまったく同じように死んだ友人と逢って、相手の顔をはっきりと見ることができるのだ。

問7 上東門院の歌の意味として最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a あなたと逢えなくなって、そのまま何も言わずに泣き寝入りをしてしまいました。やはりあきらめることなく、もう一度あなたに逢いたいと願っています。

す。

b あなたと逢えなくなつて、そのまま何も言わずに泣き寝入りをしてしまいました。結局はいつになつても、もう一度あなたに逢うことはできないのでしょうか。

c あなたとはもう逢えなくなりましたが、泣きながら寝て見る夢の中ではもう一度あなたに逢うことができるのではないかと、いつも期待を寄せていることです。

d あなたとはもう逢えなくなりました。いつも泣きながら寝ているので夢を見ることもなく、いつたいつになつたらあなたに逢うことができるかと嘆いています。

e あなたとはもう逢えなくなりました。いつもただ泣きながら寝て見る夢の中でしかあなたに逢うことができないので、とてもつらく思われることです。

問8 本文の要約として最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 仏教の教えを勧める老尼に対し、女性たちは、月や手紙や夢のすばらしさを口々に語り、すでに出家している老尼に対抗してこの世の捨てがたさ、すばらしさを強調しようとしている。

b 仏教の教えを勧める老尼に対抗して、女性たちは、月や手紙や夢のすばらしさを口々に語り、その中でどれもつとも仏教の教えよりすぐれているかについて、自分の意見をさまざまな立場から主張しあっている。

c 仏教の教えを勧める老尼に対し、女性たちは、月や手紙や夢のすばらしさを口々に語っているが、最後の女性は夫の死を悲しんだ上東門院の歌を紹介して、老尼の考えに近づいている。

d 風流な心を持つ老尼をとり囲んで、女性たちは、月や手紙や夢のすばらしさを口々に語り、その中でどれが最もすばらしいかについて、自分の意見をさまざまな立場から主張しあっている。

e 風流な心を持つ老尼をとり囲んで、女性たちは、月や手紙や夢のすばらしさを口々に語っているが、最後の女性は夫の死を悲しんだ上東門院の歌を紹介し

て、老尼の考えに近づいている。

問9 傍線部④を現代語訳せよ。ただし、「これ」の内容を明らかにすること。



次の文章は、『蜻蛉日記』下巻の一節である。作者が引き取って育てている養女に、作者の子道綱(右馬助、問題文中では「助」)の上司である藤原遠度(問題文中では「右馬頭」)から求婚の手紙が届き、作者は拒絶したが、遠度は作者の夫兼家問題文中では「殿」の同意を得ていると主張し、ついに作者の邸宅を訪問する。以下はその場面である。これを読んで、後の問いに答えよ。

ついたち七八日のほどの昼つかた、「右馬頭おはしたり」と言ふ。「あなかま。ここになしと答へよ。もの言はむとあらむに、まだしきに便なし」など言ふほどに入りて、\*<sub>1</sub>あらはなる籬まがきの前に立ちやすらふ。例もきよげなる人の、\*<sub>2</sub>練りそしたる着て、なよやかなる直衣なほし、太刀ひき佩はき、例のことなれど、赤色の扇、少し乱れたるをもてまさぐりて、風はやきほどに、\*<sub>3</sub>纓吹きあげられつつ立てるさま、絵にかきたるやうなり。「きよらの人あり」とて、奥まりたる女の、裳もなどうちとけ姿にて出でて見るに、時しもあれ、この風の簾すだれを外へ吹き、内へ吹きまどはせば、簾をたのみたるものども、我が人かにておさへひかへ騒ぐまに、なにか、あやしの袖口もみな見つらむと思ふに、死ぬばかり\*<sub>4</sub>いとほし。昨夜\*<sub>5</sub>出居のところより夜ふけて帰りに寝臥ふしたる人を起こすほどに、かかるなりけり。からうじて起き出でて、ここには人もなきよし言ふ。風の心あわたしさに、格子を、みなかねてより下ろしたるほどなれば、なにごと言ふもよろしきなりけり。しひて簀子すこのほに上りて、「今日よき日なり。\*<sub>6</sub>円座貸いたまへ。\*<sub>7</sub>居そめむ」などはかり語らひて、「いとかひなきわざかな」とうち嘆きて帰りぬ。

二日ばかりありて、\*<sub>8</sub>ただことばにて、「侍らぬほどにものしたまへりける、かしこまり」など言ひて\*<sub>9</sub>奉れて後、「いとおぼつかなくてまかでにしを、いかで」とつねにあり。似げないことゆゑに、「\*<sub>10</sub>あやしの声までやは」などあるは、\*<sub>11</sub>許しなきを、「助にもなきこえむ」と言ひがてら、暮にもものしたり。いかがはせむとて、格子二間ばかり上げて、簀子に火ともして、廂ひさしにもものしたり。助、対面たいめんして、「早く」とて縁にのぼりぬ。妻戸をひき開けて、「これより」と言ふめれば、歩み寄るものの、また立ちのきて、「まづ御消息きこえさせたまへかし」としのびやかに言ふなれば、入りて、「さなむ」とものするに、「\*<sub>12</sub>おぼしやらむところなきこえよかし」など言へば、すこしうち笑ひて、よきほどにうちそよめきて入りぬ。

助と物語しのびやかにして、笏さくに扇のうちあたる音ばかりときどきしてゐたり。うちに音なうて、やや久しければ、助に、「一日ひとひかひなうてまかでにしかば、心も

となさになむ」ときこえたまへ」とて\*1<sub>3</sub>入れたり。「早う」と言へば、あざりよりてあれど、とみにものも言はず。うちよりはたまして音なし。とばかりありて、おほつかなう思ふにやあらむとて、いささかしはぶきの気色したるにつけて、「時しもあれ、悪しかりける折にさぶらひあひはべりて」と言ふをはじめにて、思ひはじめけるよりのこと、いと多かり。うちには、ただ、「いとまがまがしきほどなれば、かうのたまふも夢のこちちなむする。小さきよりも、世に言ふなる\*1<sub>4</sub>鼠生ひのほどにだにあらぬを、いとわりなきことになむ」などやうに答ふ。声いといたうつくろひたなりと聞けば、我もいと苦し。雨うち乱る暮にて、蛙の声いと高し。夜ふけゆけば、うちより、「いとかくむくつけげなるあたりは、うちなる人だに静心なくはべるを」と言ひ出だしたれば、「なにか、これよりまかづと思ひたまへむには、おそろしきことはべらじ」と言ひつつ、いたうふけぬれば、「\*1<sub>5</sub>助の君の御いそぎも近うなりにたらむを、そのほどの雑役をだにつかうまつらむ。殿に、かうなむ仰せられしと、御気色給はりて、またのたまはせむこときこえさせに、明日明後日のほどにもさぶらふべし」とあれば、立つななりとて、几帳のほころびよりかきわけて見出だせば、簀子にともしたりつる火は、はやう消えにけり。うちにはものしりへにともしたれば、光ありて、外の消えぬるも知られぬなりけり。影もや見えつらむと思ふに、あさまして、「腹黒う、消えぬともたまはせで」といへば、「なにかは」と、さぶらふ人も答へて立ちにけり。

来そめぬれば、しばしばものしつ、おなじことをものすれど、「ここには、\*1<sub>6</sub>御許されあらむところより、さもあらむ時こそは、わびてもあべかめれ」と言へば、「やんことなき許されはなりにたるを」とて、かしこましよう責む。「この月とこそは殿にも仰せはありしか。二十余日のほどなむ、よき日はあなる」とて責めらるれど、助、寮の使ひにとて祭にもすべければ、そのことをのみ思ふに、人はいそぎの果つるを待ちけり。禊の日、犬の死にたるを見つけて、いふかひなくとまりぬ。

(『蜻蛉日記』による)

## 注

- \*1 あらはなる籬しきすきまがあつてむこうがよく見える垣根。
- \*2 練りそしたるつや十分すぎるほど打って艶を出した桂。
- \*3 纓えい冠の後部に垂れている二枚の羽根のような装飾。
- \*4 いとほしいであここでは、なまけなくつらいの意。
- \*5 出居いであのところいであ弓の練習場。

\* 6 円座わらざだ 蘭草らんそうやわらを編んだ座布団。

\* 7 居ゐそめむ 座り初めをしよう。「居そめ」(座り初め)は、求婚相手の女性の家を訪れ、受け入れられてはじめて座る儀礼と考えられている。

\* 8 ただことばにて 手紙ではなく口上で。

\* 9 奉れて 奉り入れて」が縮約した形。

\* 10 あやしの声までやは 年老いた声までお聞かせすることはできません」の意。

\* 11 許しなきを 許さないということなのに」の意。

\* 12 おぼしよらむところなきこえよかし おのぞみの場所でお話し申しなさい」の意。

\* 13 入れたり 道綱に取り次がせた」の意。

\* 14 鼠ねずみ生おひ 幼い子を子鼠にたとえた俗語。

\* 15 助の君の御いそぎ 道綱が賀茂祭の使に立つ準備。

\* 16 御許されあらむところ お許しが出るところ、つまり兼家をさす。

問1 速度の最初の訪問の際、作者はどのように対応したか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 養女の結婚はまだ早すぎると思って、最初は居留守を使おうとしたが、強風のために簾が吹き上げられ、見苦しい姿を見られてしまったので、しかたなく自ら出て行って応待した。

b 養女の結婚はまだ早すぎると思って、最初は居留守を使おうとしたが、速度の姿が絵にかいたように美しかったので、寝ていた道綱を起こして濡れ縁で接待させた。

c 養女の結婚はまだ早すぎると思って居留守を使い、しばらく美しく着飾っている速度の姿を観察していたが、その後、寝ていた道綱を起こしてだれもいないと嘘うそを言わせて帰らせた。

d 養女の結婚はまだ早すぎると思っ居留守を使い、着飾っている速度の姿を観察していたところ、強風が吹いて姿を見られたが、それでもいまいと言わせて追い返した。

e 養女の結婚はまだ早すぎると思っ居留守を使ったが、寝ていた道綱を起こしているうちに、速度の姿を女房たちが見ようとして大騒ぎになり、しかたなく女房たちに濡れ縁で接待させた。

問2 速度の最初の訪問の際、道綱はどのようにふるまったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 前日は弓の練習をしていて深夜に帰宅したため、速度の訪問の際も格子を下ろしてずっと寝たままだだったので、起きたときはもう速度は帰ったあとだった。

b 前日は弓の練習をしていて深夜に帰宅したため、速度の訪問の際もまだ寝ていたが、作者に起こされ、どうにか起きていって速度に会い、母親も養女も今は留守だと言った。

c 前日は弓の練習をしていて深夜に帰宅したため、速度の訪問の際もまだ寝ていたが、強風のために起こった大騒ぎで目を覚まし、濡れ縁で速度と会って、母親も養女も今は留守だと言った。

d 前日は弓の練習をしていて深夜に帰宅したため、速度の訪問の際もまだ寝ていたが、速度にむりやり起こされ、屋敷には母親も養女もいないといわれたので、濡れ縁で速度と語り合った。

e 前日は弓の練習をしていて深夜に帰宅したため、速度の訪問の際もまだ寝ていたが、起こされてすぐに格子を下ろし、速度が濡れ縁までしか入れないようにした。

問3 最初の訪問の際、速度はどのようにふるまったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 求婚にふさわしく美しく着飾っていたが、作者に居留守を使われたうえ、強風が吹いてせっかくの服装も乱れてしまい、濡れ縁にまで上がって勝手に座り

初めをしたが、だれにも相手にされず、がっかりして帰った。

b 求婚にふさわしく美しく着飾っていたが、作者に居留守を使われ、こっそりのぞいていた女房たちに、今日は吉日だったのに残念だと言葉をかけ、勝手に座り初めだけして帰った。

c 求婚にふさわしく美しく着飾っていたが、作者に居留守を使われたうえ、強風のために格子が下ろされていたので、対応に出てきた道綱と濡れ縁で話しただけで、今日は吉日なのに残念だと言って、勝手に座り初めをして帰った。

d 求婚にふさわしく美しく着飾っていたが、作者に居留守を使われ、むりやり濡れ縁に上って道綱と話をし、今日は吉日だと言って勝手に座り初めをしただけで、せっかくやってきたのに残念だと思いながら帰った。

e 求婚にふさわしく美しく着飾っていたが、作者に居留守を使われ、道綱とだけ会って、今日は吉日だからこのままここに居続けると言ったが、結局あきらめて、勝手に座り初めだけして帰った。

問4 速度の二度目の訪問の際、作者はどのように対応したか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 濡れ縁に灯火をともさせて外を明るくし、自分のいる奥の室内が見えないようにしたうえで廂の間に速度を入れて道綱に対応させて、自分は道綱を介して速度と間接的に形だけのあいさつを交わしただけだった。

b 濡れ縁に灯火をともさせて外を明るくし、自分のいる奥の室内が見えないようにしたうえで廂の間に速度を入れて道綱に対応させたが、速度が簾のそばまで近寄ってきたので、結婚問題についてやりとりをした。

c 来訪した速度のためを考え、濡れ縁に灯火をともさせて外を明るくし、廂の間に速度を入れて道綱に対応させ、自分は道綱を介して速度と間接的に形だけのあいさつを交わしただけだった。

d 来訪した速度のためを考え、濡れ縁に灯火をともさせて外を明るくし、廂の間に速度を入れて道綱に対応させたが、やがて速度が簾のそばまで近寄ってきたので、結婚問題について直接やりとりをした。

e 蛙の声が大きくて気味悪いので、遠度が悪い印象を持たないように濡れ縁に灯火をともさせて明るくし、廂の間に遠度を入れて道綱に correspond させ、自分も結婚問題についてやりとりをした。

問5 遠度の二度目の訪問の際、道綱はどのようにふるまったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 遠度を廂の間に迎え入れ、作者に聞こえないように小さな声で相談し、作者との間を取り持って遠度の願いをかなえようとしたが、うまくいかなかった。  
b 遠度を廂の間に迎え入れ、作者に聞こえないように小さな声で相談し、作者との間を取り持って遠度の願いをかなえようとして、作者が、この縁談を受け入れる気になるようにしむけた。

c 遠度を廂の間に迎え入れ、しばらくのあいだ作者に聞こえないような小さな声で話し合ったが、その前後には作者と遠度の間を歩き来して二人の言葉を取り次いだ。

d 遠度を廂の間に迎え入れ、しばらくのあいだ作者に聞こえないような小さな声で祭の使の準備の相談をしたが、その前後には作者と遠度の間を歩き来して二人の言葉を取り次いだ。

e 遠度を廂の間に迎え入れ、しばらくのあいだ作者に聞こえないような小さな声で祭の使の準備の相談をしたが、遠度のそのような配慮を作者に伝え、この縁談を受け入れる気持ちにさせた。

問6 二度目の訪問の際、遠度はどのようにふるまったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 道綱に用があると行って来訪し、求婚の思いを熱心に語ったが、作者にことわられ、夜がふけて蛙の声が気味悪く感じられたので、兼家に報告して許可をもらってからあらためて来ると言って帰った。

b 道綱に用があると行って来訪し、廂の間から奥の方まで入ろうとしたが、作者に拒絶され、夜がふけて蛙の声が気味悪いほど大きくなったので、兼家に報告して許可をもらってからあらためて来ると言って帰った。

- c 道綱に用があると行って来訪し、求婚の思いを熱心に語ったが、作者に「まだ早すぎる」と言ってことわれ、兼家に報告して許可をもらってからあらためて来ると言って帰った。
- d 道綱に用があると行って来訪し、求婚の思いを熱心に語ったが、今日は蛙の声が気味悪い不吉な日だと言われ、兼家に報告して許可をもらってからあらためて来ると言って帰った。
- e 道綱に用があると行って来訪し、求婚の思いを熱心に語ったが、作者に「まだ早すぎる」と言ってことわれ、道綱の祭の準備のことで兼家と相談してからまた近いうちに来ると行って帰った。

問7 二度目の訪問をした速度が帰る際、作者はどのようにふるまったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 速度が帰る様子だったので、帰る姿を見ようと思つてのぞいたが、濡れ縁の灯火が消えていたので、これでは自分の姿が見られたのではと思ひ、どうして灯火が消えていたことを言わなかったのかと道綱に対して怒つた。
- b 速度が帰る様子だったので、帰る姿を見ようと思つてのぞいたが、雨が降つたために濡れ縁の灯火が消えていて、速度の姿が暗くて見ええず、どうして灯火が消えていたことに気づかなかつたのかと残念に思つた。
- c 速度が帰る様子だったので、帰る姿を見ようと思つてのぞいたが、濡れ縁の灯火が消えていて速度の姿が暗くて見えなかつたので、どうして灯火が消えていたことを言わなかったのかと速度に言つた。
- d 速度が帰る様子だったので、帰る姿を見ようと思つてのぞいたが、濡れ縁の灯火が消えていて速度の姿が暗くて見えなかつたので、どうして灯火が消えていたことを言わなかったのかと速度の従者に言つた。
- e 速度が帰る様子だったので、帰る姿を見ようと思つてのぞいたが、濡れ縁の灯火が消えていたので、これでは自分の姿が見られたのではと思ひ、どうして灯火が消えていたことを言わなかったのかと速度の従者に言つた。

問8 二度目の来訪の後、遠度はどのようにふるまったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 作者に求婚を断られたにもかかわらず、その後何度も来訪して、道綱の祭の使の準備を手伝う一方で、求婚を受け入れてくれるよう責めたが、死んだ犬が見つかって、そのけがれのために祭も結婚も中止になったのがっかりした。
- b 作者に求婚を断られたにもかかわらず、その後何度も来訪して、道綱に仲介してくれるように責めたが、道綱は祭の使の準備のために取り合ってくれなかったのがっかりした。
- c 作者に求婚を断られたにもかかわらず、その後何度も来訪して、道綱の祭の使の準備を熱心に手伝ったが、禊の日に死んだ犬が見つかり、そのけがれのために祭は中止になったのがっかりした。
- d 作者に求婚を断られたにもかかわらず、その後何度も来訪して、求婚を受け入れてくれるよう責めたが、作者たちは道綱の祭の使の準備に追われているので、遠度は祭が終わるのをひたすら待っていた。
- e 作者に求婚を断られたにもかかわらず、その後何度も来訪して、求婚を受け入れるよう責めたが、遠度は祭が終わらないうちに死んだ犬を見つけたので、不吉だと言って求婚をやめた。

問9 傍線部④を現代語訳せよ。



次の文章は、平安時代後期の歌学書『袋草紙』（藤原清輔著）の一節で、冒頭の和泉式部の和歌をめぐる問答である。これを読んで、後の問いに答えよ。

今朝はしも思はむ人はとひてましまなきねやの上はいかにと

問ふ、「女歌にては、へつまゝとはよみてんや。ただ、へつまなきねやとよみたるは、さてはよしなうこそおぼゆれ。へつまなきこひをわれはするかな」といふことをおもひたるにや。それはいはれたるものを」。

答ふ、「これはいかに侍るべき事にか。ただ年ごろ知り給ひたるやうは、へつまゝといふ事は、男女のなからひは、これかれへつまゝといふと知りて侍りつるなり。男は女をへつまといひ、女も男をへつまといふなり。女をへつまといふべしとなに見えたるにか。これは証歌多くや侍らん。まづ伊勢物語に、へつまもこもれりわれもこもれりといへる歌は、女の歌にて、男のむさしのにこもりたりければ、野を焼かむとしければ、女のよみ侍りけるなり。へつまもこもれりとは、われが男をいへるなるべし。へわれもこもれりとは、女のことによ」。

なほ問ふ、「のたまはせたること、いはれたり。世に歌枕とて侍るめるに、多くは女をへつまといふ。もしはまた、へわかきといふ。またある本には、のたまはするやうに、女男の中をへつまといふとも書かれたるやうに覚ゆれば、いづれか一定ならむとも申しがたし。さて伊勢物語は、その歌の心を案じ侍るに、もしかきたがへたるにや。また女の男にかはりたるにや、とも思ひたまふるなり。その故はこれ、男、人のむすめをぬすみて、むさしへあてくるほどに、ぬす人なりければ、国の守にからめられにけり。女をばくさむらの中におきていければ、みちゆく人、この野はぬす人なりとて火をつけんとするに、女のみよと書かれて侍るめり。されば、ふたりながらこもれりとは見え侍らず。これ先の歌にたがひたり。また、へわかきといふは、男のことばにてこそいはれてはべらめ、女たちまちに男をわかしといはんもいはれず。また、へわかきといふ事は、妻をいふとはべめれば、へあしひきのやまへあらたまのとしなどいふやうに、へわかきつまなどよまれて侍るにこそあめれ。またこの歌を古今に、へ題、よみ人しらすと書きて、へかすがのと直されてはべめれば、これにつけてもうたがひのこれるなり。日本紀に、すさののをへいづもやへがきつまこめにとよみ、また、明日天皇の皇后に送る歌に、へあひおもふつまとよみてはべるは。また万葉には、よろづのこと、ともかうも書か

れて侍るものなれば、さだめがたう侍れど、妻と書きてつまとよみ、また婦をもつまとこそはよみて侍るめれ。されば\*<sub>7</sub>字書に、「妾の義なり」とこそ釈せられてはべれ。さだまらずといひながら、さすがに春の字を秋とよみ、雪を霞とはよまれはべらぬものをば。所の名にも、朝妻と吾妻をばつまとよまつとこそはいひつたへて侍れ。したしきをつまとよまば、夫の字、父母と兄弟の字をも、つまとよまれて侍らんや。ただし、式部はなかくころの上手に侍れば、男をつまとよみて侍れば、ゆゑ侍らん。さればひとへに難ずべきに侍らず。ただ証歌を承りて、心のうたがひをたはせと思ひ給ふるなり」。

\*<sub>8</sub>予これを案ずるに、万葉集に、松浦佐夜姫を詠ずる歌にいはいはく、

とほつひとまつらさよひめつまこひにひれふりしよりおへるやまのな

かくの如きは男をもつまといふか。またいはく、

たなはたのつままつよひの秋風にわれさへあやな人ぞこひしき

かく侍れば、男をもつまといふにこそ。

(『袋草紙』による)

#### 注

\* 1 つまなきこひをわれはするかな||和歌の下の句と思われるが、出典は未詳。

\* 2 証歌||和歌をよむときの根拠としてひかれるべき歌。

\* 3 つまもこもれりわれもこもれりといへる歌||上の句は、武蔵野は今日はな焼きそわかさの。

\* 4 歌枕||和歌によくよまれる地名や歌語を集めて解説したもの。

\* 5 日本紀||日本書紀のこと。 \* 6 明日天皇||日本書紀にある「明日、天皇」を誤読したもの。

\* 7 字書||辞書のこと。 \* 8 予||著者である藤原清輔のこと。

問1 最初の質問において、冒頭の和歌のどういふ点が問題にされているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 作者が女性であるという立場から、「妻のいない寝室」とよむのはいわれがないように思われる。もしこの「つま」のことを、男女を問わず、「恋人もいないのに恋をしている」という歌を意識しているというのなら、それなりの理由があるのだが、それでは真実の恋の歌とはいえないのではないか、という疑問が述べられている。

b 作者が女性であるという立場から、「妻のいない寝室」とよむのは妥当なこととは思われない。本来「つま」とは女性に限定されるべきものなので、もし作者が男性の立場に身を置き替えてよんだとするなら、それなりの理由があるのだが、そのような理解するのは無理があるのではないか、という疑問が述べられている。

c 作者が女性であるという立場から、「妻のいない寝室」とよむのはいわれがないように思われる。もしこの「つま」のことを、男女を問わず、「恋人もいないのに恋をしている」という歌を意識しているというのなら、それなりの理由があるのだが、女性歌人がよんだ歌において、「つま」とよむのはほんとうに妥当かどうか、という疑問が述べられている。

d 作者が女性であるという立場から、「妻のいない寝室」とよむのは妥当なこととは思われない。本来「つま」とは女性に限定されるべきものなので、この和歌の作者を女性とみるのは誤りで、男性の作であるとみるべきであり、そうならばそれなりに理由がつかうのではないか、という疑問が述べられている。

e 作者が女性であるという立場から、「妻のいない寝室」とよむのはいわれがないように思われる。もしこの「つま」のことを、男女を問わず、「恋人もいないのに恋をしている」という歌を意識しているというのなら、それなりの理由があるのだが、まるで妻がいなくてよむというなら、それはおかしいのではないか、という疑問が述べられている。

問2 最初の質問に対する答えはどのようなものだったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a そもそもこの質問の趣旨がよくわからないのだが、私がただずっと前から知っていたことは、男女の間では、双方どちらからでも「つま」ということであり、女性についてだけ「つま」というべきだという説が何に出ているのか根拠がない、という答えだった。

b そんなわかり切ったことをどうして質問されるのがよくわからないのだが、私がただずっと前から知っていたことは、男女の間ではとりあえずお互いに

「つま」といつてもよいということであり、男からも、女からも「つま」といべきだという説が何に出ているのか根拠がない、という答えだった。

c 質問の趣旨をどのようにとらえてよいのかがわからないのだが、私がただずつと前から知っていたことは、男女の間では、双方どちらからでも「つま」ということだったが、男性についても女性と同じように「つま」といべきだという説が何に出ているのかはよく知らない、という答えだった。

d これは自分でも疑問に思っていたことなのだが、私がただずつと前から知っていたことは、男女の間ではあれこれとさまざまな言い方があるが、男女双方で言い方が混乱してはいけないので、女性を「つま」というよりもむしろ男性を「つま」といべきだろう、という答えだった。

e これをどう理解すればよいのかいっしょに考えたいのだが、私がただずつと前から知っていたことは、男女の間を取り持つ場合に、男女どちらについても「つま」というのが好都合だったということ、女性のみを「つま」というのはどういう理由か見当がつかない、という答えだった。

問3 最初の質問に対する答えの中で、伊勢物語の「武蔵野は今日はな焼きそわかくさつまもこもれりわれもこもれり」という和歌は、どのように説明されているか。

最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 男が女のことをよんだ歌であって、自分が武蔵野に隠れていたところ、その野を焼いてしまうということになって、「つま」である女もわたしも二人ともこもっているから、焼かないでくれと訴えた歌である、と説明されている。

b 男が女のことをよんだ歌であって、「つま」である女が武蔵野に隠れていたところ、その野を焼いてしまうということになって、それならいっしょにこもって、ともに焼かれてしましましょうとよんだ歌である、と説明されている。

c 武蔵野にこもっている男女が焼かれそうになったとき、互いの身の上を気づかって、双方から「つま」と呼びあいながら、どうか焼かないでくださいと懇願している歌である、と説明されている。

d 女が男のことをよんだ歌であって、男が武蔵野に隠れていたところ、その野を焼いてしまうということになって、「つま」である男もわたしも二人ともこもっているから、焼かないでくれと訴えた歌である、と説明されている。

e 女が男のことをよんだ歌であって、武蔵野に隠れている男のことを気づかって、その野を焼くというのなら、「つま」であるわたしがこもって身代わりに

なりたいた願った歌である、と説明されている。

問4 二度目の質問において、「武蔵野は今日はな焼きそわかくさのつまもこもれりわれもこもれり」という和歌のどのような点が問題にされているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 男性が人のむすめを盗んで武蔵野まで連れて来たところ、盗人として捕えられた。その際、女性を草むらに置いて去って行ったということになると、盗人ととがめられたのは女性ではなく男性のほうなので、女性のよんだ歌とするのは間違っているという点が問題にされている。

b 男性が人のむすめを盗んで武蔵野まで連れて来たところ、盗人として捕えられた。その際、女性を草むらに置いて去って行ったとあるのだから、捕えられたのは男性ではなく、女性のほうで、そこで男性と女性の取り違えが生じているという点が問題にされている。

c 男性が人のむすめを盗んで武蔵野まで連れて来たところ、盗人として捕えられたとされるが、和歌では「つまもこもれりわれもこもれり」とあるので、実際に捕えられたのは男性と女性の二人だったということになって、説明と食い違うという点が問題にされている。

d 男性が人のむすめを盗んで武蔵野まで連れて来たところ、盗人として捕えられたとされるが、じつは二人とも草むらに隠れて無事に逃げられたのであり、それを、なぜ男性の歌として「つまもこもれりわれもこもれり」とよんだのかという点が問題にされている。

e 男性が人のむすめを盗んで武蔵野まで連れて来たところ、盗人として捕えられた。その際、女性を草むらに置いて去って行ったとあるのだから、その野が焼かれかけたときに女性がよんだのなら、「つまもこもれりわれもこもれり」とはいえないはずだという点が問題にされている。

問5 「わかくさの」という語について、どのような主張が述べられているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 「わかくさの」という語は、「あしひきのやま」などと同様に、「一般的には「わかくさのつま」と「つま」にかかる枕詞ではあるが、必ずしも妻のことをよむとは限らず、女性から男性に呼びかける歌に用いてもさしつかえない。

b 「わかくさの」という語は、「あしひきのやま」などと同様に、「わかくさのつま」と「つま」にかかる枕詞であり、女性のよむ和歌の言葉として最適で

あるが、男性から女性を「わかくさの」と呼びかけるのはおかしい。

c 「わかくさの」という語は、「あしひきのやま」などと同様に、「わかくさのつま」と「つま」にかかる枕詞であり、男性が妻のことをよむのに用いるのであって、女性が男性のことを「わかくさの」と歌うことは道理に合わない。

d 「わかくさの」という語は、「あしひきのやま」などと同様に、「わかくさのつま」と「つま」にかかる枕詞であるので、これを実際の「若草」として用いるのはおかしい。

e 「わかくさの」という語は、「あしひきのやま」などと同様に、「わかくさのつま」と「つま」にかかる枕詞であり、妻のことをよむものであるが、女性が男性のことを唐突に「若い」とよむのはかなりあやしい。

問6 「つま」という語の表記について、どのように説明されているか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 万葉集ではさまざまな表記があつて一定しないが、それでも「妻」という文字があれば「つま」とよむことは明白であり、ときには親しい間柄を「つま」ということがあつても、「朝妻」や「吾妻」というように明確に「妻」の文字を入れて表記するほうがよい。

b 万葉集ではさまざまな表記があつて一定しないが、それでも「妻」という文字があれば「つま」とよむことは明白であり、親しい間柄であっても「夫」や「父母」などと書いて「つま」とよまれることはないので、男性から女性に向けて「つま」というのがふつうである。

c 万葉集ではさまざまな表記があつて一定せず、「妻」という文字があつても必ずしも「つま」とよむとはかぎらないから、親しい間柄のことを「夫」や「父母」などと書いて「つま」とよまれることがあつたとしても、とりたてて不思議なこととはいえない。

d 万葉集ではさまざまな表記があつて一定しないが、それでも「妻」という文字があれば「つま」とよむことは明白であり、一方、きわめて限定的であるが、とくに「夫」や「父母」といった親しい間柄の場合には、これを「つま」とよむこともまた、明白である。

e 万葉集では「妻」という文字以外で「つま」とはよむことがないのは、「春」の文字以外で「はる」とよむことが決まると同様であつて、従つて男女双方が親しい仲だということを「つま」ということにはならず、やはり男性から女性に向けていう場合に限定されることになる。

問7 「たなばたのつまつよひの秋風にわれさへあやな人ぞこひしき」の和歌は、拾遺和歌集では、初句が「ひこぼしの」となっている。初句の違いによって生じる意味について、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 「たなばたの」という初句の場合、七夕の祭のとき、この日は年にただ一回だけ彦星と織姫が出会える機会であるという歌になって、男女双方から互いに「つま」ということになるのに対して、初句が「ひこぼしの」だと、男性である彦星が女性の織姫を待つ歌になり、「つま」は一方的に女性をさすことになる。

b 「たなばたの」という初句の場合、「秋風」が「飽きる」の掛け詞の機能をもち、織姫が彦星に飽きられているにもかかわらず、むなしく待っていることになって、「つま」は男性を意味することになるのに対して、初句が「ひこぼしの」だと、男性である彦星が女性の織姫を待つことになって掛け詞にはならない。

c 「たなばたの」という初句の場合、七夕の祭のとき、彦星が織姫のことを恋しく思うように、男性作者である自分も織姫のことが恋しく思われるという歌になるのに対して、初句が「ひこぼしの」だと、男性である彦星が女性の織姫を待つことになり、彦星と同じ男性である自分も女性の「つま」が恋しく思われるという歌になる。

d 「たなばたの」という初句の場合、女性である織姫が「つま」である彦星を恋しく待っていることになり、「つま」は男性を意味することになるのに対して、初句が「ひこぼしの」だと、男性である彦星が女性の織姫を待つことになり、結局「つま」は女性という、まったく逆のことになる。

e 「たなばたの」という初句の場合、七夕の祭の日になってもやってこない彦星のことを、「つま」である織姫がただひたすら待つことになって、「つま」は女性を意味することになるのに対して、初句が「ひこぼしの」だと、「つま」である彦星を織姫がただひたすら待つことになり、「つま」は男性という、まったく逆のことになる。

問8 筆者は「つま」という語の使い方について、どのように考えているのか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 万葉集でも松浦佐夜姫がよんだ和歌で、「つまごひ」と男性を恋い慕うよみ方をしているのも、男性のことを「つま」と指している。また「たなばた」の和歌でも、男性にあたる彦星を「つま」とよんでいる。このように考えれば、男性のことを「つま」とよむのが正しく、女性だとするのはむしろ間違っていた、と筆者は考えている。

b 万葉集では松浦佐夜姫のことを「つま」とよみ、「たなばた」の和歌では男性にあたる彦星のことを「つま」とよんでいるところから、奈良時代から平安時代にかけてよみ方が変化していった。つまり、古くは男女ともに「つま」とよんでいたのが、和泉式部の時代になって男性のみを「つま」というようになった、と筆者は考えている。

c 万葉集では松浦佐夜姫のことをよんだ和歌で、「つまごひ」と女性を恋い慕うよみ方をし、また「たなばた」の和歌では男性にあたる彦星が女性のことを「つま」といつている。従って「つま」を男性とするか女性とするか、今のところ結論は出せない、と筆者は考えている。

d 万葉集では松浦佐夜姫がよんだ和歌で、「さよひめつまごひに」と男性のことを「つま」といつているかと思えば、「たなばた」の和歌では「たなばたのつま」と彦星・織姫双方から互いに「つま」とよんでいるとする。このような例から、古くはむしろ男性のことを「つま」といつていたのが、次第にどちらからもいえるようになった、と筆者は考えている。

e 万葉集の松浦佐夜姫の立場にたつてよんだ和歌で、「つまごひ」と男性を恋い慕うよみ方をしているのも、男性のことを「つま」といつており、さらに、「たなばた」の和歌では女性である織姫から男性である彦星のことを「つま」とよんでいる。このように考えれば、女性だけでなく、男性のことを「つま」とよんでも差支えない、と筆者は考えている。

問9 傍線部④を現代語訳せよ。



光源氏はふとしたことから知り合った、素性も知らない夕顔という女性を、とある邸やしきに連れ出したが、そこで夕顔は急死してしまう。それが原因となつて、光源氏はしばらく病に臥ふせていたが、以下の文章は、その病もようやく癒いえた頃、夕顔に仕えていた女房の右近を光源氏が呼び出し、語り合っている場面である。これを読んで後の問いに答えよ。

九月二十日のほどにぞ、おこたりはてたまひて、いといたく面おもやせたまへれど、なかなかいみじくなまめかしくて、ながめがちにねをのみ泣きたまふ。見たてまつり  
とがむる人もありて、「御物怪ものけなめり」などいふもあり。

右近を召し出でて、のどやかなる夕暮に物語などしたまひて、「なほいとなむあやしき。などでその人と知られじとは、隠いたまへりしぞ。まことに\*<sub>1</sub>海人の子なりとも、さばかりに思ふを知らで隔てたまひしかばなむ、つらかりし」とのたまへば、「などでか深く隠し聞こえたまふことは待らむ。いつのほどにてかは、何ならぬ御名のを聞こえたまはむ。はじめよりあやしうおほえぬ様なりし御ことなれば、「うつつともおほえずなむある」とのたまひて、御名隠しも、さばかりにこそは、と聞こえたまひながら、「なほざりにこそ紛らはしたまふらめ」となむ、うきことにおぼしたりし」と聞こゆれば、「あいなかりける心くらべどもかな。われはしか隔つる心もなかりき。ただ、かやうに人に許されぬふるまひをなむ、まだならはぬことなる。内裏うちにいさめのたまはするをはじめ、つつむこと多かる身にて、はかなく人にはぶれ言をいふも、ところせう、取りなしうるさき身のあり様になむあるを、はかなかりし夕べより、あやしう心にかかりて、あながちに見たてまつりしも、「かかるべき契りこそはものしたまひけめ」と思ふも、あはれになむ、またうち返しつらうおぼゆる。かう長かるまじきにては、など、さしも心にしみて、あはれとおぼえたまひけむ。なほ詳しく語れ。今は何事を隠すべきぞ。\*<sub>2</sub>七日七日に仏書かせても、たがためとか、心の内にも思はむ」とのたまへば、「何か、隔て聞こえさせ侍らむ。みづから忍び過ぐしたまひしことを、「亡き御うしろに、口さがなくやは」と思ひたまふるばかりになむ。親たちははや失せたまひにき。\*<sub>3</sub>三位の中將となむ聞こえし。いとらうたきものに思ひ聞こえたまへりしかど、わが身のほどの心もとなさをおぼすめりしに、命さへ堪へたまはずなりにし後、はかなきものたよりにて、\*<sub>4</sub>頭の中將なむ、まだ少將にものしたまひし時、見そめたてまつらせたまひて、三年ばかりは、志あるさまに通ひたまひしを、去年こぞの秋あきごろ、かの\*<sub>5</sub>右の大殿より、いと恐ろし

きことの聞こえ参まで来しに、ものおぢをわりなくしたまひし御心に、せむ方なくおほしおちて、西の京に、御乳母めのと住み侍る所になむ、はひ隠れたまへりし。それもいと見苦しきに住みわびたまひて、山里にうつろひなむとおほしたりしを、今年よりは塞ふたがりける方に侍りければ、たがふとて、あやしき所にもしたまひしを、「見あらはされたてまつりぬること」とおほし嘆くめりし。世の人に似ずものづつみをしたまひて、人にも思ふ気色を見えむを、はづかしきものにしたまひて、つれなくのみもてなして、御覽せられたてまつりたまふめりしか」と語り出づるに、「さればよ」とおほしあはせて、いよいよあはれまさりぬ。

「幼き人まどはしたり」と、中將のうれへしは、さる人や」と問ひたまふ。「しか。一昨年の春ぞものしたまへりし。女にていとらうたげになむ」と語る。「さていづこにぞ。人にさとは知らせで、われに得させよ。あとはかなく、いみじと思ふ御形見に、いとうれしかるべくなむ」とたまふ。「かの中將にも伝ふべけれど、いふかひなきか」と負ひなむ。とさまかうさまにつけて、はぐくまむに答とがあるまじきを、そのあらむ乳母などにも、ことさまにいひなしてものせよかし」など語らひたまふ。「さらばいとうれしくなむ侍るべき。かの西の京にて生ひ出でたまはむは、心苦しくなむ。はかばかしく扱ふ人なしとて、かしこになむ」と聞こゆ。

(『源氏物語』「夕顔」による)

注

- \* 1 海人あまの子こ|| 「白波の寄する渚なみに世を過ぐす海人の子なれば宿も定めず」の歌による表現で、宿も定めぬ卑しい身分であることを意味する。本文の前の部分で夕顔は光源氏に名前を聞かれて「海人の子なれば」と答えた。
- \* 2 七日七日に仏書かせても|| 七日目ごとの追善に仏の名を書かせても。
- \* 3 三位の中將|| 夕顔の父親は、位が三位で官が近衛府の中將であった。
- \* 4 頭の中將|| 左大臣の息子で、光源氏の友人。ある時期、藏人頭で、近衛府の中將であった。
- \* 5 右の大殿|| 頭の中將の正室である四の君の父親。
- \* 6 聞こえ参で来し|| 「聞こえ参うで来し」のつまった形。

問1 病み上がりの光源氏は、どのような様子であったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

問2

光源氏は右近に向かって、どのような恨み言を述べたのか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 光源氏はたいそうひどくやつれていたが、かえってそれが色気もあり、ともすればぼんやりと外をながめては、声をしのばせて泣いてばかりいた。
  - b 光源氏はたいそうひどくやつれていたが、見ようによってはそれなりに色気もあり、ともすればぼんやりと外をながめては、声をあげて泣いてばかりいた。
  - c 光源氏はたいそうひどくやつれていたが、見ようによってはそれなりに美しく、ともすればぼんやりと外をながめては、泣いたり笑ったりするのであった。
  - d 光源氏はたいそうひどくやつれていたが、結構すばらしく美しく、ともすればぼんやりと外をながめては、すすり泣きばかりしていた。
  - e 光源氏はたいそうひどくやつれていたが、かえってそれがすばらしく美しく、ともすればぼんやりと外をながめては、声をあげて泣いてばかりいた。
- a やはりどうもわからない。どうして、夕顔は自分のことを、だれそれだと知られまいと、お隠しなさったりしたのだね。ほんとうに身分の低い人であつても、あれほど私が夕顔をいとしく思っているのも無視して、お隠しなさったのは、つらいことであつた。
- b やはりどうもおかしい。どうして、あなたは夕顔のことを、だれそれだと知られまいと、お隠しなさったりしたのだね。ほんとうに身分の低い人であつても、あれほど夕顔が私をいとしく思っているのも無視して、夕顔の思いをわたしにお隠しなさったのは、つらいことであつた。
- c やはりどう考えてもわからない。どうして、あなたは夕顔のことを、だれそれだと知られまいと、お隠しなさったりしたのだね。ほんとうに身分の低い人であつても、あれほど私が夕顔のことで悩んだりしているのも無視して、とほけておられたのは、つらいことであつた。
- d やはりどうも不本意だ。どうして、夕顔は自分のことを、だれそれだと知られまいと、お隠しなさったりしたのだね。ほんとうに身分の低い人であつても、あれほど夕顔の将来を私が心配しているのも無視して、よそよそしくなさったのは、つらいことであつた。
- e やはりどうも奇妙だ。どうして、夕顔は右近のことを、だれそれだと知られまいと、お隠しなさったりしたのだね。ほんとうに身分の低い人であつても、あれほど夕顔のそばにいた右近の将来を私が心配しているのも無視して、知らないふりをなさったのは、つらいことであつた。

問3 光源氏が夕顔に対して素性を明かさなかったことを、夕顔はどのように思っていたのか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 光源氏が素性を明かさないので、しかるべき御身分の方を妻としているゆえのことであろうとは思うものの、夕顔に対して光源氏がいい加減に思っているからこそ、光源氏は曖昧あいまいにしているであろうと、夕顔はつらく思っていた。

b 光源氏が素性を明かさないので、しかるべき御身分の方ゆえのことであろうとは思うものの、光源氏に対して夕顔が冷淡であるからこそ、光源氏は曖昧あいまいにしているであろうと、夕顔は光源氏に対して同情の念をいだいていた。

c 光源氏が素性を明かさないので、しかるべき御身分の方ゆえのことであろうとは思うものの、光源氏に対して夕顔が冷淡であるからこそ、光源氏は曖昧あいまいにしているであろうと、夕顔は反省の念をいだいていた。

d 光源氏が素性を明かさないので、しかるべき御身分の方ゆえのことであろうとは思うものの、夕顔に対して光源氏がいい加減に思っているからこそ、光源氏は曖昧あいまいにしているであろうと、夕顔はつらく思っていた。

e 光源氏が素性を明かさないので、それほど身分が高い方ではないゆえのことであろうとは思うものの、夕顔に対して光源氏がいい加減に思っているからこそ、光源氏は曖昧あいまいにしているであろうと、夕顔はつらく思っていた。

問4 夕顔が光源氏に対して素性を明かさなかった理由を右近から聞いた光源氏は、自分をどのような立場におかれた人と右近に説明したのか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 帝からおしかりを頂戴ちやうだいするのを始めとして、気兼ねの多い立場で、ちょっとした冗談を人にいっても、だれも相手にしてくれない、さびしい身分の者である、と説明した。

b 帝からおしかりを頂戴するのを始めとして、隠しごとの多い立場で、ちょっとした冗談を人にいいたくても、大袈裟おおげさにとられかねない、やっかいな身分の者である、と説明した。

- c 帝からおしかりを頂戴するのを始めとして、隠しごとの多い立場で、ちょっとした冗談を人にいっても、大袈裟にとられかねない、立場の弱い身分の者である、と説明した。
- d 帝からおしかりを頂戴するのを始めとして、気兼ねの多い立場で、ちょっとした冗談を人にいたくても、大袈裟にとられかねない、つらい身分の者である、と説明した。
- e 帝からおしかりを頂戴するのを始めとして、気兼ねの多い立場で、ちょっとした冗談を人にいっても、大袈裟にとられかねない、人のうわさがうるさい身分の者である、と説明した。

問5 右近は、夕顔の父親を、どのような人物であったと語ったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 父親は、三位の中将と呼ばれた方で、夕顔のことをたいそうかわいがっていらっしやったのですが、夕顔の結婚問題を心配していらっしやるうちに、寿命までも思うにまかせず、亡くなってしまいました、と語った。
- b 父親は、三位の中将と呼ばれた方で、夕顔のことをたいそう不憫かひしに思っかっていらっしやったのですが、自分の体調を気にしていらっしやるうちに、そのまま寿命までも思うにまかせず、亡くなってしまいました、と語った。
- c 父親は、三位の中将と呼ばれた方で、夕顔のことをたいそうかわいがっていらっしやったのですが、自分の不遇を嘆いていらっしやったようで、寿命までも思うにまかせず、亡くなってしまいました、と語った。
- d 父親は、三位の中将と呼ばれた方で、夕顔のことをたいそうかわいがっていらっしやったのですが、自分の将来を心配していらっしやるうちに、そのまま寿命までも思うにまかせず、亡くなってしまいました、と語った。
- e 父親は、三位の中将と呼ばれた方で、夕顔のことをたいそう不憫に思っかっていらっしやったのですが、夕顔の病気を心配していらっしやったようで、ご自分の寿命までも思うにまかせず、亡くなってしまいました、と語った。

問6 夕顔は、頭の中將とはどのようないきさつで別れることになったのか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 頭の中將の本妻である右大臣の娘の家から、たいそう恐ろしいことをいってきて、夕顔は大変臆病な性分だったので、どうしようもなくおびえ、西の京の乳母が住んでいる所に身を隠すことになった。

b 頭の中將の本妻である右大臣の娘の家から、たいそう恐ろしいことをいってきて、夕顔は世間の評判を気にするあまり、不安におちいって、西の京の乳母が住んでいる所に身を隠すことになった。

c 頭の中將の本妻である右大臣の娘の家から、たいそう恐ろしいことをいってきて、その権幕があまりにもひどいので、さすがに夕顔もすっかりおびえきつてしまい、西の京の乳母が住んでいる所に身を隠すことになった。

d 頭の中將の本妻である右大臣の娘の家から、たいそう恐ろしいことをいってきて、夕顔の娘が大変臆病な性分だったので、わけもなくおびえ、西の京の乳母が住んでいる所に身を隠すことになった。

e 頭の中將の本妻である右大臣の娘の家から、たいそう恐ろしいことをいってきて、夕顔は本来ものおじなどしない方だが、この時ばかりは不安にかられ、西の京の乳母が住んでいる所に身を隠すことになった。

問7 夕顔は、どのようないきさつで光源氏に見出されることになったのか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 西の京の乳母の家もむさくるしいあまりに、山里に移ろうと思っていたが、今年から悪い方角に当たるといっているので、方違えのために見苦しい所にいたのを、光源氏に見出されることになった。

b 西の京の乳母の家もむさくるしいあまりに、山里に移ろうと思っていたが、今年から道がふさがってしまっているで、そこへ移れないでいるあいだに、光源氏に見出されることになった。

c 西の京の乳母の家もむさくるしいあまりに、山里に移ろうと思っていたが、今年から先客が住んでいるといっているので、別の家に仮住まいしているところを、光源氏に見出されることになった。

d 西の京の乳母の家もむさくるしいあまりに、山里に移ろうと思っていたが、今年よりは来年の方が幸運だということで、ぐずぐず日を送っているあいだに、光源氏に見出されることになった。

e 西の京の乳母の家もむさくるしいあまりに、山里に移ろうと思っていたが、今年に入って生活が苦しくなつて、ちょっとした行き違いから、見苦しい家に移ることになり、そこで光源氏に見出されることになった。

問8 亡き夕顔に娘がいたことを知った光源氏は、右近にむかって何といったのか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 私の妻である葵上にはそうと知らせないで、その子を私に預けてくれ。死んでひどく悲しいと思っている私の母上の形見と思うと、たいそううれしいことだと、光源氏はいった。

b 頭の中将にはそうと知らせないで、その子の行方を私にだけ教えてくれ。死んでひどく悲しいと思っている夕顔の形見と思うと、たいそううれしいことだと、光源氏はいった。

c 人にはそうと知らせないで、その子を私に預けてくれ。死んでひどく悲しいと思っている夕顔の形見と思うと、たいそううれしいことだと、光源氏はいった。

d 父の帝にはそうと知らせないで、その子を私に預けてくれ。死んでひどく悲しいと思っている母上の形見と思うと、たいそううれしいことだと、光源氏はいった。

e 夕顔の乳母たちにはそうと知らせないで、その子の行方を私にだけ教えてくれ。死んでひどく悲しいと思っている夕顔の形見と思うと、たいそううれしいことだと、光源氏はいった。

問9 傍線部(A)を現代語訳せよ。

次の文章は、保元元年(一一五六年)、政治権力を掌握していた鳥羽院(本文中には「法皇」「二院」「旧院」とも)が崩御した直後を記した『保元物語』の一節である。これを読んで後の問いに答えよ。

同じき(保元元年)七月二日、法皇つひに隠れさせたまひけり。そののち、鳥羽院とぞ申しける。御歳五十四、いまだ六十にだにもならせたまはねば、惜しかるべき御命のほどなれども、\*<sub>1</sub>有為無常のさかひ、老いたるはとどまり、若きは先立つならひなれば、はじめて驚くべきにはあらねども、千年の宝算をも保たせたまへかしと惜しまたてまつる。一天くれて、月日の光をうしなへるがごとし。万民なげき、父母の別れにあへるがごとし。心なき草木までも、なほ愁へたる色あり。いはんや、としごろ近くさぶらひ慣れまゐらせし人びと、\*<sub>2</sub>近習の男女の心中、いかばかりなりけん。錦の帳を隔てざりし\*<sub>3</sub>国母も官女も、御姿を見たてまつらぬ、玉のみぎりに近づき\*<sub>4</sub>月卿雲客も、御ことばを聞かぬ。なかにも、\*<sub>5</sub>美福門院の御なげき、たぐひすくなくこそうけたまはりしか。玉のすだれをかかけてかけて、竜顔に向かひたてまつり、金の床を払つて、玉体にならびたてまつりたまふ、床の上には、ふるき御ふすまむなく残り、御枕の下には、昔をこふる御涙のつもり、今は灯の下には影ともなふ御事もましまさねば、ただ籬にすだく虫の音もそぞろに恨めし。ただ、夜もながう、日もながくぞおぼしめしける。さんぬる年、\*<sub>6</sub>近衛院の隠れさせたまひしことをこそ、あさましと思ひしに、今年また、法皇うせさせたまふぞ申すばかりなき。両院ともに、\*<sub>7</sub>千秋万歳とこそおぼしめしけれども、有為の理、高きも下も異なることなし。かかる御なげきのなかにも、\*<sub>8</sub>新院の御心中おぼつかなしとぞ思ひあへる。

これによつて、\*<sub>9</sub>禁中もさわがしく、\*<sub>10</sub>院中もささやく事のみぞありける。「一院かくれさせたまひなば、\*<sub>11</sub>主上と新院との御な心よくまします。世はただはあらじ」と、人さまさまに申しけるに、二日に隠れさせたまひぬるに、三日のまたどう、新院方の武士、\*<sub>12</sub>東三条に籠もりあて、夜は集まりつつ、謀反のことをはかりけり。昼は木の上、山の上にして、当時の内裏高松殿をうかがひみる由を、主上聞こしめして、下野守義朝を召し仰せられて、東三条の留守に候ひける少監物藤原光真ならびに兵士兩三人召し取りて、この子細を召し問はる。一院御\*<sub>13</sub>不予の間より、謀反のきこえあり。このほどまた、軍兵多く東西より都に入り集ふなり。ならびに兵具を馬に負はせ、車に積み、入りつどひ、東三条にも、武士、夜は集まり、昼はかくるとぞきこえぬ。新院、日ごろおぼしめしけるは、「昔よりし



て、位をうけつぎ、父の譲りを得ることは、\*<sub>14</sub>嫡庶によらず、器量をもえらび、外戚がいせきの安否をも尋ねらるるに、これは当腹ちようあひの寵愛といふばかりにて、近衛院に位を押し取られ、恨みふかくして過ぐししほどに、近衛院かくれたまひぬるうへは、\*<sub>15</sub>重仁親王をこそ帝位に備へらるべきに、思ひのほか、また四宮にこされぬこと口惜し」とおぼしめされける。御心のゆかせたまふかたとは、近習の人びとかがせんと、つねには御談合ありき。

宇治の左大臣頼長と申す人おはしけり。\*<sub>16</sub>知足院の禅定殿下の三男にておはします。入道殿、御子達の御なかにことに御いとほしくおぼしめしける御子なり。人柄も左右なき人にておはします。和漢の礼儀を調べ、自他の記録にくらからず。文才世に勝れ、諸道に浅深を探る。朝家の重宝、\*<sub>17</sub>撰録の器量なり。されば、御兄の\*<sub>18</sub>法性寺殿の詩歌にたくみにて、御手跡もつくしくあそばされけるをそしり申させたまふと覚えて、「詩歌は閑中のもてあそ翫びなり。朝儀の要事にあらず。手跡はまた一旦の興なり。賢人かならずこれにいとまをかかず」とて、我が身は宗むねと全経をまなび、仁義礼智信をたたくし、賞罰勲功を分かちたまふ。政務きりとほしにして、万人の\*<sub>19</sub>紕繆をぞたさる。かかりければ悪左大臣殿とぞ申しける。かやうに恐れたまつる。しかれども、真実御心むきは極めてたたくし、うつくしくぞおはします。

\*<sub>20</sub>舍人・牛飼なども、御勘当いよを蒙かうぶるとき、<sup>④</sup>道理を申しければ、こまごまにきこしめして、罪なければ御後悔ありき。また、禁中の陣頭にて公事行くじはせたまふとき、\*<sub>21</sub>外記・官史等を諫めさせたまふに、あやまたぬ次第を弁じ申せば、我が御ひがごととおぼしめすときは、たちまちに恐れさせたまひて御\*<sub>22</sub>怠状を書きて、彼らにたまはる。恐れをなしてたまはらざるとき、「ただたまはれ。\*<sub>23</sub>一の上の怠状を地下に伝へんこと、家の面目にあらずや」と仰せられければ、かしこまつてたまはるとかや。まことに是非明察にして、善悪無二におはしましければ、世もつてこれを賞したてまつる。父の禅定殿下も大事の人に思ひたてまつりき。久安六年九月二十六日、\*<sub>24</sub>氏の長者に補し、同じき七年正月十九日、\*<sub>25</sub>万機の内覧の宣旨をかうぶらせたまひて、天下のことを知ろしめす。摂政関白を差し置きて、\*<sub>26</sub>三公たる例、これぞはじめなる。されば、人傾け申しけれども、父の御計らひのうへは、この大臣とて世を知ろしめすべきにもあらねば、君も臣もゆるしたてまつらる。

法性寺殿は、関白の御名ばかりにて、なにごとにもいろはせたまはず、よその人にてぞおはしましける。かくのみ関白のしづませたまふこそ鬱憤うつぶん深くして、「\*<sub>27</sub>当今位につきたまひて、世\*<sub>28</sub>淳素にかへるべくは、関白の辞表をさまるか、内覧の氏の長者、関白につくべきか、両様\*<sub>29</sub>天裁にあり」と、しきりに申させたまふ。このゆゑに、関白殿と左大臣殿と御兄弟のうへ、父子の御契約ありて、礼儀深くおはしましけれども、後には御仲不快にぞきこえし。

この左大臣殿のおぼしめしけるは、新院の一宮、重仁親王を位につけたてまつりて、世を新院にしらせまゐらせて、わがままに天下のことをとりおこなふべしとおぼしめすともいへり。左大臣殿、新院の御かたにて、よもすがら申させたまふぞいかなる御はからひかあるらんとおぼつかなし。

注

- \* 1 有為無常うゐむじやう⇨この世に起きるべくして起きた事象は、つねに移り変わるということ。
- \* 2 近習きんじゆ⇨主君の側近く仕えること。
- \* 3 国母こくも⇨天皇の母親。
- \* 4 月卿げつけい雲客うんかく⇨公卿と殿上人をいう。
- \* 5 美福門院びふくもんゐん⇨鳥羽院の後。近衛院の母。
- \* 6 近衛院このゑのゐん⇨鳥羽院の皇子。若くして亡くなっており、子どもはいなかった。
- \* 7 千秋万歳せんしゆばんざい⇨命が千年も万年も続くとえ。
- \* 8 新院しんゐん⇨崇徳院のこと。鳥羽院の第一皇子、母は待賢門院であり、後白河天皇は同腹の弟にあたる。
- \* 9 禁中きんちゆう⇨宮中。ここでは、後白河天皇の在所をいう。
- \* 10 院中ゐんちゆう⇨崇徳院の在所をいう。
- \* 11 主上しゆじやう⇨天皇のこと。ここでは後白河天皇をいう。なお本文中には、後白河天皇を「四宮（鳥羽院の第四皇子）」と呼称する箇所もある。
- \* 12 東三条とうさんじょう⇨東三条殿のこと。藤原摂関家の「氏の長者（氏の首長のこと）」に伝領された邸宅。
- \* 13 不ふ予よ⇨帝王（天皇や上皇）の病氣。
- \* 14 嫡庶ちやくせによらず⇨嫡子か庶子かにかかわらず。
- \* 15 重しげ仁ひと親しの王のう⇨崇徳院の第一皇子。
- \* 16 知足院ちそくゐんの禅定殿ぜんぢやうでん下か⇨藤原忠実をいう。なお本文中には「入道殿」と呼称する箇所もある。
- \* 17 撰せん録ろく⇨本来は撰政の唐名。のちに関白をもさすようになった。

\* 18 法性寺殿ほつしやうじどの 藤原忠通をいう。

\* 19 糺繆ひびう 誤り。

\* 20 舍人とねり 皇族や貴族に仕え、警備や雑用などに従事する者。公的に下級官人として登用されていた者ばかりでなく、身分の低い者が貴族に私的に舍人として仕える場合もあった。ここでは後者。

\* 21 外記げき・官史等 太政官に属する役人たち。

\* 22 怠状 過失を犯した者がそれを認めて差し出す謝罪状。

\* 23 一の上 左大臣のこと。

\* 24 氏の長者 一般に氏族の長。ここでは頼長が摂関家藤原氏の長者になったこと。

\* 25 万機の内覧 天皇に奏聞する前に、全ての文書に目を通すこと。また文書に目を通して政務を処理する役職。通常は政治の第一人者が拜命する。

\* 26 三公 中国の官名。天子を補佐する三人をいった。ここでは左右大臣と太政大臣または内大臣をさす。摂政関白を差し置いて、左大臣である頼長が内覧の宣旨を得たことをいっている。

\* 27 当今たうぎん 現在の天皇。当時は近衛天皇だった。

\* 28 淳素じゆんそ 素直で飾り気がないこと。

\* 29 天裁 天皇の御裁断。

問1 鳥羽院が崩御した後の美福門院は、どんなようすだったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 美福門院は、鳥羽院が崩御したといっても、前年に我が子を亡くしたときほど悲しまなかった。しかし、死に顔を見たり、遺体の傍らで横になったりしている、鳥羽院との思い出などが心に浮かんで涙もあふれた。

b 美福門院は、前年に我が子を亡くしたときよりもさらに悲しみに暮れていた。しかし、残された寝具を見るにつけ、鳥羽院に寵愛されていたことなどが心

に浮かんで、夜なのか昼なのかもわからないまま、いたずらに時を過ごした。

c 美福門院は、前年に我が子を亡くしたときよりもさらに悲しみに暮れていた。夜となく昼となく遺体から離れようともせず、鳥羽院の死に顔を見つめ、涙にくれるありさまは痛々しいかぎりであった。

d 美福門院は、鳥羽院だけでなく、前年には我が子も亡くしており、その悲しみはたとえられないくらいであった。二人で夜を過ごした部屋の襖ふすまの絵を見るにつけ、生前の鳥羽院が思い出され、昼も夜も泣き明かすばかりだった。

e 美福門院は、鳥羽院だけでなく、前年には我が子も亡くしており、その悲しみはたとえられないくらいであった。毎日、時間の過ぎるのが遅く感じられ、昔を思い出しては涙にくれて、ただ呆然ぼうぜんと暮らしていた。

問2 鳥羽院の崩御後の後白河天皇と崇徳院の動向と世の人びとの反応はどのようなものであったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 鳥羽院が崩御したことで、後白河天皇のいる宮中は大騒ぎとなり、崇徳院のいる御所では謀反の相談がこつそりと行われていた。人びとは、鳥羽院が亡くなられたとなると、後白河天皇と崇徳院とが仲良く一緒に執政するよう忠告する者はいなくなり、日日の暮らしすら難しくなるほど、世は混乱するだろうと、うわさしていた。

b 鳥羽院が崩御したことで、後白河天皇のいる宮中は葬儀の準備に騒がしくなり、崇徳院のいる御所では、ひっそりとそのようすをうかがっていた。人びとは、鳥羽院が亡くなられたとなると、後白河天皇と崇徳院とは兄弟であるので、謀反をたくらむ者はただではすまないだろうと、うわさしていた。

c 鳥羽院が崩御したことで、後白河天皇のいる宮中はあれやこれやで騒がしくなり、崇徳院のいる御所では謀反の相談がこつそりと行われていた。人びとは、鳥羽院が亡くなられたとなると、後白河天皇と崇徳院とはもとと仲が悪いので、世の中を乱す争乱がおきるにちがいないと、うわさしていた。

d 鳥羽院が崩御したことで、後白河天皇のいる宮中は葬儀の準備に騒がしくなり、崇徳院のいる御所では、ひっそりとそのようすをうかがっていた。人びとは、鳥羽院が亡くなられたとなると、後白河天皇と崇徳院との間を取り持つ人もいなくなったので、二人の争いを避けることはできないと、うわさしていた。

e 鳥羽院が崩御したことで、後白河天皇のいる宮中はあれやこれやで騒がしくなり、崇徳院のいる御所では、ひっそりとそのようすをうかがっていた。人びとは、鳥羽院が亡くなられたとなると、後白河天皇と崇徳院とが二人仲好く国政に臨むことを期待して、このまま戦乱が続くことはないだろうと、うわさしていた。

問3 崇徳院は、後白河天皇が即位したことについて、どのように思っていたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 皇位継承というのは、父である天皇の嫡子庶子にかかわりなく、その位にふさわしい力量を備え、母の実家の状況なども問題とされるべきなのに、鳥羽院は、美福門院を寵愛しているという理由だけで、近衛院に皇位を譲らせた。これだけでも深い恨みであるのに、その近衛院が崩御した後、本来ならば、天皇の位につくべき我が子の重仁親王をさしおいて、後白河天皇に皇位を継がせたのは、とても残念なことだと思っていた。

b 皇位継承というのは、父である天皇の嫡子庶子にかかわりなく、立ち居振る舞いがよく、母方の祖父が存命であるかどうかなども問題とされるべきなのに、鳥羽院は、美福門院を寵愛しているという理由だけで、近衛院に皇位を譲った。これだけでも深い恨みであるのに、その近衛院が崩御した後、我が子重仁親王でなく、後白河天皇に皇位を継がせたのは、とても残念なことだと思っていた。

c 皇位継承というのは、父である天皇の嫡子庶子にかかわりなく、父の莫大な遺産を維持する能力を備え、その支えとなる身内があるか否かも問題とされるべきなのに、近衛院は母である美福門院が鳥羽院から寵愛されていることを理由として天皇の位についた。これだけでも深い恨みであるのに、その近衛院が崩御した後、崇徳院が推薦した重仁親王でなく、後白河天皇に皇位を継がせたのは、とても残念なことだと思っていた。

d 皇位継承というのは、譲位した天皇の嫡子庶子にかかわりなく、安定した政権を維持する能力を備え、それを支える後の出自なども問題とされるべきなのに、近衛院は、母である美福門院が鳥羽院から寵愛されていることを理由として天皇の位についた。これだけでも深い恨みであるのに、その近衛院が崩御した後、崇徳院の息子である重仁親王でなく、後白河天皇に皇位を継がせたのは、とても残念なことだと思っていた。

e 皇位継承というのは、譲位した天皇の嫡子庶子にかかわりなく、立ち居振る舞いがよく、母方の祖父が存命であるか否かなども問題とされるべきなのに、鳥羽院の寵愛を理由に、美福門院はその子である近衛院を天皇の位につけるために、崇徳院に譲位をせまった。これだけでも深い恨みであるのに、その近

衛院が崩御した後、崇徳院の息子である重仁親王でなく、後白河天皇に皇位を継がせたのは、とても残念なことだと思っていた。

問4 左大臣頼長の人柄について説明するものとして、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 人柄は並ぶもののないほどにすぐれていて、和漢の礼節をよくわきまえて、さまざまな記録にも通じていた。巧みに作文することでも知られ、さまざまな学問をよくした。まさに、国の宝ともいえるべき人物であり、摂政関白にふさわしい力量も備えていた。

b 人柄は右に出る人がないほどすぐれていて、和漢の礼節を知り尽くし、自他のさまざまなことがらを詳細に記録していた。巧みに作文することでも知られ、さまざまな芸事にも通じていた。また、国の宝である摂政関白として、ふさわしい力量も備えていた。

c 人柄は並ぶもののないほどにすぐれていて、和漢の礼儀作法を制定し、さまざまな場面での礼儀を詳細に記録していた。巧みに詩歌を作ることでも知られ、さまざまな学問も浅い深いはあったが一応こなしした。まさに、国の宝ともいえるべき人物であり、摂政関白にふさわしい力量も備えていた。

d 人柄はだれからも認められるほどであり、和漢の礼儀を知り尽くし、さまざまな記録にも通じていた。巧みに詩歌を作ることでも知られ、その他の芸事も浅い深いはあったが一応こなしした。また、国の宝である摂政関白として、ふさわしい力量も備えていた。

e 人柄は右に出る人がないほどすぐれていて、和漢の礼節をわきまえて、自他のさまざまなことがらを詳細に記録していた。巧みに作文することでも知られ、さまざまな学問も浅い深いはあったが一応こなしした。また、国の宝である摂政関白として、ふさわしい力量も備えていた。

問5 頼長は忠通についてどのように思っていたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 兄の忠通は和歌や漢詩に優れ、書もよくしていたが、詩歌は宮中の宴席における余興として行うもので、政務にまつわる行事ではなく、書もまた政務と関わらない趣味であって、優れた政治家だからこれに時間をかけるといようなものではないと、忠通の政治家としての資質を否定していた。

b 兄の忠通は和歌や漢詩に優れ、書もよくしていたが、詩歌は暇な時にするもので、政治にとっては重要なことではなく、書もまた同じで、このようなものに時間を費やすのは優れた政治家のやることではないと、忠通が詩歌や書に時間を費やすことを心配していた。

- c 兄の忠通は和歌や漢詩に優れ、書もよくしていたが、忠通の詩歌はお遊び程度でつたなく、政務に役立つようなものではなく、書もまた同じで、優れた政治家の手跡にとうてい及ぶものではないと、忠通の詩歌や書の才能をねたまこれを誹謗いばしていた。
- d 兄の忠通は和歌や漢詩に優れ、書もよくしていたが、詩歌は暇な時にするもので、政治にとつては重要なことではなく、書もまた同じで、このようなものに時間を費やすのは優れた政治家のやることではないと、忠通が詩歌や書に時間を費やすことを否定していた。
- e 兄の忠通は和歌や漢詩に優れ、書もよくしていたが、詩歌は宮中の重要な行事において行うもので、政治家としてはなおざりにできず、書もまた同じで、優れた政治家はかならずこれに熟達していなければならないと、自分とは異なる忠通の才能をみとめていた。

問6 久安七年(一一五二)正月十九日以後の頼長を説明するものとして、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 前年に氏の長者になっていた頼長は、内覧の宣旨をうけて、政治の第一人者となった。関白でもないのに、内覧となることはこれまでに例がなく、人びとはこれを阻止しようとしたが、父忠実の意向でもあり、頼長も人びとによく知られていたので、宮中は皆これを認めた。
- b 前年に氏の長者になっていた頼長は、内覧の宣旨をうけて、政治の第一人者となった。関白である兄、忠通を差し置いて、左大臣である頼長が内覧となることはこれまでに例がなく、頼長は固辞したのであったが、父忠実の意向でもあり、兄の関白もいることなので、宮中は皆これを認めた。
- c 前年に氏の長者になっていた頼長は、内覧の宣旨をうけて、政治の第一人者となった。関白である兄、忠通を差し置いて、左大臣である頼長が内覧となることはこれまでに例がなく、頼長は固辞したのであったが、父忠実の意向でもあり、頼長には兄の関白をこえる才能があることを知っていたので、宮中は皆これを認めた。
- d 前年に氏の長者になっていた頼長は、内覧の宣旨をうけて、政治の第一人者となった。関白でもないのに、内覧となることはこれまでに例がなく、人びとは不審に思ったが、父忠実の意向でもあり、兄の関白もこれで政治から離れるわけではないので、宮中は皆これを認めた。
- e 前年に氏の長者になっていた頼長は、内覧の宣旨をうけて、政治の第一人者となった。関白である兄、忠通を差し置いて、左大臣である頼長が内覧となることはこれまでに例がなく、人びとは不審に思ったが、父忠実の意向でもあり、頼長がこの世を支配するというわけでもないのに、宮中は皆これを認めた。

問7 頼長が内覧の宣旨を賜ったことで、兄の関白忠通はどのような行動をとり、その結果、二人の関係はどのようなになったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 忠通は、関白とは名ばかりとなり政治から遠ざけられたので、心に怒りを積もらせて、自分を辞めさせてかわって頼長が関白になるつもりなのかと、頼長にせまった。このため忠通は、父の教えに従って、天皇の前では礼儀正しくしていたが、二人の仲は悪くなっていた。

b 忠通は、関白とは名ばかりとなり政治から遠ざけられたので、心に怒りを積もらせて、関白の辞表を受けられるか、頼長を関白におつけになるか、どちらかご判断くださいと、天皇にせまった。このため頼長は、義理の親子の手前、礼儀正しくしていたが、二人の仲は悪くなっていた。

c 忠通は、関白とは名ばかりとなり政治から遠ざけられたので、その鬱憤うづがひを晴らすため、このまま忠通が関白を務めるか、それとも頼長が関白になるか、どちらが世のためになるかお考えくださいと、天皇にせまった。このため頼長は、義理の親子の手前、礼儀正しくしていたが、二人の仲は悪くなっていた。

d 忠通は、関白とは名ばかりとなり政治から遠ざけられたので、その鬱憤を晴らすため、自分が関白の辞表を出すか、頼長が内覧の辞表を出すか、どちらを選ぶかは天皇次第ですと、父親である忠実にせまった。このため忠通は、父の手前、礼儀正しくしていたが、二人の仲は悪くなっていた。

e 忠通は、関白とは名ばかりとなり政治から遠ざけられたので、心に怒りを積もらせて、自分が関白の辞表を出すか、頼長が内覧の辞表を出すか、どちらを選ぶかは天皇次第ですと、天皇にせまった。このため頼長は、父の手前、礼儀正しくしていたが、二人の仲は悪くなっていた。

問8 頼長は崇徳院に対して、どのような考えをもって、どのように働きかけたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 頼長は、崇徳院の第一皇子である重仁親王を皇位につけることで、父である崇徳院に政治の実権を握らせ、それによって自らが思いのままに政権を握ることができると考えており、崇徳院に後白河天皇から政権を奪い返す決心をするように進言した。

b 頼長は、崇徳院の第一皇子である重仁親王を皇位につけることで、崇徳院が頼長を摂政関白に取り立てるだろうと考え、またそうならば自らは思いのままに政権を握ることができるとも考えたために、重仁親王と崇徳院に後白河天皇から皇位を奪い取る決心をするように進言した。



- c 頼長は、崇徳院の第一皇子である重仁親王を皇位につけることは、崇徳院が思うがままに政治を行うべき人物であることを世間に公言するものであり、そうならば摂政関白として自らが政権を握ることも難しくなるだろうと考えたために、崇徳院に政権を握ることを思いとどまるように進言した。
- d 頼長は、崇徳院の第一皇子である重仁親王を皇位につけることで、崇徳院が思うとおりに政治を行うべきであると考えたが、そうならば崇徳院が頼長の意向を無視してわがままに政治を取りかねないと思ったために、崇徳院に後白河天皇から政権を奪い返すことを思いとどまるように進言した。
- e 頼長は、崇徳院の第一皇子である重仁親王を皇位につけることで、兄忠通に代わって頼長自身がその後ろ盾となって思いのままに政治を行うことができると考えて、崇徳院に対して重仁親王が後白河天皇から皇位を奪い取ることを促すように進言した。

問9 傍線部(A)を現代語訳せよ。

中の君(物語の女主人公で問題文中では「姫君」)は、物忌のため従姉の対の君に伴われ、その兄の僧都の九条の家におもむく。その家には、現在、但馬守の娘(問題文中では「三の君」)が住んでおり、中の君たちは一夜、琴などを奏でていた。たまたま、隣家に乳母の病氣見舞いに来っていた中納言(男主人公)が、中の君の弾く琴の音にひかれてこれを垣間見、ついに一夜の契りを交わしてしまう。問題文はその垣間見の場面であるが、読んで後の問いに答えよ。

こなたもかなたも竹のみしげり合ひて、隔てつきづきしくも固めず、しどけなきに、\*<sub>1</sub>行頼押しあけて、「同じくは。これより入らせたまへ」と申せば、「人や見つけむ。軽がろし」とはのたまへど、\*<sub>2</sub>箏の琴は、弾くらむ人ゆかしく心とどまりて、やをら入りたまへれど、こなたも竹多くしげりて、横たはれ広がりたる松の木の陰にて、人見つくべくもあらず。

軒近き透垣のもとにしげれる萩のもとに伝ひ寄りて見たまへば、池、遣水の流れ、庭の砂子などをかしげなるに、簾巻き上げて、三十に今ぞ及ぶらむとおぼゆるほどなる人、高欄のもとにて\*<sub>3</sub>和琴を弾くあり。頭つき、様体ほそやかに、しなしなく、きよらなるに、髪の毛のつややかにゆるゆるとかかりて、めやすきかな、と見ゆるに、向かひざまにて、紅か二藍かのほどなめり、いと白く透きたる好ましげなる人、すべり下りて、長押しに押しかかりて、外さまをながめ出でて、\*<sub>4</sub>琵琶にいたく傾きかかりて、かき鳴らしたる音、聞くよりも、うちもてなしたる有様、かたち、いと気色ばみ、なつかしくなまめき、こぼれかかれる額髪の絶え間のいと白くをかしげなるほどなど、まことしく優なるものかな、と見ゆるに、箏の琴人は、長押しの上に少し引き入りて、琴は弾きやみて、それに寄りかかりて、西にかたぶくままに曇りなき月をながめたる、この居たる人びとををかしと見るにくらぶれば、むら雲の中より望月のさやかなる光を見つけたる心地するに、あさましく見おどろきたまひぬ。

(中納言)「これこそは、行頼がほめつる三の君なめれ。長押の端なるは姉どもなめり。これこそ、\*<sub>5</sub>その際のすぐれたるならめ。いかで目もあやにあらむ」とまもるに、「かたちは、やむごとなきにもよらぬわざぞかし。竹取の翁の家にこそかぐや姫はありけれ」と見るにも、この程の様は、なほめづらかなり。

契りやありけむ、今宵は過ぐすべうもあらねば、やをら立ち出でたまひて、行頼に、「この竹の中に隠れて」といひて、帰り入りて見たまへば、和琴の人は入りにけ

り。琵琶、箏の人は物語しのびやかにしつづながむめり。<sup>\*6</sup>人は池のわたりなど涼み歩<sup>あり</sup>くなるべし。そなたに声などあまたして、いと静やかなるに、(中納言「ゆくりなくあはつけき振舞は、おのづから軽がろしきことも出でくるを」と、ありがたくおぼしをさめたる心なれど、我ながらあやしく鎮めがたきを、<sup>\*7</sup>人の程をこよなき劣りと思ふに、あなづらはしく、「今宵を過ぐして、またいひ寄らむ風のたよりも、さすがにあるべきやうもなし」とおぼし寄りて、月影のかたに寄りて、やをら入りたまひにけり。

人<sup>ひと</sup>気におどろきて見返りたるほどに、やがて紛れて、姫君を奥のかたに引き入れたてまつる。人心地おぼえず、むくつけく恐ろしきに、ものもおぼえず。奥のかたより、和琴の人の声にや、「<sup>△</sup>御殿籠<sup>とのち</sup>れ。御格子<sup>みかうし</sup>も、更<sup>か</sup>けぬらむ。人<sup>ひと</sup>びと参<sup>まゐ</sup>りたまへや」といひて、ぬざり入るに、かかれば、いはむかたなく、思ひまどふなども世のつねなりや。<sup>\*8</sup>くだくだしければとどめつ。

かたみに聞きかはして心かはしたらむにてだに、ゆくりなからむあさましさの、おろかならむやは。まいて心のうちどもはいかががありけむ。脱ぎやられたる直衣<sup>なほし</sup>、指貫<sup>さしぬき</sup>の手あたり、にほひは、えもいはずあてなる気色しるけれど、心の慰むべきかたなく、(対の君「<sup>\*9</sup>殿の、いとうしろやすきものにおぼして、放ちわたしたてまつりたまへるに、かかることの聞こえてもあらば、我が心とせぬことにてはあれど、いみじくもあるべきかな。この御身も、今はいたづらになりたまひぬるにこそあめれ」と思ひつづくるに、あたらしう、口惜しく、涙におぼほれまどひながらも、思ひやりいと静かなる人にて、「いふかひなきことをいひのしりて、あまねく人の知らむはいみじかるべし。後の隠れなくとも、この際はなほしのびてやみなむ」と思ふ心にて、御几帳<sup>みきちやう</sup>どもをさし違へて、「御前に恥ぢ聞こえたまふ人びとは、暑きに、さし退きてを」と、さりげなくいひなして、胸は騒ぎながら、つゆもまじろまず。

注

(『夜の寝覚』による)

\*1 行頼Ⅱ中納言の乳母の子で、中納言の家来。

\*2 箏の琴Ⅱ十三弦からなる中国伝来の琴。ここでは女主人公の中の君が演奏している。

\*3 和琴Ⅱわが国固有の琴で六弦からなる。ここでは中の君の従姉の対の君が演奏している。

\*4 琵琶Ⅱ弦楽器で、四本または五本の弦からなる。ここでは但馬守の娘である三の君が演奏している。

\*5 その際Ⅱ但馬守のような受領階級をさす。

\*6 人Ⅱ中の君に仕える女房たち。

\*7 人Ⅱ箏の琴を弾いていた人。中の君。中納言は但馬守の娘と思い込んでいる。

\*8 くだくだしければとどめつⅡ物語の語り手の言葉。

\*9 殿Ⅱ中の君の父親である太政大臣。

問1 中納言が垣間見た和琴を弾く人とはどのような人であったのか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 三十に手が届くかと思われる人で、髪の様子や姿がほっそりとして、なまめかしく清潔そうで、髪がたいそうつややかでゆったりとかかり、感じのよい人であった。

b 三十に手が届くかと思われる人で、髪の様子や姿がほっそりとして、気品があつて美しい上に、髪がたいそうつややかでゆったりとかかり、感じのよい人であった。

c 三十に手が届くかと思われる人で、髪の様子や姿がほっそりとして、お上品ぶつて近づきにくく、髪がたいそうつややかでゆったりとかかり、いささか感じの悪い人であった。

d 三十に手が届くかと思われる人で、髪の様子や姿がほっそりとして、品がなく澄まし顔で、髪がたいそうつややかでゆったりとかかり、いささか感じの悪い人であった。

e 三十に手が届くかと思われる人で、髪の様子や姿がほっそりとして、なまめかしく派手で、髪がたいそうつややかでゆったりとかかり、感じのよい人であった。

問2 中納言が垣間見た琵琶を弾く人とはどのような人であったのか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

問3

中納言が垣間見た箏の琴を弾く人とはどのような人であったのか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 和琴と琵琶を弾いていた人たちを美しいと思った以上に美しく、むらだつ雲の中から十五夜の月の清らかな光を見つけたのにも似た気持ちだし、その思いもよらない美しさに、中納言も呆然<sup>ぼうぜん</sup>としてしまうほどの人であった。
- b 和琴を弾いていた人にお仕えしている人たちを美しいと思った以上に美しく、むらだつ雲の中から十五夜の月の清らかな光を見つけたのにも似た気持ちだし、その思いもよらない美しさに、中納言も呆然としてしまうほどの人であった。
- c 和琴と琵琶を弾いていた人たちを美しいと思った以上に美しく、むらだつ雲の中に十五夜の月の清らかな光がかくれるのにも似た気持ちだし、その家柄にふさわしくない美しさに、中納言も身をかくしたくなるほどの人であった。
- d 和琴を弾いていた人にお仕えしている人たちを美しいと思った以上に美しく、むらだつ雲の中に十五夜の月の清らかな光がかくれるのにも似た気持ちだし、そのあきれほどの美しさに、中納言も身をかくしたくなるほどの人であった。
- e 琵琶を弾いていた人にお仕えしている人たちを美しいと思った以上に美しく、むらだつ雲の中から十五夜の月の清らかな光を見つけたのにも似た気持ちだ

し、その家柄にふさわしくない美しさに、中納言も呆然としてしまうほどの人であった。

問4 箏の琴を弾く人を垣間見て中納言はどのように思ったのか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a この人こそは行頼がほめていた三の君で、長押の端にいるのは姉たちなのだろう。これこそは受領階級の家の娘としては飛びぬけた美人というべきであろう。そうでなくては、どうしてこんな恐ろしいほどの冷淡さがあるのか、と思った。

b この人こそは行頼がほめていた三の君で、長押の端にいるのは姉たちなのだろう。これこそは受領階級の家の娘としては飛びぬけた美人というべきであろう。そうでなくては、どうしてこんないやになるほどの愛敬があるのか、と思った。

c この人こそは行頼がほめていた三の君で、長押の端にいるのは姉たちなのだろう。これこそは受領階級の家の娘としては飛びぬけた美人というべきであろう。そうでなくては、どうしてこんなほえましいほどの愛らしさがあるのか、と思った。

d この人こそは行頼がほめていた三の君で、長押の端にいるのは姉たちなのだろう。これこそは受領階級の家の娘としては飛びぬけた美人というべきであろう。そうでなくては、どうしてこんな沈黙をしているほどのひやかさがあるのか、と思った。

e この人こそは行頼がほめていた三の君で、長押の端にいるのは姉たちなのだろう。これこそは受領階級の家の娘としては飛びぬけた美人というべきであろう。そうでなくては、どうしてこんなまぶしいほどの美しさがあるのか、と思った。

問5 竹の中に身を隠していた中納言の心中はどのようなものであったのか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 計画通りの慎重な行動をするつもりでも、時には軽がるしいことも起こってくるから、と万事に思慮深い中納言ではあったが、今夜に限っては自分でも不思議なくらい心が鎮めがたい、と感じていた。

b だれが見ても自己中心的な行動は、時にまわりの人たちに迷惑をかけることも起こってくるから、と何ごとにつけ遠慮深い中納言ではあったが、今夜に限っては自分でも不思議なくらい心が鎮めがたい、と感じていた。

- c 突然の怪はずみな行動は、自然と自分にふさわしくないことも起こってくるから、と普通には見られないほどの自制心を持った中納言であったが、今夜に限っては自分でも不思議なくらい心が鎮めがたい、と感じていた。
- d 時にはすばやい振る舞いをしなければせっかくの機会をのがしてしまう、といつもはのんびりとした行動をする中納言であったが、今夜に限っては自分でも不思議なくらい心が鎮めがたい、と感じていた。
- e 好奇心にかられた発作的な行動は、時には不都合なことも起こってくるから、といつもは小心で大胆な行動のできない中納言ではあったが、今夜に限っては自分でも不思議なくらい心が鎮めがたい、と感じていた。

問6 中の君の部屋に中納言が忍び込んでいるのを対の君が発見した場面で、物語の語り手はどのような感想を抱いたのか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 中納言と中の君が互いに手紙などを交わして心を通わしている場合でも、このような突然の驚きは並一通りのものであろうか。まして今の場合、中の君と対の君の心中はいかばかりであつたろうか、という感想を抱いた。
- b 中納言が中の君の部屋を訪れることが予告されている場合でも、このような突然の驚きは並一通りのものであろうか。まして今の場合、対の君の心中はいかばかりであつたろうか、という感想を抱いた。
- c 中納言と中の君の仲をお互いの親が承知している場合でも、このような突然の驚きは並一通りのものであろうか。まして今の場合、中の君の心中はいかばかりであつたろうか、という感想を抱いた。
- d 中の君と対の君との間でお互いに心を通わし合っている場合でも、このような突然の驚きは並一通りのものであろうか。まして今の場合、対の君の心中はいかばかりであつたろうか、という感想を抱いた。
- e 中納言と対の君とが心を示し合っている場合でも、このような突然の驚きは並一通りのものであろうか。まして今の場合、中の君と対の君の心中はいかばかりであつたろうか、という感想を抱いた。

問7 対の君は中の君の部屋で男の衣装を発見した時どのように思ったのか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 中の君の父親が、この私を信頼できるものとして中の君を私にあずけたのに、このようなことが中納言の乳母の耳に入ったなら、中納言と中の君が示し合わせてしたことではないけれど、大変なことになるに違いない、と思った。

b 中の君の父親が、この私を信頼できるものとして中の君を私にあずけたのに、このようなことが中の君の父親の耳に入ったなら、私の意志でしたことではないけれど、大変なことになるに違いない、と思った。

c 中の君の父親が、この私を信頼できるものとして中の君を私にあずけたのに、このようなことが三の君の耳に入ったなら、中の君に落度はまったくないけれど、大変なことになるに違いない、と思った。

d 中の君の父親が、この私を信頼できるものとして中の君を私にあずけたのに、このようなことが行頼の耳に入ったなら、行頼の仕組んだことではないけれど、大変なことになるに違いない、と思った。

e 中の君の父親が、この私を信頼できるものとして中の君を私にあずけたのに、このようなことが中納言の父親の耳に入ったなら、中納言に落度はいささかもないけれど、大変なことになるに違いない、と思った。

問8 対の君はこの事態に思慮をめぐらした結果、最終的にどのように決断したのか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 言ってもかいたくないことを騒ぎ立てて、中の君の部屋に男性が忍び込もうとしたことを中の君の父親が知ったならまずいことになる。後まで隠すことはできないにしても、この際はやはり隠し通してしまおう、と決断した。

b 言ってもかいたくないことを騒ぎ立てて、中の君の素性を相手の男性が知ったならまずいことになる。後には知られるにしても、この際はやはり隠し通してしまおう、と決断した。

c 言ってもかいたくないことを騒ぎ立てて、中の君の部屋に男性が忍び込んだことを世間の人びとが知ったならまずいことになる。後には知れわたるにして



も、この際はやはり隠し通してしまおう、と決断した。

d 言ってもかいたくないことを騒ぎ立てて、男性の素性が中納言であることを中の君が知ったならまずいことになる。後になれば自然と知られるにしても、

この際はやはり隠し通してしまおう、と決断した。

e 言ってもかいたくないことを騒ぎ立てて、中の君の部屋に男性が忍び込んだことを中の君の家族全員が知ったならまずいことになるだろう。後になって知られるのはしかたがないにしても、この際はやはり隠し通してしまおう、と決断した。

問9 波線部(△)を現代語訳せよ。

主人公の中納言は、今は亡き父親が唐の第三皇子(問題文中では「三の皇子・皇子」)に生まれ変わったことを夢で知って、はるばる唐の国に渡って父の生まれ変わりである皇子に会いにゆく。問題文はその場面であるが、読んで後の問いに答えよ。

(中納言は)やうやうしづまりて、ふるさとおぼしやるに、雲霞かすみはるかに隔てて、海山を分け過ぎにけるにつけても、人びとのおぼしたりしさまどもの、あはれにかなしけれど、いつしか三の皇子、とく見たてまつらむと思ふにぞ、よろづなぐさみたまふ。帝の宣旨しやうきくだりて、内裏の\*1承願殿しやうくわんでんといふところに召しありて、参りたまへり。帝三十余ばかりにて、顔かたち、いみじくうるはしくめでたうおはします。中納言のありさまを御覧するにたぐひなし。そこらつどひたる大臣、公卿くきやう、「日本はいみじかりけり。かかる人のおはしけるよ」とおどろきて、「いにしへ、\*2河陽県かうやうけんに住みける\*3潘岳はんがくこそは、わが世にたぐひなきかたちの名をとどめたるも、あいぎやうのこぼるばかりににほへるかたは、さらにかからざりけり」と定めけり。

題を出だして文を作り、遊びをしてこころみるにも、この国の人にはまさはなかりけり。「この人のことをこそ、見ならひとむべかりけれど、この国のこととは、何ごとをか、中納言には伝へならはすべき」と、帝もおぼしめしおどろきて、ただこの中納言を、朝夕にもてあそびなづさひたてまつるに、いみじう憂へをやすめ、思ひをのぶることに思へり。

三の皇子は、内裏のほとり近く、河陽県といふところに、おもしろき宮造りして、そこをぞ御里にしたまへる。母后ははききももろともに住みたまふ。皇子の御消息あり。かぎりなくうれしくて参りたまへり。ところのさま、ほかよりもいみじくめでたく、水の色、石のたたずまひ、庭のおも、梢こずえのけしきもいみじうおもしろし。こなたに召し入れたり。御年七つ八つばかりにて、うつくしうて、うるはしく\*4鬢びんづら結び、装さうぞきておはす。ありし御面影にはおはせねど、あはれに、さぞかしと見たてまつるに、涙もこぼる心地したまふ。皇子も御けしきかはりて、おほかたのことどもも仰せられて、言葉にはたまはで、昔を忘れぬに、かく逢あひ見つるよしのあはれを書いて賜はせたるに、いみじう念ずれど涙とまらず。その御返し文、雲の浪なみ、煙の浪けぶりと、はるかにたづねわたりて、生しやうを隔て、かたちをかへたまひつれど、あはれになつかしく、ふるさとを恋ふる心も、たちまちに忘れぬる心を作りて見せたてまつるに、皇子もえ堪へたまはず。

\*<sub>5</sub>上なんどのおぼしまどひしを、さしあたりて見し折は、などかかろことを思ひよりけむと、くやしうおぼえ、道のほどはるかに心細く、「いかになりぬる身ぞ」とおぼししを、「いでや、思ひ立たさらましかは、いかにいみじう、いふせからまし」とよろづこの御前にては、なぐさみて、頼もしううれしと思へるけしきを、皇子はあはれにかぎりなく思ひたれど、人目には、そのことをおぼえ顔にもかけたまはぬを、かしこう、優にもおはするかな、と見たてまつる。母后、いといみじうときめき、皇子のおぼえもすぐれて、片時見たてまつらではえおはせねば、かばかりおもしろう、遊びよくおぼさるる河陽県にも、心のどかにもえおはせざりけれど、中納言につねにむつれまほしくおぼされければ、言ことのがれつつ、里がちになりたまひぬ。

注

\*1 承願殿||宮中の殿舎の一つ。

\*2 河陽県||今の中国河南省孟県にあたる地。

\*3 潘岳||西晋時代の詩人で、姿形が美しかったことで有名。

\*4 鬢づら||髪を左右の耳のあたりで結び上げた少年の髪形。

\*5 上||中納言が日本に残してきた母親。

問1 唐の国に着いた時の中納言の心境はどのようなものであったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 唐の国で自分を長い間待っていた后や第三皇子のことを思うとせつなく思われるけれど、それでもようやく念願の皇子に会えると思うと、つらさも紛れるのであった。

b 日本に残してきた人びとの自分に対する非難をうわきで聞くにつけ、悲しみがわいてくるが、これで第三皇子に会えると思うと、つらさも紛れるのであった。

c 唐の国の人びとの自分に対する非難がましい態度を見るにつけ、ともすれば悲しみに沈むけれど、それでも第三皇子に会えると思うと、つらさも紛れるの

(『浜松中納言物語』による)

であった。

d 日本を発つ時、周囲の人びとが心配していた様子などが心にしみてせつなく思われるけれど、早く第三皇子に会いたいと思うにつけて、つらさも紛れるのであった。

e 唐の国の人びとが自分が思ったほど歓迎してくれていないことを思うにつけ、悲しみにおそわれるけれど、第三皇子に会えると思うと、つらさも紛れるのであった。

問2 中納言の様子を見て、唐の国の大臣や公卿たちはどのような感想をいだいたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 日本という国はすばらしい国だ。こんな非の打ちどころがないほど美しい人もいたのであったかと仰天して、昔の潘岳もこれほどではない、と感じた。

b 日本という国はとんでもない国だ。これほど完璧な美しい人もいたのであったかと仰天して、昔の潘岳がこれくらい美しかったら、と感じた。

c 日本という国はおそろしい国だ。こんなとてつもなく美しい人もいたのであったかと仰天したが、それでも昔の潘岳の美しさには勝てない、と感じた。

d 日本という国は立派な国だ。これほど比べようもない美しい人もいたのであったかと仰天し、できることなら昔の潘岳を見せてやりたいものだ、と感じた。

e 日本という国は気の毒な国だ。この程度の美しさの人をもてはやしているなんてと仰天し、できることなら昔の潘岳を見せてやりたいものだ、と感じた。

問3 作文や音楽に才能を発揮する中納言に接して、唐の国の帝はどのような感想をいだいたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 中納言のことをこそ見習い、手本とすべきであるが、唐の国は昔から学芸も発達しており、いったい何事を中納言から学ぶことがあろうか、と感じた。

b 中納言のことをこそ見習い、手本とすべきであるが、唐の国の学芸の、いったい何事を中納言に伝え、習わせたらいのか、と感じた。

c 中納言のことをこそ見習い、手本とすべきであるが、唐の国のいったいだれが中納言から伝えられた学芸を習うことができようか、と感じた。

d 中納言のことをこそ見習い、手本とすべきであるが、日本とは文化的な背景も違う唐の国では、はたして中納言からうまく学芸を習うことができようか、

と感じた。

e 中納言のことをこそ見習い、手本とすべきであるが、唐の国の学芸を、中納言が滞在する短い間に、はたして中納言にうまく伝えることができようか、と感じた。

問4 中納言が初めて第三皇子に会った時の、皇子の印象はどのようなものであったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 年齢は七、八歳でかわいらしく、きつちりと鬢づらを結って正装しており、生前の父親の面影とは違っても、この方こそは父親の生まれ変わりだ、という印象を持った。

b 年齢は七、八歳で、美しく整然と鬢づらを結って正装しており、日本にいたときに出会った皇子の姿とは違って見えたが、確かに父親の生まれ変わりだ、という印象を持った。

c 年齢は七、八歳でかわいらしく、きつちりと鬢づらを結って正装しており、幼かった頃の自分とはいささか似ていないところもあるが、それでも確かに父親の生まれ変わりだ、という印象を持った。

d 年齢は七、八歳でかわいらしく、きつちりと鬢づらを結って正装しており、日本にいたときに夢の中で見た父親の顔立ちとは違っても、それでも確かに父親の生まれ変わりだ、という印象を持った。

e 年齢は七、八歳で、美しく整然と鬢づらを結って正装しており、生前の父親の面影がなんとなくのぼれて、確かに父親の生まれ変わりだ、という印象を持った。

問5 中納言と対面を果たした第三皇子は、中納言に対してどのような反応を示したか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 第三皇子も表情が変わり、あたりさわりのないことをおっしゃり、言葉に出してはいわれないものの、今は亡き日本の父親のことを忘れないでいるにつけ、その子供に再会できた感銘を、詩文に書いて中納言に下さった。

問6

第三皇子が下さった詩文を目にして、中納言はどのような反応を示したか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 中納言は、万里の道をはるか遠く尋ね求めてお目にかかると、第三皇子は長い間子供の格好をしていて、すぐに見分けがつかなかったけれど、しみじみと胸にせまって慕わしく、そのため日本を恋しいと思う心もたちまちになくなってしまったという趣旨を、詩文に書いて差し上げた。
- b 中納言は、万里の道をはるか遠く尋ね求めてお目にかかると、第三皇子は前世との生を隔て、顔立ちが変わっているけれど、しみじみと胸にせまって慕わしく、そのため亡き父親を恋しいと思う心もたちまちになくなってしまったという趣旨を、詩文に書いて差し上げた。
- c 中納言は、万里の道をはるか遠く尋ね求めてお目にかかると、第三皇子は一見それと分らないような姿形をしているけれど、しみじみと胸にせまって慕わしく、そのため第三皇子の生まれ故郷を訪ねてみたいと思う心もたちまちになくなってしまったという趣旨を、詩文に書いて差し上げた。
- d 中納言は、万里の道をはるか遠く尋ね求めてお目にかかると、第三皇子は前世との生を隔て、顔立ちが変わっているけれど、しみじみと胸にせまって慕わしく、そのため日本を恋しいと思う心もたちまちになくなってしまったという趣旨を、詩文に書いて差し上げた。
- e 中納言は、万里の道をはるか遠く尋ね求めてお目にかかると、第三皇子は前世との生を隔て、顔立ちが変わっているけれど、しみじみと胸にせまって慕わ

b 第三皇子も表情が変わり、あたりさわりのないことをおっしゃり、言葉に出してはいわれないものの、自分が日本にいた時代のことを忘れないでいるにつけ、兄である日本の中納言が唐の国にわたってきた感銘を、詩文に書いて中納言に下さった。

c 第三皇子も表情が変わり、あたりさわりのないことをおっしゃり、言葉に出してはいわれないものの、今は亡き日本の母后のことを忘れないでいるにつけ、自分には兄に当たると中納言がわざわざ唐の国にわたってきた感銘を、詩文に書いて中納言に下さった。

d 第三皇子も表情が変わり、あたりさわりのないことをおっしゃり、言葉に出してはいわれないものの、日本と唐の国とが国交のあった昔を忘れないでいるにつけ、中納言がこのように遣唐使として訪ねてきてくれた感銘を、詩文に書いて中納言に下さった。

e 第三皇子も表情が変わり、あたりさわりのないことをおっしゃり、言葉に出してはいわれないものの、親子であった昔を忘れないでいるにつけ、このように再会できた感銘を、詩文に書いて中納言に下さった。

しく、第三皇子もまた宮中を恋しいと思う心がたちまちなくなってしまうらしいのは、うれしいことだという趣旨を、詩文に書いて差し上げた。

問7 日本を発つ際に、中納言はどのような感情をいだいていたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 母親が中納言との別れに際し、気が動転していたのを見た時には、なんでこんなことを思い立ったのか、と後悔せずにはいられず、また、道中もはるかに心細く、いったい自分はどうなってしまうのか、と思われた。

b 母親が中納言との別れに際し、気が動転していたのを見た時には、なんでこんなことを思い立ったのか、と今は亡き父親を恨まずにはいられず、また、道中もはるかに心細く、いったい自分はどうなってしまうのか、と思われた。

c 母親が中納言との別れに際し、気が動転していたのを見た時には、なんでこんなことを思い立ったのか、と後悔せずにはいられず、また、はるか離れて母親を日本に残して行くこともたいそう心細く、いったい母親はどうなってしまうのだろうか、と思われた。

d 母親が中納言との別れに際し、気が動転していたのを見た時には、なんでこんなことを母親は思い立ったのか、と母親を恨まずにはいられず、また、母親と別れてひとりで旅をするのも、たいそう心細く、いったい自分はどうなってしまうのだろうか、と思われた。

e 母親が中納言との別れに際し、気が動転していたのを見た時には、なんでこんなことを母親は思い立ったのか、と今は亡き父親を恨まずにはいられず、また、道中もはるかに心細く、いったい自分はどうなってしまうのか、と思われた。

問8 中納言と再会を果たした第三皇子は、中納言に対してどのようなふるまっていたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 第三皇子は、自分のことを頼もしくうれしいと思っっている中納言の様子を、この上なくうとましく思っっているけれど、人前では、そうした本心は見せず、中納言のことを親身に思っっているようなそぶりをしていた。

b 第三皇子は、自分のことを頼もしくうれしいと思っっている中納言の様子を、心にしみていとおしく感じてはいるけれど、人前では、なぜか中納言に対して冷たく、邪険に扱うふりをしていた。

- c 第三皇子は、自分のことを頼もしくうれしいと思っている中納言の様子を、心にしみて気の毒に思っているけれど、人前では、そうした本心は見せず、親しく振舞っていた。
- d 第三皇子は、自分のことを頼もしくうれしいと思っている中納言の様子を、この上なくかわいそうに思っているけれど、人前では、そうした本心は見せず、普通に振舞っていた。
- e 第三皇子は、自分のことを頼もしくうれしいと思っている中納言の様子を、心にしみて親身に感じてはいるけれど、人前では、前世で親子であったことに気づいているようなそぶりを少しも見せないようにしていた。

問9 波線部(△)を現代語訳せよ。



次の文章は、作者が三十歳を過ぎたころ、母が出家し、作者が宮仕えを始める場面を描いたものである。これを読んで、後の問いに答えよ。

母、尼になりて、同じ家の内なれど、方かたことに住みはなれてあり。父ちちはただわれをおとなにしすゑて、われは世にも出で交らはず、かげにかくれたらむやうにてゐたるを見るも、頼もしげなく心ぼそくおぼゆるに、きこしめすゆかりある所に、「なにとなくつれづれに心ぼそくてあらむよりは」と召すを、\*1 古代の親は、宮仕人みやつかへびとはいと憂きことなりと思ひて過ぐさするを、「今の世の人は、さのみこそは出でたて。さてもおのづからよきためしもあり。さてもこころみよ」といふ人びとありて、しぶしぶに出だしたてらる。

まづ一夜参る。菊の濃くうすき八つばかりに、濃き搔練かいねりを上かみに着たり。さこそ物語にのみ心を入れて、それを見るよりほかに、行き通ふ類、親族などだにことになく、古代の親どものかげばかりにて、月をも花をも見るよりほかのことはなきならひに、立ち出づるほどの心地、あれかにもあらず、うつつともおぼえて、暁にはまかでぬ。

里びたる心地には、なかなか、定まりたらむ里住みよりは、をかしきことも見聞きて、心もなぐさみやせむと思ふをりありしを、いとはしたなく悲しかるべきことにこそあべかめれと思へど、いかがせむ。

師走しはすになりて、また参る。局つぼねしてこのたびは日ごろさぶらふ。\*2 上うへには時時、夜夜よよも上りて、知らぬ人の中にうち臥ふして、つゆまどろまれず、恥づかしうものをつつましきままに、忍びてうち泣かれつつ、暁には夜深く下りて、日ぐらし、父の老いおとろへて、われをことしも頼もしからむかげのやうに、思ひ頼みむかひゐたるに、恋しくおぼつかなくのみおぼゆ。母亡くなりにし姪めいどもも、生まれしよりひとつにて、夜は左右に臥し起きするも、あはれに思ひ出でられなどして、心もそらにながめ暮らさる。立ち聞き、かいまむ人のけはひして、いとみじくものつつまし。

十日ばかりありて、まかでたれば、父母、炭櫃すすびつに火などおこして待ちゐたりけり。車より下りたるをうち見て、「おはする時こそ人目も見え、さぶらひなどもありけれ、この日ごろは人声もせず、前に人影も見えず、いと心ぼそくわびしかりつる。かうてのみも、まろが身をば、いかがせむとかする」とうち泣くを見るもいと悲し。

つとめても、「今日はかくておはすれば、内外人多く、こよなくにぎははしくもなりたるかな」とうちいひて向ひみたるも、いとあはれに、なにのほひのあるにかと涙ぐましく聞こゆ。

聖ひじりなどすら、前の世さきのこと夢に見るは、いと難かたかなるを、いとかう、あとはかないやうに、はかばかしからぬ心地に、夢に見るやう、清水きよみづの礼堂らいだうにみたれば、別当とおぼしき人出で来て、「そこは前の生なまに、この御寺の僧にてなむありし。仏師にて、仏をいと多く造りたてまつりし功德によりて、ありし素姓まさりて人と生まれたるなり。この御堂の東におはする\*<sub>3</sub>丈六の仏は、その造りたりしなり。箔はくをおしきして亡くなりしぞ」と。「あないみじ。さは、あれに箔おしたてまつらむ」といへば、「亡くなりししかば、こと人箔おしたてまつりて、こと人供養もしてし」と見てのち、清水にねむごろに参りつかうまつらしかば、前の世にその御寺に仏念じ申しけむ力に、おのづからようもやあらまし。いといふかひなく、詣でつかうまつることもなくてやみにき。

十二月二十五日、宮の\*<sub>4</sub>御仏名に召しあれば、その夜ばかりと思ひて参りぬ。白き衣どもに、濃き搔練をみな着て、四十余人ばかり出であたり。しるべしいでし人のかげにかくれて、あるが中にうちほのめいて、暁にはまかづ。雪うち散りつつ、いみじくはげしく、冴さえ凍る暁がたの月の、ほのかに濃き搔練の袖そでにうつれるも、げに濡ぬる顔なり。道すがら、

年はくれ夜はあけがたの月かげの袖にうつれるほどぞはかなき

かう立ち出でぬとならば、さても宮仕への方にもたち馴なれ、世にまぎれたるも、ねぢけがましきおぼえもなきほどは、おのづから人のやうにもおぼしめてなさせたまふやうもあらまし。親たちも、いと心得ず、ほどもなく\*<sub>5</sub>こめすえつ。さりとしてその有様の、たちまちにきらきらしき勢ひなどあんべいやうもなく、(いとよしながりけるすする心にも) ことこのほかに違ひぬる有様なりかし。

注

\*1 古代の親||昔氣質の親。

\*2 上||宮仕への主君、祐子内親王の御座所。

\*3 丈六の仏||一丈六尺の高さの仏像。

(『更級日記』より)

\*4 御仏名〓諸仏の名号をとなえて、一年の罪障消滅を祈願する法会。十二月十九日から三日間、宮中の清涼殿で行われた後、宮家などでも催される。ここでは、祐子内親王が住んでいた外祖父藤原頼通邸で催された法会。

\*5 こめすゑつ〓ここでは結婚させること。

問1 作者が宮仕えを始めるにあたって、どのような事情があったのか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 母親が出家して尼となり、屋敷の別棟に住むようになった後、父親はむすめである作者をなんとか成人に育て上げたものの、宮仕えはつらいものだとし、家の中に隠すようにしていたところ、このごろは宮仕えによって幸せをつかむこともあるから、ためしに出仕してみなさいと人から勧められて、作者は宮仕えに出ることになった。

b 母親が出家して尼となり、むすめである作者は同じ屋敷内に住むこともできなくなつて、世間から隠れるようにひっそり暮らす一方、宮仕えはつらいものだとし、世間に出ることを断っていたところ、このごろは宮仕えによって幸せをつかむこともあるから、ためしに出仕してみなさいと人から勧められて、作者は宮仕えに出ることになった。

c 母親が出家して尼となり、屋敷の別棟に住むようになった後、父親はむすめである作者に家の万事を任せて、世間から隠れるようにひっそり暮らしていたが、このごろは宮仕えによって幸せをつかむこともあるから、ためしに出仕してみなさいと人から勧められて、作者は宮仕えに出ることになった。

d 母親が出家して尼となり、同じ屋敷内に住むこともできなくなった父親は、世間から隠れるようにひっそり暮らすことになったので、むすめである作者を手放すことができず、宮仕えをさせなかったところ、このごろはだれでも進んで宮仕えに出て運良く出世することもあるから、積極的に出仕してみなさいと人から勧められて、作者は宮仕えに出ることになった。

e 母親が出家して尼となり、屋敷の別棟に住むようになった後、父親は、大人になったむすめである作者を家の中に隠すようにしてひっそり暮らしていたところ、そんな作者を哀れに思った人から、このごろは宮仕えによって自立できることもあるから、ためしに出仕してみなさいと勧められて、作者は宮仕えに出ることになった。

問2 一回目の宮仕えに出たときの作者のようすはどのようなものだったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 今まで物語を書くことばかり熱心で、わずかな友人や親戚と付き合うほかは、古風な両親のもとで季節折々の風流を愛でるといった生活ぶりだったところに、出仕して宮中の人びとに交わる心境というのは、自分と他人の区別もつかないような状態で、現実感もないまま、夜明けごろに退出した。
- b 今まで物語を読むことばかり熱心で、ほとんど交際する友人や親戚もなく、古風な両親のもとで季節折々の風流を愛でるといった生活ぶりだったところに、出仕して宮中の人びとに交わる心境というのは、自分と他人の区別もつかないような状態で、現実感もないまま、夜明けごろに退出した。

c 今まで物語を読むことばかり熱心で、ほとんど交際する友人や親戚もなく、古風な両親のもとでは月や花といった季節折々の風流を愛でる機会すらなかったところに、出仕して宮中の人びとに交わる心境というのは、あれこれ何も手につかないような状態で、現実感もないまま、夜明けごろに退出した。

d 今まで物語を読むことばかり熱心で、交際する友人や親戚もなく、古風な両親のもとで季節折々の風流を愛でるといった生活ぶりだったところに、出仕して宮中の人びとに交わる心境というのは、自分と他人の区別もつかないほどあわただしかったが、これが現実なのだと思い知り、夜明けごろに退出した。

e 今まで物語を書くことばかり熱心で、交際する友人や親戚もなく、古風な両親のもとで季節折々の風流を愛でるといった生活ぶりだったところに、出仕して宮中の人びとに交わる心境というのは、あれこれ何も手につかないほど感激して、まるで夢見心地のままに、夜明けごろに退出した。

問3 出仕するまえとあとの作者の心境を述べたものとして、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 実家にあつて生活することになった気分からすると、きまりきった里の生活よりも、宮仕えのほうがかえっておもしろい経験ができて、気晴らしにもなるかと思うときもあったが、いざ現実に出仕してみると、たいそうきまり悪く悲しいことに出あつてしまいそうに思った。

b 実家にあつて生活することになった気分からすると、自由きままな里の生活よりも、宮仕えのほうがおもしろいとはなかなか思われず、気晴らしになることも期待できないままだったが、いざ現実に出仕してみると、案の定たいそうきまり悪く悲しいことばかりだと思った。

c 田舎びた暮らしになじんだ気分からすると、きまりきった里の生活に比べて、都会の宮仕えはかえっておもしろい経験ができ、慰めてくれる人もあるにち

がないと思うときもあったが、いざ現実に出仕してみると、はずかしめられることや悲しいことばかりだと思った。

d 実家にあつて生活することになじんだ気分からすると、自由きままな里の生活に比べて、宮仕えでは窮屈なこともあるだろうが、またおもしろい経験ができて、気晴らしにもなるかと思うときもあったが、いざ現実に出仕してみると、自分のはしたない人間だと思い知って、悲しい気持ちにとらわれた。

e 田舎暮らしになじんだ気分からすると、変化のないきまりきった生活よりも、宮仕えのほうがひよつとしておもしろい経験が多くあつて、退屈することもないだろうと思うときもあったが、いざ現実に出仕してみると、自分がはしたない人間だと思い知って、悲しいことがおこつてしまいそうに思った。

問4 作者がふたたび宮仕えにあがるようになってから、どのようなことが気がかりになったか。二回目の宮仕えのようすを説明するものとして、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a こんどは自分の部屋をもらってしばらく続けて仕えていたが、夜分に参上してくる見知らぬ人のことが気になっておちおち眠つてもいられず、忍び泣きして、明け方に自室に戻つてからも、老い衰えてゆく父親が自分を頼りにしていたことを思い出して慕わしくなり、また生れてからずっといっしょに暮らして来た姪たちのことを思いやつて哀れになったりする一方で、立ち聞きやのぞき見する人の気配で気づまりになることもあった。

b こんどは自分の部屋をもらってしばらく続けて仕えていたが、夜分に参上しても、見知らぬ人のあいだではほとんど眠ることもできず、忍び泣きして、明け方に自室に戻つてからも、老い衰えてゆく父親が自分を頼りにしていたことを思い出して慕わしくなり、また母の出家後ずっと面倒を見て来た姪たちのことを思いやつて哀れになったりする一方で、立ち聞きやのぞき見する人の気配を気にして、そつとつつましくしていることにした。

c こんどは自分の部屋をもらってしばらく続けて仕えていたが、夜分に参上してくる見知らぬ人のことが気になっておちおち眠つてもいられず、忍び泣きして、明け方に自室に戻つてからも、老い衰えてゆく父親を自分はまだ頼りにするばかりで、慕わしくてしかたなく、また生れてからずっといっしょに暮らして来た姪のことを思いやつて哀れになったりする一方で、立ち聞きやのぞき見する人の気配で気づまりになることもあった。

d こんどは自分の部屋をもらってしばらく続けて仕えていたが、夜分に参上しても、見知らぬ人のあいだではほとんど眠ることもできず、忍び泣きして、明け方に自室に戻つてからも、老い衰えてゆく父親を自分はまだ頼りにするばかりで慕わしくてしかたなく、また生れてまもない姪を置いてきたこと

を思いやって哀れになったりする一方で、立ち聞きやのぞき見する人の気配を気にして、そつとつつましくしていることにした。

e こんどは自分の部屋をもらってしばらく続けて仕えていたが、夜分に参上しても、見知らぬ人のあいだではほとんど眠ることもできず、忍び泣きしていて、明け方に自室に戻ってからも、老い衰えてゆく父親が自分を頼りにしていたことを思い出して慕わしくなり、また生れてからずつといっしよに暮らして来た姪たちのことを思いやって哀れになったりする一方で、立ち聞きやのぞき見する人の気配で気づまりになることもあった。

問5 二回目の宮仕えから帰宅したときの作者のようすはどのようなものだったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 両親は炭櫃に火などをおこして待っていたが、作者が車から下りてくるのを見て、「あなたがいらしたときは人の出入りもあり、供の者もひかえていたが、最近はだれもやって来ず心細かった。このように宮仕えなんかに出て、わたしをどうしようというのですか」と嘆くのを、作者は悲しく思った。翌朝になっても、「きょうはあなたがいるので、家の内外には人が多くいて、とてもにぎやかになったことです」というのを、作者はとてもかわいそうに思い、いったい私にどのような取り柄があるのだろうと、涙ぐましく聞いた。

b 両親は炭櫃に火などをおこして待っていたが、作者が車から下りてくるのを見て、「あなたの父親が出仕していらしたときは人の出入りもあり、供の者もひかえていたが、最近はだれもやって来ず心細かった。そのうえあなたまで宮仕えなんかに出て、わたしをどうしようというのですか」と嘆くのを、作者は悲しく思った。翌朝になっても、「きょうはあなたがいるので、家の内外には人が多くいて、とてもにぎやかになったことです」というのを、作者はとてもかわいそうに思い、いったい私にどんな頼りがいがあるのかと、涙ぐましく聞いた。

c 両親は炭櫃に火などをおこして待っていたが、作者が車から下りてくるのを見て、「あなたがつとめに出了らしたときは人の出入りもあり、供の者もひかえていたが、最近はだれもやって来ず心細かった。このように宮仕えなんかに出られたままで、わたしはどうすればよいというのですか」と嘆くのを、作者は悲しく思った。つとめにもどるときも、「きょうはあなたを見送るために、家の内外には人が多くいて、とてもにぎやかになったことです」というのを、作者はとてもかわいそうに思い、いったい私がどれほどはなやんでいるのかと、涙ぐましく聞いた。

d 両親は炭櫃に火などをおこして待っていたが、作者が車から下りてくるのを見て、「あなたの母親が出家なさる前は人の出入りもあり、供の者もひかえて

いたが、最近はだれもやって来ず心細かった。そのうえあなたまで宮仕えなんかに出て、わたしをどうしようというのですか」と嘆くのを、作者は悲しく思った。翌朝になっても、「きようはあなたがいるので、家の内外には人が多くいて、とてもにぎやかなことです」というのを、作者はとてもかわいそうに思い、いったい私がどれほどはなやいでいるのかと、涙ぐましく聞いた。

e 両親は炭櫃に火などをおこして待っていたが、作者が車から下りてくるのを見て、「あなたがいらしたときは人の出入りもあり、供の者もひかえていたが、最近はだれもやって来ず心細かった。このように宮仕えなんかに出て、わたしはどうすればよいのですか」と嘆くのを、作者は悲しく思った。つとめにもどるときも、「きようはあなたを見送るために、家の内外には人が多くいて、とてもにぎやかになったことです」というのを、作者はとてもかわいそうに思い、いったい私にどんな頼りがあるのかと、涙ぐましく聞いた。

問6 作者が見た夢とはどのようなものだったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 作者の前世は清水寺の僧で、しかも仏師として多くの仏像を造った功德によって、前世の僧侶姿を改めて、この世ではほかでもない人間として生まれ変わったのだ。死ぬ前に作りかけていた仏像があったが、前世の功德によって作者があの世界から金箔をはることができ、改めて供養することができたのだ、というお告げを夢で見た。

b 作者の前世は清水寺の僧で、しかも仏師として多くの仏像を造った功德によって、前世の僧という身分よりも、さらに高い家柄の人としてこの世に生まれ変わったのだ。死ぬ前に作りかけていた仏像があったが、それには別人によって金箔がはられ、さらにまた別人によって供養されたのだ、というお告げを夢で見た。

c 作者の前世は清水寺の僧で、しかも仏師として多くの仏像を造った功德によって、この世では、前世の家系とはまったく異なった人として生まれ変わったのだ。死ぬ前に作りかけていた仏像があったが、それには別人によって金箔がはられ、さらにまた別人によって供養されたのだ、というお告げを夢で見た。

d 作者の前世は清水寺の僧で、しかも仏師として多くの仏像を造った功德によって、前世の僧であった時よりも、もっと立派な仕事ができる人としてこの世に生まれ変わったのだ。死ぬ前に作りかけていた仏像があったが、前世の功德によって作者があの世界から金箔をはることができ、改めて供養することができ

きたのだ、というお告げを夢で見た。

e 作者の前世は清水寺の僧で、しかも仏師として多くの仏像を造った功德によって、前世の身分と同様、この世に人として生まれ変わったのだ。死ぬ前に作りかけていた仏像があったが、前世の功德によって、特別の技量をもった人が金箔をはって完成させたうえで、その人が作者のために供養してくれたのだ、というお告げを夢で見た。

問7 三回目の宮仕えとなる十二月二十五日、作者はどのように過ごしたのか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 十二月二十五日は祐子内親王家で催された御仏名に呼ばれたが、これが最後の夜だと思って参上した。自分を宮家に出仕の道を開いてくれた人の恩に報いるために、そっと顔を出したものの、明け方には退出した。雪が降っていて、とても冷たく冴えわたる明け方の月の光が着物の袖にほんのりと映っているようすを見るうち、思わず涙にくれてしまった。

b 十二月二十五日は祐子内親王家で催された御仏名に呼ばれたが、夜だけのお勤めだったので参上した。自分の人生の指針ともいうべき人に恩義があるので、そっと顔を出したものの、明け方には退出した。雪が降っていて、たいそう激しかったが、明け方の冷たい月の光が着物の袖にほんのりと映っているようすは、まるで涙にぬれているように見えた。

c 十二月二十五日は祐子内親王家で催された御仏名に呼ばれたが、その晩だけと違って参上した。自分の人生の指針ともいうべき人の手前、いたしかたなくそっと顔を出したものの、明け方には退出した。雪が降っていて、たいそう激しかったが、明け方の冷たい月の光が着物の袖にほんのりと映っているようすを見るうち、思わず涙にくれてしまった。

d 十二月二十五日は祐子内親王家で催された御仏名に呼ばれたが、その晩だけと違って参上した。自分を宮家に出仕の道を開いてくれた人の影に隠れてそっと顔を出したものの、明け方には退出した。雪が降っていて、とても冷たく冴えわたる明け方の月の光が着物の袖にほんのりと映っているようすは、まるで涙にぬれているように見えた。

e 十二月二十五日は祐子内親王家で催された御仏名に呼ばれたが、これが最後の夜だと思って参上した。自分の人生の指針ともいうべき人の影に隠れてそっ



と顔を出したものの、明け方には退出した。雪が降っていて、とても冷たく冴えわたる明け方の月の光が着物の袖にほんのりと映っているようすを見るうち、思わず涙にくれてしまった。

問8 出仕し始めたのち、作者はどのような境遇になったというのか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 宮仕えに出たからにはやめるわけにもいかず、仕事に慣れて、宮仕えの生活にとけこみ、かりに世間の俗事にまぎれていったとしても、ひねくれ者といううわさでも立たないかぎり、自ら進んでふつうの女房としてやっていたらだろうと、このまま宮仕えを続けるつもりだったのに、親たちは納得せず、まもなく私を結婚させてしまった。

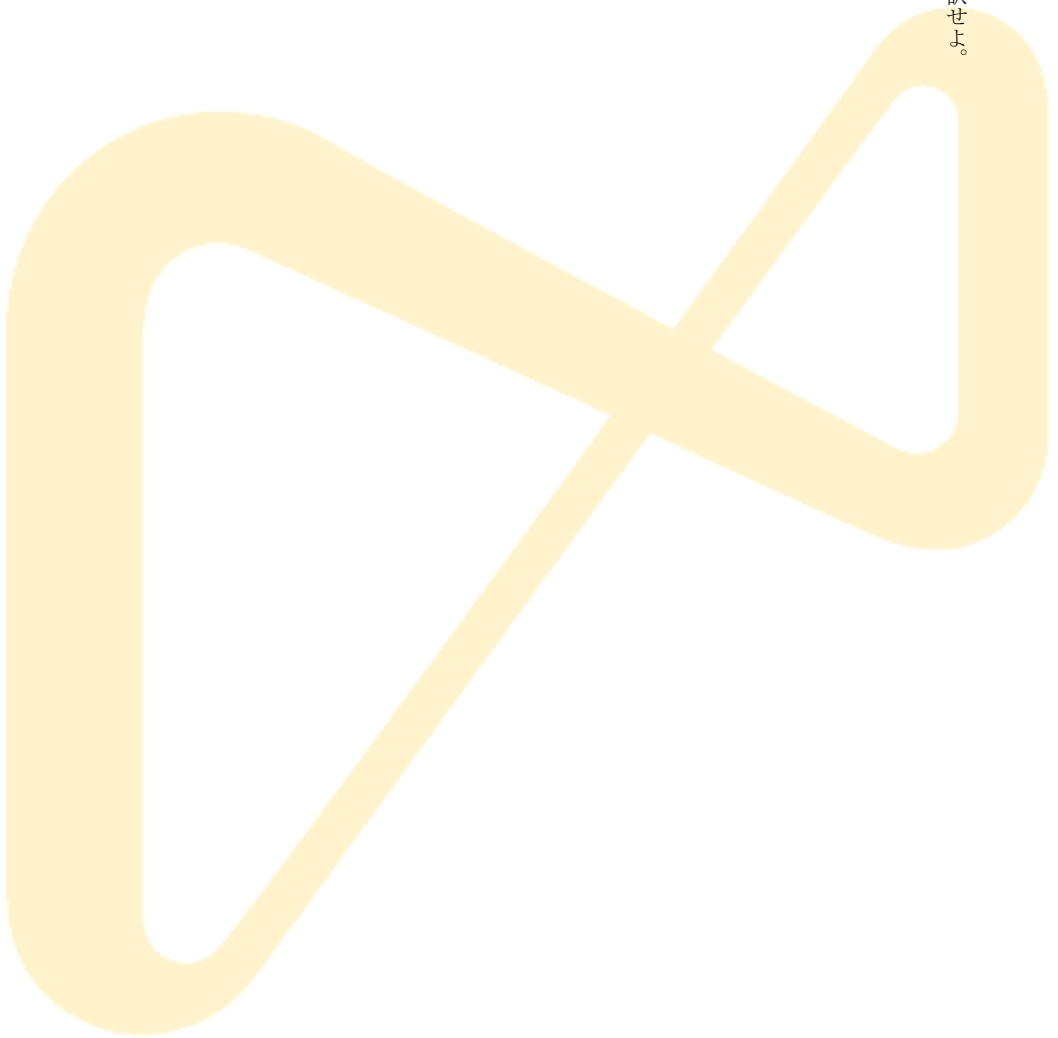
b いったん宮仕えに出たからには、仕事に慣れて、宮仕えの生活にとけこみ、かりに世間の俗事にまぎれていったとしても、ひねくれ者といううわさでも立たないかぎり、自然とふつうの女房として取りたてられるだろうと、このまま宮仕えを続けるつもりだったのに、親たちはどう考えたのか、まもなく私を結婚させてしまった。

c 宮仕えに出たからにはやめるわけにもいかず、仕事に慣れて、宮仕えの生活にとけこみ、かりに世間の俗事にまぎれていったとしても、いじめのようなつらい目にさえあわなければ、自然とけこんで一人前の人間として取りたてられるだろうと、このまま宮仕えを続けるつもりだったのに、親たちはどう考えたのか、まもなく私を結婚させてしまった。

d いったん宮仕えに出たからには、仕事に慣れて、宮仕えの生活にとけこみ、かりに世間の俗事にまぎれていったとしても、いじめのようなつらい目にさえあわなければ、自ら進んでふつうの女房としてやっていたらだろうと、このまま宮仕えを続けるつもりだったのに、親たちはどう考えたのか、まもなく私を結婚させてしまった。

e いったん宮仕えに出たからには、仕事に慣れて、宮仕えの生活にとけこみ、かりに世間の俗事にまぎれていったとしても、ひねくれ者といううわさでも立たないかぎり、自然と一人前の人間として取りたてられるだろうと、このまま宮仕えを続けるつもりだったのに、親たちは納得せず、まもなく私を結婚させてしまった。

問9 波線部(△)を現代語訳せよ。



長和五年、三条院が藤原道長の外孫である後一条天皇に譲位し、天皇の異母兄で、道長の血を引かない一宮敦明親王が東宮に立った。しかし、翌年、三条院が崩御されるとすぐに、東宮は退位を望むようになった。次の文章は、その時の状況を、世継の話を熱心に聞いていた侍が語る場面である。文章を読んで次の問いに答えよ。

\*<sub>1</sub>「この様<sup>やうだい</sup>は、三条院のおはしましけるかぎりこそあれ、うせさせたまひにける後は、世の常の東宮のやうにもなく、殿上人<sup>てんじやうびと</sup>まゐりて、御遊<sup>おぼ</sup>びせさせたまひや、もてなしかしづき申す人などもなく、いとつれづれに、まぎるるかたなく思<sup>おも</sup>し召<sup>め</sup>されけるまゝに、心やすかりし御有<sup>おん</sup>様のみ恋しく、ほけほけしきまでおぼえさせたまひけれど、三条院おはしましつるかぎりは、院の殿上人もまゐりや、御使もしげくまゐり通ひなどするに、人目もしげく、よろづ慰めさせたまふを、院うせおはしましては、世の中のものおそろしく、大路の道交ひも、いかがとのみわづらはしくふるまひにくきにより、\*<sub>2</sub>宮司<sup>みやづかさ</sup>などだにも、まゐりつかまつることもかたくなりゆけば、まして下衆<sup>げす</sup>の心はいかがはあらむ、\*<sub>3</sub>殿守司<sup>とのもりつかさ</sup>の下部<sup>しもべ</sup>、朝ぎよめつかうまつることなければ、庭の草もしげりまさりつつ、いとかたじけなき御すみかにてまします。まれまれまゐりよる人々は、世に聞こゆることとて、\*<sub>4</sub>三宮<sup>みやう</sup>のかくておはしますを、心ぐるしく\*<sub>5</sub>殿も\*<sub>6</sub>大宮<sup>みやう</sup>も思ひ申させたまふに、「もし\*<sub>7</sub>内に男宮も出でおはしましなば、いかがあらむ。さあらぬ先に東宮にたてたてまつらばや」となむ仰せらるなる。されば、おしてとられさせたまふべかんなり」などのみ申すを、まことにしもあらざらめど、げにことのさまも、よもとおぼゆまじければにや、聞かせたまふ御心地は、いとどうきたるやうに思し召されて、「ひたぶるにとられむよりは、我とや退<sup>の</sup>きなまし」と思し召すに、また、\*<sub>8</sub>高松殿<sup>たかまつどの</sup>の御匣<sup>みやげ</sup>殿<sup>どの</sup>まゐらせたまひ、殿はなやかにもてなしたてまつらせたまふべかなり」とも、例のことなれば、世人のさまざま定め申すを、\*<sub>9</sub>皇后宮<sup>こうごうみやう</sup>聞かせたまひて、いみじう喜ばせたまふを、東宮は、「いとよかるべきことなれど、さだにあらば、いとどわが思ふことえせじ、なほかくてえあるまじく」思されて、御母宮に、「しかじかなむ思ふ」と聞こえ申させたまへば、「さらなりや、いといとあるまじき御ことなり。御匣<sup>みやげ</sup>殿<sup>どの</sup>の御ことこそ、まことならば、すすみ聞こえさせたまはめ。さらにさらに思しよるまじきことなり」と聞こえさせたまひて、「御物<sup>もの</sup>の怪<sup>け</sup>のするなり」と、御祈りどもせさせたまへど、さらに思しとどまらぬ御心のうちを、いかでか世人も聞きけむ、「さてなむ、「御匣<sup>みやげ</sup>殿<sup>どの</sup>まゐらせたまつりたまへ」とも聞こえさせたまふべかなる」などいふこと、殿の辺にも聞こゆれば、「あまことごとく思しゆるまじきたまはせば、いかがすへからむ」など思す。

さて東宮はつひに思し召したちぬ。「後に御匣殿の御ことも言はむに、なかなかそれはなぞかなからむ」など、よきかたさまに思しなしけむ、不覚のとなりや。皇  
后宮にもかくとも申したまはず、ただ御心のままに、殿に御消息聞こえむと思し召すに、むつまじうさるべき人もものしたまはねば、\*10。中宮権大夫殿のおはし  
ます四条坊門と西洞院とは宮近きぞかし、そればかりを、「こと人よりは」とや思し召しよりけむ、藏人なにがしを御使にて、「あからさまにまゐらせたまへ」  
とあるを、思しもかけぬことなれば、おどろきたまひて、「なにしに召すぞ」と問ひたまへば、「申させたまふべきことのさぶらふにこそ」と申すを、「この聞こゆる  
ことどもにや」と思せど、「退かせたまふことは、さりとともよにあらじ。御匣殿の御ことならむ」と思す。いかにもわが心一つには、思ふべきことならねば、「おどろ  
きながらまゐりさぶらふべきを、おどろに案内申してなむさぶらふべき」と申したまひて、まづ、殿にまゐりたまへり。「東宮よりしかじかなむ仰せられたる」と申し  
たまへば、殿もおどろきたまひて、「何事ならむ」と仰せられながら、大夫殿と同じやうにぞ思しよらせたまひける。「まことに御匣殿の御ことのたまはせむを、いな  
び申さむも便なし。まゐりたまひなば、また、さやうにあやしくはあらせたまつるべきならず。また、さては世の人の申すなるやうに、東宮退かせたまはむの御思  
ひあるべきならずかし」とは思せど、「しかわざと召さむには、いかでかまゐらではあらむ。いかにも、のたまはせむことを聞くべきなり」と申させたまへば、まゐら  
せたまふほど、日も暮れぬ。

注

(『大鏡』による)

- \* 1 ことの様体Ⅱ敦明親王が東宮を退位した事情。
- \* 2 宮司Ⅱ東宮に関する諸事を司る東宮坊の役人。
- \* 3 殿守司Ⅱここでは東宮坊の下部組織。
- \* 4 三宮Ⅱ一条院の第三皇子敦良親王。後一条天皇の弟。母は藤原道長の娘、彰子。道長の孫にあたる。
- \* 5 殿Ⅱ藤原道長。
- \* 6 大宮Ⅱ一条院の後で、藤原道長の娘、彰子。
- \* 7 内Ⅱ後一条天皇。三宮敦良親王の兄にあたる。

\* 8 高松殿の御匣殿Ⅱ高松殿は道長の第二夫人明子。御匣殿はその娘寛子。

\* 9 皇后宮Ⅱ三条天皇皇后城子。藤原濟時の娘。東宮、敦明親王の母親で、本文では「御母宮」とも。

\* 10 中宮権大夫Ⅱ藤原道長の四男能信。ここの中宮は、東宮敦明親王の母親城子。

問1 三条院が亡くなってからの東宮の生活は、どのようなものであったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 三条院が亡くなってからは、普通の東宮のように、殿上人がやってきては管弦の遊びをしたり、大切にもてなし、お世話申し上げたりするので、退屈なことは何一つなかったが、かつてともに過ごし心を許した女性が恋しく思われて、それだけが唯一の気がかりにお思いになっておられた。

b 三条院が亡くなってからは、普通の東宮のように、殿上人がやってきて遊びに連れだしたり宴会を開いてもなしたりしてくれたが、そのような遊びはすべて退屈なものに過ぎず、気のまぎれるようなことはなかったので、かつて一緒に遊んだ女性の細やかな心遣いが恋しく思われて、ぼんやりとその女性のことを思い出す日々であった。

c 三条院が亡くなってからは、普通の東宮とはちがって、殿上人がやってきて遊びに連れだしたりすることや宴会を開いてもなしたりすることもなく、たいそう退屈なのだが、さりとて気をまぎれさせる方法もわからず、心おきなく遊ぶことのできた以前の生活が恋しく思われ、現在の生活にはただ気が滅入るばかりであった。

d 三条院が亡くなってからは、普通の東宮とはちがって、殿上人がやってきて管弦の遊びをしたり、大切に面倒を見たりお世話申し上げたりする人もいなくなり、たいそう退屈で、気のまぎれる方法もみあたらず、東宮に立つ以前のただの親王時代の気楽な生活を恋しく思っ**て**、ただ**ぼうぜん**としておられた。

e 三条院が亡くなってからは、普通の東宮とはちがって、殿上人がやってきて管弦の遊びをしたり、宴会を開いてもなしたりする人もいなくなり、とても退屈で、気のまぎれるような**で**きことがないまま、ただ、かつてだれにも気兼ねすることなく宴会などの遊びができたころが恋しく思われ、もう一度そんな日々に戻りたいもの**だ**と思われた。

問2 三条院が亡くなってからの東宮御所のようすは、どのようなものであったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 三条院が亡くなる前は人の出入りも多く、なにごとにつけ心が慰められていたが、三条院が亡くなってからは、人々が敬遠して近づくことがなくなり、物の怪さえも出没しかねない状態で、朝の掃除をする役人もいなくなったので、庭も荒れはてて、およそ東宮の御所としてはふさわしくないようすであった。
- b 三条院が亡くなる前は人の出入りも多く、なにごとにつけ心が慰められていたが、三条院が亡くなってからは、人々が大路から宮のようすをのぞき見たり、その前で立ち止まりはするものの、参上してお仕えしたり、朝の掃除をする人もなく、庭も荒れ放題で、およそ東宮の御所としてはふさわしくないようすであった。

- c 三条院が亡くなる前は人の出入りも多く、なにごとにつけ心が慰められていたが、三条院が亡くなってからは、物の怪が出没したり、大路を騒ぎながら過ぎていく人がいたりして、宮の警備も難しくなり、朝の掃除さえできない状態で庭も荒れはてて、およそ東宮の御所としてはふさわしくないようすであった。

- d 三条院が亡くなる前は人の出入りも多く、なにごとにつけ心が慰められていたが、三条院が亡くなってからは、人々が敬遠して近づくことがなくなり、東宮に仕える役人たちできえ、おそばに参上することも難しくなり、下役人が朝の掃除をすることも途絶えたので、庭も荒れはてて、およそ東宮の御所としてはふさわしくないようすであった。

- e 三条院が亡くなる前は人の出入りも多く、なにごとにつけ心が慰められていたが、三条院が亡くなってからは、誰もたずねてこなくなったばかりか、東宮の身の回りの世話をしたり、朝の掃除をしたりする役人までもすっかりいなくなったので、庭も荒れはてて、およそ東宮の御所としてはふさわしくないようすであった。

問3 三宮についてのうわさを聞いた東宮の気持ちはどのようなものであったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 三宮の祖父である道長たちが、後一条天皇に男子ができる前に三宮を東宮に立てたいといっており、自分は無理やり東宮の位を退かせられるといううわさに対して、本当とは思えないけれども、そうならないともいえないような状況であるので、とても不安に思われた。

問4

御匣殿のうわさを聞いて東宮はどのように思ったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- b 三宮の祖父である道長たちが、もし後一条天皇に男子ができればすぐに新しい東宮に立て、後一条天皇の譲位をまって自分を帝位に推すつもりだといっているとのうわさに対して、本当とは思えないけれども、もしそうならばようやく自分の望みがかなうと、とてもうきうきした気分になった。
- c 三宮の祖父である道長たちが、後一条天皇に男子ができる前に三宮を東宮に立てたいといっており、その代わり自分は無理やり東宮の位を退かせられるといううわさに対して、本当にそうになったら、望み通りこの位を辞退できてうれしいのにと、とても喜ばしい気分になった。
- d 三宮の祖父である道長たちが、もし後一条天皇に男子ができればすぐに三宮を東宮に立て、後一条天皇を退位させて自分を帝位につけてしまおうといっているとのうわさに対して、本当にそうなりそうな状況なので、できることなら帝位にだけはつきたくない、いっそうかたくなな気分になった。
- e 三宮の祖父である道長たちが、後一条天皇に男子ができる前に三宮を東宮に立てたいといっており、自分は無理やり東宮から退けられるといううわさに対して、本当とは思えないし、状況もそのように思われないので、そうしたことは口さがない単なるうわさにすぎないと気にとめないでいた。
- a 道長が、娘である御匣殿を東宮と結婚させようとしているといううわさを聞いて、皇后宮はたいそう喜ばれたが、東宮は、大変いいことのようにみえるが、これは道長の策略であり、このままでいられるはずがないと思った。
- b 道長が、娘である御匣殿を東宮と結婚させようとしているといううわさを聞いて、皇后宮はたいそう喜ばれたが、東宮は、皇后宮は大変いいことのようにお思いだが、そうになったら自分は東宮のままではいられないし、皇后宮もこのままではいられないにちがいないと思った。
- c 道長が、娘である御匣殿を東宮と結婚させようとしているといううわさを聞いて、皇后宮はたいそう喜ばれたが、東宮は、大変いいことのようにみえるが、そんなことになれば、東宮の位を退くことができただけでなく、今までのような生活はできなくなると思った。
- d 道長が、娘である御匣殿を東宮と結婚させようとしているといううわさを聞いて、皇后宮はたいそう喜ばれたが、東宮は、大変喜ばしいことであり、そうなってくれたら本望だが、決してそう思い通りにはならないだろうと思った。
- e 道長が、娘である御匣殿を東宮と結婚させようとしているといううわさを聞いて、皇后宮はたいそう喜ばれたが、東宮は、皇后宮は大変いいことのように

お思いだが、自分は心に決めた別の女性と結婚したいので、この話为实现しないほうが良いと思った。

問5 東宮の望みを聞いた皇后宮はどのように答えたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 当然のことです。帝位につくのを辞退するなどというのは、とんでもないことです。御匣殿のことが本当なら、どんどん話を進めなさいませ。帝位につくのを辞退しようなどと、ゆめゆめお考えになるべきではありません、と答えた。
- b 言うまでもないことです。東宮の位を退くなどというのは、とんでもないことです。御匣殿のことが本当なら、進んでお返事なさいませ。東宮を辞退しようなどと、ゆめゆめお考えになるべきではありません、と答えた。

- c そういうことです。東宮の位を退かせられるなどというのは、とんでもないことです。御匣殿のことが本当なら、進んでお返事なさいませ。東宮の位を退かせられるなどと、ゆめゆめお考えになるべきではありません、と答えた。

- d 当たり前のことです。帝位につこうなどというのは、とんでもないことです。御匣殿のことが本当なら、進んでお断りなさいませ。帝位を望もうなどと、ゆめゆめお考えになるべきではありません、と答えた。

- e そうでしょうか。御匣殿を妻にできるなどというのは、ありえないことです。御匣殿のことを本気にして、進んで話を進めることはなさいませ。縁談が本当だと、ゆめゆめお考えになるべきではありません、と答えた。

問6 退位を思い立った東宮は、まずどうしたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 母である皇后宮には何も言わないで、ただ自分の考えだけで、道長に手紙を出そうとしたが、届けてくれる人も思い浮かばなかったので、東宮の近くに住んでいた藏人に使いを頼んだ。

- b 母である皇后宮には何も言わないで、ただ自分の考えだけで、道長に事情を申し入れようとしたが、親しい人で、間にはいつてくれる人もいなかったの  
で、中宮権大夫に仲介を頼もうとした。



- c 母である皇后宮には何も言わないで、ただ自分の考えだけで、中宮権大夫に手紙を出そうとしたが、親しい人で、手紙を届けてくれる人が思い浮かばなかった。お側に仕える蔵人に頼んで届けてくれる人を探してもらった。
- d 母である皇后宮には何も言わないで、ただ自分の考えだけで、中宮権大夫に事情を申し入れようとしたが、親しい人で、間にはいつてくれる人も思い浮かばなかった。近くに住んでいる蔵人を使いにして、申し入れた。
- e 母である皇后宮には何も言わないで、ただ自分の考えだけで、道長に手紙を出そうとしたが、近くに住んでいる人で、間にはいつてくれる人もいなかった。知り合いの中宮権大夫に使いを頼んだ。

問7 東宮からの呼び出しに、中宮権大夫はどうしたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 「東宮を辞退なさることは、まさかないだろう。御匣殿のことだろう」と思い、きつと自分の思い通りにはいかないだろうから、父道長の力を借りようとした。
- b 「東宮を辞退なさることは、まさかないだろう。御匣殿のことだろう」と思い、それなら自分一人で決めてもよかったのだが、とりあえず父道長に東宮のところへ行くべきかどうかの判断を仰ぐことにした。
- c 「東宮を辞退なさることは、まさかないだろう。御匣殿のことだろう」と思い、どうして自分一人だけに相談するのかと不審に思い、父道長に報告してからうかがおうとした。
- d 「東宮を辞退なさることは、まさかないだろう。御匣殿のことだろう」と思い、きつと御自分だけでお考えになったことだろうから、父道長にも知らせておこうとした。
- e 「東宮を辞退なさることは、まさかないだろう。御匣殿のことだろう」と思い、自分だけの判断ではなんともできないので、父道長にまず相談してからうかがおうとした。

問8 中宮権大夫の報告に、道長はどう答えたか。最も適当なものを選択肢より一つ選び、その記号をマークせよ。

a 「御匣殿の縁談のことなら、御断り申すわけにもいくまい。御匣殿が東宮のもとに参られたなら、東宮を今のようにならぬままにはできない。となると、東宮を辞退なさろうなどとはお思いにならないだろう」と、具合悪く思ったが、「このようにお召しがあるからには、参上しないわけにはいくまい。どんなお話であろうと、お考えをお聞きするべきである」と答えた。

b 「御匣殿の縁談のことなら、御断り申すわけにもいくまい。中宮権大夫が東宮のもとに参ったなら、このまま縁談を引き延ばすことはできない。となると、東宮を辞退させることもできなくなる」と、具合悪く思ったが、「このようにお召しがあるからには、参上しないわけにはいくまい。どんなお話であろうと、お考えを聞いて来なさい」と答えた。

c 「御匣殿の縁談のことなら、御断り申すわけにもいくまい。私自身が東宮のもとに参ったなら、このままの状態ではしばらく引き延ばすことができるだろう。となると、東宮を辞退なさろうなどとはお思いにならないだろう」と、うれしく思って、「このようにお召しがあるからには、参上しないわけにはいくまい。どんなお話なのか、私がお考えを聞きに参上しよう」と答えた。

d 「御匣殿の縁談のことなら、御断り申すわけにもいくまい。中宮権大夫が東宮のもとに参ったなら、東宮のみすばらしい生活をそのままにはできないだろう。となると、東宮はその位を辞退したいなどとは思われなくなる」と、具合悪く思ったが、「このようにお召しがあるからには、御匣殿を差し上げないわけにはいくまい。どんなお話なのか、私がお考えを聞きに参上しよう」と答えた。

e 「御匣殿の縁談のことなら、御断り申すわけにもいくまい。御匣殿が東宮のもとに参られたなら、東宮は今のようなみすばらしい生活は続けられないだろう。となると、私の思惑どおり退位なさるだろう」とうれしく思って、「このようにお召しがあるからには、御匣殿を差し上げないわけにはいくまい。どんなお話であろうと、お考えをお聞きするべきである」と答えた。

問9 波線部(△)を現代語訳せよ。

今は亡き大納言(問題文中では「大納言」「故大納言」)には、二人の娘がいた。母も亡くして心細い思いで暮らす姫君たちのうちの姉(同じく「姫君」「君」)のとこ  
ろに、右大将(同じく「右大将」「父殿」「大将の君」)の息子の少将(同じく「少将」)が通うようになった。問題文はその場面であるが、読んで後の問いに答えよ。

昔物語などにぞ、かやうのことは聞こゆるを、いとありがたきまで、あはれに浅からぬ御契りのほど見えし御事を、つくづくと思ひつづくれば、年の積りにけるほど  
も、あはれに思ひ知られけむ。

大納言の姫君、二人ものしたまひし、まことに物語に書きつけたるありさまに劣るまじく、何事につけても生おひ出でたまひしに、故大納言も母上も、うちつづきかく  
れたまひにしかば、いと心細きふるさとに、ながめ過したまひしかど、はかばかしく御乳母めいだつ人もなし。ただ、常に候まをらふ侍従、弁などいふ若き人びとのみ候へば、  
年に添へて人目まれにのみなり行くふるさとに、いと心細くておはせしに、右大将の御子の少将、知るよしありて、いとせちに聞こえわたりましたまひしかど、かやうの筋  
は、かけても思おぼし寄らぬことにて、御返事かへりごとなど思しかげざりしに、少納言の君とて、いといたう色めきたる若き人、何のたよりもなく、\*<sub>1</sub>二所御とのごもりたる所  
へ、導ききこえてけり。もとより御志ありけることにて、\*<sub>2</sub>姫君をかき抱きて、\*<sub>3</sub>御帳の内へ入りたまひにけり。思しあきたるさま、例のことなれば書かず。

おしはかりたまひにしも過ぎて、あはれに思さるれば、うち忍びつつ通ひたまふを、\*<sub>4</sub>父殿聞きたまひて、「人のほど、くちをしかるべきにはあらねど、何かは、い  
と心細き所に」など、許しなくのたまへば、思ふほどにもおはせず。△君もしはしこぞ忍しのび過すしたまひしか。さすがにさのみはいかかおはせむ。さるべきに思し慰  
めて、やうやううちなびきたまへるさま、いとどらうたく、あはれなり。昼など、おのづから寝過したまふ折、見たてまつりたまふに、いとあてに、らうたく、うち見  
るより心苦しきさましたまへり。

何事もいと心憂うれく、人目稀まれなる御住ひに、人の御心もいとたのみがたく、いつまでとのみながめられたまふに、四、五日いぶせて積りぬるを、「思ひしことかな  
と心細きに、御袖ただならぬを、われながら、いつ習ひけるぞと思ひ知られたまふ。

人ごころ秋のしるしのかなしきにかれ行くほどのけしきなりけり

「など手習に馴れにし心なるらむ」などやうに、うちなげかれて、やうやう更け行けば、ただ、うたたねに御帳の前にうち臥ふしたまひにけり。

少将、内裏うちより出でたまふとおはして、うち叩たたきたまふに、人びとおとろきて\*<sub>6</sub>中の君起したてまつりて、わが御方へ渡しきこえなどするに、やがて入りたまひて、\*<sub>6</sub>大将の君の、あながちにいざなひたまひつれば、\*<sub>7</sub>初瀬へ参りたりつるほどのことなど語りたまふに、ありつる御手習のあるを見たまひて、

ときはなる軒のしのぶを知らずしかれ行く秋のけしきと思ふ

と書きそへて見せたてまつりたまへば、いと恥づかしくて、御顔引き入れたまへるさま、いとらうたく児こめきたり。

(『堤中納言物語』「思はぬ方にとまりする少将」による)

#### 注

- \* 1 二所||姉の姫君と妹の姫君。
- \* 2 姫君||姉の姫君のこと。
- \* 3 御帳||御帳台の略で、寝所のこと。
- \* 4 父殿||少将の父である右大将。
- \* 5 中の君||妹の姫君。
- \* 6 大将の君||少将の父である右大将のこと。
- \* 7 初瀬||長谷寺のこと。奈良県桜井市の初瀬にある。

問1 右大将の息子の少将から求婚された時、姉の姫君はどのような反応を示したか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 姫君は、このような冗談めいたことには、まったく慣れてもいなかったため、少将に対して返事などをしようとは思ひもなかった。
- b 姫君は、このような色めかしい方面のことは、全然考えてもみなかったため、少将に対して返事などをしようとは思ひもなかった。

- c 姫君は、このような人の縁談を世話するということは、今まで経験したこともなかったので、少将に対して返事などをしようとは思いませんでした。
- d 姫君は、このような道義に反するようなことは、これまで想像もしなかったため、少将に対して返事などをしようとは思いませんでした。
- e 姫君は、このような真面目くさったことは、ほとんど聞いたことがなかったため、少将に対して返事などをしようとは思いませんでした。

問2 少将が、故大納言の娘である姉の姫君のもとに通っていることを知った右大將は、少将に対してどのようにいったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 容貌や態度に文句があるというわけではないが、なんだって、あんなたよりない状態で暮らしている女のもとに通うのか、と右大將はいった。
- b 礼儀作法といった面で問題があるというわけではないが、なんだって、あんなたよりない状態で暮らしている女のもとに通うのか、と右大將はいった。
- c 妹の姫君の性格に難点があるというわけではないが、なんだって、あんなたよりない状態で暮らしている女のもとに通うのか、と右大將はいった。
- d 身分や家柄に不足があるというわけではないが、なんだって、あんなたよりない状態で暮らしている女のもとに通うのか、と右大將はいった。
- e 父親の生前の活躍にもつたりない面があるというわけではないが、なんだって、あんなたよりない状態で暮らしている女のもとに通うのか、と右大將はいった。

問3 姉の姫君と一緒に昼まで寝過ごした折に、少将が見た姫君はどのような様子をしていたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 少将が見た姫君というのは、たいそう美しく、しかも恥ずかしがりやであり、一目見るだけで、いかにもいじらしいような様子をしていた。
- b 少将が見た姫君というのは、たいそうおっとりとしていて、しかももの静かであり、一目見るだけで、いかにもいじらしいような様子をしていた。
- c 少将が見た姫君というのは、たいそう上品で、しかも可憐かれんであり、一目見るだけで、いかにもいじらしいような様子をしていた。
- d 少将が見た姫君というのは、たいそう幼げで、しかもかわいらしく、一目見るだけで、いかにもいじらしいような様子をしていた。
- e 少将が見た姫君というのは、たいそう気位が高く、しかも上品でいて、一目見るだけで、いかにもいじらしいような様子をしていた。

問4 少将の訪れが四、五日なかった折、姉の姫君はどのように思ったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 姫君は「やはり思ったとおりだ」と心細く感じるにつけても、袖が大変寒くてたまらず、われながら、いつこんな習慣が身に付いてしまったのか、と思わずにはいられなかった。

b 姫君は「やはり思ったとおりだ」と心細く感じるにつけても、袖が涙でひどく濡れるのを、われながら、いつこんな習慣が身に付いてしまったのか、と思わずにはいられなかった。

c 姫君は「やはり思ったとおりだ」と心細く感じるにつけても、袖を合わせて伏し拝み、われながら、いつこんな習慣が身に付いてしまったのか、と思わずにはいられなかった。

d 姫君は「やはり思ったとおりだ」と心細く感じるにつけても、袖が窮屈でしかたがなく、われながら、いつこんな習慣が身に付いてしまったのか、と思わずにはいられなかった。

e 姫君は「やはり思ったとおりだ」と心細く感じるにつけても、袖をかきあわせて、われながら、いつこんな習慣が身に付いてしまったのか、と思わずにはいられなかった。

問5 姉の姫君が詠んだ和歌の説明として、最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 和歌の大意は「あなたが心変わりし、私のもとから足が遠のいていくのは悲しいことですね」というもので、「秋」と「飽き」、「枯れ」と「離れ<sup>か</sup>」がともに掛詞となっている。

b 和歌の大意は「私が心変わりし、あなたのもとから足が遠のいていくのは残念なことですか」というもので、「人ごころ秋のしるしのかなしきに」までが「かれ行く」を導きだすための序詞となっている。

c 和歌の大意は「あなたが心変わりし、私のもとから足が遠のいていくのはしかたのないことですね」というもので、「離れ」と掛詞になっている「枯れ」

は「しるし」の縁語である。

d 和歌の大意は「あなたが心変わりし、私のもとから足が遠のいていくのは悲しいことですね」というもので、本来なら冒頭に来るはずの「かれ行くほどのけしきなりけり」が後に位置する倒置法の構文である。

e 和歌の大意は「私が心変わりし、あなたのもとから足が遠のいていくのはしかたのないことですね」というもので、「人ごころ」は「秋」にかかる枕詞である。

問6 内裏から退出した少将が姉の姫君の邸にやってきた時、少将と邸の人びとはどうしたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 少将が門をたたくと、女房たちは目をさまし、妹の姫君を起こして自分の部屋へ連れて行ったところ、少将もそのまま妹の姫君の部屋へ入っていった。

b 少将が女房のひとりの肩をたたくと、まわりの女房たちもびっくりし、あわてて妹の姫君を起こして自分の部屋へ連れて行ったところ、少将はそのまま姉の姫君の部屋に入ってしまった。

c 少将が女房のひとりの肩をたたくと、まわりの女房たちも目をさまし、妹の姫君を自分の部屋へ連れて行ったところ、少将もそのまま妹の姫君の部屋へ入っていった。

d 少将が門をたたくと、女房たちは目をさまし、妹の姫君を起こして自分の部屋へ連れて行ったところ、少将はそのまま姉の姫君の部屋に入ってしまった。

e 少将が門をたたくと、女房たちはびっくりし、あわてて妹の姫君を起こして自分の部屋へ連れて行ったところ、少将はそのまま姉の姫君の部屋に入ってしまった。

問7 姉の姫君のもとをしばらく訪れることができなかった理由として、少将は何と説明したか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 少将は、父親の右大将に強引に誘われて長谷寺に参詣していたために、しばらく姫君のもとを訪れることができなかった、と説明した。

b 少将は、父親の右大将と一緒に長谷寺に参詣したが、父親がいつまでも長谷寺にいたがったために、しばらく姫君のもとを訪れることができなかった、と

説明した。

c 少将は、父親の右大将がよかったら一緒に長谷寺に参詣しないかと誘ってくれたために、しばらく姫君のもとを訪れることができなかった、と説明した。

d 少将は、父親の右大将を強引に誘って長谷寺に参詣していたために、しばらく姫君のもとを訪れることができなかった、と説明した。

e 少将は、父親の右大将に長谷寺に参詣することを強引に誘われたが、それを断るのに時間がかかり、しばらく姫君のもとを訪れることができなかった、と説明した。

問8 姉の姫君の手習を見て少将が詠んだ和歌の内容と、それを見た姉の姫君の反応はどのようなものであったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 和歌は、「私がすでに心変わりしているのに、あなたはそれも知らなかったのですか」というもので、それを見た姉の姫君は、恥ずかしさのあまり顔を袖に引き入れたが、その様子が気の毒なほど子供っぽかった。

b 和歌は、「あなたがすでに心変わりしているのに、私はそれを知らなかった」というもので、それを見た姉の姫君は、恥ずかしさのあまり顔を袖に引き入れたが、その様子がいかにもおさなげであった。

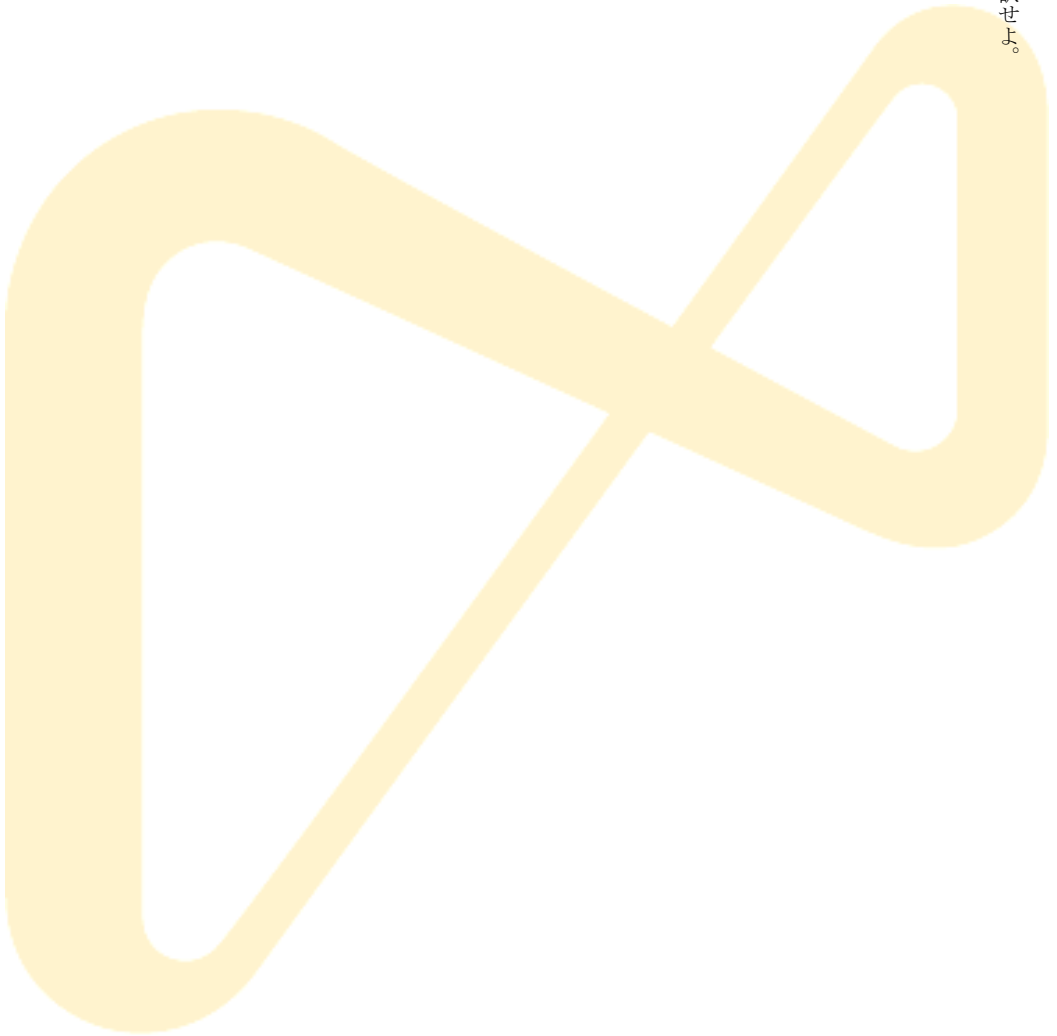
c 和歌は、「私がすでに心変わりしているのに、あなたはもう気づいていたのですか」というもので、それを見た姉の姫君は、恥ずかしさのあまり顔を袖に引き入れたが、その様子が素直で子供っぽかった。

d 和歌は、「あなたがすでに心変わりしているのに、私がそれに気づかなかったとも思っているのですか」というもので、それを見た姉の姫君は、恥ずかしさのあまり顔を袖に引き入れたが、その様子はしらしらしく幼稚なものであった。

e 和歌は、「私の心は変わらないのに、私が心変わりしたとあなたは思ったのですか」というもので、それを見た姉の姫君は、恥ずかしさのあまり顔を袖に引き入れたが、その様子がたいそう可憐でういししかった。



問9 波線部(△)を現代語訳せよ。



左大臣には兄妹の二人の子どもがあった。入内させようと大切にしていた妹の姫君(問題文中では「女御」)が風邪で清水寺に参詣するのだが、心配な父、左大臣は、兄の中将(物語の主人公。同じく「御兄、中将殿」「中将殿」)を遣いに参らせる。中将はそこで、急な時雨に雨宿りする姫君(女主人公。同じく「姫君」)に出会う。本文はその出会いの場面であるが、読んで、後の問いに答えよ。

さて二三日にもなりければ、おぼつかなしとて、御兄、中将殿を清水へ遣り参らせたまひけり。<sup>\*1</sup>紅葉落葉の狩衣に御仮粧ありて、やがて<sup>\*2</sup>先がけ、侍、御隨身召し具して清水の西門へ入らせたまへば、参り下向の輩、目を驚かして見たてまつるに、<sup>\*3</sup>女御の御心のおぼつかなくいかがおぼしければ、「侍ども、とくとく」とて、面々急ぎ召し具して堂の辺をさざめきて上りたまふ。折節、にわか空曇り風吹きて、はしたなき時雨する。参り下向の数多きなかに、年のほど十五六ばかりなる姫君ののめならずうつくしき、女房達四五人してぬらさじと立ち隠す。中将殿、これを御覧じて、わがささせたまひたる御傘、<sup>\*4</sup>六位の進にておくらる。姫君、こはいかにおおほしめして見上げたまひつる御目のうちのけたかさ、あくまで愛敬がましくうつくしくぞおはしける。

さて、姫君は本堂の東の縁に立たせたまひて、「今は御傘参らせよ」と仰せける。中将殿はぬれながら御傘待ち得させたまひて、「この人々はいづくにぞ」と問はせたまへば、「いまだあれに立たせたまひて候ふ」と申せば、やがて人を遣はせて見せられけれども、おはせざりけり。さて、女御の御心地、別の事に渡らせたまはねば、やがて御下向あるけれども、傘さしておくりつる人の事、御心にかかりければ、「今宵はこれに通夜せん」とて仏の御前にあくがれ居たまひけり。尋ねん方も覚えず、せん方もなければ、ただつくづくと眺めのみせられて、局に入りたまひたれども、静心なかりけり。

さる程に、隣の局に人の籠りてゆゆしく忍びたるよそほひなりければ、怪しくてここかしこより覗きたまへば、内には几帳を引かれたり。見るべきやうもなかりけるに、柱の節抜けの穴のありけるに紙を丸めて押し支ひたり。引き抜きて見たまへば、傘さしておくりし人なり。見るに胸うち騒ぎて覗き入りて見たまへば、時雨にぬれたる装束を脱ぎ置きて干し散らし、姫君は綾羅の紫の衾引きて寄り臥したまへり。四十ばかりなる女房の清げなるが御側にさし寄りて、巻貝磨りたる硯の蓋にいろいろの果物どもを調べて、「これこれ」と勧めけれども、姫君は御目をも懸けられず。ゆゆしげなる気色にて、いかに申せども答へたまはねば、この女、申すや

う、「例の、また、むつかしや。御覧じ入れさせたまへかし。よろづ御心苦しくこそ候へ。(さあはれ御親に添ひ参らせたまひて候はば、今かかる端近き御歩きなどよもあらじ。この精進のついでに賀茂へも参らばやと思ふに、かやうにくたびれさせたまひてはいかがせん」とぞ申しける。また、若き女二人、さし寄りて申すやう、「生まれさせたまひてより後は、今日こそ始めてかち歩き。仏もいかばかりいとほしく御覧ずらむ」と、かやうに面面に申しけれども、姫君は寄り臥してくたびれたまへる御気色、なのめならずぞうつくしき。

さて、日も暮れなんとす。「参りを始めばや」とて、十二三ばかりなるま。上童を一人御伽に置いて、女房四五人うち連れて拝礼しにぞ出でにけり。その時中将殿、よき暇かなと嬉しくおぼしめして、紅葉襲の薄様の、殊に匂ひ深きに文を書きて遣りたまふ。詞なくして、

たまほこの道行ぶりに見るよりも契りは深き物と知らずや

と、かやうに書きて隨身を召して、「これ、並びの局へ参らせよ」とて賜びにけり。さてまた中将殿は覗きたまふに、隨身遣戸をほとほと叩けば、「誰やらん」と出でたるに、「時雨の雨の時、御傘参らせたまへる人の文にて候。参らせたまへ」と申せば、上童取りて内へ入り、「御傘の主の文なり」とて参らせけり。姫君起きたまひて、「その文持て」とて持たせて、中をば開けずしてつくづくと御覧じて、「人違へにてぞあるらむ。思ひも寄らぬ事なり」とて、御手をも触れず、「物の主に取らせよ」とて返されたまひ、隨身「情けなし」と申せば、「さらば文を取りたらんところへ捨てよ」と仰せられければ、立ち出でて、雨落ちにうち捨つる。その上は力なくして取りて帰りぬ。中将殿、いかがせんぞおぼしける。

## 注

- \* 1 紅葉落葉の狩衣 紅葉や落葉の模様を織りだした狩衣。狩衣は貴族の平服。
- \* 2 先がけ、侍、御隨身 それぞれ、行列を騎馬で先導する者、貴人の身边を世話する者、貴人の外出の際に警護する者。
- \* 3 女御 天皇の後の名称のひとつ。ここでは入内前の、中将の妹の姫君のこと。
- \* 4 六位の進 中将の侍の呼び名。
- \* 5 上童 ここでは姫君に仕える少女。

( ) 『しぐれ』より

問1 左大臣に遣わされて清水寺に向かう中将殿のようすはどのようだったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 清水寺に遣わされた中将殿は、身支度や供の者の準備に手間取り、しばらくしてから仰々しい行列で出かけ、往来を行き交う人々が右往左往するような事態となった。

b 清水寺に遣わされた中将殿は、行列を整えてあわただしく出かけたところ、何事が起つたのかと、かえって妹の姫君一行を不安がらせるという事態となった。

c 清水寺に遣わされた中将殿は、顔や身なりをうつくしくととのえて、供の者を大勢従えた仰々しい行列を仕立てたため、参詣する人々は驚いて目を見張ってしまふという事態となった。

d 清水寺に遣わされた中将殿は、少人数だがいかめしい行列を整えて出かけたので、清水寺に参詣していた人々はその行列のものしさに驚いて、早々に帰ってしまうという事態となった。

e 清水寺に遣わされた中将殿は、一人で目立たない身なりにやつし、供の者も従えず、ひそかに寺を訪れたので、事情を知らない人々は、最初はだれが来たのかわからないという事態となった。

問2 急に時雨が降ってきたとき、中将殿はどうしたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 多くの参詣人にまぎれていた十五、六歳のうつくしい姫君を、四、五人の女房たちがぬらさないように隠していたところ、中将殿の供の侍がこのようすを告げたので、その者がさしていた傘を姫君に貸してさしあげるよう命じたところ、これを見上げた姫君のかわいらしくもまたうつくしい姿を目にした。

b 多くの参詣人にまぎれていた十五、六歳のうつくしい姫君を、四、五人の女房たちがぬらさないように隠していたところ、中将殿がこのようすを見て、自分がかさしていた傘を直接貸してあげようとなさったとき、これを見上げた姫君のかわいらしくもまたうつくしい姿を目にした。

c 多くの参詣人にまぎれていた十五、六歳のうつくしい姫君を、四、五人の女房たちがぬらさないように隠していたところ、中将殿がこのようすを見て、供の者がかさしていた傘を、姫君に仕えている別の女房を通じて貸してあげようとしたとき、これを見上げた姫君のかわいらしくもまたうつくしい姿を目にし

た。

d 多くの参詣人にまぎれていた十五、六歳のうつくしい姫君を、四、五人の女房たちがぬらさないように隠していたところ、中将殿がこのようすを見て、自分がさしていた傘を、供の侍を通じて貸してあげようとしたとき、これを見上げた姫君のかわいらしくもまたうつくしい姿を目にした。

e 多くの参詣人にまぎれていた十五、六歳のうつくしい姫君を、四、五人の女房たちがぬらさないように隠していたところ、中将殿が、自分がさしていた傘を、中将を案内していた寺僧を通じて貸してあげようとしたとき、これを見上げた姫君のかわいらしくもまたうつくしい姿を目にした。

問3 姫君の一行に傘を貸し与えたのち、事態はどうなったのか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 姫君の一行に傘を貸し与えたのち、中将殿は雨にぬれながら、貸した傘が返されてきたとき、「傘を貸した者たちはどこにいるのか」と尋ねると、まだそこに立っているというので、すぐに見にやらせたところ、すでにその場所にはいなかったが、中将殿は、傘を貸した姫君のことが気がかりだったので、寺で一夜を明かすことになった。

b 姫君の一行に傘を貸し与えたのち、中将殿は雨にぬれながら、貸した傘が返されてきたとき、「傘を貸した者たちはどこにいるのか」と尋ねると、まだそこに立っているというので、すぐに供の者に見にやらせたところ、すでにその場所にはいなかった。一方、姫君のほうもだれが傘を貸してくれたのかわからなかったのち、その正体が知りたくて寺で一夜を明かすことになった。

c 姫君の一行に傘を貸し与えたのち、中将殿は雨にぬれながら、貸した傘が返されてきたとき、「傘を貸した者たちはいったいどこに行ったのか」と尋ねると、まだそこに立っているというので、すぐに見にやらせたところ、すでにその場所にはいなかったが、中将殿は、妹の姫君のようすが気になって、寺で一夜を明かすことになった。

d 姫君の一行に傘を貸し与えたのち、中将殿は雨にぬれながら、貸した傘が返されてきたとき、「傘を貸しに行った者たちはどこにいるのか」と尋ねると、まだそこに立っているというので、すぐに使いの者をやったところ、すでにその場所からどこかへ行ってしまったようで、その者たちを探すうちに夜になってしまい、中将殿はやむをえず寺で一夜を明かすことになった。

e 姫君の一行に傘を貸し与えたのち、中将殿は雨にぬれながら、貸した傘が返されてきたとき、「傘を貸した者たちはどうしているか」と尋ねると、まだそこに立っているというので、すぐに見にやらせたところ、すでにその場所にはいなかったが、中将殿は、姫君の兄君から派遣された使者だということを口実にして、寺で一夜を明かすことになった。

問4 姫君の一行が清水寺に参籠<sup>ろう</sup>しているとき、中将殿はどうしたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 中将殿は、隣の局に誰か参籠している気配がするので気になって覗こうとしたが、局の内側には目隠しの布がところどころに引きめぐらしてあり、すこし見通しが悪かったので、柱の節の穴に貼られた紙の札をはがして、そこから中のようすをうかがった。

b 中将殿は、隣の局に参籠している人に、寺僧が参籠の規則を告げているのが聞こえてきたので、気になって覗こうとしたが、局の周囲が目隠しの布で覆われていて見るすべもなかったので、柱の節の穴をふさいでいる紙を引きぬいて、そこから中のようすをうかがった。

c 中将殿は、隣の局に上品な女性が参籠している気配なので、気になって覗こうとしたが、局の内部は間仕切りの布が垂れ下げてあり、まったく見通しがきかなかったため、紙でふさがれている柱の節の穴を見つけ、その紙をはがして、そこから中のようすをうかがった。

d 中将殿は、隣の局にいる人が他の参詣の人々を避けているような気配なので、気になって覗こうとしたが、局には目隠しの布が引きめぐらしてあり、見られることをひどくいやがっているようなので、柱の節にむりやり穴をこじあけて、そこから局のようすをうかがった。

e 中将殿は、隣の局に誰か人目を避けて参籠している気配がするので、気になって覗こうとしたが、局には部屋を仕切る布が目隠しのようになめぐらしてあり、見るすべもなかったため、柱の節の穴をふさいでいる紙を引きぬいて、そこから局のようすをうかがった。

問5 参籠する姫君のようすに対して、女房たちはどういったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 姫君が、時雨にぬれた衣装を脱いで、夜具に寄りかかって伏せっいらっしやったところ、女房が巻き貝をすりだした硯箱のふたに菓子や果物を置いて勧めたのだが、姫君は目もくれず嫌そうなようすでもおっしやらないので、女房は、「またいつものわがままがはじまった、もう何も申し上げません」

といった。

b 姫君が、時雨にぬれた衣装を脱いで、夜具に寄りかかって伏せっていらっしやったところ、女房が巻き貝をすりだした硯箱のふたに菓子や果物を置いて勧めたのだが、姫君は目もくれず嫌そうなようすでもおっしゃらないので、女房は、「またいつもの気ふさがはじまった、せめて私たちの苦勞をご理解くださってもよいのに」といった。

c 姫君が、時雨にぬれた衣装を脱いで、夜具に寄りかかって伏せっていらっしやったところ、女房が巻き貝をすりだした硯箱のふたに菓子や果物を置いて勧めたのだが、姫君は目もくれず嫌そうなようすで、女房がどのように申し上げても返事すならないので、女房は、「またいつものように面倒なことがなつた、召し上がってくださいませ」といった。

d 姫君が、時雨にぬれた衣装を脱いで、夜具に寄りかかって伏せっていらっしやったところ、女房が巻き貝をすりだした硯箱のふたに菓子や果物を置いて勧めたのだが、姫君は目もくれず嫌そうなようすなので、女房はうとましく思い、「またいつもの不機嫌がはじまった、たまには私たちに気をつかって召し上がってくださいばよいのに」といった。

e 姫君が、時雨にぬれた衣装を脱いで、気分が悪いといって夜具に寄りかかっておられたので、女房が巻き貝をすりだした硯箱のふたに菓子や果物を置いて勧めたのだが、姫君は目もくれず、返事するのめげだるそうになさるので、女房は、「雨にぬれたせいで、また風邪がぶり返しなされたのでしょう」といった。

問6 夕暮れときに、姫君一行のようすを見て、中將殿はどうしたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 日も暮れかかって、参拝をはじめようというので、幼いために参拝できない少女だけをのこして、姫君と女房たちは連れだつて礼拝に出て行ったそのすきに、中將殿はちょうどよい機会だと喜んで、上品な香りをたきこめた美しい薄手の紙に手紙を書いて送ろうとした。

b 日も暮れかかって、参拝をはじめようというので、お仕えの少女一人を姫君の話し相手にのこして、女房たちは連れだつて礼拝に出て行ったそのすきに、中將殿はちょうどよい機会だと喜んで、紅葉の色を重ね合わせた、とりわけ美しい薄手の紙に手紙を書いて送ろうとした。

- c 日も暮れかかって、参拝をはじめようというので、お仕えの少女一人を案内に先立てて、女房たちは連れだつて礼拝に出て行ったそのすきに、中将殿はちょうどよい機会だと喜んで、香り高い美しい薄手の紙に手紙を書いて送ろうとした。
- d 日も暮れかかって、参拝をはじめようというので、姫君は、お仕えの少女一人を局の留守番にのこして、女房たちを伴つて礼拝に出て行ったそのすきに、中将殿はちょうどよい機会だと喜んで、紅葉のように色とりどりの紙を貼りませた美しい薄手の紙に手紙を書いて送ろうとした。
- e 日も暮れかかって、参拝をはじめようというので、お仕えの少女数人を姫君の世話係にのこして、女房たちは連れだつて礼拝に出て行ったのと入れ違いに、先に参拝をすませた中将殿は、紅葉をかたどつた金箔を貼り付けた美しい薄手の紙に手紙を書いて送ろうとした。

問7 中将殿は、「たまぼこの」という和歌にどのような恋心を託したのか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 手紙に歌だけを書きつけて送って、寺に来る道すがらお姿をお見かけして、たちまちあなたの美しさにとりこになって、ふたりの縁を思わずにはおれませんでした、という恋心をうたった。
- b いきなり歌を送つてこられて、ことばをなくしてしまつたのですが、寺に来る道の途中ですれ違つたお方があなただとわかつて、あなたとの縁がこれほど深いものとは思ひもかけないことでした、という恋心をうたった。
- c なんの前書きもつけずに歌だけを書きつけて送って、寺に来る道すがら遠目にお見かけしたときよりも、こうしておそばでお見受けするといっそう美しく見え、あなたとの縁がこんなにも急に進展するとは思ひもかけないことでした、という恋心をうたった。
- d なんの前書きもつけずに歌だけを書きつけて送って、寺にお参りする道すがらお見かけしてからというもの、あなたとの縁が前世からの深いものだったのだとお思ひになりませんか、という恋心をうたった。
- e 直接お話しすることがかなわないので、歌を送ることしかできないのですが、あなたは多くの参詣者のなかで、だれよりも美しいので、たちまち心ひかれることになってしまいました、という恋心をうたった。



問8 和歌を送られた姫君は、そのあとどうしたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 使いの者から、時雨が降ってきたとき傘を差し出した人からの手紙だと告げられて、姫君はものも言わずそれを見ていたが、「きつと人違いです、無礼は許しません」と言つて、手紙に触れようともせず、使いの者に返そうとしたが、使いの者が「それでは私が困ります」と言つて受け取ろうとしないので、使いの者に「それなら捨ててしまいなさい」と命じて、軒下を流れる雨水にうち捨てさせた。

b 使いの者から、時雨が降ってきたとき傘を差し出した人からの手紙だと告げられて、姫君はその手紙を取り次いだ上童にそれを持たせたまま手紙を開けもせずじつと見ていたが、「きつと人違いです、思い当るところがありません」と言つて、手紙に触れようともせず、使いの者に返すように上童に指示したが、使いの者が「つれないことです」と言つて受け取ろうとしないので、上童に「それなら捨ててしまいなさい」と命じて、軒下の雨の落ちるところにうち捨てさせた。

c 使いの者から、時雨が降ってきたとき傘を差し出した人からの手紙だと告げられて、姫君は使いの者に持たせたまましばらくじつと見ていたが、「きつと人違いです、思いもよらぬ失礼なことです」と言つて、手紙に触れようともせず、使いの者に持ち帰るように指示したが、使いの者は無礼にも姫君の指示に従わないので、姫君はそばにいた女房に「それなら捨ててしまいなさい」と命じて、軒下の雨の落ちるところにうち捨てさせた。

d 使いの者から、時雨が降ってきたとき傘を差し出した人からの手紙だと告げられて、姫君は、取り次いだ上童に持たせたまましばらくじつと見ていたが、「きつと人違いです、思い当るところがありません」と言つて、手紙に触れようともせず、女房に返すように指示したが、あきれたことに使いの者が持ち帰ることを拒んだので、姫君は「それなら捨ててしまいなさい」と女房に命じて、軒下の雨の落ちるところにうち捨てさせた。

e 使いの者から、時雨が降ってきたとき傘を差し出した人からの手紙だと告げられて、姫君は手紙を開けもせずしばらくじつと見ていたが、「きつと人違いです、思い当るところがありません」と言つて、手紙に触れようともせず、手紙の主に戻すように使いの者に指示したが、「そんな無愛想な」と言つて受け取ろうとしないので、上童に「それなら捨ててしまいなさい」と命じて、軒下にたまった雨水にうち捨てさせた。

問9 波線部(△)を現代語訳せよ。



光源氏(問題文中では「君」)は、かつてふとしたことから立ち寄った紀伊守の邸で出会った空蟬(問題文中では「女」)という女性に、今一度会うことを願っているが、なかなかそれを果たせないでいる。問題文はその場面であるが、読んで後の問いに答えよ。

例の、内裏に日教経たまふころ、\*<sub>1</sub>さるべき方の忌み待ち出でたまふ。にはかに\*<sub>2</sub>まかでたまふまねして、道のほどよりおはしましたり。\*<sub>3</sub>紀伊守おどろきて、\*<sub>4</sub>遣水の面目とかしこまり喜ぶ。\*<sub>5</sub>小君には、昼より「かくなむ思ひよれる」とのたまひ契れり。明け暮れまつはし馴らしたまひければ、今宵もまづ召し出でたり。女も、さる御消息ありけるに、思したばかりつらむほどは、浅くしも思ひなされねど、さりとして、うちとけ、人げなきありさまを見えたてまつりても、あぢきなく、夢のやうにて過ぎにし嘆きをまたや加へむと思ひ乱れて、なほさて待ちつけきこえさせむことのまばゆければ、小君が出でていぬるほどに、「いとけ近ければかたはらいたし。なやましければ忍びて\*<sub>6</sub>うち叩かせなどせむに、ほど離れてを」とて、\*<sub>7</sub>渡殿に、\*<sub>8</sub>中将といひしが、局したる隠れに移ろひぬ。

さる心して、人とく静めて御消息あれど、小君は尋ねあはず。よろづの所求め歩き、渡殿に分け入りて、からうじてたどり来たり。いとあさましくつらしと思ひて、「いかにかひなしと思さむ」と泣きぬばかり言へば、「かくけしからぬ心ばへはつかふものか。幼き人のかかること言ひ伝ふるは、いみじく思むなるものを」と言ひおどして、「心地なやましければ、人びと避けず\*<sub>9</sub>押さへさせてなむ」と聞こえさせよ。あやしと誰も誰も見らむ」と言ひ放ちて、心のうちには、いとかく品定まりぬる身のおぼえならで、過ぎにし親の御けはひとまれるふるさとながら、たまさかにも待ちつけたてまつらば、をかしようもやあらず、(△)しひて思ひ知らぬ顔に見消つも、いかにほど知らぬやうに思すらむ、と心ながらも胸いたく、さすがに思ひ乱る。とてもかくても、今は言ふかひなき宿世なりければ、\*<sub>10</sub>無心に心づきなくやみなむ、と思ひはてたり。

君はいかにたばかりなさむと、まだ幼きをうしろめたく待ち臥したまへるに、\*<sub>11</sub>不用なるよしを聞こゆれば、あさましくめづらかなりける心のほどを、「身もいと恥づかしくこそなりぬれ」と、いといとほしき御気色なり。とばかりものたまはず、いたくうめきてうしと思したり。

「\*<sub>12</sub>帚木の心を知らで園原の道にあやなくまどひぬるかな

聞こえむ方こそなけれ」とのたまへり。女も、さすがにまじろまざりければ、

「数ならぬ伏屋ふせやに生ふる名のうさにあるにもあらず消ゆる帯木」

と聞こえたり。小君、いといとほしさに、眠たくもあらでまどひ歩くを、人あやしと見るらむと、わびたまふ。

例の、人びとはいぎたなきに、一所すずろにすさまじく思しつづけらるれど、人に似ぬ心さまのなほ消えず立ちのぼれりけると、ねたく、かかるにつけてこそ心もとまれと、かつは思しながら、めざましくつらければ、\*<sub>3</sub>さばれと思せども、さも思しはつまじく、「隠れたらむ所になほ率ひて行け」とのたまへど、「いとむつかしげにさし籠こめられて、人あまはべるめれば、かしこげに」と聞こゆ。いとほしと思へり。「よし、あこだにな棄すてそ」とのたまひて、御かたはらに臥ふせたまへり。若くなつかしき御ありさまを、うれしくめでたしと思ひたれば、つれなき人よりはなかなかあはれに思さるとぞ。

注

(『源氏物語』「帯木」による)

\* 1 さるべき方の忌みい空蟬のいる紀伊守の邸に出かける口実となるような方忌み。

\* 2 まかでたまふまねしてい妻の葵上の住む左大臣邸に行くふりをして。

\* 3 紀伊守い伊予介の子。空蟬は伊予介の後妻で、紀伊守には年の若い継母にあたる。

\* 4 遣水の面目い以前、源氏が紀伊守邸に来た折、庭の遣水をほめたことがあったらしい。

\* 5 小君い空蟬の弟。  
\* 6 うち叩かせい腰などを叩かせ。

\* 7 渡殿い屋根付きの廊下。  
\* 8 中将い空蟬の女房。

\* 9 押さへさせてい身体をもませて。  
\* 10 無心い情けがないこと。

\* 11 不用なるよしい役に立たなかつたむね。

\* 12 帯木の：い「園原や伏屋に生ふる帯木のありとて行けど逢はぬ君かな」の歌をふまえる。なお、「園原」も「伏屋」も長野県の地名。「帯木」は木の名前。

\* 13 さばれいどうにでもなれ。

問1 光源氏から手紙をもらった空蟬は、どのように思ったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 工夫をしてわざわざ来られた光源氏の熱意のほどは浅くはないと思うものの、さりとして、心を許して人並の姿をお目にかけても、楽しい夢のように過ぎ去ったあの夜の嘆きをまた繰り返し返すことになるのだろうかと思った。

b 工夫をしてわざわざ来られた光源氏の熱意のほどは浅くはないと思うものの、さりとして、意思に反してみすばらしい姿をお目にかけても、むなし夢のように過ぎ去ったあの夜の嘆きをまた繰り返し返すことになるのだろうかと思った。

c 工夫をしてわざわざ来られた光源氏の熱意のほどは浅くはないと思うものの、さりとして、心を許してみすばらしい姿をお目にかけても、美しい夢とともに過ぎ去ったあの夜の嘆きをまた繰り返し返すことになるのだろうかと思った。

d 工夫をしてわざわざ来られた光源氏の熱意のほどは浅くはないと思うものの、さりとして、心を閉ざしたままみすばらしい姿をお目にかけても、はかない夢のように過ぎ去ったあの夜の嘆きをまた繰り返し返すことになるのだろうかと思った。

e 工夫をしてわざわざ来られた光源氏の熱意のほどは浅くはないと思うものの、さりとして、心を許してみすばらしい姿をお目にかけても、やるせなく、夢のように過ぎ去ったあの夜の嘆きをまた繰り返し返すことになるのだろうかと思った。

問2 空蟬はどのような口実をもうけて中将の部屋に逃れたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 光源氏のいる所がたいそう近いからはずかしい。残念だけれど、こっそりと腰などを叩かせたりしたいから、もっと離れた所に行きたい、という口実をもうけた。

b 光源氏のいる所がたいそう近いから具合が悪い。疲れたので、こっそりと腰などを叩かせたりしたいから、もっと離れた所に行きたい、という口実をもうけた。

c 光源氏のいる所がたいそう近いから具合が悪い。迷った拳句のことが、こっそりと腰などを叩かせたりしたいから、もっと離れた所に行きたい、という

口実をもうけた。

d 光源氏のいる所がたいそう近いからはずかしい。小君には悪いけれど、こっそりと腰などを叩かせたりしたいから、もつと離れた所に行きたい、という口実をもうけた。

e 光源氏のいる所がたいそう近いから具合が悪い。たどり着けるかどうかかわからないが、こっそりと腰などを叩かせたりしたいから、もつと離れた所に行きたい、という口実をもうけた。

問3 空蟬の居場所を探しあてた小君に対して、空蟬は何といったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a このように光源氏に対して不都合な考えを持つとは何事ですか。幼い人がこんなことを取り次ぐのは、ひどく慎まなければならないことなのに、といった。

b このように私にとって不都合な考えを持つとは何事ですか。幼い人がこんなことを聞きかじってくるのは、ひどく慎まなければならないことなのに、といった。

c このように私にとって不都合な考えを持つとは何事ですか。幼い人がこんなうわさを広めたりするのは、ひどく慎まなければならないことなのに、といった。

d このように私にとって不都合な考えを持つとは何事ですか。幼い人がこんなことを取り次ぐのは、ひどく慎まなければならないことなのに、といった。

e このようにあなたにとって不都合な考えを持つとは何事ですか。幼い人がこんなことを取り次ぐのは、ひどく慎まなければならないことなのに、といった。

問4 光源氏と会うのを拒否した空蟬だが、内心では、どのようなことを思っていたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a このように身分の決まってしまった境遇ではなく、亡くなった親の面影の残っている生まれ故郷で、しばしば光源氏が来るのを待つのであったら、どんな

にか幸せだろうに、と内心では思った。

b このように身分の決まってしまった境遇ではなく、年老いた親の面影が残っている実家で、時々でもいいから光源氏が来るのを待つのであったら、どんなにか幸せだろうに、と内心では思った。

c このように身分の決まってしまった境遇ではなく、亡くなった親の面影が残っている実家で、たまにでもいいから光源氏が来るのを待つのであったら、どんなにか幸せだろうに、と内心では思った。

d このように身分の決まってしまった境遇ではなく、亡くなった親の兄弟が暮らしている生まれ故郷で、たまにでもいいから光源氏が来るのを待つのであったら、どんなにか幸せだろうに、と内心では思った。

e このように身分の決まってしまった境遇ではなく、年老いた親の面影が残っている実家で、たまにでもいいから光源氏が来るのを待つのであったら、どんなにか幸せだろうに、と内心では思った。

問5 自分の願いがかなわなかったことを小君から聞いた光源氏が空蟬に贈った和歌は、どのような内容であったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 帯木のように、近寄ってみると消えてしまうあなたの気持ちも知らずに近づこうとして、あやうく園原の道に迷ってしまうところでした。

b 帯木のように、近寄ってみると消えてしまうあなたの気持ちを知りたくて近づいたところ、とうとう園原の道に迷ってしまったことですよ。

c 帯木のように、近寄ってみると消えてしまうあなたの気持ちを知ってからというもの、わけもわからず園原の道に迷ってしまったことですよ。

d 帯木のように、近寄ってみると消えてしまうあなたの気持ちはどうしてもいやになって、どうにかこうにか園原の道に迷わずにすみませう。

e 帯木のように、近寄ってみると消えてしまうあなたの気持ちも知らずに近づこうとして、わけもわからず園原の道に迷ってしまったことだなあ。

問6 光源氏から和歌を贈られた空蟬は、どのような内容の和歌を返したか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 取るにたりない伏屋に生えるという帚木、そんな帚木という名前がうれしくて、じっとしていることができずに、姿を消してしまいたいと思っている、そんな私なのです。
- b 取るにたりない伏屋に生えるという帚木、そんな帚木という名前がいやなので、いるにいられずに、姿を消してしまう、そんな私なのです。
- c 取るにたりない伏屋に生えるという帚木、そんな帚木という名前が悲しくて、もともといなかったかのように、姿を消してしまふ、そんな私なのです。
- d 取るにたりない伏屋に生えるという帚木、そんな帚木という名前がなつかしくて、いてもたってもいられずに、姿を消してしまふ、そんな私なのです。
- e 取るにたりない伏屋に生えるという帚木、そんな帚木という名前が腹立たしくて、とうていがまんがでせずに、姿を消してしまふ、そんな私なのです。

問7 空蟬の和歌に接して、光源氏はどのように思ったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a 空蟬の気強さが、消えるどころか立ちのぼるばかり気位高く保たれているのだと思うと、それがいまいましく、また、だからこそ心ひかれるのだと思うた。
- b 空蟬の気強さが、消えるどころか立ちのぼるばかり気位高く保たれているのだと思うと、それがいたましく、また、だからこそそいつい同情したくなるのだと思うた。
- c 空蟬の気強さが、消えるどころか立ちのぼるばかり気位高く保たれているのだと思うと、それがうれしく、また、だからこそ冷静さを失ってしまうのだと思うた。
- d 空蟬の気強さが、消えるどころか立ちのぼるばかり気位高く保たれているのだと思うと、それが不思議で、また、だからこそ心が迷ってしまうのだと思うた。
- e 空蟬の気強さが、消えるどころか立ちのぼるばかり気位高く保たれているのだと思うと、それが腹立たしく、また、だからこそにくらしくなるのだと思うた。



問8

空蟬のいるところに手引きするように光源氏からいわれた小君は、何と答えたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a たいそう危険な雰囲気の所に引きこもっていて、しかも、人がおおぜいいるようですから、あなたさまをお連れするのは、大変心配なことでございます、と答えた。

b たいそうわかりづらい所に引きこもっていて、しかも、人がおおぜいいるようですから、あなたさまをお連れするのは、ためられることでございます、と答えた。

c たいそう気味わるい所に引きこもっていて、しかも、人がおおぜいいるようですから、あなたさまをお連れするのは、気が進まないでございます、と答えた。

d たいそう寂しげな所に引きこもっていて、しかも、人がおおぜいいるようですから、あなたさまをお連れするのは、気がとがめることでございます、と答えた。

e たいそうむさ苦しそうな所に引きこもっていて、しかも、人がおおぜいいるようですから、あなたさまをお連れするのは、おそれおおいことでございます、と答えた。

問9

波線部(△)を現代語訳せよ。

中納言の北の方は、まま子落窪の君(物語の女主人公。問題文中では「君」「女君」)に、狭い部屋をあてがい、みずばらしい身なりをさせ、また、実の娘の婿たちの装束を急いで縫わせたりなど、冷淡に遇っていた。その北の方が石山寺に参詣に出かけた留守に、左大将の息子、右近の少将(物語の男主人公)が落窪の君のもとに通信した。その二日目の夜をむかえようとしているところから問題文は始まる。読んで後の問いに答えよ。

さて、\*<sub>1</sub>あこぎ、ただひとりして、言ひ合はずべき人もなければ、心一つを千々になして、立ち居つる。おましどころの塵ちり払ひ、そそくりて、屏風びやうぶ、几帳きちやうなければ、しつらひなさむ方もなし。いとわりなけれど、君は物もおぼえて臥ふしたまへるを、おまし直さむと引き起こしたてまつれば、おもて赤みて、げに苦しげなるまで御目も泣き腫はれたまへり。いとほしうあはれにて、「御髪みくしかきくだしたまへ」と、\*<sub>2</sub>おとなおとなしうつくろへど、「心こゝろ悪あし」とて、ただ臥ふしに臥ふしぬ。この君は、いささか、よき御調度てうど持たまへりける。母君の御物なりけり。鏡などもなむ、まめやかに美しげなりける。「これをだに持たまへらざらましかば」と言ひて、かきのごひて、枕上に置く。かく大人おとなになり、童わらわになり、ひとりいそぎ暮らしつ。

今はおはしぬらむとて、「かたじけなくとも、まだいたう身にも馴なれはべらず。いとほしう、昨夜よべをだに、さて見えたてまつりたまひけむを」とて、おのが袴はかまの、二たびばかり着て、いと清きよげなる\*<sub>3</sub>宿直物とくのあもの一つを持もたりけるを、いと忍しのびて奉るとても、「いと馴なれ馴なれしうはべれども、また見知る人のはべらばこそあらめ。いかがはせむ」と言へば、かつは、恥ちづかしけれど、今宵こよひさへ同じやうにて見えむことを、わりなく思ひつるに、あはれにて、着たまひつ。「薰物たきは、この\*<sub>4</sub>御裳もせ着に賜たまはせたりしも、ゆめばかり包み置きてはべり」とて、いとかうばしう薰たきにほはず。三尺の御几帳た一つはいるべかめる、いかがせむ、たれに借らまし、御宿直物もいと薄うすきを、思ひまはして、\*<sub>5</sub>叔母おばの殿とのばら、宮仕へしけるが、今は和泉いづみの守かみの妻めにてあたりけるが、文ふみやる。「とみなることにて、とどめはべりぬ。恥ちづかしき人の、方違かたがたがへに曹司そうしにもしたまふべきに、几帳きちやう一つ、さては宿直物に、人のかうものする、便びんなきは出いだしはべらじと思ひはべりてなむ。さるべきやはべる。賜たまはせてむや。折々は、あやしきことなれど、とみにてなむ」と、はしり書きてやりたれば、「△首くびつれたまはぬをこそ、いと心憂こころをく思ひたまふれ。何も何も、なほのたまはむとのたまへれば、よろづとどめつ。いとあやしけれど、おのが着むとて、したりつるなり。さはしも、ものしたまふらむ。几帳きちやう奉る」とて、\*<sub>6</sub>紫苑色しをんいろの張綿はりわたなど、お

こせたり。いとうれしきこと限りなし。取り出でて見せたてまつる。

几帳の紐ひもときおろすほどに、\*<sub>7</sub>君おはしたれば、入れたてまつりぬ。\*<sub>8</sub>女、臥したるが、うたておほゆれば、起くれば、「苦しうおぼえたまはむに、何か起きたまふや」とて、とく臥したまひぬ。今宵は袴きぬもいとかうばし、袴きぬも衣ひとへも単ひとへもあれば、例の人心ちしたまうて、男もつつましからず臥したまひぬ。今宵はときどき御いらへしたまふ。いと世になう、あるまじうおぼえたまひて、よろづに語らひたまふほどに、夜も明けぬ。

「御車率みて参りたり」と申せば、「今雨やめて。しばし待て」とて臥したまへれば、あこき、\*<sub>9</sub>御手水、粥かゆいかで参らむと思ひて、\*<sub>10</sub>御厨子みづしにや語らはましと思へど、大方にもおはしまさねば、御粥もよにせじと思へど、行きて語らふ。「\*<sub>11</sub>帯刀たちはきの友だちなむ、昨夜の言はむとて来たりしを、雨にとまりてまだ帰らぬに、粥食はせむと思ふをなむ、なくて。\*<sub>12</sub>土器かはらけ少し賜へ。さては\*<sub>13</sub>引干ひきほしなどや残りたる。少し賜へ」と言へば、「あないどほし。心いそぎを、かうしてしたまふがいとほしき。帰らせたまはむ料に、今少しあらむ」と言へば、「帰りたまはむには、\*<sub>14</sub>御としみをぞしたまはむ」とて、けしきよろしと見て、かたはらなる瓶子へいじをあけて、ただ取りに取るを、「少しは残したまへ」と言へば、「さよさよ」と言ひて、紙に取り分けて、炭とりに入れて、ひき隠して持て行きて、\*<sub>15</sub>つゆに「御粥いとよくして持て来よ」とて、をかしげなる御台あり求め歩く。御手水参らむと求め歩きて、「御方には、いくくの\*<sub>16</sub>半插はぎふ、鹽たらひかあらむ。\*<sub>17</sub>三の御方さんのを取り持て来て御前に参らむ」とて、頭かしらかいくだしなどしてあたり。

女君は、わりなう苦しと思ひ臥したまへり。あこき、いと清さうぞげに装束さうぞきて、帯ゆるるかにかけて参る後姿うしろで、髪たけ丈に三尺ばかり余りて、いとをかしげなりと、帯刀も見送る。「この御格子は参らでやあらむずる」と、ひとりごととして参るを、少将の君もゆかしうて「いと暗し。上げよ」とのたまふめり」とのたまへば、物踏み立てて上げつ。男君起きたまひて、御装束したまひて、「車はありや」と問ひたまふ。「御門かどにはべり」と申せば、出でたまひなむとするに、いと清さうぞげにて御粥参りたり。御手水取り具して参りたり。「あやしう。便なしと聞きしほどよりは」と思おぼす。女君は、「いとあやしう、いかで」と思おぼひたまへり。

注

\* 1 あこき 落窪の君にただひとり仕える女の童。

\* 2 おとなおとなしう 大人びて分別ありげで、の意。

(『落窪物語』による)

- \* 3 宿直物||宿直の時に用いる、衣、袴、夜具の類のこと。ここでは袴。
- \* 4 裳着||これ以前に、中納言と北の方との娘、三の君の裳着(女性の成人式)があった。
- \* 5 叔母の殿ばら||あこき叔母。
- \* 6 紫苑色||襲の色目で、表は薄紫、裏は青。ここでは夜具の色。
- \* 7 君||右近の少将のこと。
- \* 8 女||落窪の君のこと。
- \* 9 御手水、粥||洗面の水と朝食。
- \* 10 御厨子||台所。ここでは台所の下働きの女。
- \* 11 帯刀||あこきの夫。
- \* 12 土器||素焼きの土器。ここでは転じて酒のこと。
- \* 13 引干||海藻を干したものの、酒飯の菜に常用された。
- \* 14 御としみ||寺社に参詣を終えた後に行く精進落しのこと。
- \* 15 つゆ||召使いの童女の名。
- \* 16 半插、盥||湯や水を注ぐ道具と手や顔を洗うときに用いる器。
- \* 17 三の御方||中納言と北の方との娘、三の君のこと。

問1 右近の少将が通い始めて二日目に、あこきはどのようにしたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

- a あこきは、相談すべき人が外出してしまったので、ただひとり心を悩ませて、落窪の君の御座所の屏風や几帳を整えたりと忙しく立ち働いたが、しよせんひとりではすべてを仕上げることができないので途方に暮れてしまった。
- b あこきは、ただひとりで落窪の君のために掃除をしたり洗濯をしたりなど、さまざまに心を砕き、屏風や几帳などを整えて立ち働いたが、肝心の落窪の君が何もしないので途方に暮れてしまった。
- c あこきは、落窪の君に相談しても答えてくれないので、自分一人の判断で、御座所のしつらえから衣装の用意など、さまざまに心を砕いて忙しく立ち働いたが、すべてをそろえることができないので途方に暮れてしまった。
- d あこきは、自分ひとりで何ごとも整えなければならぬのを不満に思いながらも、すべては落窪の君のためと思い直して、御座所をしつらえようと忙しく

立ち働いたが、屏風や几帳が整えられないので途方に暮れてしまった。

e あこきは、相談する人もないので、ただひとり落窪の君のためにさまざまに心を砕き、御座所を掃除したり忙しく立ち働いたが、屏風や几帳などがなく、部屋を飾りつけるすべがないので途方に暮れてしまった。

問2 あこきが立ち働いている間、落窪の君はどのようなようすであったか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 落窪の君は、茫然として臥しておられたが、御座所を整えるためにあこきが引き起こすと、顔は赤らみ苦しげで、目も泣きはらしていた。

b 落窪の君は、昨夜の出来事を何もおぼえておられないように、御座所の床に臥したままあこきを見上げたようすは、赤ら顔で苦しそうであり、さめざめと泣いていた。

c 落窪の君は、少将の訪れがあまりにも突然だったので、気恥ずかしさにあこきと目を合わすことができず、顔を赤らめ苦しげにして、声をころして泣いていた。

d 落窪の君は、御座所を整えるあこきをどう手伝ってよいかわからず、茫然自失の体で臥しておられ、熱が出たように顔は赤らみ苦しそうで、いまにも泣きだしそうであった。

e 落窪の君は、自分のために御座所で忙しく立ち働くあこきに感謝の気持ちを伝えようとするが、熱のため床に臥し、顔は赤らみ苦しげで、目も泣きはらしていた。

問3 少将の再訪がさし迫った頃、あこきは、落窪の君に対してどのようなにしたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a あこきは、「恐れ多いことですが、まだ一度も身につけてはおりません、お気の毒にも、昨夜、少将の君にみすばらしい姿でお会いになったなんて」と、特別な日に自分が着るために新調していた袴を美しくとのえて、そっとお渡しした。

b あこきは、「恐れ多いことですが、まだ一度しか身につけてはおりません、お気の毒にも、昨夜、少将の君にみすばらしい姿でお会いになったなんて」と、

自分が一度着た袴を美しくとのえて、そっとお渡しした。

c あこきは、「恐れ多いことですが、もうだいぶ着古していますがまだまだきれいです。お気の毒にも、昨夜、少将の君にみすぼらしい姿でお会いになったなんて」と、自分が着古した袴を美しくとのえて、そっとお渡しした。

d あこきは、「恐れ多いことですが、まだ長く身につけてはおりません、お気の毒にも、昨夜、少将の君にみすぼらしい姿でお会いになったなんて」と、自分が二度ほど着用した袴を美しくとのえて、そっとお渡しした。

e あこきは、「恐れ多いことですが、わたしの母がくれた古い物ですがまだ着ることができます。お気の毒にも、昨夜、少将の君にみすぼらしい姿でお会いになったなんて」と、自分がいつも着ていた袴を美しくとのえて、そっとお渡しした。

問4 落窪の君は、あこきが渡した袴をどうしたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 落窪の君は、自分のみすぼらしい姿を恥じて、もう決して少将の君と会うべきではないと思う一方で、やはり会いたい気持が募ったが、今宵も昨夜と同じ身なりで会うわけにもいかないの、あこきの心遣いがうれしくてその袴をお召しになった。

b 落窪の君は、自分のみすぼらしい姿をなんとか少将の君に気付かれないまま過ごしたいと思う一方、今宵も昨夜と同じ身なりで会わねばならないのかと思、い悩んでいたところなので、あこきの心遣いがうれしくてその袴をお召しになった。

c 落窪の君は、自分のみすぼらしい姿を整えてくれる人がいつかは現れると樂觀していたが、それでも今宵は昨夜と同じ身なりで少将の君と会わねばならないことがなげなかつたので、あこきの心遣いがうれしくてその袴をお召しになった。

d 落窪の君は、一方では自分のみすぼらしい姿を恥ずかしいと思うものの、だからといって、今宵も昨夜と同じ身なりで少将の君と会うのもやりきれなく思っていたので、あこきの心遣いがうれしくてその袴をお召しになった。

e 落窪の君は、かつては自分のみすぼらしい姿をどうしようもないことと思っていたが、今宵は昨夜と同じ身なりで少将の君と会うこともなくなったので、あこきの心遣いがうれしくてその袴をお召しになった。

問5 少将を迎えるための準備が整わないので、あこきはどうしたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a あこきは、自分の叔母に「突然ですが、名前を出す叔母様にまでご迷惑がかかってしまいそうなお方が、方違えでわたしの部屋においてになりますので、几帳を一つ、それから、宿直のための品ですが、わたしの身分からすると恥ずかしい物を出すことはできませんか」と思っておりますので、適当な物はございますか。お貸しくありませんか」と、走り書きで手紙を書いた。

b あこきは、自分の叔母に「突然ですが、高貴なお方が方違えでわたしの主人の落窪の君のもとにおいてになりますので、几帳を一つ、それから、宿直のため品ですが、どんなお客様でも、お泊まりになるのに不都合なものを出すことはできませんか」と思っておりますので、適当な物はございますか。お貸しくありませんか」と、丁寧な手紙を書いた。

c あこきは、自分の叔母に「突然ですが、高貴なお方が方違えでわたしの部屋においてになりますので、几帳を一つ、それから、宿直のための品ですが、高貴なお方がお泊まりになるのに不都合なものを出すことはできませんか」と思っておりますので、適当な物はございますか。お貸しくありませんか」と、走り書きで手紙を書いた。

d あこきは、自分の叔母に「突然ですが、高貴なお方が方違えで中納言の部屋においてになりますので、几帳を一つ、それから、宿直のための品ですが、中納言のお客様がお泊まりになるのに不都合なものを出すことはできませんか」と思っておりますので、適当な物はございますか。お貸しくありませんか」と、丁寧な手紙を書いた。

e あこきは、自分の叔母に「突然ですが、本当のことを申し上げたらわたしが恥ずかしくなってしまうお方が、方違えでわたしの主人の落窪の君の部屋においてになりますので、几帳を一つ、それから、宿直のための品ですが、落窪の君の身分からすると恥ずかしい物を出すことはできませんか」と思っておりますので、適当な物はございますか。お貸しくありませんか」と、走り書きで手紙を書いた。

問6 落窪の君のもとを再訪した少将はどのように一夜を過ごしたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a 落窪の君の様子が、袴に昨夜と違う香がたきしめてあり、服装や調度も一段と美しい物がそろっているので、姫君の趣味の良さに感心しながら床に臥し、黙ってお側に控える姫君を見つめて、その美しさはまったく世に類なくすばらしいものと思ったが、恋心を受け入れてもらえないまま夜を過ごした。

b 落窪の君の様子が、昨夜と違って袴に香がたきしめてあり、服装や調度も整っているのです、自分の趣味と通じることをうれしく思いながら床に臥し、時々返事をする姫君を眺めて、その美しさはまったく世に類なくすばらしいものと思ったが、あまり語り合えないまま夜を過ごした。

c 落窪の君の様子が、袴に昨夜と違う香がたきしめてあり、服装や調度も聞いていた以上に華美な物がそろっているので、やはり高貴なお方なのだと、すこし気兼ねしながら床に臥し、今宵も返事一つしない姫君を眺めて、その美しさはまったく世に類なくすばらしいものと思ったが、すこしもうちとけないまま夜を過ごした。

d 落窪の君の様子が、昨夜と違って袴に香がたきしめてあり、服装や調度も整っているのです、気兼ねなく床に臥し、時々返事をする姫君の美しさはまったく世に類なくすばらしいものと思われて、さまざまに語り合って夜を過ごした。

e 落窪の君の様子が、昨夜と違って袴に香がたきしめてあり、服装や調度も整っているのです、特別趣深く思い、すこし気兼ねしながら床に臥し、黙ってお側にひかえる姫君を眺めて、その美しさはまったく世に類なくすばらしいものと思ったが、すこししか語り合えないまま夜を過ごした。

問7 少将が訪れた翌朝、あこきは、少将の君の朝の準備のために、どのような口実を設けて頼んだか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a あこきは、中納言邸の台所の下女に、「わたしの夫の帯刀の友だちが、夕べも話があってきていましたが、雨が降ったためにまだ帰れないので粥でも食べさせようと思ったが、なくて。お酒でもあれば少しくださいな。ほかに引干などもあれば、少しくださいな」と頼んだ。

b あこきは、中納言邸の台所の下女に、「わたしの夫の帯刀の主人が、夫とともに夕べもいらっしゃっていたのですが、雨が降ったためにまだお帰りにならないで、そのお方が粥よりもお酒がよいとおっしゃるので、あれば少しくださいな。ほかに引干などもあれば、少しくださいな」と頼んだ。

c あこきは、中納言邸の台所の下女に、「わたしの夫の帯刀が、主人のお供で夕べもきていましたが、雨が降ったためにまだ帰れずにいます。夫に粥でも食べさせたいが、夫は酒のほうがよいというので、あれば少しくださいな。ほかに引干などもあれば、少しくださいな」と頼んだ。



d あこきは、中納言邸の台所の下女に、「わたしの夫の帯刀が、友だちを連れてタベもきていましたが、雨が降ったためにまだ帰れずにいます。客人に粥を食べさせたいが、夫は酒をふるまえといっているので、あれは少しくださいな。ほかに引干などもあれば、少しくださいな」と頼んだ。

e あこきは、中納言邸の台所の下女に、「わたしの夫の帯刀が、タベも友だちのことで話があつてきていたのですが、雨が降ったためにまだ帰れずにいます。こんな日は粥よりもお酒がよいと思つたのですが、手もとにはないので、あれは少しくださいな。ほかに引干などもあれば、少しくださいな」と頼んだ。

問8 翌朝、落窪の君のもとを出ようとした少将は、朝のしたくを見てどう思つたか。最も適当なものを選択肢から一つ選び、その記号をマークせよ。

a あこきが、見栄え良くお粥を差し上げたり、洗面の用意を取りそろえたりしていたので、「なるほど、この人がいるから姫君も人並みな生活ができるのだな」と思つた。

b あこきが、見栄え良くお粥を差し上げたり、洗面の用意を取りそろえたりしていたので、「変だな、生活が苦しいと聞いていたのに」と思つた。

c あこきが、見栄え良くお粥を差し上げたり、洗面の用意を取りそろえたりしていたので、「やはり、世間知らずの姫君にはこういう人が必要なのだな」と思つた。

d あこきが、見栄え良くお粥を差し上げたり、洗面の用意を取りそろえたりしていたので、「不思議だな、いつの間にこれだけの準備ができたのだろう」と思つた。

e あこきが、見栄え良くお粥を差し上げたり、洗面の用意を取りそろえたりしていたので、「くらしに余裕があるから手際が良いのだな」と思つた。

問9 波線部(△)を現代語訳せよ。

【解答一】2023 関西大学 2/1. 全学日程1(2・3教科)・英語外部試験利用含む法 社会安全 文 経済 商 社会 政策創造 外国語 人間健康 総合情報

問1 e 問2 e 問3 c 問4 b 問5 a

問6 a 問7 d 問8 b

問9 ここにちゃんとおりましたのに。変な話ですなぁ。

《出典》「堤中納言物語 花桜折る少将」

【解答二】2023 関西大学 2/2. 全学日程1(2・3教科)・英語外部試験利用含む法 社会安全 文 経済 商 社会 政策創造 外国語 人間健康 総合情報

収録なし

《出典》「栄花物語 月の宴」

【解答三】2023 関西大学 2/3. 全学日程1(2・3教科)・英語外部試験利用含む法 社会安全 文 経済 商 社会 政策創造 外国語 人間健康 総合情報

問1 a 問2 e 問3 c 問4 d 問5 b

問6 c 問7 e 問8 b

問9 どうしてあなたを尼にし申し上げられようか、いや、そのようにはできない。

《出典》紫式部「源氏物語 手習」

【解答四】2022 関西大学 2/1, 全学日程1(2・3教科)・英語外部試験利用含む 文 経済 商 社会 政策創造 外国語 人間健康 社会安全

- 問1 e 問2 d 問3 b 問4 e 問5 c  
問6 a 問7 d 問8 e  
問9 光源氏は、私もお供させてくださいとひどくお泣きになって

《出典》紫式部「源氏物語 明石」

【解答五】2022 関西大学 2/2, 全学日程1(2・3教科)・英語外部試験利用含む 文 経済 商 社会 政策創造 外国語 人間健康 総合情報 社会安全

- 問1 c 問2 c 問3 e 問4 b 問5 e  
問6 a 問7 d 問8 d  
問9 自分は どうして(この蔵を)開けられないことがあるのか、いや自分には開けられるはずだ。

《出典》「うつほ物語 蔵開上」

【解答六】2022 関西大学 2/3, 全学日程1(2・3教科)・英語外部試験利用含む 法 文 経済 商 社会 政策創造 外国語 人間健康 総合情報 社会安全

- 問1 a 問2 c 問3 a 問4 b 問5 e  
問6 d 問7 e 問8 b  
問9 殺されるまでのことはまさかあるまい

《出典》 「平家物語」

【解答七】2021 関西大学 2/1, 全学日程1 (2・3教科)・英語外部試験利用含む 法 文 経済 商 社会 政策創造 外国語 人間健康 総合情報 社会安全

問1 c

問2 e

問3 a

問4 b

問5 b

問6 d

問7 d

問8 d

問9 中納言の君は(同僚だった女の身の上の心配を)他人に言うことができないで、思い嘆きなさる。

《出典》 「兵部卿物語」

【解答八】2021 関西大学 2/2, 全学日程1 (2・3教科)・英語外部試験利用含む 法 文 経済 商 社会 政策創造 外国語 人間健康 総合情報 社会安全

問1 d

問2 b

問3 e

問4 a

問5 d

問6 b

問7 b

問8 b

問9 (倫子は)人に(質問なさって、岩蔭の方に)向き物思いにふけりなさる。

《出典》 「栄花物語」

【解答九】2021 関西大学 2/3, 全学日程1 (2・3教科)・英語外部試験利用含む 法 文 経済 商 社会 政策創造 外国語 人間健康 総合情報 社会安全

問1 e

問2 a

問3 d

問4 b

問5 d

問6 a

問7 d

問8 e

問9 東宮がこのようなように人の親におなりになって、心配していらつしやるのはしみじみかわいそうだ。

《出典》「うつほ物語」

【解答十】2020 関西大学 2/1. 学部個別(3教科・2教科英語外部試験利用) 文 経済 社会 政策創造

問1 d 問2 e 問3 a 問4 d 問5 c

問6 e 問7 e 問8 b

問9 せめてこの宮だけでも身近で拝見したいものだ。

《出典》紫式部「源氏物語 紅梅」

【解答十一】2020 関西大学 2/3. 学部個別(3教科・2教科英語外部試験利用) 経済 商 政策創造 外国語 人間健康

問1 a 問2 c 問3 b 問4 a 問5 e

問6 d 問7 a 問8 c

問9 先日はあなたとの宿縁の深さを自然と分かったが、あなたもそのように思い知りなさったのだろうか。

《出典》紫式部「源氏物語 関屋」

【解答十二】2020 関西大学 2/4. 学部個別(3教科・2教科英語外部試験利用) 法 文 商 総合情報 社会安全

問1 b 問2 e 問3 c 問4 c 問5 e

問6 a 問7 e 問8 d

問9 伊尹の一族を永久に絶やすことを気の毒だという人もいたら、その人をも恨もう。

《出典》 「大鏡」

【解答十三】 2020 関西大学 2/6 学部個別(3)教科・2教科英語外部試験利用) 法 社会 外国語 人間健康 社会安全

問1 a 問2 a 問3 c 問4 a 問5 e

問6 e 問7 c 問8 b

問9 人の住む気配に狐や鼻のような怪しげなものも阻まれて姿を隠していたが、

《出典》 紫式部「源氏物語 蓬生」

【解答十四】 2019 関西大学 2/1 学部個別(3)教科・2教科英語外部試験利用) 文 経済 社会 政策創造

問1 b 問2 b 問3 d 問4 a 問5 a

問6 e 問7 e 問8 e

問9 あなたは難波にはお越しにならないでください。私が一人で行きましょう。

《出典》 「大和物語」

【解答十五】2019 関西大学 2/3 学部個別(3教科・2教科英語外部試験利用) 経済 商 政策創造 外国語 人間健康

問1 d 問2 e 問3 a 問4 c 問5 a

問6 b 問7 d 問8 a

問9 風が止む間も待たないで、あなたを待ち焦がれ船を漕いで帰ってきたものだよ。

《出典》「浜松中納言物語」

【解答十六】2019 関西大学 2/4 学部個別(3教科・2教科英語外部試験利用) 法 文 商 総合情報 社会安全

問1 b 問2 c 問3 d 問4 a 問5 b

問6 e 問7 d 問8 c

問9 中将の君は気まり悪く思ってお仕えることができなくなってしまったのが、陸奥国の守の妻になっていたところ、

《出典》紫式部「源氏物語 宿木巻」

【解答十七】2019 関西大学 2/6 学部個別(3教科) 法 社会 外国語 人間健康 社会安全

問1 e 問2 d 問3 e 問4 d 問5 e

問6 b 問7 c 問8 b

問9 特にものもおっしゃらないもの静かなお方が、正体もなく泣き惑っていらっしやるので、気の毒に思いますので。

《出典》「うつほ物語 祭の使」

【解答十八】2018 関西大学 2/1 学部個別(3)教科・2教科英語外部試験利用) 文 経済 社会 政策創造

問1 b 問2 b 問3 b 問4 a 問5 e

問6 c 問7 d 問8 e

問9 華陽公主がいらつしやるといふ様子をなんとか見たいと氏忠は思うけれど

《出典》「松浦宮物語」

【解答十九】2018 関西大学 2/3 学部個別(3)教科・2教科英語外部試験利用) 経済 商 政策創造 外国語 人間健康

問1 c 問2 c 問3 c 問4 a 問5 d

問6 b 問7 a 問8 e

問9 もし海辺で詠んでいたならば、「波が立って邪魔をして月を海に入れないでほしい」とも、詠んだらうか。

《出典》「土佐日記」

【解答二十】2018 関西大学 2/4 学部個別(3)教科・2教科英語外部試験利用) 法 文 商 総合情報 社会安全

問1 a 問2 b 問3 a 問4 d 問5 b



問6 c                    問7 e                    問8 e

問9 光源氏が当て推量におっしやるので、朧月夜は堪えきれないのであろう。

《出典》「花の宴」『源氏物語』

**【解答二十一】2018 関西大学 2/3.学部個別(3教科) 法 社会 外国語 人間健康 社会安全**

問1 c                    問2 a                    問3 e                    問4 a                    問5 b

問6 e                    問7 d                    問8 e

問9 やはり心苦しく思っている様子が気の毒で、少将は女君にお聞かせにならない。

《出典》「落窪物語」

**【解答二十二】2017 関西大学 2/1.学部個別日程(3教科・2教科英語外部試験利用) 文 経済 社会 政策創造**

問1 d                    問2 c                    問3 c                    問4 b                    問5 d

問6 d                    問7 a                    問8 b

問9 実家の侍女たちの前でさえ隠しておりますのに、どうして宮中で学識をひけらかすのでしょうか。

《出典》「紫式部日記」

**【解答二十三】2017 関西大学 2/3.学部個別(3教科) 経済 商 政策創造 外国語 人間健康**

問1 a 問2 b 問3 a 問4 e 問5 c

問6 b 問7 d 問8 c

問9 朱雀院が御心を悩ませていらつしやる姫宮の御後見に中納言はどうか、などと人知れず思いつきなさった。

《出典》「若菜上」『源氏物語』

【解答二十四】2017 関西大学 2/4.学部個別日程(3教科・2教科英語外部試験利用) 法 文 商 総合情報 社会安全

問1 b 問2 a 問3 e 問4 c 問5 e

問6 b 問7 a 問8 e

問9 帝のお許しがございませうちは、不作法な思慕の気持ちは決してお見せ申し上げますまい。

《出典》「狭衣物語」

【解答二十五】2017 関西大学 2/9.学部個別(3教科) 法 社会 外国語 人間健康 社会安全

問1 e 問2 a 問3 b 問4 a 問5 d

問6 e 問7 a 問8 e

問9 やたらと上の空に思いふけておりましたあまりに、現世を仮のものと思ふようになりました。

《出典》「浜松中納言物語」

【解答二十六】2016 関西大学 2/1 学部個別(3教科) 文 経済 社会 政策創造

問1 c 問2 d 問3 a 問4 d 問5 e

問6 a 問7 b 問8 c

問9 帝のお気持ちは自然と桐壺の更衣から藤壺へと移られ、この上なくお心が慰められておいでになる様子であるのも、しみじみとすることであるよ。

《出典》紫式部「桐壺」『源氏物語』

【解答二十七】2016 関西大学 2/3 学部個別(3教科) 経済 商 政策創造 外国語 人間健康

問1 d 問2 e 問3 a 問4 e 問5 a

問6 b 問7 a 問8 c

問9 私を婿に迎えたいとおっしゃる方はおりますけれども、なんとなく気が進まないまま過(こ)しているのだ。

《出典》「住吉物語」

【解答二十八】2016 関西大学 2/4 学部個別(3教科) 法 文 商 総合情報 社会安全

問1 d 問2 c 問3 c 問4 a 問5 e

問6 b 問7 a 問8 c

問9 大將殿はほんの少しもお世話したこともないけれど、このようにこの上なく面倒を見て下さるのは、

《出典》「落窪物語」

**【解答二十九】2016 関西大学 2/9. 学部個別(3教科) 法 社会 外国語 人間健康 社会安全**

問1 b 問2 d 問3 e 問4 e 問5 c

問6 d 問7 c 問8 e

問9 私の晩年に薫がお生まれになって、かわいそうに、大人になる姿を見届けられないことだ

《出典》紫式部「匂兵部卿」『源氏物語』

**【解答三十】2015 関西大学 2/1. 学部個別日程(3教科) 文 経済 社会 政策創造**

問1 c 問2 e 問3 a 問4 b 問5 b

問6 d 問7 a 問8 e

問9 中納言は、唐の国の女性は和歌を詠まないのではなかったのだなあ、と趣深くお思いになる。

《出典》「浜松中納言物語」

**【解答三十一】2015 関西大学 2/3. 学部個別日程(3教科) 経済 商 政策創造 外国語 人間健康**

問1 a 問2 e 問3 e 問4 a 問5 d

問6 c 問7 c 問8 b

問9 「性急で失礼だ、と姫君がお思いになるだろうか」と光源氏は気が引けてためらいなさる。

《出典》「末摘花巻」『源氏物語』

【解答三十二】2015 関西大学 2/4 学部個別日程(3教科) 法 文 商 総合情報 社会安全

問1 d 問2 a 問3 e 問4 d 問5 b

問6 c 問7 a 問8 e

問9 自分の姿を見て大納言に気づかれてしまったかどうかと、困ったことに、狭衣の君はお思いになった。

《出典》「狭衣物語」

【解答三十三】2015 関西大学 2/6 学部個別日程(3教科) 法 社会 外国語 人間健康 社会安全

問1 b 問2 d 問3 c 問4 e 問5 c

問6 b 問7 e 問8 d

問9 ただ向かい合っている間に心が通じ合うばかりではありますけれど、手紙は、昔のまま全く変わることがないというのも、すばらしいことです。

《出典》「無名草子」

【解答三十四】2014 関西大学 2/1. 学部個別日程(3教科) 文 経済 社会 政策創造

- |    |                                  |    |   |    |   |    |   |    |   |
|----|----------------------------------|----|---|----|---|----|---|----|---|
| 問1 | c                                | 問2 | b | 問3 | d | 問4 | b | 問5 | c |
| 問6 | c                                | 問7 | e | 問8 | d |    |   |    |   |
| 問9 | また(殿の)仰ることを申し上げに、明日か明後日にでも伺いましょう |    |   |    |   |    |   |    |   |

《出典》『蜻蛉日記』

【解答三十五】2014 関西大学 2/3. 学部個別日程(3教科) 法 経済 商 外国語 人間健康

- |    |                                       |    |   |    |   |    |   |    |   |
|----|---------------------------------------|----|---|----|---|----|---|----|---|
| 問1 | d                                     | 問2 | a | 問3 | d | 問4 | e | 問5 | c |
| 問6 | b                                     | 問7 | d | 問8 | e |    |   |    |   |
| 問9 | とにかく証拠となる和歌をお聞きして、心の中の疑問を断ち切りたいと思うのです |    |   |    |   |    |   |    |   |

《出典》藤原清輔「袋草子」

【解答三十六】2014 関西大学 2/4. 学部個別日程(3教科) 法 文 商 総合情報 社会安全

- |    |  |    |   |    |   |    |   |    |   |
|----|--|----|---|----|---|----|---|----|---|
| 問1 | e  | 問2 | a | 問3 | d | 問4 | e | 問5 | c |
| 問6 | a  | 問7 | a | 問8 | c |    |   |    |   |
| 問9 | 「やはりそうであったか」と光源氏はお思いになり、ますます夕顔を気の毒に思われるのであった |    |   |    |   |    |   |    |   |

《出典》「源氏物語 「夕顔」」

【解答三十七】2014 関西大学 2/6. 学部個別日程(3教科) 社会 政策創造 外国語 人間健康 社会安全

問1 e 問2 c 問3 a 問4 a 問5 d

問6 e 問7 b 問8 a

問9 筋道立てて申し上げると、(頼長は)詳しくお聞きになり、落ち度がない場合は罰することを後悔なさった。

《出典》「保元物語」

【解答三十八】2013 関西大学 2/1. 学部個別日程(3教科) 文 経済 社会 政策創造

問1 b 問2 d 問3 a 問4 e 問5 c 問6 a

問7 b 問8 c

問9 お休みください。御格子も、夜が更けてきたようです、みなさん閉めてください。

《出典》「夜の寝覚」

【解答三十九】2013 関西大学 2/3. 学部個別日程(3教科) 経済 商 政策創造 外国語 社会安全

問1 d 問2 a 問3 b 問4 a 問5 e 問6 d

問7 a 問8 e

問9 唐に渡ることを思い立たねば、どれほどひどく、気が晴れなかっただろう

《出典》「浜松中納言物語」

【解答四十】2013 関西大学 2/4 学部個別日程(3教科) 法 文 商 人間健康 総合情報

問1 c 問2 b 問3 a 問4 e 問5 a 問6 b

問7 d 問8 b

問9 今までの想像が、全く意味のないうわついた心によるものであったとしても、格別に期待外れな(結婚生活の)有様だったことよ。

《出典》「更級日記」

【解答四十一】2013 関西大学 2/6 学部個別日程(3教科) 法 社会 外国語 人間健康 社会安全

問1 d 問2 d 問3 a 問4 c 問5 b 問6 b

問7 e 問8 a

問9 本当に(東宮が)そのようにお心をお動かしておっしゃられたら、どうすればよいだろうか。

《出典》「大鏡」

【解答四十二】2012 関西大学 2/2 学部個別日程(3教科) 商 政策創造 人間健康 社会安全



問1 b 問2 d 問3 c 問4 b 問5 a

問6 d 問7 a 問8 e

問9 姫君もしばらくは少将を避けるように過ごしていらつしやつたが、やはりどうして、そうばかりもしていらつしやれようか。

《出典》「思はぬ方にとまりする少将」『堤中納言物語』

【解答四十三】2012 関西大学 2/3. 学部個別日程(3教科) 法 経済 政策創造 外国語 総合情報

問1 c 問2 d 問3 a 問4 e 問5 c

問6 b 問7 d 問8 b

問9 あまご両親がお傍について申し上げていらつしやれば、今ごろこのような人目につきやすい外出をなさることなど、まさかありませんでしょうに。

《出典》「しぐれ」

【解答四十四】2012 関西大学 2/4. 学部個別日程(3教科) 法 文 商 社会 人間健康

問1 e 問2 b 問3 d 問4 c 問5 e 問6 b

問7 a 問8 e

問9 ことさらにお気持ちに気付かない風を装って無視するのも、どれほど身の程知らずの女だと源氏の君はお思いになるだろう

《出典》紫式部「帚木」『源氏物語』

**【解答四十五】2012 関西大学 2/9 学部個別日程(3教科) 文 経済 社会 外国語 社会安全**

問1 e

問2 a

問3 d

問4 d

問5 c

問6 d

問7 a

問8 b

問9 あなたが手紙をくださらないことを、大変つらく思っております。

《出典》「落窪物語」